モノ学
感覚価値研究［第7号］
モノ学・感覚価値研究会年報

もくじ

『モノ学・感覚価値研究』第7号刊行に際して　鎌田東二 ●001

第1部　こころのワザ学

第一章　「こころの練り方」探究事始め　その三
南方熊楠の「心理学」を中心に　鎌田東二 ●002

第2部　震災とモノ学アートの試み

第一章　モノ学・感覚価値研究会アート分科会／京都大学こころの未来研究センター連携研究プロジェクト　二〇一三年度活動報告　大西宏志 ●013

第二章　アブダクションによる世界認識とコスモロジーの改編　渡邊淳司 ●029

第3部　モノ学の展開

第一章　グラデーションという現象とデザイン表現についての一考察　上林壮一郎 ●032

第二章　石の聖地の比較研究　須田郡司 ●044

第三章　「象徴形式」としての一点透視遠近法
——「自然」概念の変遷を手掛りに　秋丸知貴 ●054

第4部　東日本大震災「こころの再生に向けて」シンポジウム記録

第一章　京都大学シンポジウムシリーズ『大震災後を考える』——安全・安心な輝ける国作りを目指してⅣ「大震災後の『心のケア』を考える」
災害と宗教と「心のケア」——東日本大震災　現場からの報告と討議
島薗進＋玄侑宗久＋稲場圭信＋金子昭＋河合俊雄＋内田由紀子＋鎌田東二 ●063

第二章　第二回東日本大震災関連シンポジウム
災害時における宗教的ケアと宗教的世直し思想について
鈴木岩弓＋金子昭＋稲場圭信＋島薗進＋井上ウィマラ＋鎌田東二 ●097

第三章　第三回東日本大震災関連シンポジウム
こころの再生に向けて
玄侑宗久＋島薗進＋稲場圭信＋黒崎浩行＋一条真也＋井上ウィマラ＋鈴木岩弓＋鎌田東二 ●134

書評 ●012

新聞掲載記事 ●096 ●133 ●168

『モノ学・感覚価値研究』第7号刊行に際して――

鎌田東二

『モノ学・感覚価値研究』第七号は、二〇一一年四月に立ち上げた東日本大震災にかかわる研究プロジェクト「震災関連プロジェクト～こころの再生に向けて」において開催した三つのシンポジウム・研究会の全記録を収めた。

1　二〇一一年七月二〇日開催の第一回シンポジウム記録
2　二〇一二年一月二四日開催の第二回研究会記録
3　二〇一二年七月一一日開催の第三回シンポジウム記録

この研究プロジェクトとシンポジウムは今後も継続していくが、二〇一三年三月二日に次のような関連企画を実現した。

パネルディスカッション「東日本大震災と宗教者・宗教学者」

日　時　二〇一三年三月二日（土）
場　所　東北大学マルチメディアホール（東北大学川内北キャンパス）
主　催　東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座・京都大学こころの未来研究センター震災関連プロジェクト・宗教者災害支援連絡会
共　催　東北大学大学院文学研究科・世界宗教者平和会議（WCRP）・心の相談室
プログラム
開会の辞　総合司会：鈴木岩弓（東北大学大学院教授）
基調講演　山折哲雄（宗教学者）「宗教者と宗教学者は災害とどう向き合うか」
パネルディスカッション　司会：鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター教授）
報　告　金田諦應（通大寺住職）「東日本大震災と仏教者」／川上直哉（仙台教会主任教師）「東日本大震災とキリスト者」／藤波祥子（八重垣神社宮司）「東日本大震災と神職」／黒住宗道（WCRP日本委員会理事・黒住教副教主）「東日本大震災と超宗派的組織」／稲場圭信（大阪大学准教授）「宗教者と宗教学者の連携」／黒崎浩行（國學院大學准教授）「宗教系大学の取り組みと宗教学者」
コメント　玄侑宗久（作家・福聚寺住職）／島薗進（東京大学大学院教授）／岡田真美子（兵庫県立大学教授・妙興寺）／蓑輪顕量（東京大学大学院教授・竜蔵寺）
ディスカッション
閉会の辞　鈴木岩弓

東北大学には、二〇一二年度から「実践宗教学寄附講座」が設けられ、スタートした。その講座の共催として今回のパネルディスカッションが実現したのだが、たいへん有意義な試みであり、催しであったと思う。その記録については、いずれ公開されるだろう。

さて、本号では、この震災関連の記録以外に、鎌田東二「『こころの練り方』探究事始めその三――南方熊楠の『心理学』を中心に」、大西宏志「モノ学・感覚価値研究会アート分科会／京都大学こころの未来研究センター連携プロジェクト二〇一二年度活動報告」、渡邊淳司「アブダクションによる世界認識とコスモロジーの改編」、上林壮一郎「グラデーションという現象とデザイン表現についての一考察」、須田郡司「石の聖地の比較研究」、秋丸知貴「『象徴形式』としての一点透視遠近法――『自然』概念の変遷を手掛りに」の各論考を収めた。

「3・11」後の状況は厳しい。事故を起こした福島原発をどうするのか、また日本国内の原子力発電所を中長期的にどのようにしていくのか、その議論も政策も方向性も迷走したまま、なし崩し的に経済復興・景気回復の掛け声の中に埋没しつつある。未来社会のグランドデザインも描けないまま。しかも、これまでには考えられなかったような気象現象が各地に現れてきている。すべてが事後的に「想定外」「前代未聞」とされ、根本的な解決がなされないまま、目の前に山積する短期的な課題が優先されている。先送りされた問題と課題は巨大で、どこから、どう手をつけていったらいいのか、この巨大文明システムを前にしてなすすべを見失っている。

そのような時には、やはり、歴史軸を基軸としてものを考える必要がある。空間的な諸問題が歴史的な課題としてどのように処理されてきたか、対応されているか、またどういう方向に据えられるべきか、大まかなアウトラインを描く必要があるだろう。そうした折に、たとえば南方熊楠や宮沢賢治が対峙し構想しようとしたことなどを再度考えてみることには大きな深い意味があるだろう。今、あらためて、南方熊楠や宮沢賢治のような未来透視型の思想と行動が問われていると思う。

本『モノ学・感覚価値研究』も、そのような歴史基軸に添いつつ未来を構想するミッションをもって始められた。この研究プロジェクトの正式タイトルと副題は、「モノ学の構築――〝もののあはれ〟および〝もののけ〟から〝ものづくり〟までを貫流する日本文明のモノ的創造力と感覚価値を検証する」というものであった。わたしたちは、この研究プロジェクトを二〇〇六年四月にスタートさせた。それから七年が経った。これから先の問題を再度正面から見据えて対処していく必要があるだろう。

謝辞　本『モノ学・感覚価値研究』第七号は、京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門の助成を得て刊行された。上廣倫理財団には心より感謝申し上げたい。

第1部 こころのワザ学

第一章 「こころの練り方」探究事始め その三

南方熊楠の「心理学」を中心に

鎌田東二
京都大学こころの未来研究センター教授／
宗教哲学・民俗学

はじめに――「心理学」という夢

日本の歴史の中で「こころ」がどのように捉えられ、どのような「こころの練り方」といえる身心変容技法を生み出してきたかを跡づけることは容易ではない。時代によっては史料も限定されているとはいえ、膨大な数の文献史料や図像や考古学的資料などを適切に分類し、ピックアップしながら、位置づけていかなければならないからである。厳密に考えれば考えるほど、それは不可能な仕事に思えてくる。

とはいえ、そのような仕事を誰かが手掛けなければならない。そこでここでは限定的な枠を設けながら、作業仮説的に「こころの練り方」の時代的特質を浮き彫りにさせる跡づけを試みてきた。

その流れの中で、近代の「こころの練り方」を考えていく際に、まず何よりも特徴的であり、考えなければならないことは、「心理学」という「科学」が登場してきたことにある。これは、日本の古代にも中世にも近世にもなかった、近代に特徴的な出来事であり、現象だからである。

「こころ」を対象として起こってきた「経験科学」が「心理学（psychology）」であるが、日本では明治初年に「心理学」の訳語が作られ、その後、明治二〇年代（一八九〇年代）に本格的に「心理学」が導入され、東京帝国大学文科大学で初代心理学の教授が誕生し、正式に大学の授業科目となり、専攻課程となっていく。[1]

その東京帝国大学文科大学の初代心理学教授が元良勇次郎（一八五八－一九一二）であった。そして、その弟子が松本亦太郎と福来友吉（一八六九－一九五二）であり、松本亦太郎は京都帝国大学教授から、元良勇次郎の後を継いで、東京帝国大学の二代目の心理学教授となり、その後、日本心理学会が設立された際、初代会長となった。大学の講座としては、京都帝国大学に初めて心理学講座ができ、松本亦太郎が初代の心理学教授に就任した。

本稿では、「こころの練り方」という観点から、伝統的な「こころ観」や「こころの練り方」につながる身心変容技法が、西洋近代の「心理学」の移入の中でどのような位置づけや変容を見たかをまずは南方熊楠の事例に焦点を当てて検討してみたい。その前に、時代の転機としての「一九一〇年問題」について述べておきたい。

1 ハレー彗星インパクト――一九一〇年問題、近代の闇とスピリチュアル・ムーブメント

一九一〇年（明治四三）五月一九日、地球にハレー彗星が最接近した。その時、世界中で地球滅亡が噂され、パニックとも珍現象ともいえる動きが起こった。

その直後に、柳田國男は『遠野物語』を出版し、同年八月に南方熊楠は神社合祀反対運動を展開して留置場にぶち込まれ、福来友吉は透視実験を試みた「千里眼事件」によって東京帝国大学心理学科を追われ、

夏目漱石は『門』の連載を進め、柳宗悦は『白樺』にテレパシーなどの現象を攻究する「新しき科学」と題する論考を発表し、京都帝国大学助教授となった西田幾多郎が翌年一月に『善の研究』を上梓した。

この一九一〇年の激震・激動を「一九一〇年問題」あるいは「ハレー彗星インパクト」と呼びたい。この時初めて、地球史的危機が世界的な規模で意識化された。今日の環境問題の浮上である。この時、「エコロギー」なるイギリス仕込みの新学問を引っ提げて神社合祀反対運動を展開したのが南方熊楠であったが、その南方の思想と実践の中にも「心理学」の夢が潜んでいる。

わたしの考えでは、一九一〇年は、世界史のターニングポイントとなった記念すべき年であった。その年、地球上に初めて世界同時性の意識と地球史的危機意識が芽生え始めたといえるからである。

先に述べたように、この年ハレー彗星が到来し、五月一九日に地球に最接近した。それにより、世界中に騒動が巻き起こった。ヨーロッパでは終末論的な破局がやってくるとまことしやかに語られ、日本では、彗星到来時には清浄な酸素を吸収することができないので、洗面器に水を張って長く息を止める練習をする人のことなどが報道された。有毒ガスを含んだ尾が地球を包み、生物は全滅すると噂され、パニックが起こった。尾に含まれた大量の水素が地球上で大爆発を起こすと信じられ、欧米では地下室にこもったり、郊外に逃げ出す人が続出し、岐阜県では自殺者まで出た。

五月一九日付けの『東京日日新聞』には、「支那では爆竹で彗星を驚かして退散せしめるという奇抜な呪（まじない）があるようだが、米国ではハレー彗星が地球と衝突した場合、その厄を逃るるには、地中に潜っているが一番安全だといって、五六日前から穴居を始めた人があるそうだ。また、日本にも二三日前のこと、日向国延岡町の渡辺某妻は、十九日ハレー彗星が地球と衝突すると下界の人間は皆打殺されるという例の風説を信じて、逆上のあまり卒倒して遂に彼の世の人となった」との記事が載せられている。

また、『東京朝日新聞』では、ハレー彗星が接近してくるほぼ一ヶ月前の四月二三日から毎日のように、この「千載一遇の大事件」であるハレー彗星についての特集記事が掲載されている。その中に次のような一節がある。「仏国のフレンマリオン博士其他の説に依れば、此尾が地球を包む結果として地球の人類に大なる危害を及ぼす虞があると云ふことだ。果して然らば、今から二十幾日後の現象を考へると、実に恐怖と震駭に堪へない次第で、これこそ誠に人生に取つて非常の一大事件と云はねばならぬ。（中略）（フレンマリオン博士の）其言説とは、『ハリー彗星が太陽面を通過する時に地球と彼との距離は千五百万里を越えない。然るに、其尾の長さは二千万里、乃至三千五百万里の筈であるから、之に依つて我地球が包まるゝことは、勢ひの免れ難い所である』と云ふのだ。（中略）フ博士（フレンマリオン博士）は更に進んで、『此尾の中に含まるゝ水素が地球の空気の中に存在する酸素と化合すれば、人類は皆窒息して死滅するであらう。若し又、此反対に、空中の窒素が減ずる場合には、人類は勢ひ無我夢中に狂喜して踊つたり跳ねたりして、遂には矢張り死滅せねばならぬ筈だ』と述べた。」

この記事に出てくる「フレンマリオン博士」とは、ニコラ・カミーユ・フラマリオン（Flammarion, Nicolas Camille：一八四二–一九二五）のことである。フラマリオンは、フランス天文学会を創設して初代会長に就任したほどの著名な天文学者で、火星の観測から、火星には海と運河があり、地球人よりも進んだ火星人が住んでいると主張した人物でもある。そのフラマリオン博士がハレー彗星到来による人類滅亡説を主張したのだから、多大な影響がないわけがない。

この「人類死滅」が予測された明治四三年、すなわち一九一〇年の動きのいくつかを時系列に沿って列記してみる。

①二月一〇日以降、東京帝国大学文学部心理学助教授・福来友吉が透視実験を始める。
②四月一日、柳宗悦、武者小路実篤や志賀直哉らとともに「白樺」派を旗揚げする。
③四月二五日に東京帝国大学内で、同年二月に熊本で行った「千里眼」の持ち主・御船千鶴子の透視実験の報告をし、話題を呼ぶ。
④五月一九日、ハレー彗星が最接近。
⑤五月二五日、大逆事件が起こり、検挙が始まり、六月一日、幸徳秋水らが明治天皇暗殺計画の容疑で逮捕され、処刑される。
⑥六月一四日、柳田國男が『遠野物語』を出版し、新渡戸稲造、牧口常三郎らとともに「郷土会」を発足させる。
⑦八月二一日、南方熊楠が神社合祀反対運動により逮捕される。
⑧八月二二日、韓国併合条約が締結される。
⑨八月二四日、夏目漱石、伊豆の修禅寺で大喀血、

大病を患う。喀血前後にウィリアム・ジェームズの遺著となる『多元的宇宙』を読破。

⑩八月二六日、アメリカの心理学者ウィリアム・ジェームズ死去（享年六八歳）。

⑪八月三一日、学習院の教師であった西田幾多郎が京都帝国大学文科大学助教授に就任し、倫理学を担当する。

⑫九月一日と一〇月一日、学習院高等部で西田幾多郎や鈴木大拙の教え子であった柳宗悦が『白樺』第一巻六号・七号に心霊科学研究の論文「新しき科学」を発表する。

⑬同月、東京帝国大学で、御船千鶴子による福来友吉の透視実験が行われる。

⑭同時期に、高橋五郎『心霊万能論』、ブラヴァツキー『霊智学概説』、E・S・スティヴンソン・宇高兵作共訳、スエデンボルグ『天界と地獄』鈴木大拙訳、など、心霊研究書の出版が目白押しとなる。

⑮一一月二〇日、ロシアの文豪レフ・トルストイ死去（享年八二歳）。

⑯一二月、柳田國男『時代ト農政』を出版する。この頃、柳田國男は、新渡戸稲造、牧口常三郎らとともに「郷土会」を発足させる。

⑰一九一一年（明治四四）一月一八日、大審院が幸徳秋水ら二四人に死刑判決を下す。一月二四日、幸徳秋水ら一一人を死刑執行。一月二五日、管野スガ、死刑執行。

⑱一月三一日、西田幾多郎の『善の研究』が出版される。

⑲同月、福来友吉の透視実験が詐欺呼ばわりされ、御船千鶴子は服毒自殺し、「念写」実験の協力者の長尾郁子も病死し、大正二年、福来友吉は東京帝国大学助教授を休職（辞職）する。

注意したいのは、ハレー彗星の影響によって地球規模の気象変化がどのように起こるのかまったく予測がつかなかったこともあり、この時、地球と生命の危機が強く意識せられ、世界同時性＝地球的同時性が認識され始めたことである。一九世紀以来の西欧諸国による植民地支配、通信・交通網の整備、新聞雑誌等の大衆メディアの隆盛によって、ハレー彗星到来問題は全地球的な問題となったのである。この時、地球という惑星の中で「世界は一つ」あるいは「惑星的運命共同体」という認識がリアリティを持ち始めたといえる。そこで、この年の大変化をわたしは「ハレー彗星インパクト」あるいは「一九一〇年問題」と呼んでいるのである。

2 一九一〇年のサイコロジー（心理学）とエコロジー（生態学）と民俗学 ——南方熊楠の場合

南方熊楠は慶応三年（一八六七）紀州藩（和歌山県和歌山市）に生まれた。菩提寺は真義真言宗根来派の末寺・延命院（通称「赤門寺」）で、そこには南方熊楠の分骨が納められている。ちなみに、本骨は田辺市の高山寺（真言宗御室派）に納骨されている。

幼少期の教育環境について、南方熊楠は次のように記している。「（父母は）地蔵の和讃、大日真言などを聞かせて育てたり。この和讃、この真言のかたことばかりの中に、在英の現在の金粟如来は生まれたるなり」[2]。この頃、伊達神社の倉田神官や、提燈屋の亭主の国学者や、学識ある薬屋の坂上隠居らに、毎日曜日に「心学」を学んでいたという。

南方熊楠は、一八七九年（明治一二）和歌山中学校に入学し、そこで、生物学や天文学や和歌や漢籍や英語など、大変広範な学識を持つ博物学者の鳥山啓（ひらく）の多大な影響を受けている。鳥山啓は、『変異弁——天変地異拾遺』（一八七三年）をはじめ、『異変弁動物図彙』『木水魚譜』『植物図彙』などの図鑑を著すと同時に、「軍艦マーチ」の作詞者としても知られている。南方は、一八八四年（明治一七）に上京して、共立学校で英語を学び、東京大学予備門に入学するも、ノイローゼになり中退する。その時の同期生には、夏目漱石や正岡子規や秋山真之、芳賀矢一、山田美妙、本多光太郎など、錚々たるメンバーがいた。

東京大学予備門を中退した南方熊楠は、一八八六年（明治一九）、渡米してサーカス団に入り、巡業したりしたが、一八九二年（明治二五）イギリスに渡り、ロンドンに住み着き、大英図書館に通い詰めて、猛烈な勉強を開始する。そして、科学雑誌『Nature』に「東洋の星座」や「ミツバチとジガバチに関する東洋の見解」や「拇印考」などの論考を投稿し掲載される。この頃、大英博物館で図書目録編纂係となり、考古学や人類学の文献を抜き書きし、南方版百科全書ともいうべき私家版の『南方抜書』を作成する。

注目すべきは、一八九三年（明治二六）一〇月三〇日、ロンドンで土宜法竜（後の高野山真言宗管長）と出会ったことである。土宜法竜は同年、シカゴで行われた万国宗教大会に鎌倉円覚寺の釈宗演らとともに日本代表として参加し、その後ロンドンとパリに立ち寄り帰国することになるが、ロンドン滞在はわ

ずか数日であったにもかかわらず、その後の南方熊楠との頻繁なる書簡のやり取りは特筆に値する内容と分量である。土宜法竜は、パリではギメー博物館の要請で、一八九四年の三月まで約五ヶ月間滞在している。この間に南方熊楠と土宜法竜との間でロンドンとパリを往復する膨大な書簡のやり取りがあったわけである。ちなみに、『南方熊楠全集第七巻』の一三五頁から四七三頁までの約三四〇頁が土宜法竜宛書簡である。一頁が四〇〇字詰め原稿用紙だとおよそ三枚ほどなので、その桁外れの書簡の分量をうかがうことができよう。

南方の書簡については、もう一つ付け加えねばならない。『南方熊楠全集第八巻』五頁から四九四頁までのおよそ四九〇頁が柳田國男宛書簡であるが、これもまた異様な分量である。ここに南方熊楠の「変態心理」の一端を垣間見ることすらできる。

一九二〇年（大正九）八月、五三歳の南方は、当時高野山真言宗の管長職にあった土宜法竜の招きで高野山に登り、二七年ぶりの再会を果たす。この時、土宜の弟子であった水原堯栄（一八九〇－一九六五）が熊楠を接待したのだが、水原は後に『邪教立川流の研究』（一九二四年）を上梓した学僧である。この時、熊楠は一乗院に宿泊し、周辺の森で粘菌類を採集している。翌年の一九二一年一一月に熊楠はふたたび高野山に登り、膨大な粘菌を採集したが、この時も、一乗院に投宿している。土宜法竜はその翌年、一九二二年、高野山金剛峰寺にて死去した。

南方熊楠は土宜法竜と出会い、それをきっかけとして膨大な書簡をやり取りする中で、幼少期から南方の血肉となっていた真言密教が、当時のロンドンで大流行していた心霊研究やオカルティズムやスピリチュアリズムとある面では共鳴し、ある面では反発して独自の南方流世界認識を作り上げていくことになる。

一八九三年一二月二一日、南方熊楠は土宜法竜に、「オッカルチズムのことは、仁者（引用者注：土宜法竜のこと）これを何の用に供するを言わず。（中略）オッカルチズムのことたる、別に立派なものにあらず。一体日本にも巫覡などいうは、士君子たるものの正しきこととせぬことなり。仁者のこれを調べんとするは、西洋にかかるもの多く、言を仏教などに託するを聞いて、もし真に然らばこれを仏教の助けとなさんとせられしことと小生は思えり。（中略）またわけも分からざるオッカルチズムぐらいのことで（中略）シャマニズムは、仏教の至っておちぶれたるものとも、また大乗の『瑜伽論』の原をなせりとも申す[3]」と書き送っている。

ここで熊楠は、西洋の「オッカルチズム」（オカルティズム）などはさほど大したものではない、それは日本の「巫覡」すなわちシャーマニズム的な現象と変わらぬもので、それは仏教の落ちぶれたものであり、また大乗仏教の唯識派のヨーガ的な行法の元をなすものともいえると述べている。

注意したいのは、熊楠が一方では「オッカルチズム」を「シャマニズム」のような落ちぶれたものと幾分否定的に言いつつも、もう一方でそれがヨーガ的唯識説の元をなすものだとも評価しているように見える点である。そしてさらに注目すべきは、翌一八九四年三月一九日付けの土宜法竜宛書簡で、その「瑜伽」をキリスト教のグノーシス主義に比している点である。「你（なんじ）、瑜伽を学ばんとならば、耶蘇教のGnosticismを見よ。これ今はほとんど全滅せしが、書はあるなり。『大日経』ともいうべき大著述もあり。例の捏造捏造といわる、されど何しろ玄妙なものなり。五智如来の配置にはなはだ似たることもあり。いろいろの秘密法あるなり[4]」。

一八九四年当時に、古代キリスト教最大の異端とされたグノーシス主義をこのような観点から評価している熊楠の知識とその慧眼に驚かされる。しかも、「捏造」文書と言われるグノーシス主義に実に「玄妙なもの」である『大日経』のような大著があり、そこには、『大日経』に説かれる五智五仏の叡智のはたらきや密教修法のような「秘密法」があると述べているところにも驚かされる。いったい熊楠は、このようなグノーシス主義についての知見をどのようなところから得たのであろうか。

推測するに、それは一つは、ブラヴァツキーの「神智学」方面からの情報だったのではないか。というのも、熊楠が土宜法竜に宛てた書簡に次のような文章があるからである。

御申越しの幽霊等の会のことは、小生一向知らず。ただし行くその会につてを求めて、一報を長谷氏まで呈すべし。またオッカルチズムのことは小生も少々読みしが、名ありて実なきようのことにあらずや。たとえば霊験とか妙功とかいうほどのことで、一向その方法等は聞き申さず。ブラヴァツキのこのことの傑作前後二篇四冊のうち二冊、ずいぶん大冊なるが、前年読みしも、ただかかる奇体なことあり、かかる妙な行法あり、

というまでにて、いわば『古今著聞集』、『今昔物語』等に、安倍晴明、賀茂保憲等のしき神を使いしこと多くのせたるようなことで、面白いばかり、一向核のなきことなりし。この書もし入用ならば、仁者帰国の後、貸し申すべし（和歌山にあるなり）。私は多くオッカルチズムの書に銭を費やせしが、ただただ飯くわぬ人、幽霊と話する人の伝ぐらいのもので、『周易』などのごとく法方理論もなんにもなく、はなはだ漠たるものなり。ユダヤ人にカバラという方術あり。これははなはだむつかしく入りくみしもので、理論もあり書典もあるなり。[5]

ここで熊楠は、「ブラヴァツキのこのことの傑作前後二篇四冊」と記している。この「傑作前後二篇四冊」とは、おそらくブラヴァツキー著の『ヴェールを脱いだイシス（*Unveiled Isis*）』と『秘密教義（*Secret Doctrine*）』の二著（各二分冊で合計四分冊）のことであろう。これを熊楠はオカルティズムの「傑作」とも記すが、しかし、これとても、「名ありて実なきよう」なもので、「霊験とか妙功」とかを説くが、その「方法」などについての記述もなく、『古今著聞集』や『今昔物語』などには「霊験とか妙功」現象は頻出している。たとえば、陰陽道の安倍晴明や賀茂保憲などが式神を使って呪を行うことなどがその例である。そのような霊験譚がブラヴァツキーの著作には満載されているが、しかしそこには方法論や理論がないと熊楠は断じている。それに対して、ユダヤ教の「カバラという方術」には「理論」も「書典」もあると評価を与えている。

このように、キリスト教神秘主義のグノーシス主義とユダヤ教神秘主義のカバラに一定の評価を与えているところに、熊楠における先行事例とも範型ともなっていたのが真言密教であったことがよくわかる。熊楠は日本および東洋の「密教」を判断軸として、グノーシス主義とカバラに一定の評価を与え、オカルティズムやブラヴァツキーに対してはシャーマニズムや『古今著聞集』や『今昔物語』を判断軸として低い評価しか与えていない。

ここで、熊楠が「事」（事象、現象、霊験、妙功）あるいは「理外の理」よりも、まっとうなる「理」（方法、理論）を重要視していることがうかがえる。それは、次のような「理外の理」についての言説においても明白であろう。「また目今、数十万の信徒を有するスウェーデンのスウェズンボールグ氏の教え（New Churchとかいう。欧米到る処に寺あり）は、全く你らのいうような奇怪なこと、すなわち理外の理を主張す。しかして元祖スウェズンボールグの你よりえらきは、さすがの英雄なれば、理学を精研して、合戦のときは大敵を打ち破る器械までも成し、一同の心を圧服して後に、珈琲ばかり飲んで終夜一室に鬼語し、われは上帝、ノア等と会話すとて、乗り出だしたる、とあり」[6]、「また汝、オッカルチズムごとき腐ったものを理外の理などいうて求めんとす。予は常にかかることを行ない、一昨日も行なえり」[7]。つまり、スウェーデンボルグは単なる神秘家でも「理外の理」を求め吹聴する輩でもなく、「理学」者でもあり、戦闘「器械」まで作った点が、土宜法竜よあんたより偉いのだという熊楠の歯に衣着せぬ主張がこの書簡には躍動している。

しかも、熊楠は、ぬけぬけと「釈迦に説法」よろしく、自分が「金粟如来」の化身であるとして、その「直言」を土宜法竜に向かって説法しているのだと説きつけるのである。「金粟如来は権に熊楠身によりてこの文を草す。熊楠の身を脱すれば、すなわち如来位、（中略）、直言が即身成仏の極楽じゃ。大日如来の光焔中に無数の如来あり、あるいは香を供養し、あるいは薬師となり、あるいは音で説法し、あるいは芳で説法する。金粟如来は直言をもって開発す。決して自己のみの利益とは思わず。また仮身の生理上よりすることにもあらず。」[8]これには、さぞかし土宜法竜も苦笑いせざるをえなかったであろう。ほとんど妄想の域に達しているかに見えるこの熊楠「金粟如来」の「直言」に対しては。

もう一つ、ここで触れておかねばならないのは南方熊楠の独自の「自覚」のことである。熊楠は自分をしばしば「辟支仏」と言っている。「辟支仏」（pratyeka-buddha）とは、「縁覚」とか「独覚」とも言うが、それは、師を持たずに独自に悟りを開いた者の意味で、いわゆる小乗仏教的な覚者のことを言う。熊楠は土宜法竜に言う。「現在ロンドンの金粟如来は、今しばらく菩薩に成らず、やはり辟支仏でおる」[9]と。さらに、帰国後、一九〇四年に知己を得た柳田國男に向かって、「仏経に辟支仏（縁覚）というものあり、独覚根性という奴これなり。無仏の世に辟支仏出で、麒麟の独居するがごとく、無言で乞食しまわる。これに食を奉ずれば、後世に福あり。しかし、返礼に説法などは少しもせず、ただ空中に上がり、身土火を出し、神変を現じて飛び去るばかりなり。人に教えられず縁に触れて独り覚る。故にまた人に

教うる気少しもなし。菩薩は馬が人を乗せて川を渡るがごとく、独覚は人を乗せずに独り渡るがごとしなど申す。土宜法竜師説に、熊楠はこの辟支仏のもっとも顕著なる奴の由」と書き送っている。[10] この「辟支仏・縁覚・独覚」の自覚も南方熊楠理解には欠かせないところであろう。

熊楠はまた、一八九四年三月二四日付け土宜法竜宛書簡の中で、「この世界のことは決して不二ならず〔一つではない、一つとして同じものはない〕。森羅万象すなわち曼陀羅なり。その曼陀羅力を応用するの法およびその法あるべき理論を精述するなり。むやみに未熟で世に出すときは大害を生ずるものゆえ、まず仁者に真言として伝えんと思うなり。事実の条述は大抵左のごとし。（中略）［一］箇人心は単一にあらず、複心なり。すなわち一人の心は一にあらずして、数心が集まりたるものなり。この数心常にかわりゆく、またかわりながら以前の心の項要を印し留めゆく（このことは予実見せしことなり）。［一二］しかるに、複心なる以上はその数心みな死後に留まらず。しかしながら、またみな一時に滅せず、多少はのこる（予は永留の部分ありと信ず）。［三］右を実証す。［四］天才（genius）のこと。坐禅などはこの天才を涵養する法なり。しかるに、なにか大胆になるとか不平をしのぐとか心得は残念なり。不意に妙想出で、また夢に霊魂等のことあり。これ今日活動する上層の心機の下に、潜思陰慮する自心不覚識（アラヤ）の妙見をいう。（中略）［五］静的神通（遠きことを見る、聞く等なり）。［六］幽霊。［七］動的神通（遠きことを手でかきまねで示す等なり。南方金粟如来の秘密事なり）。［八］入定。［九］実用。［十］教用。［十一］真言宗向来の意見」[11] と書き送っている。

ここで熊楠は、「森羅万象」が「曼陀羅」であること、そしてその「曼陀羅力」の応用法を秘密の「真言」として伝えるとその意気込みを土宜法竜に向かって述べ、①複心論、②数心の死後の存続、③その実証、④天才および天才涵養法あるいは潜在意識論、⑤透視やテレパシーなどの静的な神通力、⑥幽霊、⑦テレポート（物体移動）などの動的な神通力、⑧（弘法大師空海の死も含む）入定という死のありようについて、⑨密教の実用（事相・実践）、⑩教相（教学・理論）、⑪真言宗に対する熊楠のこれまでの意見（のことか？）の一一種を挙げている。

このように、南方熊楠は土宜法竜という密教の練達の士を得て、溢れるように彼の密教観と学問観を書き送るのであった。そこで東洋古代密教と西洋現代心理学とが激突するさまを垣間見ることができる。

それでは、南方熊楠にとって、思考の基軸に置かれることになる真言密教とはどのようなものであったのだろうか。帰国後三年ほど経って、那智から高野山の土宜法竜に宛てた熊楠の書簡から探ってみよう。

ここに一言す。不思議ということあり。事不思議あり。物不思議あり。心不思議あり。理不思議あり。大日如来の大不思議あり。予は、今日の科学は物不思議をばあらかた片づけ、その順序だけざっと立てならべ得たることと思う。（中略）心不思議は、心理学というものあれど、これは脳とか感覚諸器とかを離れずに研究中ゆえ、物不思議をはなれず。したがって、心ばかりの不思議の学というもの今はなし、またはいまだなし。次に事不思議は、数学のひと一事、精緻を究めたり、また今も進行しおれり。（中略）図中（イ）のごときは、諸事理の萃点ゆえ、（中略）（ヌ）ごときに至りては、人間の今日の推理の及ぶべき事理の一切の境の中で、（この図に現ずるを左様のものとして）（オ）（ワ）の二点で、かすかに触れおるのみ。（ル）ごときは、あたかも天文学上ある大彗星の軌道のごとく、（オ）（ワ）の二点で人間の知りうる事理にふれおる（ヌ）、その（ヌ）と少しも触るるところないが、近処にある理由をもって、多少の影響を及ぼすを、（中略）なにか一切ありそうなと思う事理の外に、どうやら（ル）なる事理がありそうに思わるるというぐらいのこと想像しうるなり。（中略）さてこれら、ついには可知の理の外に横たわりて、今少しく眼鏡を（この画を）広くして、いずれにかて（オ）（ワ）ごとく触れた点を求めねば、到底追蹤に手がかりなきながら、（ヌ）と近いから多少の影響より、どうやらこんなものがなくてかなわぬと想わるる（ル）ごときが、一切の分かり、知りうべき性の理に対する理不思議なり。さてすべて画にあらわれし外に何があるか、それこそ、大日、本来の大不思議なり。[12]

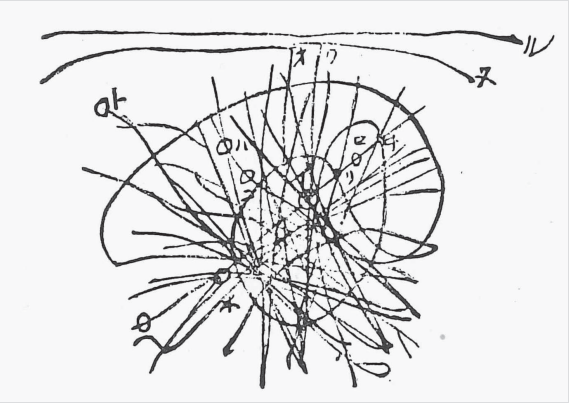
ここで、熊楠は、①事不思議、②物不思議、③心不思議、④理不思議、⑤大日如来の大不思議の五種の「不思議」を弁別している。この内、物不思議については、「今日の科学は物不思議をばあらかた片づけ、その順序だけざっと立てならべ得た」とし、さらに心不思議について、「心理学というものあれど、これ

は脳とか諸感覚とかを離れずに研究中ゆえ、物不思議をはなれず。したがって、心ばかりの不思議の学というもの今はなし、またはいまだなし」と「心理学」の方法論的制約と限界について指摘している。つまり、物質科学としての心理学の限界を南方は指摘しているのである。「脳とか諸感覚とかを離れずに研究」することが、もちろん、実証的な経験科学としての心理学の重要な学問的方法となってきたが、それゆえに、南方はそれでは「物不思議」を離れることはできない、つまり、物質の科学の範疇の中にあるのであって、「心ばかりの不思議の学」ではない、と鋭い突っ込みを入れるのだ。

これはしかし、通常の心理学者にとっては心外の指摘であろう。心理学が「科学」として担保されるのはまさしくこの「物不思議を離れない」からであると彼らは言うであろう。だが、日本の真言密教の宗祖である空海の主著『秘密曼荼羅十住心論』を読破していたであろう南方熊楠にとっては、このようなレベルの心理学はいまだ浅はかな入門段階の心理学にすぎなかった。だからこそ、彼は、「心ばかりの不思議の学というもの今はなし、またはいまだなし」と言わざるを得なかったのである。要するに、「心ばかりの不思議の学」というものを、仏教は、とりわけ「十住心」の体系を持つ真言密教は持っているということを南方は自覚している。そしてそれを今日現在に生起しつつある心理学に対峙させている。南方にとっての西洋の「科学」とは、このような意味での東洋の学術との対峙と対決の中で問われるものであった。同じ意味で、仏教哲学も江戸の本草学も西洋近代科学との対峙と対決の中で問い直されたのであった。そのような意味で、南方熊楠の中で西洋と東洋とは対峙・対決し、ある絶妙の接合点を生み出したのである。

興味深いのは、「理不思議」を数学に比定していることと、これに高い評価を与えている点である。この南方の五不思議論には、その思想背景として、『華厳経』の理事無碍法界論があると考えられる。また、真言密教の事相（修法・実践）と教相（教学・理論）の別もあると思う。そうした華厳哲学や密教教理を判断基軸として、熊楠は「五不思議」の中に「心不思議」の世界を位置づけているのである。

この有名な「萃点」図で、諸交叉線から離れて、その上層に超越的に引かれた「(ル)」の直線が、「一切の分かり、知りうべき性の理に対する理不思議なり。



「南方マンダラ」とも呼ばれる「萃点」図

さてすべて画にあらわれし外に何があるか、それこそ、大日、本来の大不思議なり。」とされる線である。興味深いのが、これが「一切の分かり、知りうべき性の理に対する理不思議」でありつつ、「その外」に「大日、本来の大不思議」の世界が存在することを表わす線分であることである。つまり、熊楠はこの「理不思議」の「外」に、無方広大なる「大日、本来の大不思議」の世界を想定できる想像力と思考の軸を持っているということである。この存在世界認識に注意しなければならない。科学の「理」は、そうした存在世界の一部分を切り取るための方法にすぎないということ、そのことを、熊楠は骨身に沁みて理解している。それゆえに、科学の面白さも重要性もよりクリアーにわかっていたということができる。

その「熊楠密教」は、また、「胎蔵界大日中に金剛大日あり。その一部心が大日滅心（金剛大日中、心を去りし部分）の作用により物を生ず。物心相反応動作して事を生ず。事また力の応作によりて名として伝わる。さて力の応作が心物、心事、物名、名事、心物心、心名物、（中略）これを心に映して生ずるが印なり」[13]というものである。熊楠は、胎蔵界（智・女性原理）と金剛界（理・男性原理）とに二分並列された密教教学を、「胎蔵界大日（如来）」の「中」に「金剛（界）大日（如来）」が含まれてあるという大日理解を示している。そして、その大本の「胎蔵界大日」の「一部心」が「大日滅心」の「作用」によって、「物心相反応動作」を起こして「事」を生じ、その「事」が「名」となり、また「心物、心事、物名、名事、心物心、心名物……」と展開していって、「印」が生じてくると主張する。

正直言って、この熊楠独自の大日心観は、理解し

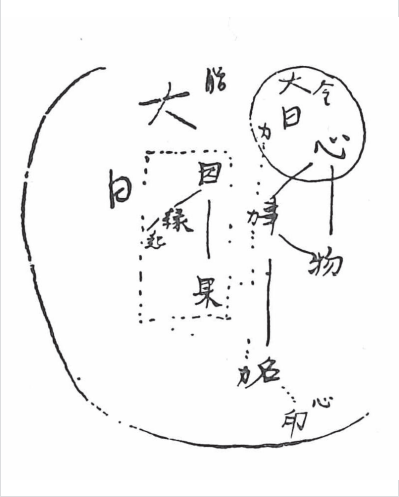
にくい。が、ここで確認しておきたいことは、南方熊楠にとっての心理学というものが、このような彼の「心」観あるいは「心」理解の中にあったということである。南方流心理学の根幹に、空海の「十住心」哲学や、『大日経』が厳としてあったということをまずはここで確認しておきたい。

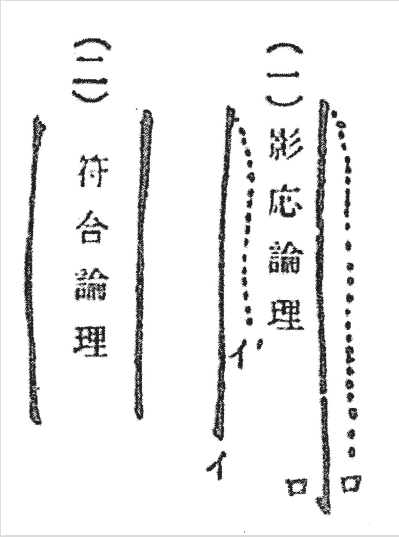
そしてそれが、後の一九二五年一月三一日付けの矢吹義夫宛書簡の「履歴書」の中に、「かくて小生那智山にあり、さびしき限りの生活をなし、昼は動植物を観察し図記して、夜は心理学を研究す。さびしき限りの処ゆえいろいろの精神変態を自分に生ずるゆえ、自然、変態心理の研究に立ち入れり。幽霊と幻（うつつ）の区別を識りしごとき、このときのことなり。幽霊が現わるるときは、見るものの身体の位置の如何に関せず、地平の垂直にあらわれ申し候。しかるに、うつつは見るものの顔面に平行してあらわれ候」[14]とあるように、「さびしき限りの生活」の中で記されていたということを考慮する必要があるだろう。南方はその時、夢告や幽体離脱のような「いろいろの精神変態」を体験したのである。「幽霊と幻の区別」などを「想定外」の超長文の「履歴書」の中で記すなどということをやってのけるのであるから、熊楠も長年相当な「変態心理」の中にいたことは間違いない。ともかく、そうした中で、「事物心一切至極のところを見んには、その至極のところへ直入するの外なし」[15]というのが、南方流の直観・直言・直入という「直」の論理であった。

さて、このような南方熊楠の密教的心理学がどのように彼の生物学・生態学と神社合祀反対運動と結びつくのか、この点が次の考察のポイントになる。先に述べたように、熊楠には「辟支仏・縁覚・独覚」という自覚と「金粟如来」の化身という自覚もあったが、同時に「藤白王子の老樟木の申し子」の自覚もあった。これは忘れてはならない点である。亡くなる二年前の一九三九年（昭和一四）三月一〇日、熊楠は土宜法竜の弟子の水原堯栄に宛てて「小生は藤白王子の老樟木の申し子なり」と書き送っている。[16]この「藤白王子」とは、和歌山県海南市にある、境内に楠の巨木を持つ神社で、九十九王子の中で特に「五体王子」と呼ばれた別格王子社の一社である。「藤代王子」、「藤代神社」、「藤白権現」、「藤白若一王子権現」とも呼ばれている。要するに、熊野参詣道（熊野古道）の入り口に位置する由緒のある神社である。ここの神社の説末社が楠社であるが、熊楠はこの「藤白王子」社の宮司に名前を付けてもらった。そこで、楠に対しても、熊野に対しても、特別の思いが熊楠の中にはあった。

熊野密教と楠。これこそ「南方熊楠」という存在の立脚点であったといえる。南方熊楠の生命研究（植物学）と民俗学（人間生活学）と神社合祀反対運動との接合点は、熊楠の密教理解と藤白神社に対する深い思いを基盤として支えられていたのだろう。

今、繰り返し読んでも、熊楠の神社合祀反対運動の論理は練り上げられていて、彼の「履歴書」など





のような融通無碍なるマンダラ論理ではなく、見事に首尾一貫した戦略的な整合性がある。熊楠は言う。神社合祀は、①敬神思想を弱め、②民の和融を妨げ、③地方を衰微させ、④国民の慰安を奪い、人情を薄くし、風俗を害し、⑤愛国心を損ない、⑥土地の治安と利益に大害があり、⑦史蹟と古伝を滅却し、⑧天然風景と天然記念物を亡滅する、と。実に、そのとおりである。付け加えるものはない。体系的かつ網羅的に、「神社合祀」という行政的な強制的政策の非と欠陥を突いている。このような図抜けた明晰さと土宜法竜に宛てた書簡のような妄想的ともいえるような錯雑した複合性が熊楠の特性である。神社合祀反対運動は、熊楠のそのような合理と不合理（超合理ともいえる）が沸騰融合している。

熊楠は「エコロギー」という言葉を使って、生命の宝庫としての神社の森（鎮守の森）を護り、そのいわば社会運動を生態学的な生命研究と接合した。この点で、わたしは南方熊楠を宮沢賢治と並んで、日本近代における「生態智」思想探究の先駆者と位置づけている。そして、その両者ともに、「変態心理」を体験し、「変態心理学」に多大な興味と独自の心理学的野心を持っていたことに注目したい。

熊楠は、「わが国の神社、神林、池泉は、人民の心を清澄にし、国恩のありがたきと、日本人は終始日本人として楽しんで世界に立つべき由来あるを、いかなる無学無筆の輩にまでも円悟徹底せしむる結構至極の秘密儀軌たるにあらずや」と述べ、また、「本県合祀励行一村一社の制を強行して、神社乱滅、由緒混乱、人民嚮（むか）うところを失い、淫祠邪魅盛んに行なわれ、官公吏すでに詐道脅迫をもって神様を奪い得る。人民また何なりして官を欺くがよろしというようなことで、当県官公吏の犯罪（村長の）全国第一たり。加うるに、高野、熊野その他に山林濫伐、偽証払下げの罪人多く生じ、当該官当局またこれを悔ゆることはなはだしけれども、今度は人民の方一層狡猾になり、小生千辛万苦して、せっかく数千の私資金を費やし、多大の年月を消して作りたるプレパラートの漏れ損ずるをも顧みず……」、「神社の人民に及ぼす感化力は、これを述べんとするに言語杜絶す。いわゆる『何事のおはしますかは知らねども有難さにぞ涙こぼるる』ものなり」、「野外博物館とは実は本邦の神林神池の二の舞ならん」と述べている。[17]

「エコロギー」という語の使用に関しては、和歌山県知事川村竹治宛て書簡中に、「殖産用に栽培せる森林と異（かわ）り、千百年来斧斤を入れざりし神林は、諸草木相互の関係はなはだ密接錯雑致し、近ごろはエコロギーと申し、この相互の関係を研究する特種専門の学問さえ出で来たりおることに御座候」[18]とあり、また、柳田國男宛て書簡中にも、「昨今各国競うて研究発表する植物棲態学 ecology を、熊野で見るべき非情の好模範島（神島のこと）」とある。この「千百年来斧斤を入れざりし神林は、諸草木相互の関係はなはだ密接錯雑致し」という熊楠の記述は、まさに生命のミステリー場としての神社の森の生命精髄であっただろう。そしてそれが田辺湾に浮かぶ美しい「神島」という「非情の好模範島」に典型化されていたのである。

心理学と生態学と民俗学との融合。それを可能としたのが、彼の密教と神社に対する神仏習合的な直覚であったということに注意しておきたい。

おわりに ―― 明治「心理学」の夢と変容

本稿では、以上、近代における「こころの練り方」の一事例として南方熊楠の心理学と生態学と神社合祀運動との接合点について取り上げてみた。この南方熊楠の神社合祀運動は、ハレー彗星の到来した一九一〇年（明治四三）にピークを迎えた。熊楠は猛然と論旨明快、行動果敢にこの運動を展開する。余人に理解しがたいほどの熱情と行動力をもって。

一九一〇年の「心理学」を考える際に避けて通ることができないのは、すでに確立していた井上円了の「心理学」のことである。哲学館（東洋大学の前身）を創立した井上円了は「妖怪学」という彼の一大体系の中に「哲学（純正哲学）」と「心理学」を位置づけていた。円了は、「妖怪」を「物怪」と「心怪」とに分け、また「妖怪現象」を「自然現象・人為現象・心理現象」として見ながら、「妖怪現象」の合理的説明を『妖怪学講義』の中で、①理学部門、②医学部門、③純正哲学部門、④心理学部門、⑤宗教学部門、⑥教育学部門、⑦雑部門として展開していった。この稀代の「妖怪学者」は実に啓蒙的で、迷信的な妖怪撲滅を掲げる合理主義者であった。円了は自分を「明治第二世代」と位置づけているが、円了より少し後に生まれた「明治第三世代」の南方熊楠や福来友吉は、円了流の合理主義「心理学」には飽き足らず、それを一歩も二歩も深化させる「変態心理」や「幽霊」の研究に突き進んだ。[19]熊楠にとってはその「変態心理学」は、その時に「今ここ（熊野・那智）」において、「生態学」とも「民俗学」とも結びついた新たなる探究であった。

同時に、福来友吉の「心理学」実験（透視＝千里眼、念写）も、新しい段階の実験心理学（精神物理学）を切り拓く探究であったが、実験を疑われ、アカデミズムを追われる。その福来友吉の新しい「変態心理学」的探究に関心を抱き、それをさらに「新しき科学」として展開しようとしたのが柳宗悦や宮沢賢治であったが、それは福来友吉の失脚に伴って変容を余儀なくされた。[20] これについては、次の稿でまとめていきたい。

注

1　「心理学」が明治時代以前（江戸時代）から明治時代以降、どのように移入され、研究・教授されてきたかについては、佐藤達哉・溝口元編著『通史　日本の心理学』（北大路書房、一九九七年）に詳しいので、これを参照されたい。

2　『南方熊楠全集』第七巻、平凡社、一九七二年、一五五頁

3　『南方熊楠全集』第七巻、平凡社、一九七二年、一三九頁、一八六頁、一八八頁～二四日付土宜法竜宛書簡。また熊楠はその頃、後の仏教思想家・鈴木大拙について、土宜法竜に次のように書き送っている。「前年チカゴのケラス方にある鈴木貞太郎（大拙と号す）と書簡にて往復す。この人の説に、熊楠は諸説一切、不可得を完全体となすごとしという。（小生のほかにデカルツなども不可得を完全体とせり。大拙は知らざりし、または気がつかざりしなり。）」（『南方熊楠全集』第七巻、四六〇頁、一八九四年三月二四日付土宜法竜宛書簡）

4　『南方熊楠全集』第七巻、二九六頁、一八九四年三月一九日付土宜法竜宛書簡

5　『南方熊楠全集』第七巻、二四二頁、日付なし宜法竜宛書簡

6　『南方熊楠全集』第七巻、二九六頁、一八九四年三月一九日付土宜法竜宛書簡

7　『南方熊楠全集』第七巻、二一八頁、一八九四年三月三日付土宜法竜宛書簡

8　『南方熊楠全集』第七巻、二九六頁、一八九四年三月一九日付土宜法竜宛書簡

9　『南方熊楠全集』第七巻、一五四頁、一八九三年一二月二一日付土宜法竜宛書簡

10　『南方熊楠全集』第八巻、一九三頁、一九一五年一〇月一七日夜、柳田國男宛書簡

11　『南方熊楠全集』第七巻、四六五－四六七頁、一八九四年三月二四日付土宜法竜宛書簡。また、「小生は平生法身如来観をなし、何ごとがあるとも格別何とも思わず、これも成り行きなりと芝居を見る心構えの男なる」（『南方熊楠全集』第九巻、平凡社、一九七三年、四一〇頁）とある点にも注意しておきたい。

12　『南方熊楠全集』第七巻、三六四－三六六頁、一九〇三年七月一八日付土宜法竜宛書簡

13　『南方熊楠全集』第七巻、三九〇頁、一九〇三年八月八日付土宜法竜宛書簡

14　『南方熊楠全集』第七巻、三一頁、一九二五年一月三一日付矢吹義夫宛書簡「履歴書」

15　『南方熊楠全集』第七巻、四五五頁、一九〇四年三月二四日付土宜法竜宛書簡

16　『南方熊楠全集』第九巻、四一一頁、一九三九年三月一〇日付水原堯栄宛書簡

17　『南方熊楠全集』第七巻、四八九頁、五五〇頁、五六一－五六二頁。「生態智」とは、「自然と他者に対する深く慎ましい畏怖・畏敬の念に基づく、暮らしの中での鋭敏な観察と経験によって練り上げられた、自然と人工との持続可能な創造的バランス維持システムの技法と知恵」であると定義している。それは、聖地や癒し空間や古代からのさまざまな生活文化のワザの中に保持されてきているし、また、神社の儀礼（神饌や祭りや建造物など）、修験道の山岳跋渉の修行、タオイズム・老荘思想、先住民文化なども「生態智」を核として成り立っているといえる。そのような「生態智」を宿す「聖地」を二一世紀の「霊性のコモンズ（公共財）」として生かすことが求められている。『日本の聖地文化』（鎌田東二編、創元社、二〇一二年）参照。

18　『南方熊楠全集』第七巻、五二六頁、和歌山県知事川村竹治宛書簡、柳田國男宛書簡。熊楠は、一九一一年三月二一日付けの柳田國男に宛てて書いた最初の書簡には、「小生、当県の俗吏等むやみに神社合祀を励行すること過重にして（三重県の外にかかる励行の例なし）、一切の古社神林を濫伐するを憤り、英国より帰りて十年ばかり山間に閉居し動植物学を専攻致し候も、もはや黙しおる時にあらずと考え、一昨年秋より崛起してこれに抗議し、一時は英国の学士会院等よりわが政府に抗議せしめんかと存じ候も、（中略）神社濫滅のため土俗学・古物学上、また神林濫伐のため他日学術上非常に珍材料たるべき生物の影を止めず失せ果つるもの多く、さて神職等、素餐飽坐して何のなすところなく、淫祀狐府蠱の醜俗蜂起し候こと、実の学問のためにも国体のためにも憂うべき限りに有之候。（中略）また英国の雑誌に小生をあてこみに質問出で候も、一向手がかりなく困りおり候一条は、死人の最も親しき親族が見るとき尸（しかばね）より血出づると申す。このことなにか本邦の文書に載りたるものに有之候や。井上円了氏の『妖怪学講義』など見ば手がかり有之べくと存じ候えども、その書手許になく困りおり候。」（『南方熊楠全集』第八巻、平凡社、一九七二年、五－六頁）と記している。

19　福来友吉は、一八六九年（明治二）に飛騨高山に生まれ、一八九六年に東京帝国大学哲学科に入学、卒業後、大学院に進み、元良勇次郎の下で心理学を学び、変態心理学や催眠現象の研究に取り組んだ。一九〇六年、『催眠の心理学的研究』で文学博士号を授与され、一九〇八年に同大学助教授に就任し、元良の後継者と期待されるが、当時注目を浴びていた「千里眼」の実証的研究に取り組もうとして、猛烈な反発を受けて辞職。しかしその後も念写などの研究を続け、一九一九年（大正八）には高野山で密教を修行し、一九二六年から一九四〇年（昭和一五）まで高野山大学教授を務めている。その間に、財団法人大日本心霊研究所の所長も務め、一九二八年にはロンドンで行われた国際心霊学大会に日本から浅野和三郎と共に参加し、念写の研究を発表した。

福来は、「千里眼」を仏教の「根本識」すなわちアーラヤ識と結びつけ、「識原」と位置づけていた。また、福来は「千里眼」を得るためには「無我」にならなければ達成できないと指摘している。福来は「精神上の事実が物理学的方法で、最も確実に研究出来るのであると思つて非常なる希望を抱いて夫れに手を着けた」が、結果は「斯る研究は精神の極めて皮相なる部分に触れる丈のもので、道徳や宗教や芸術の如き重要なる精神問題と没交渉であると感じた」と述べている。福来はウィリアム・ジェームズの心理学を熟読し、精神現象にはそれ「固有の研究法」があるのではないかと考えるようになり、「精神

現象固有の研究法によりて出来たる心理学は科学者の定義する科学にならぬであらうけれども、それは精神其物の本性より生ずる結果で、已むを得ざることである」という認識に至り、さらに「超個人的なる精神原理の存在」に行き当たる。今日に言うトランスパーソナル心理学の問題に直接し、そこから「心霊現象を研究する」道に突入していった。一九三二年（昭和七）、『心霊と神秘世界』（心交社）を刊行する。福来は、心霊研究から神通力→念力→霊の存在とその活動の認識に至り、菩提智、慈悲心、神通力を「仏の三大本性」として「仏教型の神秘主義」の内奥に迫り、「福来霊学」を探究し続けたのである。

20　柳宗悦は、一九一〇年（明治四三）、『白樺』に発表した「新しき科学」の中で、「三つの科学」の区別をした。それは、(1)「人間とは何か」を問う生物学における人性の研究、(2)「物質とは何か」を問う物理学における電気物質論、(3)「心霊とは何か」を問う変体心理学における心霊現象の攻究、の三つである。この時、柳は、まごうことなく、新しい時代の「新しき科学」の最前線を「変体心理学における心霊現象の攻究」に見ていたのである。また、宮沢賢治も、一九二五年（大正一四）の友人宛書簡に、「前に私の自費で出した『春と修羅』も、亦それからあと只今まで書き付けてあるものも、これらはみんな到底詩ではありません。私がこれから、何とかして完成したいと思って居ります、或る心理学的な仕事の支度に、正統な勉強の許されない間、境遇の許す限り、機会のある度毎に、いろいろな条件の下で書き取って置く、ほんの粗硬な心象のスケッチでしかありません。私はあの無謀な『春と修羅』に於て、序文の考えを主張し、歴史や宗教の位置を全く変換しようと企画し、それを基骨としたさまざまの生活を発表して、誰かに見てもらいたいと、愚かにも考えたのです。あの篇々がいいも悪いもあったものではないのです。私はあれを宗教家やいろいろの人たちに贈りました。その人たちはどこも見てくれませんでした。」（『校本宮沢賢治全集』第一〇巻、筑摩書房）と書き送っているが、この「或る心理学的な仕事」とは、透視やテレパシーなどの、いわゆる超心理学的な現象の解明と開発の仕事であった。というのも、賢治の『銀河鉄道の夜』の第三次稿に出てくる「ブルカニロ博士」は主人公のジョバンニにテレパシー実験を試みているからである（だが、この実験は第四次稿ではすべて削除された）。第三次稿で、ブルカニロ博士はジョバンニに次のように語っている。「ありがたう。私は大へんいゝ実験をした。私はこんなしづかな場所で遠くから私の考を人に伝へる実験をしたいとさっき考へてゐた。お前の云った語はみんな私の手帳にとってある。さあ帰っておやすみ。お前は夢の中で決心したとほりまっすぐに進んで行くがいゝ。そしてこれから何でもいつでも私のとこへ相談においでなさい。」

＊謝辞　本論考の元になる研究プロジェクト「こころ観の思想史的・比較文化的基礎研究」は、京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門の助成を得て推進された。上廣倫理財団には心より感謝申し上げたい。

古事記ワンダーランド　鎌田東二著

とくしま書評

演劇性に着目し読解

稗田阿礼が読誦し太安万侶が記録したとされる「古事記」が編纂されてから今年で1300年。本書は神話、天語歌、寿歌など、さまざまな名を持つ11の歌謡が収められた古事記を歌謡劇として捉え、繰り返し歌い継がれてきたであろう古事記の演劇性に着目し、その面白さを読み解く。

国生み神話、出雲神話、天孫降臨神話など、息をもつかせぬテンションとスピードで次々と展開してゆく上巻をはじめ、古事記には語りのリズムが満ち満ち、古代、歌が歌われる現場にあった言霊の力が、今も響き渡っていると著者は言う。

本書ではわが国で初めて歌を詠んだとされるスサノオや、その系譜につながる大国主神やヤマトタケルなどの格調高くおおらかな歌も分かりやすく紹介されていて、大和言葉の持つ力強さや美しさ、素直さを堪能することができる。いとしい人を恋うる歌、国褒めの歌、苦悩を吐露する歌など、恋に生き、武に生き、古代の息吹と共に来た英雄たちの光と影が胸に迫る。

また、古事記を敗者である出雲系の神々や氏族の鎮魂譜であり、黄泉の国にみまかったイザナミの嘆きのグリーフ・ケアの書であるとして、「平家物語」と同様、彼らの悲嘆が物語られることによって、恨みや怒りといった負の感情が慰撫されてきたのだと歴史を振り返る。

物語られる言葉が喚きとる人々の身体と魂の古層に働きかけ、私たちの「今・ここ」を太古の時からつながっていて活性化するという普遍の起源にまでさかのぼりながら古事記の神話に深く踏み込んでゆく筆致は、まるで語りの力をよみがえらせて現代社会の閉塞状況を打破し、古代の息吹と共に未来を押し開こうとしているかのようだ。

「3・11」後、日本に仏教と神道が存在することのありがたさを痛感するようになったという著者。読者もいつしかそのイマジネーションに導かれ、時を超えた古事記ワンダーランドを飛翔していることであろう。（砂）

◇

著者は阿南市出身、京都大学こころの未来研究センター教授。角川学芸出版刊、1680円。

徳島新聞　2012年11月29日

第一章

モノ学・感覚価値研究会アート分科会／京都大学こころの未来研究センター連携研究プロジェクト二〇一二年度活動報告

大西宏志
京都造形芸術大学芸術学部准教授／メディアアート・アニメーション

はじめに

本稿は、鎌田東二京都大学こころの未来研究センター教授が受け入れ教員となって行われた京都大学こころの未来研究センターの二〇一二年度連携研究プロジェクトと、これに関連したモノ学・感覚価値研究会アート分科会メンバーの二〇一二年度の活動報告である。

震災、津波、原発事故によって幾重にもダメージを受けた東北地方。震災直後は物資的、経済的な支援に重点がおかれたが、時間が経つにつれて、こころやきずなの再生が必要とされるようになってきた。これを受けて、行政、医療機関、宗教団体、ボランティア団体などがそれぞれの方法でケアを行っている。本研究では、こうした活動に芸術実践を通じて貢献するために必要な条件とは何か、芸術の本質と人間のこころと幸福感の問題を切り口にして、作家と研究者が協力して検証してゆく。

期待される効果は二つある。一つは、人間のこころときずなの再生に芸術実践が担いうる役割について、実践面と理論面から光を当て明らかにすること。二つめは、こうして得た知見をもとにして、実際に被災地のこころときずなの再生に寄与する活動に繋げてゆくことである。

以上は、こころの未来研究センター連携研究プロジェクトの主旨である。これは3・11以降のアートとアーティスト自身の役割を問い直すためにモノ学・感覚価値研究会アート分科会が開催した「物気色（モノケイロ）11・11」展（遊狐草舎、二〇一一年一一月）の問題意識が展開されたものである。また、そのルーツは、モノ学・感覚価値研究会の目的のひとつ「人間の幸福と平和に結びつく『モノ』認識と『感覚価値』のありようを探りながら、認識における『世直し』と『心直し』をしていく」（モノ学・感覚価値研究会ホームページ）に見ることができる。

二〇一二年度は、二〇〇六年にスタートしたモノ学・感覚価値研究会、そして二〇〇八年に発足したアート分科会、さらに『物気色』に関わったアーティストやアート関係者の活動が、京都大学こころの未来研究センターとの連携研究を通じて各々の問題意識を深めてゆく一年となった。この一年の活動を時系列に沿ってふり返ってみる。

1 モノ学・感覚価値研究会アート分科会被災地プロジェクト

四月二八日、アート分科会のメンバーである近藤

高弘、渡邊淳司、岡田修二、上林壮一郎、秋丸知貴、大西宏志らが、国際日本文化研究センターの談話室でブレインストーミングを行い、「物気色11・11」の次の展開として被災地での展覧会「物気色フクシマ」を実施することが決められた。

五月一〇日、ブレインストーミングの内容を元に、京都大学こころの未来研究センター鎌田研究室で、鎌田東二、近藤高弘、渡邊淳司、秋丸知貴、大西宏志らで企画内容の検討を行い、「モノ学・感覚価値研究会アート分科会被災地プロジェクト」の企画案がつくられた。

○アート分科会被災地プロジェクト企画案

主旨

ニュークリア・シュライン〜フクシマから福島へ〜 Nuclear shrine —From Fukushima to 福島—

3・11を境に、福島はフクシマとなってしまった。長い時を重ねて育まれた地域のアイデンティティが、この日一瞬で奪われた。そして、レッテルが貼られた。やがてそれは呪いの言葉になり世界中を駆け巡った。フクシマはもう福島に戻れないのだろうか。フクシマを再び福島に戻すために、私たちに何ができるか。このアートプロジェクトの構想は、こうした問いから始まった。

フクシマを福島に戻すためには、放射性物質に対する不安を取り除くことが必要である。しかし、危険区域が「安全」になるためには、数十年、へたをすると千年単位の時間が必要になる。だが、そこまで待つわけにはゆかない。放射性物質を完全に追い出して以前のような街に戻すことはできないとしても、呪いの言葉を跳ね返すことで人々の心を鎮めることができるのではないか。なにより、フクシマ(Fukushima)は原発事故の災禍を表象する記号ではなく、ベニスやベルリンやニューヨークや北京、そして東京と同じ生身の人々が暮らす街であり、心と絆の復興に向けて苦闘していることを世界に伝えることが大切なのではないか。フクシマを福島に戻すために、日本人の心とアートの問題に取り組んできたモノ学・感覚価値研究会アート分科会の芸術実践としてこのプロジェクトを実施する。

方法

荒ぶるカミやオニを鎮め、穢れた土地を清め、人心を平安に導くためにアートの力を使った先例がある。平安京である。

平安人は都を鎮護するために、要となる場所に寺社を建て霊的な守りを固めた。それらの要所は、古代からの聖地であったり魔物の進入路と考えられた場所であったが、いずれも平安人のコスモロジーに合わせて合理的に定められた場所であった。これと同じようなことを、今日的な視点から実施する。宗教学的な観点に加えて、心理学、民俗学、地質学、資源学、放射線防護学、気象学、生態学、宇宙人文学などの知見も役立てながら3・11以降のコスモロジーを構築して福島の要となる場所をピックアップする。そして、それらの場所にアーティストが参じて作品を供える(作品のタイプや供え方の方法は、それぞれのアーティストに委ねられる)。これらの作品群は、フクシマを福島に戻し、霊的に守護し、世界の人々の心に平安をもたらす小さな神社となる。

図1　事故の最新情報　SPEEDI(緊急時迅速放射能影響予測)による甲状腺の内部被曝量の試算
朝日新聞2011年3月24日朝刊(© 朝日新聞社)

スケジュール

①地図作り(五月〜六月末)

平安京は四神相応というコスモロジーと山背の地の地勢が重ね合わさって誕生した。これにならって、3・11以降のコスモロジーを再構築し、フクシマ(中でも危険区域とされる一角)を福島に戻すために必要な情報を埋め込んだコスモロジー・マップを制作する。マップの制作は、アーティストと識者が協力して行う。

②フィールド調査(七月〜)

コスモロジー・マップの要となる場所にアーティストが出向き、フィールド・ワーク(展示やワークショップ)の構想を練る。

③フィールド・ワーク(八月〜九月)

②で定めた場所に、それぞれのアーティストがそれぞれの方法で作品を供える。アーティストによって、グーグル・アースなどのヴァーチャル・メディアを使う者や、地元の人とワークショップ

を行う者がいてもよい。フィールド・ワークの様子をヴィデオや写真などで記録しておく。

④報告会（二二月ごろ）

③の記録とコスモロジー・マップを一カ所に集めて、アート・プロジェクトの報告会を実施する。場所は東京画廊などを検討。

⑤海外での報告会（二〇一三年二月ごろ）

ベネツィア・ビエンナーレのサテライト会場などで、アートプロジェクトの報告会を実施。世界に向けて、フクシマ（Fukushima）のレッテルを剝がし、福島に戻すことを訴える。

⑥福島での展覧会（二〇一三年三月一一日？）

明らかになった課題

- 現実は厳しくフクシマは福島に戻ることはできない。世界のフクシマとして生きてゆくしかないのではないか。
- 直接的な支援ではない新しい方法が、被災地の人々をはじめ社会的に理解されるか。被災地を利用した「傍観者的な搾取」にならない（あるいは受け取られない）ためには何が必要か。
- 「荒ぶる原発を鎮める」「オニ封じ」など、スピリチュアルなレベルでは実施可能であっても現実的に放射性物質を封じるのは不可能。また、「このプロジェクトは、原発賛成か反対か」等のイデオロギー闘争に巻き込まれてしまい、本来の意図がねじ曲げられてしまうことも懸念される。
- 現実的、科学的にはツッコミどころ満載なことを、どこまでシリアスにできるかが重要だ。嘘からどこまで真実を作り出せるかが作品としての腕の見せどころではないか。
- 純粋な芸術行為として位置付けて活動し、その結果が間接的に福島の再生に寄与するような運びかたもあるのではないか。
- 宇宙観や自然観と人間との関係を考えるという中から、福島にわれわれがどうアプローチするか？　そのテーマに原発も入ってくるだろうし、「火」と捉えてもいいかと思う。

2　「被災地のこころときずなの再生に芸術実践が果たしうる役割を検証する基盤研究」第一回研究会

日　時：二〇一二年六月二八日（木）午後三時半～六時半

場　所：稲盛財団記念館三階小会議室Ｉ

テーマ：「被災地とアートプロジェクト」事例報告とその検証

発表１：秋丸知貴「被災地とアートプロジェクト事例報告」

発表２：大西宏志「モノ学・感覚価値研究会アート分科会の被災地プロジェクト計画」

討　議：近藤高弘、秋丸知貴、渡邊淳司、鎌田東二、内田由紀子、大西宏志（司会）

大西から前述の「アート分科会被災地プロジェクト」企画案のプレゼンテーション、秋丸知貴からは「被災地とアートプロジェクト事例報告」が行われた。

秋丸は、芸術の本質と幸福感の関係について考えることが重要であり、「長期的・精神的な文化というソフト面の復興」に芸術の果たすべき役割があるとした。そして、震災直後から二〇一二年六月ごろまでに行われた震災関連の芸術実践の中から約四〇件を取り上げ、それらの分析を行った。

秋丸の分析によると、震災直後の芸術実践には、チャリティや寄付など芸術実践を通じての経済的・物質的復興支援が多く見られたが、時が経つにつれて精神的側面への支援に力点が移ってきたという。また、東日本大震災「3・11」の特徴は、「地震・津波（自然災害）」の側面と「原発事故（人為災害）」の側面とがあり、芸術実践もこれらの側面にどう反応したかで傾向が見えてくるという。

秋丸が特に注目したのは、陸前高田の出身で津波で母親を失った写真家畠山直哉であった。畠山は、「アートは、人を治したり、社会をよくしたりするものじゃない」、「今だからこそ、美学と倫理の関係を注意深く掘り下げ、ロマンチシズムと政治性の関係をもっと批判的に考察すべきなのです。アートに関わる者がその努力を怠るなら、それこそが今回の災害に対するアートの敗北なのだと、僕は思います」（MSN産経ニュース二〇一二年三月八日）と語っている。また、震災の恐怖に対する率直な反応が作品となったものや原発事故に焦点を当てた作品の場合、逆に被災地のこころを乱す要因となった事例もあった。

総合討議は、発表者の二名に、近藤高弘、渡邊淳司、鎌田東二、内田由紀子が加わって行われた。代表的なコメントを紹介しておく。「純粋芸術よりも大衆芸術の方が心にしみる。傍観者的な搾取にならないためにはどうしたらよいか」（秋丸）、「純粋なアート活動と支援プロジェクトは別のもの」（近藤）、「スタンダードと周縁を転換させるのがアーティスト。ス

タンダードが崩壊した今どこまで未来を見るかが重要」（内田）、「スタンダードは強固で崩れていないように思う」（大西）、「京都は時間と空間をスタンダードとは違う視点からみることができる。モノ学的生存計画を提案できないか」（鎌田）、「〝芸術家として……〟には意味がない。普遍性・思想性が必要。技術とのつき合い方も再考が必要。宗教圏のビジョンを借りて再構築ができるかもしれない」（渡邊）。また会場から「芸術にはモヤモヤとした気持ちに形や行動を与える力がある。媒介機能、風穴をあける機能に期待する」（奥井遥）、「被災地の人は、震災や私たちのことを忘れないでほしいと思っている」（坪文子）などのコメントが得られた。

総合討議での議論はその後の懇親会にも引き継がれ、「モノ学・感覚価値研究会アート分科会被災地プロジェクト」について集中的に議論が行われた。特に問題となったのは、先の討議で秋丸から出された「傍観者的な搾取にならないためにはどうしたらよいか」という点である。当事者ではない者が、被災地で震災を扱った展覧会を行うことの必然性をどのように考えるのかが問題となった。そこで、あらためて自らが置かれた状況に目をやることになり、フィールドを福島から関西圏に移すことになった。この時期はちょうど、関西の大飯原発の再稼働が決まり福島の事故が他人事ではなくなっていたのである。[1] 大飯町や滋賀県、琵琶湖、京都をフィールドにして、大飯原発がクラッシュした場合の核物質の拡散範囲をシミュレートして核分神社を置く案にまとまった。

3 水戸芸術館「3・11とアーティスト：進行形の記録」視察

一二月八日と九日、水戸芸術館が実施した震災関連の展覧会「3・11とアーティスト：進行形の記録」（企画：竹久侑）を大西と秋丸が視察した。この展覧会は、先の第一回研究会で秋丸が行った報告と共通する観点で企画されたものである。以下は、その開催主旨である。

二〇一一年三月一一日、東日本大震災が発生しました。被災地の内外で市民によるさまざまな支援活動が立ち上がるなか、表現を生業とする一部のアーティストも行動を起こしました。本展では、震災を受けて現れた約三〇に及ぶアーティストのアクションと表現を、二〇一一年三月から現在へと時間軸をたどる形で振り返ります。震災を受け、「表現」を通してその状況に向き合う作家がいる一方で、「アーティスト」というアイデンティティをいったん棚上げにし、作品にすることを前提とせず活動を行った作家も多くいました。その行為は「表現」なのか「記録」なのか、クリエイティヴィティある「支援活動」か。あるいは支援活動から発展した「作品」か――。その分かちがたさは、活動の背景にある作家の葛藤、現地の状況やニーズをくんだ展開、そして「災害後のアート」にまつわる各作家の考え方のちがいを示しています。盤石のように思われていた社会システムのもろさをあらわにした災害の圧倒的な衝撃は、現実を反映する同時代のアートにも波及し、これまで以上に大きく「アート」の理念や定義を揺さぶりました。（後略）（展覧会カタログより）

展覧会の報告は、次節の「第二回研究会報告」にある秋丸のコメントを参照してほしいが、私にとって特に興味深かったのは、展覧会の関連企画として実施された座談会「3・11とアーティスト：進行形の記録　話す・きく・かんがえる」（一二月九日）であった。この座談会は二部構成になっており、第一部は美術を学ぶ東京や茨城の学生が主体となって「3・11以降、自身の表現に対する考え方に変化はあったのか」というテーマで、また第二部は出品作家やキュレーター、美術大学の教員などが主体となり「3・11から戦争や災害、事件、個人的体験までを視野に入れ、第一部で提起された『問い』」について討議が行われた。[2] その中で、第一部の学生たちがさかんに使っていた「当事者」というキーワードが印象に残った。被災の当事者ではない自分が（あるいは自分よりもっと苛酷な体験をした人がいるにもかかわらず）震災をテーマにして制作することへのうしろめたさがある一方で、震災で揺れ動いたこころを作品として表現したいという衝動も抑えきれない。こころは当事者であっても身体は当事者ではないことの違和感。これらをどのように意味づけて解決してゆけばよいか、真剣に悩みながら前に進もうとしているように思えた。また、この展覧会そのものに言及して、「気持ち悪さを感じる」と言っていたのも印象に残った。気持ち悪さとはキュレーションの背景にある「空気」や「不文律」のことであろう。

現実には展示作品以外にも多くの震災関連の芸術実践がなされていたわけだが、ここに展示された作品とされなかった作品とを分ける「空気」が、やはり存在する。それらは、観客の反応に対する配慮や集客を考慮した選考基準であり、公営の美術館としてはあってしかるべきものであるが、スタンダードと周縁がひっくり返った（はずの）現在においても効力を持つものか問い直す必要があるだろう。

4 「被災地のこころときずなの再生に芸術実践が果たしうる役割を検証する基盤研究」第二回研究会

日　時：二〇一一年一二月二三日（日）午後一時～五時

場　所：京都造形芸術大学　人間館四階NA四一〇教室

テーマ：「被災地とアートプロジェクト」事例報告とその検証2

イントロ：大西宏志「研究会のこれまでの取り組み」

発表1：近藤高弘「宮城県七ケ宿町での取り組み」

発表2：坪文子「宮城県石巻市雄勝支援（硯石）産業の再生支援プロジェクト」

発表3：山本健史「南相馬でのがれき収集とそれを作品化する活動」

発表4：大西宏志「HANARART2012で行った南三陸をテーマにした展示」

発表5：秋丸知貴「調査報告：水戸芸術館　3・11とアーティスト：進行形の記録」

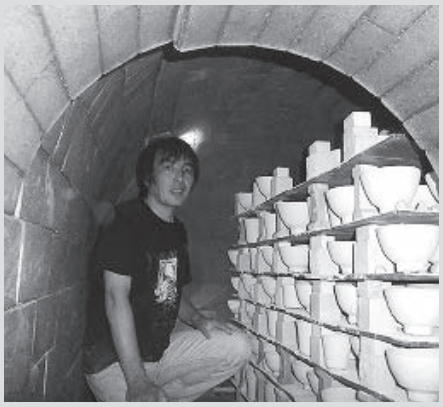
討　議：近藤高弘、秋丸知貴、山本健史、鎌田東二、坪文子、大西宏志（司会）ほか

一二月二三日、第二回研究会が実施された。この回は、二〇一二年度の活動を総括するものであったが、結果的には「物気色フクシマ」「物気色オオイ」など、モノ学・感覚価値研究会アート分科会としての震災関連プロジェクトの実現は叶わなかった。代わって、アート分科会のメンバーである作家やデザイナーが、個々に震災と向き合いながら活動を進めた一年となり、それらの活動報告とプロジェクトの再検討が行われた。

近藤高弘「宮城県七ケ宿町での取り組み」

近藤は二〇一一年から「命のウツワプロジェクト」を継続して実施している。このプロジェクトは、宮城県七ケ宿町を拠点に、地元の土を使って地元の人たちと共に器をつくり仮設住宅などに送るプロジェクトである。近藤は自身のホームページの中で、「この災害があまりにも甚大なため、我々は、何をしたら良いか自失している状態でした。被災地ばかりでなく、精神的にも日本全体が罹災したことで、我々自身の生き方をも問われていたのではないでしょうか。私たちが生きていくためにも、人と人とがつながること、一人一人が考え、互いに助け合わなければ新しい一歩を踏み出すことはできません。そして、アートもまた、その媒介として、役割の一端を担えると信じています。そこで、私が出した一つの答えは、ウツワを制作することだと思いました。そして、二〇一一年五月、被災地の方々にウツワを届ける『命のウツワ』プロジェクトを立ち上げました。家内が宮城県仙台市生まれということもあってこれまで東北とは縁があり、一九九八年に、宮城県七ケ宿町の西山学院高校内に登り窯「無限窯」をプロデュースし築窯しました。その後、一三年間、毎年夏に地元で採れる土を使い、自生する松や間伐材で窯を焚くワークショップを行ってまいりました。今回、幸いにも登り窯や百五十年続いてきた古民家の工房は大きな被害もなく無事でした。そこで、七月からこの七ケ宿の東北の土を使い、登り窯でウツワを焼くための制作をスタートいたしました。地元の方々の協力もあって、二〇〇〇点近いウツワを制作、八月末と一〇月に登り窯を焚き、ウツワが焼きあがりました。そして、被災地とネットワークのある方々を通じて、被災者の方に、ウツワをお届けしてきました」とプロジェクトの主旨を述べている。

二〇一二年のプロジェクトでは、器作りに加えて活動資金を得るために、器をニューヨークのギャラリーや、イギリス・ウエルズのアートセンターに持


「命のウツワプロジェクト」で窯入れをする近藤高弘氏

ち込んで寄付を募るイベントを行った。また、一〇月にはフランス・レンヌ市で行われた食文化のイベントに、器をもって宮城県の料理人と共に参加している。これらの活動がきっかけとなり、「雄勝町の硯石プロジェクト」などの新しい動きにつながってきているとのことであった。

近藤はさらに、ウランガラスを使った作品「HOTARU」プロジェクトも実施している。近藤は、「放射能に個人的に反応して作品化した。氷に見立てたガラスの中に小さなウランガラスを入れている。ブラックライトを当てるとホタルのように光るが普段は何も見えない。」と述べている。「HOTARU」プロジェクトは、二〇一一年一〇月にスコットランド最北の島オークニーの海岸と現地のアートセンター・ピアットセンターで実施した後、「物気色11・11」展（二〇一一年一一月）、京都・京都町家スティ・アートプロジェクト（二〇一二年一月）、比叡山アートプロジェクト「INOCHI Requiem GAIA」（二〇一二年三月）、「建築と無常」（関西日仏学館、二〇一二年四月）と展開させている。現在、キューブが二五〇〇個ぐらいできているが、時間のあるときには作りつづけて一万個でも一万五〇〇〇個でも作ろうと思っているとのことである。

そして、これら二つのプロジェクトは「灰」でつながっているとのことである。そもそも「HOTARU」プロジェクトは、二〇一一年の「命のウツワプロジェクト」の際、国見町のごみ処理施設で見た焼却灰がもとになっている。当初、近藤は、放射性物質で汚染された焼却灰を作品に取り込むことを検討していたが、その灰は処理場から持ち出すことができないほど高い放射能レベルであった。そこでウランガラスを使った「HOTARU」を思いついたのであった。一方、「命のウツワプロジェクト」では、窯の薪として使っているアカマツも放射能に汚染されていたことが分かり、登り窯で焼くという行為や灰の処理をどのようにするかという問題が突きつけられている。

また、フランスのイベントでは放射能テストをクリアして安全な数値の器であっても、ナーバスな反応を示す人たちもいたそうである。当初は別々のプロジェクトとしてスタートした「命のウツワ」と「HOTARU」は、いまは放射能の灰の問題でリンクしてきているという。

坪文子「宮城県石巻市雄勝支援（硯石）産業の再生支援プロジェクト」

坪のプロジェクトは、硯石の産地である雄勝町がフィールドになっている。硯石は、薄いスレート状にスライスして瓦として使われるが、津波にも奇跡的に流されずに残った瓦が、このたび復原された東京駅丸の内駅舎の屋根に使われている。

坪は、二〇一一年一〇月一一日、近藤の「命のウツワプロジェクト」の窯開きに参加した帰り、雄勝硯伝統産業会館を訪ねた。そのころは、未だ建物の上にバスが載っていたり、壁が破壊されて骨組みだけになったインフォメーションセンターが残っていたそうである。砂をかぶった地面からは、硯石の破片がたくさん顔を見せていたという。雄勝硯生産販売協同組合の事務局長の千葉氏と会って話を聞くと、「産業に携わっていた人は全員亡くなって工場もすべて流された。この土地には住むこともできないし工場も建てられない。硯石を掘り出す道具もすべて何もない。一からやらなければいけない。人材もいないし工場もない」ということだった。

しかしその後、千葉氏たちは小規模ながら作業場を再開する。坪は自らのアトリエを改装して、カフェ&ギャラリー堂島リゾーム（http://www.dojima-rhizome.com/）を立ち上げ、堂島リゾームの床には硯石のスレートを敷き詰めて使った。これは東京駅の屋根の残りである。ギャラリーのオープニングパーティでは硯石のスレートを皿にして料理が振る舞われ、ギャラリーの壁を飾る棚には粉末にした硯石を釉薬に使った器が並べられた。これらの器は近藤の念々堂が制作にあたった。とても評判がよく、あっというまに全部売れてしまい、第二弾の制作を進めているそうである。近藤によると、将来的には、

硯石の加工場（坪文子氏撮影）

本格的な工場を建設して雄勝の産業や雇用の創出につなげられないか、あるいは国際的に雄勝ブランドとして広げていくことはできないか検討しているとのことである。三〇年前から雄勝の硯石を使って制作しているプロダクトデザイナーの小林良一氏とのコラボレーションの話も出ているそうである。

今年の一二月になって千葉氏から坪にあてて写真が送られてきた。その写真にはプレハブの作業場を作り、組合員とパート従業員で仕事を再開した千葉氏の姿が写っていた。このプレハブが、硯石プロジェクトを通じて本格的な工場に再生されることが望まれてやまない。

「堂島リゾーム」に展示された器。雄勝の硯石を砕いて釉薬にしている。

山本健史「南相馬でのがれき収集とそれを作品化する活動」

山本は、震災後一年ほど経って被災地に赴いた。それまでは、岩手に入っていたボランティアの知人を通じてできる範囲のことをするに止まっていたが、なんとなくこれでいいのかなという思いがあったという。

「自分は木材を使う作品をつくっていたので、現地に行って木材を取ってくるところから何かが始まらないかなと思った。それが六月ぐらいだった」と山本はふり返る。そしてまず南相馬の市役所に、瓦礫の集積場に入らせてもらえないかと相談を持ちかけるが、瓦礫の山が崩れるおそれがあり危険だとの理由で断られる。次にボランティアセンターに連絡したところ、「町中はもう片付いているので、がれきはほとんどないだろう。海岸沿いにはまだかなり残っているので、とにかく一回見にきてほしい」と言われる。

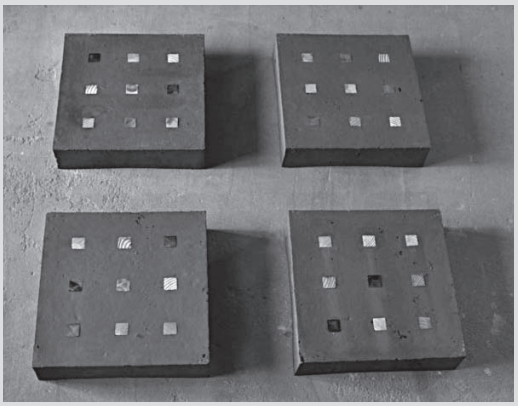
そして、六月の末ごろ、福島第一原発の南側に位置する広野町に行った。ここは立入禁止区域の南端に接する街である。山本は、そこに向かう途中、自分と同年代の男たちを載せた大型バスが北に向かって走っていくのを見て、原発の仕事をしにゆくのだと思ったという。また海岸に行くと、破壊された大きな防波堤や、剝ぎ取られた汚染土を詰めた巨大な袋の山が何百メートルも続くさまにショックを受けたそうである。汚染土の袋には、「ごめんなさい」と平仮名で書いてあるものがあり、地元の人たちに対する心遣いかなと思ったとのことだった。人の姿はほとんどなく、建設用重機がただ黙々と作業をしているだけだったそうである。

山本健史氏が南相馬に赴いた際に撮影した写真

その後山本は、広野町の海岸から持ち帰った木材を近くの役場に持ち込んで放射能が残っていないか測定してもらい、問題がなかったので、それを刻んで作品にした。

山本は、この一連の仕事の中で、エネルギー問題と汚染されてしまった土壌のことを切実に考えるようになったと言う。「私が住んでいる石川県には志賀原発がある。となりの福井県には『もんじゅ』をはじめ、いま話題になっている敦賀湾の原発がたくさんある。本当に数十キロ先に原発があるので切実だ」。また、「日ごろ生活している中では、福島のことはほとんど話題には上らないが、皆、放射能に対する不安を抱いている。被災地の使えなくなった漁網が金沢の焼却施設で焼かれることになったが、市民から猛烈な反対意見が出てかなり難航した」ということである。

九月の終わり、山本は再び被災地に赴く。今度は立入禁止区域の北側の南相馬をフィールドに選ん


被災地の木材を埋めた山本氏の作品

だ。南相馬に至る途中、線量の高い浪江町を通った。車は通っているが人の姿が見えない道が三〇分くらい続くそうである。車は通ってもいいが人は外に出てはいけないのだそうだ。

南相馬に入った山本は、木材を拾うために海の方にむかうが、広野町よりも凄まじい被害を受けた防波堤が印象に残ったという。また、津波で破壊された家が残してあり、仏壇だけが家の真ん中に置いてある様子に、非常に深い傷を見たような気がしたそうである。

山本は、「何かのっぴきならないものがあると感じた。そこには汚染された土壌自体が、延々と続いている。直接人間に関わらないレベルになるまでに、百年から千年の単位で時間がかかる。そこに先祖からずっと暮らしている人たちにとっては、ただ単に財産がなくなったというレベルの話ではなく、自分のアイデンティティ自体がなくされていくような話なのだと思った」と感想を語ってくれた。

そして、「こういうことに対して、自分が直接的に助けられるとか、展覧会をすることによって何かが好転するとはとても思えない。自分がそこで考えたのは、ただ一点だけで、このことを忘れないということだと思った」と述べた。

被災地から持ち帰った木材で山本がつくった作品は、陶のオブジェの中に磨いて着色した木材がはめ込まれている。この作品のタイトルは、木材を採った現場の住所にするそうである。

大西宏志「HANARART 2012で行った南三陸をテーマにした展示」

私は、五月のゴールデンウィークの終わりごろに、宮城県の南三陸町と石巻に行った。きっかけは、東北の温泉旅館の女将たちがテレビに出て、「こういうことになって予約がない。支援とかボランティアでなくても、とにかく来てほしい、見てほしい。そして観光して帰ってほしい」と訴えていたのを見たことだった。現地を見に行きたい気持ちとそれをためらう気持ちの間で躊躇していたところに、「観光」という糸口が見つかったのである。

南三陸町の岬の高台に、南三陸ホテル観洋がある。そこには津波が及ばなかったため、一時期は避難所として機能し津波が去った後は復旧作業に携わる人たちの基地の役割も果たしていた。ここに泊まって、町を見てきた。写真を撮ったり瓦礫を拾ってきたりしたが、そのときはまだ南三陸をテーマに作品を作ることなど考えていなかった。

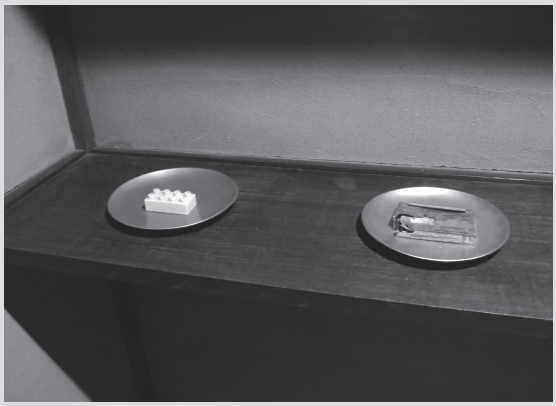
その後、五月一〇日に鎌田研究室でミーティングを行い、六月二八日に第一回研究会を実施した。その間に南三陸町で撮影してきた写真を使って映像作品を一本制作した。これは未発表で、今後発表するかどうか、まだ気持ちの中で整理がついていない。被災地での体験を作品化したいという衝動と、それを公にさらすことは別のことだと分かった。

そして、二つ目のきっかけとなったのが、広島国際アニメーションフェスティバルであった。私は、この映画祭を運営している国際アニメーションフィルム協会日本支部（ASIFA-JAPAN）のメンバーでもあり、映画祭の準備や後片づけで八月に一〇日ほど広島に滞在した。地元のスタッフと一緒に仕事をすると、やはり福島が話題にのぼる。「広島は福島の未来の姿かもしれない」と彼らはいう。それには二つの意味があり、一つは人類の負の遺産を引き受けて世界に警告を与え続ける街。もう一つは、被ばく者という立場がデフォルトになりそこから抜け出せなくなっている街。偶然乗ったタクシーの運転手が、「平和と言うだけでは広島は発展しない。これにプラスして何か新しい価値を生みださなければだめだ」と言っていたのが印象に残った。こうした出会いを通して、私の福島や東北に対する考え方が変わったのではないかと思う。

そして、一〇月二七日から一一月四日にかけて、「HANARART 2012」への出品に至る。この展覧会は、奈良県内にある古い町並みを残すエリアを使って行われる地域振興型のアートイベントである。二〇一二年は六カ所のエリアで行われ、私が出品した

のは和歌山県にほど近い五條新町エリアにある「まちや館」という施設だった。この施設のキュレーションを担った羽太広海氏が、「物気色」や「物気色11・11」に出品した私の作品を見てくれていて、声をかけてくれたのだった。

私は、二つの和室を瓦礫と被災地の映像でしつらえることにした。砂まみれになった玩具のブロック、割れて中身が飛び出した八ミリヴィデオのテープ、破片になったコンピューターのキーボード、公立志津川病院の診察券。これらは器にのせて違い棚に飾った。へこんだ万歩計、欠けたホンダのエンブレム、砂が付いただけでほとんどダメージを受けていない塗りの椀。これらは、坪から分けてもらった雄勝の硯石のスレートを敷物にして、床の上に置いた。



大西が「HANARART2012」に出品した瓦礫

床の間には、南三陸で撮影した映像を使ったヴィデオ水鉢とヴィデオ花器を飾った。水鉢の小型モニタには、津波で流される職員の姿が報道された防災庁舎の映像を使った。鉄骨となった防災庁舎には祭壇がつくられ、いまでも多くの人々の祈りの場になっている。

床には大きなテレビモニタを置き、金魚が波に流される映像を流した。金魚は、人工的につくられた生き物で自然の中では生きていけない我々自身のメタファーである。

隣の部屋にはヴィデオ屏風を置いた。たまたま、白く塗られたベニヤ板が部屋の隅に置かれていたのを四枚つないで流用させてもらった。そこにホテル観洋のバルコニーから撮影した海の映像を映し、バリ島で買ってきた合掌するネコの木彫りを置いた。

大西が「HANARART2012」に出品した映像作品

作品のタイトル『DISTANCE』は、「距離」や「隔たり」と訳されるが、空間的な距離だけではなく、時間的な隔たりや、気持ちや認識のズレも意味するそうである。今の自分と被災地との関係を表すのにちょうどいい言葉だと思い採用した。

展覧会を終えてふり返ってみると、自分も含めて被災地から遠く離れたアウトサイドにいる人のために、原爆ドームのようなものを作ろうとしたのではないかと思い始めている。毎年、夏が近づくと、テレビでは戦争に関する番組が放送される。同様に、三月一一日が近づいてきたら瓦礫と被災地の映像で部屋をしつらえ、客を招き、それがなぜ起きたか考える。そのような茶会があってもいいのではないか。さらにここから発展して、瓦礫など被災地の負の遺産を積極的に集め、それを震災を忘れないためのアートとして全国に配ることもできるのではないかと思い始めた。

秋丸知貴「調査報告：水戸芸術館　3・11とアーティスト：進行形の記録」

まず秋丸は、本展の展覧会カタログにもとづいて出品作家の作品を紹介し、[3]続いて特に印象が強かった作品やプロジェクトについて考察を加えていった。

秋丸は、パンクロックバンド「スターリン」のヴォーカリストだった遠藤ミチロウ氏と音楽家の大友良英氏そして詩人の和合亮一氏の音楽プロジェクトを記録したドキュメンタリーフィルム『フェスティバル FUKUSHIMA!』（監督：藤井光）にふれて、「ミチロウ氏にはパンクロッカーの面影はなく普通

の人に見えた。アーティストのポジションは取れないという表情をしていたのが非常に印象的だった」と述べた。

また、タノタイガ氏の『タノンティアによるヘドロ撤去活動』というプロジェクトについて、「タノタイガ氏はアーティストではなく一人の人間として現場に行きたいと語っていたが、展覧会に出品したりプロジェクトを通して、自分は一生アーティストで生きていく決意を固めた、と表明しているのを見ると、やはりこれはどこかでアート作品だという意識があり、良い悪いではなくて今回のテーマを考えるには重要だと思う」と指摘した。

そして最も印象に残った作品として、藤井光氏の『沿岸部風景記録』を挙げた。これは、二〇一二年八月の福島県飯舘村の山中の映像を壁一面に投影したものだった。徐々に日が傾き最後は全部がブラックアウトし、横に「緯度何々、経度何々、水位何々」と出て、最後に何々ミリシーベルトと出る。一見そういった放射能などは感じないような場所であっても、もはやわれわれは意識せずにはいられないという作品であった。

さらに、今回ある意味で一番注目している写真家だと秋丸が言ったのは、第一回研究会でも取り上げた陸前高田市出身の畠山直哉氏だった。何枚か出品されていた中で『気仙町２０１２年3月24日』というタイトルの被災地にかかる虹の写真から強い印象を受けたという。秋丸は、「畠山氏と言うと、それまでのブラスト（Blast）シリーズにあるように、火薬を大量に爆発させた瞬間を写すことで有名だった。また、二〇一一年五月一日の時点では、もっと悲劇性の高い写真を撮っていた。しかし今回は、人の心をひりひりさせるような作品ではなく、希望を感じさせるような作品が展示されていたのが印象的だった」と述べた。

また、トークイベントにも触れて、「第一部の学生が震災を契機に自分がこれから携わっていきたい芸術とは何かというのを熱く真剣に語っていたのが印象的だった。ただ、抽象論や理想論に陥りそうなところがあったのが学生の限界かと思った。第二部は、今回の展覧会出品作家だったが、当事者性や倫理性の問題が話し合われ、私が知りたかった核心部分が出てこなかった」という。そして質疑の際に、「他人の不幸をだしにして、作品をつくり有名になったりお金を得たりすることが今回の倫理性の問題に関わる一番の核心ではないだろうか。また、アートとして震災に関わることの価値はどこにあるのか。例えば、ＡＫＢ48がチャリティーコンサートで何億円も寄付するのとは違う面でのアートとしての価値があるとすればそれは何か」と質問した。秋丸は、アート分科会のメンバーに対しても問題提起していた「傍観者の搾取」について、そこで考えようとしたのである。

最後に視察の総括として、（1）アーティストは目の前の事象に反応せざるを得ないというような印象が強かった、（2）作品やプロジェクトに登場する被災地の人の表情がどれも好意的であり傍観者的な搾取は感じなかった、（3）いろいろなことを気にしすぎるあまりナイーブになりすぎるのもよくない、（4）物質的・経済的なものとは違う精神的なものとは何か。人々の心を豊かにしたり自分の人生を意味あるものとして肯定する気持ちを育むことは、やはりアートでないとできない、の四項目を挙げた。

5 今年度の総括（第二回研究会総合討議より）

大西　それでは、総合討議に入ります。まずは一人ずつ感想をうかがおうと思います。

坪　自分に何ができるかというのは、皆さんの共通の意識なんだなと思いました。前もって硯石のことを調べて雄勝に行ったのですけれども、あまりにひどい状態に、私自身も何かできるなんて思えませんでした。地元の人と話をしていても泣けてきて。逆に飲み物をいただいたりして、何か私自身が向こうの人にいたわられたような感じで帰ってきたのです。ゆっくり落ち着いて、そんなに気負わないで、一過性ではなくて、ずっと忘れないで何かできることを少しずつ探っていけたらいいのだなという状態に、いま自分の心を収めているというところです。

秋丸　大切なのは、やはり気負わないことだと思い

坪文子氏

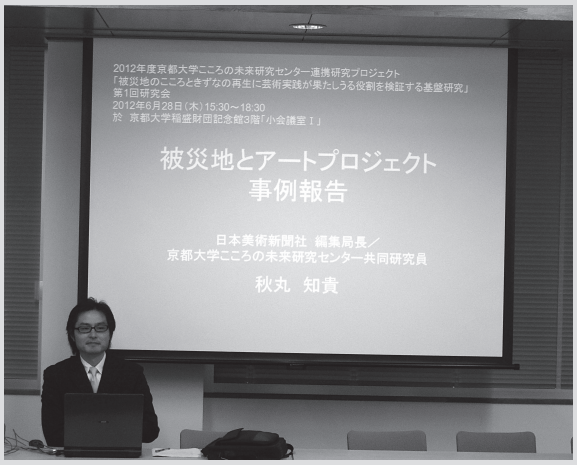
ます。人間であれば、誰でも反応してしまうのが自然です。直截的に3・11をテーマにしても、またしなくてもいいと思うのです。作品をつくらなくてさえいい。もしくは3・11とは別のテーマでつくっても構わないと思うのです。それまでご自分でされていた制作活動の延長にあるものであれば、それは必ず必然性を持つものだと思います。とにかくアーティストであれば、何かつくりたいという衝動があれば、それをつくるということでいいのではないか、というのが水戸の展覧会を見ても今日の発表を聞いても感じたことでした。

山本　うちの大学に非常勤で来てもらっているフランス人がいます。ちょうど去年の3・11の後、夏前に来日して、日本人はあれだけの大変なことがあったのに、なぜそれを題材にして作品をつくる人が少ないのかという質問を受けました。もしフランスだったら、ばかすか作品が出てくると言っておられました。最近は、展覧会がいくつか開かれたりとか、震災が題材になっている作品も増えてきましたが、国民性の違いというか文化の違いがあるのかなという気がするのです。先ほどの秋丸さんの話で、結局そうだと、僕も同意する部分で、素直に気負うことなく、自分が表現するという衝動が生まれたときに作品にするということしか、まずはないのかなと感じています。

近藤　山本さんと大西さん、お二人とも非常にモノ学的だなと思いました。また、秋丸さんの水戸芸術館の報告は非常に分かりやすかったですし、モノ学の延長線でなし得ることがあるのではないかということを感じました。私自身のことで言えば、自分の作品もこれまでの延長線上にあります。灰の問題も、「オイルシリーズ」であったり、廃材になったガラスを使ったり、あるいは陶器で単純に灰を釉薬にするとか、ガラス化するとかという延長線上に、自分自身が放射能の灰に反応しているのだと思います。それは搾取でも何でもなくて、今後自分が純粋にそれをどういうかたちにしていけるのかという問題です。あるいは坪先生とやろうとしている雄勝の石の粉、これも捨てられていくものを、もう一回再生することによって、逆に何か新しい物がそこから生まれてくるような、そのこと自身は個人的にもやり続けていかないといけないと思いました。

大西　現地に行って帰ってきて近づいたり離れたり「移動」をする中で、なんとなくやれることのかたちが見えてくるのかなという気がしました。行ったきりだと圧倒されて止まってしまい、離れていると頭はいっぱい働くけれども具体的に何か形にすることができない。距離を縮めたり離れたりする中で、足場が見えてくるような感じがしたというのが一つです。もう一つは、今年の研究テーマは「被災地のこころときずなを再生する」でスタートしたわけですが、さまざまな取り組みの中で「アーティストの心と被災地とのきずなをみつける」というテーマに行き着いたのではないかと思います。

秋丸　初期衝動でも熟成でも時間ではなくて、そこにどれだけ創作意欲のリアリティーがあるかが大切だと思います。私も文章を書く場合、やっぱり書きたい、書けると思わないと書けないです。たぶん何かものをつくる人は同じなのではないかと思うんですね。私は自分が何かリアリティーを感じないと書けない。おそらく、ほかの何か制作活動、創造活動をする人は、やっぱりリアリティーというのが大切なのではないかというのは思っています。



秋丸知貴氏

鎌田　こういうケースがあると思うんですね。リアリティーを感じるから書けない。このへんは、アンビバレントで微妙だと思うんですよ。僕なんかは言葉を失ったというふうな感じは、やはりあって、もう強烈なリアリティーがあるがゆえに言葉が出てこないというのがあるので、リアリティーを感じるから表現できるというふうに単純には思わない。リアリティーを感じるからこそ、表現できないという時間が、やっぱりその緊張関係というか、往還の中でしか出てこないのじゃないかな。

大西　そのあたりはどうですか。アート分科会の方

はもちろん、今日いろいろなご縁で集まってくださった方は。

上林　連携研究員の上林壮一郎（京都造形芸術大学）です。最近、大学院の中にプロダクト・デザインの専門領域ができまして、そこの研究所の名前がソーシャル・デザイン・インスティチュート（SOCIAL DESIGN INSTITUTE）という名前になっています。このソーシャル・デザインという言葉は、一九八〇年代あたりから、じわじわと日本に広まってきて、最近になって非常に注目されるようになってきています。また、二〇〇〇年代後半からアートの世界も単に美術館で展示するだけではなく、社会に関わっていくような作品が非常に増えてきて、ソーシャル・デザインと、プロダクト・デザインとアートの境界があいまいになってきました。さかのぼると、ヨーゼフ・ボイス（Joseph Beuys）の社会芸術運動と、その背景にあるシュタイナー（Rudolf Steiner）の考え方、あるいは出口王仁三郎とか、岡田茂吉の芸術的な社会実践なども絡んでくると思います。

　また、先ほどのリアリティーという言葉が出てきたところは核心的な部分かなと思うのです。リアリティーという言葉にはいろいろなレベルがあるので、レベルによって意味が変わってくるかとは思うのです。はじめにご紹介した大学院に、太陽光をレンズで集めて蒸留水をつくる装置をデザインしている学生がいます。しかし、結局デザイナー一人の仕事ではできなくてエンジニアがいなければ作れない。どこまでがデザインなのかということが分からなくなってきている。そういう大きな流れの中で、震災に対してどのようにリアリティーを感じるか、芸術の実践とは何なんだろう、はたして社会に関わっていくということができるのか。こうしたことを問題意識として強く感じます。

須田　共同研究員の須田郡司です。私は、3・11の後に千葉から引っ越してきました。彦根に引っ越してきたら、「もんじゅ」が問題になってしまいましたが、私も本当に原発のことでこちらに来たのです。けれども、今年五回東北に行っているのです。ご縁の中で何ができるかということで、いまは石の写真をテーマに撮っています。自分ができることは、いままで撮ってきた「いわくら」のこと、特に東北のものをみんなに知ってもらいたいと思って活動しています。

岡田　本研究会の共同研究員の岡田修二（成安造形大学）です。最初にすごくベーシックなことですけれども、災害に遭った人の心が、やはり真ん中にはあると思うのです。ただ今回の震災は、地震と津波という自然災害に対する問題と原発の問題というまったく対極の二つの問題が合わさっています。自然の力に対する問題であれば、それは自然の力に人間がのみ込まれるという一つの自然の摂理の問題の中にあると思うのですけれども、原発の問題というのはまったく違う次元の問題というところがあると思います。ですから、やはりその二つの問題を切り分けて、どちらにものを言っているのか考えていく必要があると感じています。

　二つ目に、「芸術」という言葉が、やはりどうしてもアート分科会の文脈では出てくるわけです。しかし、いわゆるファインアート、純粋性とか、芸術の自律ということになりますと、非常に古いモダニズム的な定義になってしまう。正直言って、僕らの中でそういうのはほとんど無効であるということが明らかであって、モノ学もそこをやっているのだと思いますから、もっと明確にしてゆかなければならないと思います。

　そしてそれに引き継ぐ問題として、二一世紀的な次のパラダイムを求めるような自然環境や自然の価値をベースに置いた芸術の理念をどうつくるのか、自然の美学をベースにした芸術を理念と実践の両面でつくってゆくことが重要です。

大西　渡邊さんはいかがですか。渡邊さんは本研究プロジェクトの共同研究員でもあり、アート分科会の展覧会を大飯町をテーマにしてできないか一緒に探った経緯もありました。

渡邊　一番気になっているのは、大西先生が先ほどのプレゼンテーションで示した図（**図2**）です。あれについて、もうちょっと話を聞きたいなと思いました。

大西　あの図は水戸の視察の後に考えました。震災

渡邊淳司氏

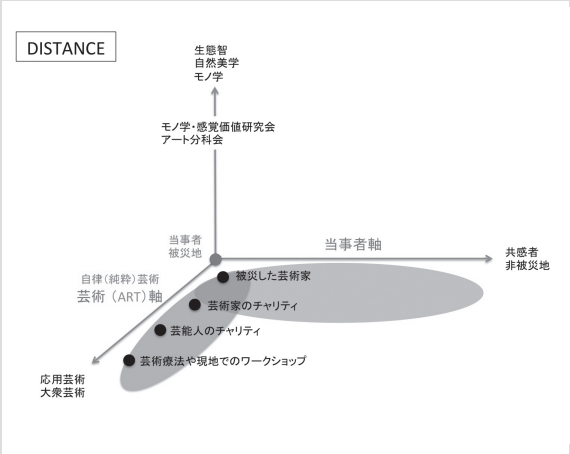


図３　図２にＺ軸を加えて三次元にしたもの

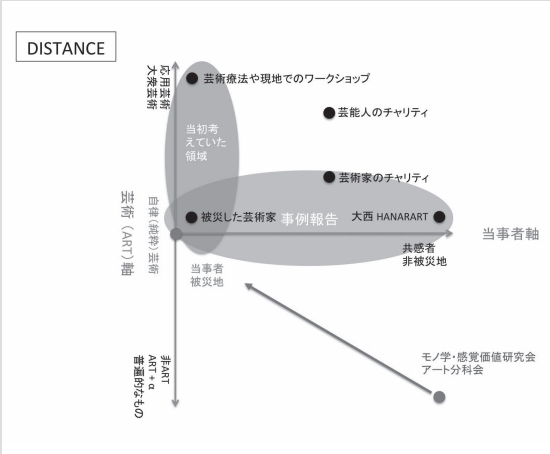


図２　震災関連の芸術実践を、芸術の自律性と被災の当事者性の軸を使ってマッピングしたもの

に対する芸術実践がいろいろあって、それらをどう整理したらいいのか考えて暫定ですがマップをつくってみました。これには二つの軸があると思います。一つは芸術軸で、もう一つは当事者軸です。芸術軸というのは、アートとしてやっているか否か。当事者軸は、どれだけ被災地の出来事に近いかです。芸術軸は原点よりもマイナスがあって、それは先ほど岡田先生がおっしゃった二一世紀的なパラダイム軸にすべきかもしれません。だとすると、ＸとＹ軸で表すのではなく、Ｚ軸も使って立体的に表す必要がありますね（図３）。

岡田　もう一つ事例を挙げます。いわゆる十分にファインアートとして認められている次元で、例えば川俣正という有名な作家がいます。川俣さんは一九七〇年代から社会実践的な芸術をやっていた。例えばオランダのある精神病院が都会から離れた湿地帯にあって、そこに自分たちで木橋をつくって町に向かって進んでいくプロジェクトをやったのです。それなどは、何の役にも立たない。役に立つとしたら、彼らが町に向かって歩ける橋ができるだけですけれども、売り物にも何にもなりません。だけど、その考え方や社会実践がファインアートなのです。売れるか売れないかとか、役に立つとか立たないとか、そういうところだけで二元的に割ってしまうと、ファインアートというものが、すごく硬いものになってしまうと思います。

近藤　ただ、やはりアートの方は自発的です。つまりクライアントがない状態で進んだ結果としてスポンサーが付くかどうかです。デザインの場合は、まずクライアントが付いた方がいいと思います。

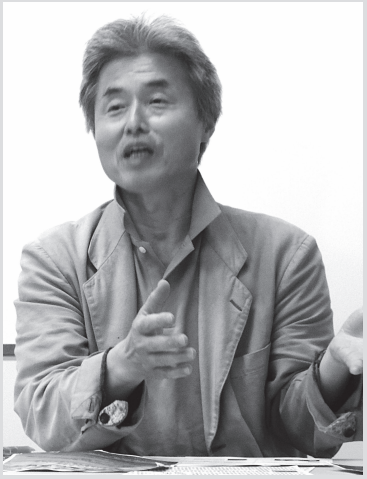
そういう意味で、秋丸さんがおっしゃったリアリティーと自分の自発的な問題からスタートした中でやるということが、まずすごく大事だと思います。工芸とアートが、確かにゼロ年代にクロスオーバーしてきたことは間違いないし、工芸的なものをファインアートが、むしろ活用していく方法もあると思うのです。やはり、自発的に自分からクライアントなしで進んでいくということは大事にしておかないといけないと思います。デザイン、建築、工芸と明治以降分かれているけれども、デザイナーでも自発的にリアリティーを持ってやっていけば、それは当然アートになり得ます。

大西　自発性と自律性に違いはあるのでしょうか。

秋丸　位相が違うと思います。それは美術と工芸の問題で、私がアート分科会に感じている「物気色」の肝心なところと重なるものです。

もともとアートという概念は西洋の概念であって、日本に「アート」や「美術」という概念はありませんでした。生活の中で意味をなすからこそ価値があり美しいのであって、純粋に視覚鑑賞だけのものなんて日本ではあり得ないわけです。逆に言うと、日本の現代美術には西洋のアートができなかった西洋の価値観に対する解毒剤になり得る可能性があると思うのです。

例えば近藤さんが「命のウツワプロジェクト」をやられていますが、これを現代美術の文脈でみれば、ヨーゼフ・ボイスの社会彫刻です。だけど、そうではない部分、そこからこぼれる部分があるのです。生活の中で使うものとしてこれを使ってくださいと。それは逆に日本的感性の一つのアート的な表れ


鎌田東二氏

だと思うのです。

鎌田　その「アート」というのを、美術を中心に考えるから、そういうふうな発想になりがちだと思えるのです。僕は音楽をやりますが、音楽では、クライアントとの関係には微妙なものがあって、そんなに一義的ではありません。

今回のような事態は非常に見えにくい、不可視な状態にある。しかし、それはいいことではないかと。つまり芸術などが発生してくる一番の現場みたいなものがどこにあるのかということを、もう一回問い返して、生活とバーチャルなもの、そこにあるリアリティーがどのように関係し合っているのかを考える契機になると思います。モノ学には、物質レベルから霊性レベルまで全体を問おうという軸があったわけだから、まさにモノ学的なことを問いかけていくようなシチュエーションが、いまあると僕は思います。

大西　畠山さんにもご意見をうかがってみたいと思います。畠山さんは京都造形芸術大学の職員で、ご実家は気仙沼です。昨年の「物気色11・11」の座にもご参加いただきました。

畠山　先月、一年ぶりに帰ってきました。私の家は気仙沼港から一分のところ、大島行きのフェリー乗り場がある魚町というところです。今回は、仮設に入っている方とか被災されているご近所さんだとか、お店が全壊してしまった皆さんが飲食店をやっている復興屋台村というところのお話を聞いてきました。それで、今日の資料の中に、「震災直後は物質的、経済的な支援に重点が置かれたが、時間がたつにつれ、心や絆の再生が必要とされる」と書かれていますが、正確には心や絆の再生「も」だと思います。というのは、実質的に、復興なんて全然進んでいないのです。その中で、やっぱり心や絆の再生「も」必要とされるようになっている時期なのです。

ですがまだ向こうの人たちは、アートというものとはまったく無縁な生活をしているわけです。田舎のお爺さんやお婆さんにとって、心の癒やしになるものって、やはりご先祖さまなのです。ご先祖さまと自分たちのつながりをどうやって持つかというところです。具体的には、流されたり倒れたりしたお墓を早く直したいというところなのです。そういうものがきちんと直っていかない限り被災地のこころの平安はありません。

そういう中、若い方たちに都会から来ていただくことで、自分たちでも何かできるのではないかという機運を、ちょっと持ち始めている人はいるように思いました。ただ悲しいかな、先ほどの坪先生の発表にあったように、向こうには、こちらから提案をしてもそれを受けてかたちにしてくれる働き手がいないという状況があります。私が生まれた気仙沼でも働きたくても働く場がない方がたくさんいます。手に職を持っている人ばかりではないのです。水産加工所があれば、そこで働いて収入が得られるのに、それが全然進んでいない状況です。

向こうの人たちと話していると、今日のお話と向こうに住んでいる人とのギャップというのが、非常に、天と地ほど、まだあるなと思いました。以前はボランティアの人たちもたくさん来てくれたけれど、どんどん少なくなっていく。そういう状況の中、芸術に取り組んでいる方たちが息の長い活動で関わってくれること。先ほどの「忘れないで」というキーワードは非常に重要なところだと思っています。

うちの姉は気仙沼にいますが、「本当に来てみて、こんな状況だよ」と言われるのです。先ほど秋丸先生から、例えば作品をつくりたいという自分の中にリアリティーができたときにつくったらよろしいというお話がありましたけれども、向こうの人たちは、そういうリアリティーをどこに求めたらいいのか、実は今はない状態なのです。うちのおばも鹿折に家があって、あの共徳丸のすぐ横だったのですけれども、いま仮設住宅に入っています。なんとか物だけは生活に困らない程度のものはありますけれども、ではこれからどうするのだといったときの展望はまったく見えない。そういうときに、何か息の長い交流みたいなのが生まれていったらいいかなと思います。今日、石巻市の雄勝の話が出ましたけれども、気仙沼にもこういうかたちで、芸術に関わる方が来て交流の芽が出かけたところです。私はものをつくる人間でもないですし研究する人間でもないですけ

れども、せっかく芸術の大学にいますので、自分ができることは何かしていきたいと思っています。先ほど非アート、あるいは超アートという話が出ましたけれども、私のような立場の者が、いったいどこに軸足を置いたらいいのか、あの図を見ながら考えていたのです。僕は当事者なのかどうか、昨年の三月一一日以降、自分の中で解消できない問題になりました。気仙沼の町が燃えている映像を見たときに、もう絶望でもないし、何か悪夢を見ているのでもない、なんとも言えない感情で満たされて、やっぱり自分は震災について当事者なのだろうか、まだ結論が出ていない気がします。

鎌田　展覧会みたいなことをやるならば、すぐにでもできるような気がします。ただし、未来へ向けたコンセプトがきちんとしていないと力強いメッセージにならないし、地元の人たちや周りの人たちに対して、いままでの何かを再生してみせるにすぎないものになってしまうと思うのです。

今日見た作品の中で、これは地元の人たちにとっても新しいものの見方になるという作品は、大西さんのネコちゃんのやつです。私の提案は、あの中にネコちゃんだけでなく、バッタとか、虫とかヘビとか、人間だけを除いて、さまざまな動物を置くことでみな、海を見詰めている。その海に亡くなっていった人間がどれだけたくさんいるか心の中にイメージとして喚起できるような、つまり生物が見守っている、生き物が見ているよというようなことを、うまくあの作品の中につくってくれたならば、私は生態智みたいな硬い言葉で言わなくても、何かもう少し柔らかい感覚で地元の人たちに伝わるのではないかと思います。

6　次年度の展望（第二回研究会総合討議より）

総合討議の終わりに、鎌田教授から本研究会のメンバーおよびモノ学・感覚価値研究会アート分科会のメンバーに対してプロジェクトの提案が行われた。最後に、その内容を紹介する。以下は、鎌田教授が、モノ学・感覚価値研究会のメーリングリストに投稿したプロジェクトの概要である。

六月の第一回研究会で、わたしは、モノ学・感覚価値研究会としては、これからアートを含む、「モノ学的生存計画」を社会発信していくことが大事ではないかという意見を述べました。今日は、その発言を踏まえて、具体的に、次のような提案をしました。

1　本年は『古事記』編纂千三百年の節目の年である。その『古事記』は、「むすひ」と「修理固成（おさめ、つくり、かため、なせ）」という〈生存哲学〉に支えられている。この世界の生成力に対する畏怖・畏敬の念と、それによって生成されてくる世界の様々な出来事や体制に対して、問題があればそのつど、修理し、固め成し、変えていくという哲学であると言える。

その「むすひ」と「修理固成」は、『古事記』上巻には、

起：イザナギ・イザナミの命による①「国生み」から始まり、

承：大国主神とスクナビコナによる②「国作り」、

転：天孫への③「国譲り」、

結：そしてその天孫の子孫による④「国治め」

という国土計画と開発の経緯が記されている。

『古事記』は、そのような「国作り」の神話・歴史の物語記録であり、その生存戦略は、「祭り」と「歌」である。「祭り」とは、暗黒になった世界を再生させるための生命力更新の「むすひ」の力の発現のワザ、「歌」とは、荒ぶる怪物的力（八俣大蛇の破壊力）を退治し、コントロールして浄化された「こころ」を開放し賦活するワザ。これが、日本の神事・芸能・さらには、芸術の始まりを告げる物語である。

2　それを、前置きにして、これからの一三〇〇年を構想する、「モノ学的生存計画」として、『古事記』ではなく、未来志向の『新事記』プロジェクトを立ち上げる。

①起：二〇一一年三月一一日の東日本大震災後の諸活動

「モノ学とアート的思考から観る日本の再生計画」（鎌田東二＋近藤高弘＋山本豊津）

「東北被災地めぐり」（鎌田東二＋須田郡司）

「命のウツワプロジェクト」（近藤高弘）

「物気色（モノケイロ）11・11」（近藤高弘＋大西宏志、モノ学・感覚価値研究会アート分科会メンバーほか）

②承：二〇一二年四月～：京都大学こころの未来研究センター一般公募研究プロジェクト「被災地のこころとときずなの再生に芸術実践が果たしうる役割を検証する基盤研究」

（研究代表：大西宏志）
六月二八日：第一回研究会「被災地とアートプロジェクト」事例報告とその検証
一二月二三日：第二回研究会「被災地とアートプロジェクト」事例報告とその検証２
二〇一三年三月：第五回東北被災地追跡調査（鎌田東二＋須田郡司）三月一一日に被災地の海に入り、鎮魂の祈りを捧げる。
同時に、「大飯原発が東日本大震災や津波の被害を受けて福島原発と同様の被害を受けた場合のハザードマップを作り、津波の被害を警告する『浪分神社』に対応するような『核分神社』の未来可能性を探る」（渡邊淳司＋大西宏志＋鎌田東二他、科学者・技術者の協力を得て）
風水的な四神相応をリニューアル・イノベートした新四神相応装置の考案を探る。
③転：二〇一三年四月～五月：第六回東北被災地追跡調査（鎌田東二＋須田郡司）において、宮城県石巻市雄勝町を訪ね、雄勝法印神楽奉納の際に、モノ学・感覚価値研究会提携の催しの企画・実施を探る。
石巻市雄勝町を「支縁」の拠点として、地道な活動を積み重ねていく。
近藤高弘・坪文子による雄勝硯石やスレートの活用。
大西宏志「distance」による「いのちの海（ホテル観洋からのいのちのまなざし）」映像インスタレーション。
山本健史によるモノ学的瓦礫再生作品。
岡野玲子＋手塚真：ドキュメンタリー映画『雄勝～法印神楽の復興』（手塚真監督、二〇一二年制作）などとの提携を探る。
和合亮一（福島市在住の詩人）＋新実徳英（作曲家）「つぶて詩・つぶてソング」との提携・共演。
玄侑宗久（福島県三春・福聚寺住職）らとの提携。
仙台市「心の相談室」（事務局長：鈴木岩弓東北大学教授）との提携。
神楽・民俗芸能とアート（美術・音楽・演劇・舞踊・映画・映像など）を結び付けていく。
と同時に、京都や東京やパリやロンドンなどの諸都市において、「モノ学的生存計画：新事記プロジェクトpart Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ……n」と継続進化させていく。
新しい「岩戸開き～祭り」の創造に向けて、新しい「歌」の創造に向けて。
新しい「修理固成」的国作りへ。
④結：一三〇〇年を超えて、プルトニウム半減期の万年単位の未来へ
３　繰り返し、『新事記』を上書き、更新していく。

注

１　二〇一二年六月一六日、野田政権は、関西電力大飯原発三、四号機の再稼働を正式に決め、七月一日に三号機を再起動、七月一八日には四号機を再起動した。
２　第二部の参加者：ゲストスピーカー＝照屋勇賢（現代美術家）、藤井光（美術家／映像監督）、森田浩彰（美術家）、スピーカー＝杉田敦（美術批評家／女子美術大学教授）、井上文雄（CAMP）、チェ・キョンファ（インディペンデント・キュレーター）、竹久侑（水戸芸術館現代美術センター学芸員）、沼下桂子（女子美術大学助手）、飯島真理子（学生）、齊藤哲也（学生）ほか
３　本展の出品作家は以下のとおり。遠藤一郎、加藤翼、北澤潤、小森はるか＋瀬尾なつみ、眞田岳彦、高山明（Port B）、タノタイガ、Chim↑Pom、椿昇、照屋勇賢、トーチカ、中島佑太×ビルド・フルーガス、ニシコ、畠山直哉、日比野克彦、藤井光、宮下マキ、村上タカシ（MMIX Lab）、ヤノベケンジ、山川冬樹。さらに、荒井良二、開発好明、wah documentがイベントに参加した。
http://arttowermito.or.jp/gallery/gallery02.html?id=331

参考文献

鎌田東二『古事記ワンダーランド』角川選書、角川学芸出版、二〇一二年
井上ウィマラ、藤田一照、西川隆範、鎌田東二『仏教は世界を救うか』地湧社、二〇一二年
稲場圭信・黒崎浩行編『叢書「宗教とソーシャル・キャピタル」震災復興と宗教』「第12章　民俗芸能・芸術・聖地文化と再生」（鎌田東二執筆）、明石書店、二〇一三年三月刊行予定

第二章

アブダクションによる世界認識とコスモロジーの改編

渡邊淳司
日本電信電話株式会社NTTコミュニケーション科学基礎研究所

はじめに

私たちが生きていく上で、世界がどのような因果律で構成され、自分がなぜここに存在しているのか、そして、現在、どのように生きるべきかという世界観（コスモロジー）はどんな時代においても不可欠である。一三〇〇年前に編纂された『古事記』も、その当時の日本のコスモロジーを国作りの神話物語として提示しているという。[1]近代日本は、民主議会政治や科学に基づく事物の定量化をはじめ、海外のコスモロジー実践様式を輸入し、ほとんどそのままの形で運用してきた。しかしながら、その礎となるコスモロジー自体を日本人の思想様式に基づいて再解釈することがなければ、輸入されたコスモロジーの表面をなぞるだけで、日本の中で機能させることは難しいであろう。本論では、日本人の世界理解の様式を論理的推論という立場から再考し、ともすると機能不全に陥っている現代日本のコスモロジーを改編する方法論を考えていきたいと思う。

1 アブダクションとコスモロジー

論理的推論の様式として、一般に演繹（Deduction）と帰納（Induction）の二種類が知られている。演繹とは、一般的な命題から具体的な命題の答えを導き出す推論の様式で、たとえば「質量あるものは落下する」という命題から「りんごは落下する」を導き出す。帰納とは、具体的な命題群の答えから普遍的な命題を導き出す推論の様式であり、たとえば「りんごも、みかんも、バナナも落下する」という命題群から「くだものは落下する」を導き出す。アメリカの論理学者チャールズ・サンダース・パース（Charles Sanders Peirce, 1839–1914）はこれら二つの推論の様式に加えてアブダクション（Abduction）と呼ばれる様式が存在することを唱え、科学的発見や創造的思考においては最も重要な役割を果たすとしている。[2]アブダクションとは、いくつかの異質な命題群の答えから、そこには顕在化していない法則を導き出す推論の様式である。たとえば「りんごも、石も、雨も落下する」という命題群から、その背後に「万有引力が存在する」という法則を推論する。つまり、いくつかの事象からそれらの背後にある法則や因果律を選択的に取り出し、その法則を瞬間的に理解する推論の様式である。このようなアブダクションによる法則の発見は、ある種の論理の飛躍があり、詩的言語におけるメタファによる事象理解[3]や主観的合目的性（特定の目的なしに合目的性を感じてしまう感覚）[4]の想起にあるような認識的快が生じると考えられる。

また、アブダクティブに森羅万象を見ていくことは、世界に新しいイメージを作り出すことにつながる。[5]たとえば、蛇は人間の輪廻転生と結びつけられる動物であるが、その背後には、蛇が脱皮を繰り返すことと輪廻転生のあいだに「個体が状態を変えて繰り返し生きる」という類似点が存在し、それらを結びつけるアブダクションの推論が働いている。そ

して、日常の不可思議な出来事や天災等の人間の理解の及ばない事象に対しても、実在しない超越的な動物のイメージをアブダクティブに想定することも可能であっただろう。特に、古代日本の八百万神的な世界観を考えると、その神話物語の構造や登場人物は現実世界とのつながりをアブダクティブに強く意識させるものであったであろうし、それへの動機付けが強く働いていたのではないだろうか。

コスモロジーの構築やその共有の過程を考えたときに、演繹的に適用可能な「一般的なコスモロジー」といえるものはおそらく地球上に存在しないであろうし、正確な現状分析が可能でないかぎり、帰納によってのみその土地・時代に適したコスモロジーを推定することは難しいであろう。そう考えると、コスモロジーはアブダクションという飛躍的な推論の作用抜きには、構築・共有することは難しいのではないだろうか。

本稿ではここまで、アブダクションという推論の様式を「演繹」や「帰納」のように日本語に変換せずに使用してきたが、これはあえて日本語に変換しなかったのではなく、「仮説形成思考」、あるいは「ひらめき」や「思いつき」といった適切とはいえない訳語しか見つからなかったことによる。このことは、古代日本では強く働いていたであろう推論の様式が、現代日本では、意識的に用いられることは少なくなってしまったことを意味するのではないだろうか。しかし、むしろコスモロジーの共有が難しい現代日本においてこそ、具体的な事象に対してホロニックに（個の現象が全体の構造や性質を示唆するように）コスモロジーを見出すアブダクティブな推論や、いくつかのアブダクションによるイメージを体系化しコスモロジーとして編集する試み（たとえば古代の精霊や魂に関する思想を体系化して神話や宗教を作り出したように）が必要ではないだろうか。

2 公共性とコスモロジーの改編

次に、現代日本のコスモロジーはどのように存在し、それを改編するためにはどのような方法論が可能であるか、これまでの宗教的議論（たとえば注6、7）も参考に現代なりの方法論を模索してみたい。前述のように、現代日本は、個人個人の意思が統合されてコスモロジーが形成されたというよりは、外部のコスモロジーの実践様式が社会に導入されることによって、そのコスモロジーがあたかも日本の一般意思（公共の意思）のように広がっている。そして、日本社会の特性として、「空気を読む」といった言い回しにあるように、公共の意思的なものを敏感に感じ、それが必ずしも個人の意思や感覚と一致しなくとも、抗うことのできないものとして個人を規制する。[8・9] つまり、現代日本では、個人の意思を基にコスモロジーが生まれたのではなく、コスモロジーや公共の意思がどこからともなく現れ、それに従うものとして個人が存在しているといえる。では、このような「空気」がコスモロジーとして機能しているような社会では、どのようにそれを改編できるであろうか。

ひとつの方法論としては社会を非日常と接続することが考えられる。外部からその社会の価値観と関係のない存在がやってきたり、「祭り」のような非日常の儀式を行うことで、一時的にでも現状とは別の関係性を作り出し、（夢から覚めるように）これまでの意味を解体し、コスモロジー自体を外部から変容・上書きしてしまう方法論である。現代において、パブリックアートは日常の公共空間に作品という異物を取り込み、既存の関係性を改編する試みといえるであろう。[10] パブリックアートは美術館やギャラリーでのアートと異なり、街の中の景観や日常の暮らしに直接入り込む。そして、その作品自体やその周辺に用途のはっきりしない「自由な空間」が生まれ、空間の意味や社会の構造の解体を促すと考えられる。

また、別の方法論として、コスモロジーもしくは公共意思を表現する主体の匿名性を解体し、公共的な意思を個人の思想に帰することも考えられる。古代では、仮面をかぶる、神の言葉を招き入れる儀式を行うなど、表現主体が身体的・精神的に匿名性を持つことで、発言内容に公共性や真理性が付与されていた。この表現主体にもう一度、個人性を与えることでその発言内容を個人意思というレベルに引き落とすことができる。現代でも、マスコミやニュース、また、インターネット上の発言は個人性が希薄な状態で情報伝達が行われるが、それは発言内容にある種の公共性・真理性を付与することにつながる。しかし、その発言を誰がどのように行っているのか、発言に署名や抑揚が付与されると、公共から個人へとその発言主体の存在が顕在化する。たとえば、近年のSNS（Social Network Service）は、匿名（ハンドルネーム）から実名を基本としたサービスに変化しつつあるが、その中での発言は「どこの誰だかわ

からないみんな」のものから「そこにいる個人」の意思として表明されるようになっている。将来的に、このような個人性の付与されたコミュニケーションを行う世代にとって、日本人の「空気」的なコスモロジーはもはや機能しなくなる可能性も考えられる。

前述の二つの方法論は、どちらかというと、異物や個人性を付与するシステムを外部から導入するものであった。別の方法論として、社会を構成する個人個人が個別性を取り戻し、そこからボトムアップ的にコスモロジーを共有していく方法も考えられる。たとえば、「歌」や「体操」は、なんらかの公共意図をもって作られたとしても、それを行う個人にとっては、韻律や呼吸が個別性のよりどころである身体を意識化する側面を持っている。私たちは、日常生活において、話す、考える、見る、聴く、触れる、食べる、呼吸をする、移動する、植える、祈る、等さまざまな行為を行っているが、「歌」や「体操」が自然に人々の生活に組み込まれてきたように、これらの日常の行為の中に、アブダクティブな自己認識・世界認識のプロセスを組み入れることはできないだろうか。[11] このような方法論においては、世界の背後の法則や意識すべき論点に関して、日常の中に誰の目にも見える形でアブダクティブな世界を創出することが重要となる。本誌の大西宏志氏の論考にある、モノ学・感覚価値研究会アート分科会メンバーやこころの未来研究センター一般公募研究プロジェクト「被災地のこころときずなの再生に芸術実践が果たしうる役割を検証する基盤研究」のメンバーで論議した「核分神社」に関するアイディアはひとつの検証例となるであろう。具体的には、大飯原発が東日本大震災で津波の被害を受けた福島原発と同様の被害を受けた場合のハザードマップを作り、津波の被害を警告する「浪分神社」に対応するような「核分神社」を想定するものである。津波の被害の広がりと放射性物質の拡散をあえて類似のものとしてアブダクティブに見ることで、古代日本の自然の力に対するコスモロジーを意識するとともに、人間が人工的に作り上げた（すでに作り上げてしまった）原子力というエネルギーに対して、どのような思想をもって対応していくべきかを意識させると考えられる。

おわりに

ここまで、現代日本のコスモロジーを（再）発見し、改編するための試論をアブダクションという推論の様式を取り上げながら述べた。筆者の立場から可能なことは、前節で述べた三つめの方法論、つまりは、コミュニケーションデザイン（時に、遊び心に満ちた）によって公共性への介入を達成し、公共性をもたらす言葉や場の象徴性を一度剝ぎ取り、そこになんらかのコスモロジーを自律的に、アブダクティブに発見していく場を創出することではないだろうか。

参考文献

1　鎌田東二『古事記ワンダーランド』角川選書、角川学芸出版、二〇一二年
2　米盛裕二『アブダクション――仮説と発見の論理』勁草書房、二〇〇七年
3　ジョージ・レイコフ、マーク・ターナー『詩と認知』大堀俊夫訳、紀伊国屋書店、一九九四年
4　秋庭史典『あたらしい美学をつくる』みすず書房、二〇一一年
5　中沢新一『古代から来た未来人　折口信夫』筑摩書房、二〇〇八年
6　釈徹宗、内田樹、名越康文『現代人の祈り――呪いと祝い』サンガ、二〇一一年
7　井上ウィマラ、藤田一照、西川隆範、鎌田東二『仏教は世界を救うか』地湧社、二〇一二年
8　別役実『ベケットと「いじめ」』白水社、二〇〇五年
9　山本七平『「空気」の研究』文藝春秋、一九八三年
10　カトリーヌ・グルー『都市空間の芸術――パブリックアートの現在』藤原えりみ訳、鹿島出版会、一九九七年
11　渡邊淳司（編著）、田中浩也、藤木淳、丸谷和史、坂倉杏介、ドミニク・チェン『いきるためのメディア――知覚・環境・社会の改編に向けて』春秋社、二〇一〇年

第一章

グラデーションという現象とデザイン表現についての一考察

上林壮一郎
京都造形芸術大学准教授／インターフェイスデザイン論

はじめに――つなぐものとしてのグラデーション

黎明や夕暮れの空のグラデーションは美しい（図1）。

図1　峠の黎明

その現象面に着目すると、このグラデーションによって昼と夜の境目は一本線ではっきりとわけられる代わりに、緩やかにつながれる状態となっている。このように、ある状態と別の状態の接続部分、言い換えればインターフェイスを緩やかにつなぐグラデーションとはいったいどんな現象で、どんな性質と広がりをもっているのであろうか。本稿では、いくつかのデザイン的試みやデザイン作品を見ながらグラデーションのつなぐはたらきのありようをデザイン的な視点で考察してゆきたい。

二〇〇五年からNPO法人東京自由大学で筆者が行っているリサーチデザイン「コンテクストデザインワークショップ」の二〇一二年度の年間テーマは「グラデーション」であった。また、これまでの自作品を振り返っても、グラデーションという視点で見てみると関連するものが多い。本稿では一般的なグラデーション考察と並んで、それらのグラデーション表現を一つの手がかりとしてより深く考えてゆきたい。

ところで、ある状態と別の状態をつなぐグラデーションという現象は、モノ学的でもある。二〇〇七年発行のモノ学感覚価値研究会年報の発刊の辞の中で鎌田は「もの」とは何かについて述べる中で、次のようにグラデーションという言葉を使っている。

『もの』とは何かと問いかけてみると、これが実に多彩・多様・多義・多面的な言葉なのだ。一筋縄ではいかない。簡潔に言えば、物質性としての『物』から、人間性としての『者』を経て、霊性としての『霊（もの）』にまで至る多次元的なグラデーションを持っている。（鎌田、二〇〇七。傍線は引用者）

多次元的なグラデーション。すなわちモノ学のコンセプトにおいては、「物」と「者」と「霊（もの）」は断絶しておらず、関連しながらつながっているということだ。グラデーションというのはある状態と別の状態が段階的につながっていることを示してい

る。それゆえ、物と者とがつながっているとするそのつながり方においてグラデーションのような状態があると想定してもよいのではないだろうか。

本稿では直接そのことを主に論じるのが目的ではないが、グラデーションという現象の基本研究の先にはそのような問題を想定しており後半で少し触れたい。まずは、グラデーションという現象の様相についての基礎的な考察から始めたい。

1 グラデーションという言葉の定義

1-1 辞書的定義

グラデーションとは何かを考える手がかりとして、まず日英伊の辞書を参照したい。

- **グラデーション**（『大辞林』）
  写真・絵画などの濃淡の段階的な推移。諧調。ぼかし、濃淡法。
- **gra・da・tion**（三省堂『ウィズダム英和辞典』）
  1（色彩・明暗などの段階的な）変化、推移、ぼかし。
  2（変化の）段階、等級。
  3（～(s) of…）微妙な…
- **gradazione**（小学館『伊和中辞典』）
  1 段階的変化、漸次的移行。（変化、進展などの）段階、度合い。（色彩、光などの）ぼかし、微妙な色の違い
  ～ di colori 色のグラデーション、色合い
  ～ di luce 明暗（の変化）
  per ～ 徐々
  2《修》漸層法
  ▼感情が徐々に強く［弱く］、やがてクライマックスに達する表現方法
  例 Si spaventò, si stupì, s'infuriò, pensò, presa una decisione.「はっと驚き、あっけに取られ、怒り、考え、決断した」
  3《音》グラデーション
  4（アルコール）度数

以上のような定義に共通する点は、「段階」と「ぼかし」と「移」という言葉である。

国語辞書と英和辞書には「推移」という言葉が見られるが、共通する「移」という文字を手がかりに、小学館の『伊和中辞典』においては「漸次的移行」を抽出し、「段階」と「ぼかし」と「移」という言葉をグラデーションという現象の重要なファクターであると理解したい。

また、これら主要な語彙の周りに補助的だが以下のような重要な語彙も見られる。すなわち「度合い」「微妙」「変化」である。つまり何らかの度合いが微妙に変化していくのである。特にこの微妙さが細かいほどグラデーションの解像度は上がり、グラデーションの最初と終わりの状態に落差があるほどグラデーションはダイナミックになる。

次に英単語に注目してみると、gradationという単語の中にはgradeと共通するgradという言葉が見られる。このgradeというのは日本語でいえば「段階」や「階級」のことであることにも注意を払いたい。

さらに小学館『伊和中辞典』にのみ、二番目の意味として修辞法の漸層法が付与されている点にも目を向けたい。すなわち、グラデーションには、単に水平方向の変化ではなく、その度合いのクライマックスをめざすという垂直方向のベクトルが働いていることを感じさせるからである。

1-2 英語におけるグラデーションの近接概念

gradationに近接する概念も多い。英語では以下のようである。

- **ぼかしや陰影を強調する概念、図と地の関係を想定。**
  fáde·out　溶暗（⇔ fade-in）（音・映像が次第にぼんやりしていくこと）
  fáde·in　溶明（⇔ fade-out）（音・映像が次第にはっきりしてくること）
  shad·ing　1（絵・物の）陰（になっている部分）、陰影、明暗。［美］陰影法。2［時に～s］（色・状況・考え方などの）微妙な変化［相違］。3陰にすること。（主に植木のための）日よけ、日陰になるもの。
- **段階を踏みながら大きく変容していくという概念。**
  met·a·mor·pho·sis　1 大変貌、変容、2［生物］変態。
  trans·for·ma·tion　変質、変化、変身。変圧。変換。変形、（昆虫などの）変態。
  trans·fig·u·ra·tion　1変形、変貌。2［the T-］［聖書］キリストの変容。
  grów·ing　1（程度・大きさ・数量などが）増大する
  ▼growing concern［interest］高まる心配［興味］　2育ち盛りの、成長に適する。
- **比較的連続的に断絶なく推移するという意味、何かと何かを緩やかに結ぶ場合**

change　1《…の》変化、推移、変遷。修正（点）、改良（点）《in》2（従来のものの）取り替え、交換、変更

tran･si･tion　1《…から／…への》移り変わり、推移、変遷、移行。過渡期（transition period［stage］）。変わり目《from/to》2［楽］（一時的）転調。（2つの主題などをつなぐ）移行部。

mórph･ing　［コンピュ］モーフィング（画像を変形処理する方法）。

- **異なる状態のものをグラデーションでつないでいる場合**

inter･face　1（異なる物の）境界面、共通領域。2［コンピュ］インターフェース。などである。

1-3　日本語におけるグラデーションの近接概念

次にグラデーションへの見方を広げるために、日本語でも近接概念をいくつかあげてみたい。

変態：変化のプロセスの中で状態の構造が大きく変わること

移ろい：儚さをともなう変化で、特に日本人の自然観においては消失への移ろいが感動を生み、美の基準になっている。

つながり：つながりは離れたものが結びつくこと。関わりであり関係であるが、単一のつながりだけではグラデーションではない。

連なり：連なりは近接したものが次々と結びつくこと。連続的なつながりがつらなりとなるが、変化がなければグラデーションではない。

変容および変貌：プロセスを経て様子がすっかり変わること。

成長および増大：消失へのグラデーションの反対が、増大のグラデーションであり、生命力と発展の予感を秘めている。

相：水の相は○度から百度までの温度のグラデーションの範囲で維持し続ける構造や状態のこと。

2　現象におけるグラデーションの基本的考察

一般的にグラデーションというと虹のような色彩のグラデーションを想起すると思われるが、色彩から始めてさまざまな現象にグラデーション的な現象を探し、グラデーションという概念を広げ俯瞰しておきたい。

2-1　色彩

色彩は視覚的グラデーションである。色彩は、グラデーションの代表格として英和辞典にも初めに登場し、誰もが想起しやすい。色彩はグラデーションの基本といってよいだろう。

日常生活の中では、虹や夕焼け、朝焼けなどの自然現象に特徴的に見られ、その大きさや美しさからかしばしば感動を伴う。自然現象では他に紅葉や、果物の色づき、昆虫や動物の体色、さらには風景にも見られる。

人工的なものでは、絵の具やインク、化粧品などの並びや、色相環などは機能的な理由で作られたグラデーションである。一方で、染織や絵画やグラフィックデザインではレインボーは、感覚に訴える装飾的なものとして意図的に活用されている。

2-2　明暗

明暗は光源からの距離や角度、光の反射や透過などを原因とする、光が当たった物体面の光の強弱によって生まれるグラデーションである。それは太陽や月や火や人工照明などの光によって作られ、生活の中にあふれている。谷崎的にいえば、近代化以降は陰翳がだいぶ生活の中から失われたのであるが、近年は人工的にコントロールされた陰翳として間接照明がよく使われるようになってきた。

また明暗は、光源からの方向と立体の形状に対応して微妙に変化するため、絵を描く時に立体感を出すための重要な手段になる点で、立体認知、空間認知とも深く関わっている。

コントラストが強すぎる景観では奥行きを認識しにくいが、弱すぎてもまた認識しにくい。空気の乾いた地域の風景ははっきりとどこまでも立体的であるが、靄や霧の濃い地域では水墨画のように奥行き感が曖昧になるという側面もあるように、明暗の一つの重要なファクターは光である。もう一つのファクターは墨や絵の具のぼかしや染織のぼかしなど、描かれたものや、経年変化による馴染みや染みによる物体そのものの色の明るさや濃さの明暗である。

2-3　コントラスト

前項で光と空間認知の関係の中でコントラストについて少し触れたが、コントラスト自体はグラデーションではなく、ある状態と別の状態の差異やギャップのことである。対比とも訳される。差異が

大きい対比にコントラストという言葉が馴染むが、グラデーションにおけるコントラストとはなんだろうか。グラデーションはコントラストを弱めているようだが、ライトグレーの隣に少し暗いライトグレーが隣接している場合、コントラストは弱いが、同時にグラデーションも弱く認識されにくいのではないだろうか。

ある状態と別の状態、例えば白と黒のコントラストは大きいが、その間をグラデーションでつないだ場合、そのグラデーションは変化の段階にたいへん幅のある、情報量の多いグラデーションらしいグラデーションとなる。コントラストが強いほどそれをつなぐグラデーションも強くなる。両者の間にはそのような関係がありそうである。

2-4 音

音は聴覚的グラデーションである。音のグラデーションについては音楽が含まれるため考えるべきことが多い。

音の要素には、音の大きさ、高さ（音階＝周波数）、音色の三要素の他、共鳴、和音、速度、などがある。この中でグラデーションとしてまずとらえやすいのは、音の大きさと高さであろう。

まず音の大きさのグラデーションについて考えてみる。厳密には、音の大きさは主観的であり、音の強さは物理学的客観的であるようだが、ここでは分けずに大きさ＝強さ＝音量として考える。

通常、音量のグラデーションを体験するのは音源が近づいてきた時や残響音である。しかし車や電車など、音源が近づくことによってドップラー効果も加わり音程も変化してしまうので、単純に大きさだけの変化としてはとらえにくい。ドップラー効果が少ないものとしては耳元で聞こえる蚊の羽音である。

音量だけを変化させるには、オーディオ機器で聞いている時にボリュームを変化させればいい。録音された曲にはフェードインやフェードアウトというグラデーション効果がよく使われる。これは音楽にとっての背景である静寂からの滑らかな移行としてのグラデーションであり、静寂から立ち上がり静寂へと消えてゆくため、静寂を意識させる効果があると言えるだろう。

減衰音としては、琴やギターやピアノなど弾いた直後から音量が減衰し、余韻として音楽的な効果をもたらす。この減衰音は、残響音とも言えるが、カラオケなどでエコーを使ったり風呂場で歌うと心地いいように、一般に好まれる音のぼかしである。

しかし、カラオケほど残響音を強調しない場合でも、日常音には何らかの残響音は聞こえているという。これを削除した無響室に入ると、たいへん違和感を感じる。筆者も経験したことがあるが、近くで話していても遠くで話しているように聞こえ、音による空間認知がしにくくなる。

こうした点から類推すると、光における明暗のグラデーションが空間認知を助けるように、音における音量のグラデーション（特に残響のグラデーション）も空間認知を支えているのではないだろうか。明暗も音量も刺激の強弱に置き換えられるから刺激の強弱が空間認知と関わりがあるのだろう。

次に音階のグラデーションについて考えてみたい。音階は波長のグラデーションであり、光でいえば色に相当するだろう。

西洋音楽的な音階でいえば、ドレミファソラシドのような断続的に認知された長調の音階があるが、これらを使っても一定のグラデーションは表現できる。この音階を具体的に表現するものに楽器があるが、グラデーションという意味で楽器は二種類に分けられそうである。すなわち、通常の演奏方法では不連続に段階的にしか音を出せないピアノやギターやクラリネット、あるいはマリンバのような楽器と、無段階に音程を表現できる、バイオリンやトロンボーンあるいは、テルミンのような楽器とがある。楽器ではないが声というものも後者に入るだろう。また前者のような楽器は、西洋音階との結び付きが強い楽器であるのに対し、後者は使い方を変えれば、西洋音階にこだわらずに音を出せる、より自由な楽器である。

筆者は音楽理論に詳しくないのであまり深く考察できないが、一般的に音階のグラデーションは均質なものでなく、全音階と半音階の組み合わせによる、ある規則を持った中で展開されるという点は、非均質的なグラデーションという点で興味深い。

低いドから一オクターブ高いドへ移行する音階のグラデーションを作る時に、ドレミファソラシドの他にも、ドレファソラドと移行することもできるし、ドミソドと移行することもできる。しかしそれらは聞く側にとっては、一様ではない。ドレミファソラシドには長音階という要素が入り込み、ドミソドにはその中でもさらにドミソというCコードの和音という要素を伴ったグラデーションである。和音でいえば、和音自体を音階とは別に音の要素としてあげ

ていたが。

そして、単音のグラデーションではなく、和音同士もグラデーションというものがありそうである。ある和音から別の和音に移行する時に、セブンスを入れると移行しやすくなるなど、和音の並べ方によってグラデーション効果を高める技法がある。このようなことから音楽理論はグラデーションの理論として興味深い。しかし、ここではこれ以上立ち入らず、それはまた別の機会に譲ることにしたい。

2-5 視覚 遠近法

遠近法と解像度は表裏の関係にある。線路を眺めると、遠くへ行くほど一本にくっついているように見える。空気による遠近感の強調を除外しても、風景においては遠くのものほど小さく微かに見え、ゆっくり動き、近いものほど大きくはっきり見え、速く動く。明暗の項では、陰による立体認識、空間認知について触れたが、消失点にすべての線が収斂してゆくという風景は図学的構造を持っている。消失点へ向けて一定の比率で間隔密度も高まりグラデーションするという構図の典型が透視図的視野である。

2-6 変化のしかたについて

特に速い変化を急変と呼ぶように、通常の変化は段階的に徐々に異なる状態へと推移してゆくものを指すといえよう。変化は時間的ととらえられがちだが、明け方の空の写真を見ると、東の地平線から天頂へかけて空の色と明るさは変化しているように、あるいは場所や標高によって植生が移り変わるように、空間的な変化もある。時間的にせよ空間的にせよ、急変に驚くということは、私たちはある種の変化の度合いをもって私たちが驚かない程度の変化、日常的な変化と見ているのではないだろうか。

自然現象の中でも変化の激しい時空がある。一つはずっと暗い状態が続いたあとに来る明け方の、特に日の出の時間帯であり、地形的には崖や滝や河口であり平地より山間地の方が変化が激しい。気象的には、雷雨や嵐である。昨今の気象は特にその変化にグラデーション帯がなくなってきている。また、田舎より都会の方が変化が激しく、昔より現代の方が変化が激しいと言われる。その反動としてスローが叫ばれている。スローは、グラデーションを重視する発想方法であろう。

2-7 大小のサイズ

サイズの段階的変化もグラデーションの典型である。

空間的なものとしては、マトリョーシカを始め、ボルトやビス、紙のサイズ、天体のサイズ、箱（小箱から、建築まで）などがあり、時間的なものとしては、造山運動から、動物や植物の成長、海岸での波の生成などがあるだろう。

現在では地図の縮尺の連続的変化はGoogle Earthなどで誰でもが体験できるようになったが、かつてチャールズ・イームズは、「Powers of Ten」（1968）という映像の中で、原子レベルから銀河団レベルまでを連続的にグラデーショナルに変化させる様子を描いている。

「Powers of Ten」というのは、一〇の力ではなく、一〇のべき乗という意味だそうだが、その名のとおり画面の縮尺を連続的に変化させているのである。縮尺が変わるというのは、裏を返せばそこに見えているものの大きさが変化しているということである。

しかし、この映像では原子レベルと太陽系や銀河レベルでは渦や回転体という相似形が見られるが、それらをつなぐ間には皮膚の溝パターンや、染色体、分子構造など構造的にあまり連続しないものも登場しており、それら構造の異なるもの同士の接続映像は、うまくぼかすことで自然につながっている。この非連続部分のグラデーションをどう考えるのかという点は重要なミッシングリンクであるが、また別の項で考察したい。

2-8 度合い

程度ともいう。グラデーションはあらゆるものの「程度」や「度合い」の推移であるが、これまで見てきたように温度、音、色、距離、解像度などはすべてこの度合い、程度として認識できるだろう。そして多くの「度合い」には単位がある。したがって、グラデーションと単位というのもまた関連性が高いといえよう。だからと言ってすぐにモノ学のグラデーションの単位というものを想定しようにも、単一の単位では表現できないだろう。ただ、音のグラデーションのように音階や音量といったいくつかの要素に還元して考えることはできるかもしれない。

2-9 強度

強度も度合いの一つだが、強度は硬さや応力の強さ、耐久性、持久力あるいは、堅牢さという意味ではなく、ソフトな強さとして、しなやかさ、柔軟さ

などに関連している。具体的には硬い部分から柔らかい部分に連続的に変化するものとして、時間的には、スパゲッティの茹で加減であるし、空間的には、魚のヒレやその応用であるスキンダイビングで使う足ヒレ、稲やススキや竹などの植物や柳などの樹木、人工物では釣竿があげられる。単一素材でありながらその厚みや太さによって強度とともに機能が変わってゆく点が興味深い。

2-10　透明度

透明度のグラデーションは、自然現象としては、空気や水に関する透明度として現れる。大気汚染による透明度、季節ごとの大気の透明度、靄や霧、海や湖水、河川の透明度。

霧を擬似的に体験できる、ブルーノ・ムナーリの『きりのなかのサーカス』（フレーベル館）というトレーシングペーパーを使った絵本があるが、濃霧の中では近づいてくるものは次第に濃く、遠ざかるものは次第に淡く白くなってゆく。これは空気遠近法と同じ効果である。

2-11　高さ

高さのグラデーションとは、一つにはGoogle Earthのように、あるいはイームズの「Powers of Ten」のようにだんだん上空へ上がる（あるいは下がる）ことによる風景の変化や高度感の変化だろう。しかし、気球や飛行機に乗ったり、ロープウェーや登山で実際に高度を上げてゆく場合は、むしろ気温や気圧や気象の変化という要素も加わる。気球やロープウェーではあまり感じられないだろうが、もう一つ興味深い要素に重力というものがあるように思う。エレベータは景色や気温の変化から遮断された密室で移動するからかもしれないが重力の変化が特に感じられる乗り物である。しかし、高さあるいは重力のグラデーションを強く感じられるのは、バンジージャンプやスカイダイビングであろう。重力が1Gから無重力へ変化するグラデーションは言葉どおり加速度的なグラデーションである。

3　グラデーションのデザイン的な表現の試み

二〇一二年六月二十四日に「グラデーション」をテーマにNPO法人東京自由大学においてコンテクストデザインワークショップを行った。そこで試みたいくつかのグラデーション表現について考察する。

3-1　直方体のグラデーション

これは（図2、図3）、白い発泡スチロールでできた右端の立方体を縦横高さの三軸について少しずつ寸法を変えて配置したものである。ばらばらに散在しているときはカオスであるが、ある秩序が生まれることによって、配置された上面に緩やかな曲面に相当する地形の変化のようなものが知覚される。各直方体の相互の間隔というパラメータが変化することによって、グラデーションの変化率ともいうべきものが変化する。各直方体を近づけすぎても離しすぎてもその曲面は知覚しにくい。それはおそらく次のような理由によるものだろう。

私たちは、佐藤雅彦氏の差分の研究でも示されて

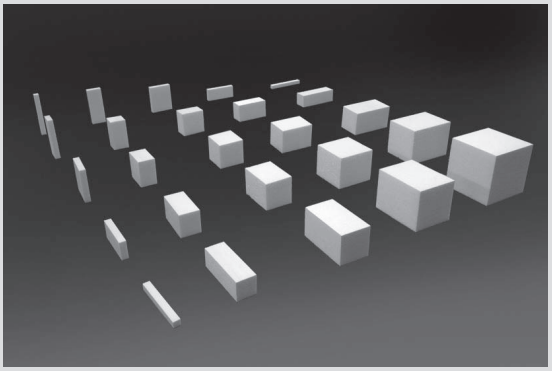


図3　コンテクストデザインワークショップ2012

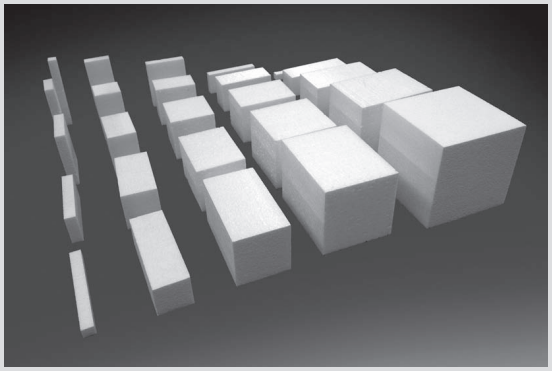


図2　コンテクストデザインワークショップ2012

いるように、ある表象と別の表象との間の何もない部分を想像力が補い、そこにはないものを知覚しようとする知覚の癖があるようである。それぞれの直方体が段階的な変化をしているため、あまり近づけすぎるとその断絶が強調されてしまい、脳が埋めるべきグラデーションが生成されなくなってしまうために、あまり滑らかな変化としてとらえにくい。そのように考えられるのではないだろうか。その説明が正しいかどうかは別として、体験的にある程度相互距離がある状態が最も心地よく曲面を知覚できるようである。

3-2　大きさのグラデーションによる形と素材のオーバーラップ

これは（図4）四ミリ厚の合板を、英単語の「CONTEXT」という文字で、高さ二〇ミリから二ミリのものまで二〇段階にわけてレーザーカッターでカットし並べたものである。小さくなっても厚みは四ミリのまま一定なので、はじめはしっかりと「CONTEXT」と文字として見えていたものが、小さくなるに従って、切断面の焦げた部分の面積が相対的に増え、全体の色味が焦げ茶色になる。さらに小さくなると、木材の繊維のスケールと文字の線とが同じくらいになり、文字として判別しにくくなってくる。このスケールになると、はじめは意識しなかった合板という素材の組成をまざまざと見せられ、文字よりも素材感に目が行くようになる。

これはグラデーションによって文字という抽象的な認知対象が、素材という具体的な認知対象へと移り変わってゆくプロセスを示している。文字とそれを作っている素材という二つの異なるフェーズが認知の中で連続しているとも言えるのではないだろうか。

図4　コンテクストデザインワークショップ2012

3-3　背景色へのグラデーション

nendoというデザイン集団が、興味深い椅子をデザインしている（図5）。

透明素材でできた脚に、床との設置部分は透明のままに残して、次第にグラデーションしながら木目のような塗装へと変化するような処理をしている。こうすることで、白い背景におかれたこの椅子は、遠目にはあたかも空中に浮かんでいるように見える。しかし、それ以上にfadeout-chairというタイトルが示すように背景に溶け込んでいく、あるいは消えゆくように見える不思議な椅子となっている。この作品は、脚が透明アクリルであるがゆえに背景はカーペットでもなんでもよいのだろうが、写真がそう撮られているように、いわゆるホワイトキューブ的な真っ白な背景の上にあるときに最も効果を発揮するのだろう。

ワークショップでは、この効果を簡易的に実験してみた。身の回りにあるものを白いスプレーでグラデーショナルに塗装する試みをしてみたのが、図6と図7である。一つめは白い壁の前の中空に、下部が白く塗装されたフォークを一本持ったものである。ただそれだけのことだが、生々しくも背景に溶け込んでゆく存在となっている。

もう一つの写真は、同様の塗装を施した物の白い部分を中心に集めて放射状に置いたものである。置いてあることによってできた影によって、多少物質的存在感が増しているが、中心部に吸い込まれてゆくような動きを感じるものとなっている。

これを見ていると、部分的に雪が積もった風景を想起する。積雪はいたるところにこのような景観を

図5　fadeout-chair デザイン:nendo 2009（写真:林雅之）

作り出しているのだろう。これは、一つの物体に、カムフラージュのように背景と同色を与え、背景とのコントラストを徐々に減少させるという操作をすることによって成立する現象である。

これらの現象は、円山応挙が描いた幽霊のような古典的な、すなわち幽霊の脚がグラデーションで背景に消え地に足をつけていないという手法に通じるだろう。円山応挙の幽霊が興味深いのは全身が半透明ではなく、上半身ははっきりと物質界に属していながら、グラデーションを伴って下半身は霊界に属しているという両義的な方法をとっていることである。

図6　コンテクストデザインワークショップ2012

図7　コンテクストデザインワークショップ2012

3-4　二つの漢字の輪郭をグラデーションでつなげる

二つの漢字を用意する。できれば対照的な意味の漢字の方が興味深いだろう。書いている途中の写真(図8)では、外側が「有」で内側が「無」である。最初に大きさの違う文字を入れ子状に書き、次に二つの文字の間をできるだけ滑らかにつながるように変化させてゆく。

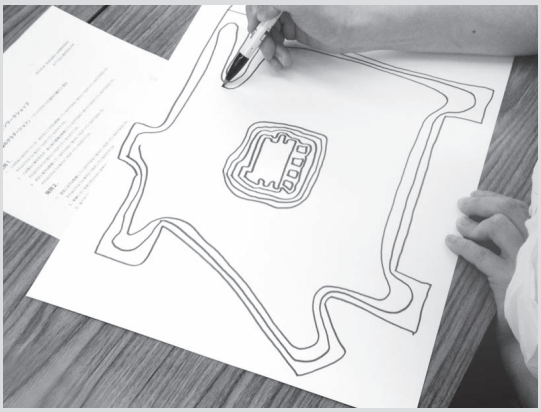


図8　コンテクストデザインワークショップ2012

これはある意味でコンピュータのモーフィングの技術に近い操作である。完成した方の写真(図9)は、外側が「老」で内側が「童」である。子供から始まって次第に老いてゆくプロセスと重なっていて面白い。

二つの文字の間はある程度任意に描かれたものであるが、滑らかに変容するそれらの線は結果として地形図における等高線と同じ様相を呈するようになった。

変化の項で地形のことを述べたが、一般的に地形はなだらかに形を変化させている。それは地形図における等高線で見てとれる。例えば標高五百メートルの形が標高千メートルに至るまでグラデーショナルに変化して連なっている。それと同じような現象

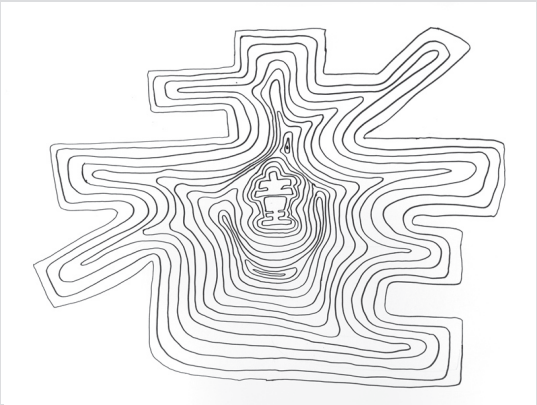


図9　コンテクストデザインワークショップ2012

がここでも現れた。これはおそらくもう一つの漢字をさらに外側に書けば三つの漢字のグラデーションになるであろう。そのグラデーションに言えることは、一連のグラデーションの中で三回意味を発生させるということである。

ここで確認できることは、グラデーションのところどころに現れる意味との関係である。色や音階のグラデーションでは、色の名前であったり、音の名前がその特異点として現れるが、文字ほどははっきりと認知しにくい。そして、こうした連続的な変化の中で時折結ぶ認知の像というイメージを描いた時に想起される類似した現象としては、レンズのフォーカスポイントというものがある。グラデーションにおける特異点という意味では、2―7の「大小のサイズ」の項で考察した「Powers of Ten」において、意味を成しにくい中間的グラデーション映像の要所要所で現れる認知の像としての太陽系や原子などの特異点に通じるものがあるかもしれない。

3-5 BACK UP JAPANにおけるグラデーション

二〇一一年十一月に京都の遊狐草舎というギャラリーで行われた「モノケイロ11・11」展に出品するために、東日本大震災への思いを形にした「BACK UP JAPAN」という杉の座卓（図10）は、前項と同様の考え方を立体にしたものである。日本列島の比較的リアルな海岸線の輪郭を最初の線として、そこから次第に標高をあげて絞り、再び広げてデフォルメした曲線の中に天板として形を収束させたこの座卓は、杉の木目が地層にオーバーラップすることも相まって地形的であるが、一方で地形というよりも複雑さから単純さへと溶解してゆくグラデーションともなっている。

図10　BACK UP JAPAN／Low Table
デザイン：上林壮一郎（写真：太田拓実）

4 機能や名称のグラデーション

4-1 建築のトランスフォーム――意味の変換

思考実験として大地に連なる壁を想像していただきたい。ベルリンの壁のようなものでもいい。その壁に一つ四角い穴があいている。それを窓と呼んでもいいだろう。窓については、オットー・フリードリッヒ・ボルノウが『人間と空間』の中の窓についての現象学的論考の中で、窓は世界全体にたいして開きつつ、遠方へと遠ざけ移しかえるはたらきをすることを指摘しているが、その窓をだんだん大きくしていくとやがて窓は、外部と遠ざけるはたらきよりも、そこを通って容易に外部へ出ていくことができるようになり、世界と結びつけるはたらきが強くなる。そしてそれは戸や、出口または入口などと呼ばれるようになる。さらに開口部を広げると、壁の残った部分は次第に細くなり、壁だと思っていたものはやがて柱のような様相を呈するようになってくる。

このような連続的な形態変換のプロセスは、建築家の黒川雅之氏が氏の著書『黒川雅之のプロダクトデザイン』の中で、建築のトランスフォーム（図11）として次のように解説している。

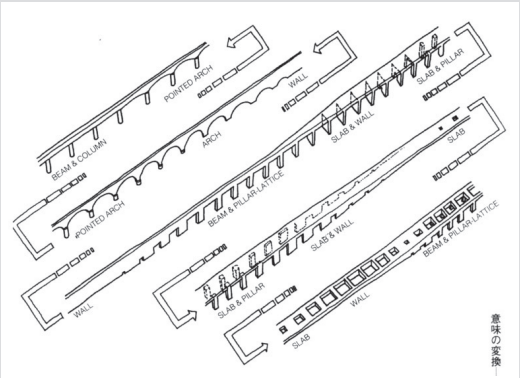


図11　意味の変換（建築のトランスフォーム）by 黒川雅之

格子や壁やアーチ等の名称を持つ形態言語は明白な意味を持つ、既に公認されたものである

が、それらは連続的な形態変換のプロセスの中で意味の浮き上がりとして顕在化したものである。公認されたこれらの形態言語は連続的であるのでその中間には二つの意味が衝突して、不安定なカタストロフィーの状態をつくる。（黒川、一九九三）

つまり、一般的に人は名称のついたもののみを認識しがちであるが、名称のついたものと、それに近接する名称のついたものの間にある中間的で名称のない形態についてはその存在を見落としがちである。

例えば顎と首はそれぞれ人体の部位の名称であるが、首と顎の間には「顎の下」以上にその部位をアイデンティファイする固有の名称がみあたらない。しかし、顎と首は徐々に形が変化しながらつながっているのである。

このように、ある名称のついたものと別の近接したものをつなげるように徐々に形を変えて連続させることで、形のグラデーションが出来上がる。この時、このグラデーションの中で名称のついた部分は特異点として認知されているといえよう。

4-2　機能のグラデーション展（Gradation of Function）

二〇一〇年の夏に、京都の五条大橋近くのエフィッシュというカフェで「Gradation of Function」という小さな展覧会を行った。

杉の廃材で、直感的にリアルタイムに形状を削ることができるベルトサンダーという機械を使い、靴べらを作った（図12）。いくつもあった廃材を使って、靴べらは次第に形を変化させ、別のものになってきた。それがどうやら肩たたきにでも使えそうだったので、靴べらから肩たたきへのグラデーションという意味で機能のグラデーションというコンセプトと名称にしたのだ。

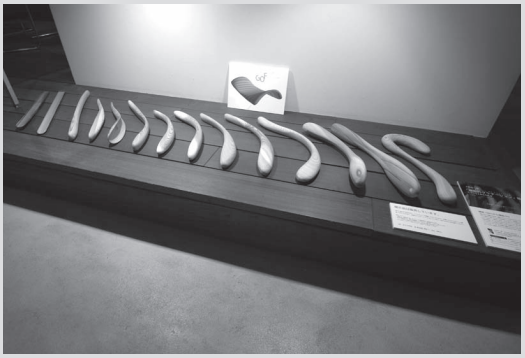


図12　機能のグラデーション展
デザイン：上林壮一郎2010

機能がグラデーションするとどういうことが起きるか。ある見方でいえば中途半端で使いにくいものができるといえる。しかし他方で、もっともその機能にふさわしい形が客観的に決まっていない場合は、自分好みにあったちょうどいいものを選べるという見方も成り立つのである。グラデーションはまさにちょうどいい度合い＝grade を選ぶためのカタログになる働きがあるのである。

4-3　ほうきからタワシへのグラデーション

これは（図13）、東京都の伝統工芸に指定されている手植えブラシの技術を使って、新しいブラシをデザインしたものである。通常のブラシは、同じ長さの毛でできている。しかし、よく考えてみるとブラシに近接した道具に、タワシや刷毛、ほうきがある。刷毛は塗るための道具だが、タワシもブラシもほうきもそれぞれ掃除の道具である。それらは厳密には素材や製法が異なるが、毛の長さや腰の強さという点では連続性のあるものとしてとらえてみても面白いのではないかと考えた。そこで、毛を円弧状に植えてその長さをグラデーショナルに変化させた。毛の長い部分は軽いチリを掃くために、短い部分は取りにくい汚れや埃をとるためにタワシのような働きをする。その間は、その時の汚れの度合いに従って、リングの角度を変えることで容易に面に当たる毛の長さを変えられるものである。ここでのグラデーションは明確な特異点はないが、一応タワシ→ブラシ→ほうきという特異点を結ぶグラデーションとなっているといえよう。

以上は形と機能のグラデーションであるが、デザ

図13　WABRUSH
デザイン：上林壮一郎2012

インの要素は形態以外にも、色彩や濃淡、温度、音、テクスチャー、大きさ、強度、重さ、比重、素材感などさまざまなパラメータがある。このようにデザインする上で具体的に操作するものは、実はこうしたパラメータの「度合い」すなわち〝grade〟であり、デザイナーにはこのグラデーションが見えている必要があるのである。

5 グラデーションにおける相の問題

5-1 物質の三態と相転移というギャップ

第二節の「現象におけるグラデーションの基本的考察」であえて触れなかった問題に、グラデーションにおける相の問題がある。温度によって氷が水になり水蒸気に変化するように、物質の状態変化の中で、融点や沸点のように、連続性の途切れるかのような突然の相の転移をグラデーションの中でどのようにとらえればいいのかがわからなかったからである。これは、2-7の「Powers of Ten」における非連続的なグラデーションの問題にも通じることだと思われる。

一般に物質ならば固体・液体・気体の三つの状態（相という）を変化する。水は一気圧で〇度以下ならば氷となり固体であるが、温度が上がり氷が融解し、溶けると水になりやがて沸騰・気化し水蒸気という気体になる。この融解や気化によって突然物質の状態が変化することを相転移というが、温度変化による相転移を含むこの状態の変化をグラデーションと言えるだろうか。

水の状態変化には、水蒸気という気体がいきなり固体に昇華してできる雪や霜のほか、霰（あられ）や霙（みぞれ）や雹（ひょう）などさまざまな状態があるがここでは、氷→水→水蒸気という三相転移のみに注目する。というのも、「はじめに」のところで、鎌田の「『もの』とは」についての叙述を引用した箇所にあった、「物質性としての『物』から、人間性としての『者』を経て、霊性としての『霊（もの）』にまで至る多次元的なグラデーション」を物質の三態のアナロジーとしてとらえられないかと思うからである。科学的なアナロジーとしてはわからないが、少なくとも芸術的ファンタジーのアナロジーとしては考えてもいいのではないかと思う。その場合、「物」から「者」への相転移は融解であり、「者」から「霊（もの）」への相転移は気化ということになる。また「物」から「霊（もの）」への相転移はこの場合、昇華が対応するだろう。

しかし、この相転移を含む状態の推移を鎌田は多次元的なグラデーションと呼んでいる。

氷から水へ、あるいは水から水蒸気へ変化する臨界においては確かに突然の変化があるが、見た目にあまり変わらなくても、氷において、あるいは水や水蒸気においては、温度変化とともにグラデーションがあるだろう。気体においてはその体積が大きく変化している。その力は蒸気機関や蒸気タービンとして使われている。また水は、対自然、対人間や動植物との関係においては、冷たい水からぬるま湯、ちょうどよい湯加減を経て、茶やコーヒーを淹れ、食料や材料を煮る熱湯になるという機能的グラデーションを持っている。それは、低温になるほど氷の固体としての強度が増すなど、目立たないが氷においても言えるだろう。このようにそれぞれの相の中では、それぞれグラデーション的な現象が起きている。

問題は相転移にある。これまで考察してきたさまざまなグラデーションの中にも特異点と称してきた状態のジャンプが見られる。

例えば、2-7の「Powers of Ten」の映像の移り変わりの中で現れる、染色体や、原子や太陽系などの名称として認識される状態や、4-1で述べた「形のグラデーション」の中に現れる柱や窓などの名称が与えられた特異点である。あるいはまた、3-4や3-5で述べたように等高線のような曲線が漢字という意味を生成する特異点や、同じく水平断面の形状が日本列島という形を生成する特異点である。形の持つ意味のフォーカスポイントと言ってもいい。

この例でいえば、前者の「Powers of Ten」では、一度太陽系という特異点に達するとそれより小さいスケールでは地球という次の相に達するまで、太陽系というスケールの状態が続くという意味で、物質の三態に対応しているといえよう。一方で、漢字の形や日本列島の形においては、その状態が続くというよりも、二つの間をつなぐ形状を生成するという意味で、コンピュータのモーフィングに対応するといえるのではないだろうか。

5-2 ゲーテの植物のメタモルフォーゼとモノの三態

では、視点を変えて植物の成長はどうであろうか。ゲーテに「植物のメタモルフォーゼ」という詩がある。植物の成長を詩として内面化し、美しい表現を通して精神の内で植物をグラデーショナルに変化成

長させていくものである。しかし、植物の成長のプロセスにあっても、種から葉と茎というフェーズへ転移するいわゆる芽が出る特異点と、茎が伸び葉の間から花が咲く特異点、そして花の中から雄しべと雌しべが育ち結実して実がなる特異点などがある。

こうした特異点は先の例に対応させるなら、物質の三態や「Powers of Ten」における名称のような特異点に対応するだろう。特異点で変えた姿は次のフェーズのあいだ引き継がれる。

ここでもう一度「物質性としての『物』から、人間性としての『者』を経て、霊性としての『霊』にまで至る多次元的なグラデーション」という言葉を思い出したい。特異点を含むグラデーションというアナロジーでこのモノ学のグラデーションを考えると、物から者へと転移する臨界と、者から霊へと転移する臨界は、そのポイントにおいてはやはりグラデーションではなく別の原理が働いているのかもしれない。

まとめ

黎明の空のグラデーションの美しさから立ち入り、辞書的な定義の確認から、グラデーションに関係すると思われるデザイン要素的項目について分析を経て、造形物やデザイン作品を通した考察を行ってきた。また特記項目として、機能と形態の関係という視点で機能性のグラデーションについても考察した。

そしてそれらは第一義として、通常は断絶し別物と考えられてきた相や要素をデザインによってつなぐ考え方を幅広く探るためである。そして最後にグラデーションによってつなぐ方法の延長として、物質の三態のアナロジーを援用しつつ、モノ学における物と者と霊（もの）の各フェーズの多次元的グラデーションのありようを考える地平へと論を展開してきた。

しかし、そこでは相転移の特異点をグラデーション的にどう解釈するのかということが課題として浮き彫りになった。

ところで、二〇一〇年京都大学総合博物館で開催されたモノ学感覚価値研究会アート分科会の「物からモノへ」展に鏡リュウジ氏とのコラボレーションで Holoscope Table を出展した時、鏡氏は次のように語っていた。すなわち、占星術や錬金術では、動物から植物、そして鉱物まで断絶したものとはとらえずに連続したものとしてとらえていると。デザイン表現は、多分にレトリカルな性質を持っているので、そのようなコンセプトは、アナロジーとして有力な発想源となる。

本稿は、グラデーションというものを考えていくうえでの一つのきっかけにすぎないが、今後はこの考察で浮かび上がってきた「物」と「者」と「霊（もの）」の三態の融点と沸点における連続性のありようを、芸術的ファンタジーを動力としたデザイン表現を思考実践の場としてさらに考察してゆきたい。

参考文献

松村明編『スーパー大辞林3・0』三省堂、二〇〇六–二〇〇八年
井上永幸、赤野一郎編『ウィズダム英和辞典』三省堂、二〇〇六–二〇〇八年
池田廉、在里寛司、西村暢夫、米山喜晟、郡史郎『伊和中辞典』第二版、小学館、一九九九年
オットー・フリードリッヒ・ボルノウ著、大塚 恵一、池川健司、中村浩平訳『人間と空間』せりか書房、一九七八年
高橋義人編訳、前田富士男訳『ゲーテ自然と象徴 ——自然科学論集』冨山房百科文庫三三、冨山房、一九九〇年
鎌田東二「発刊の辞 モノ学への挑戦」『モノ学感覚価値研究会年報』第一号、二〇〇七年
石井匠「アイドルのモノ学」『モノ学感覚価値研究会年報』第六号、二〇一二年
上林壮一郎「モノ・星・デザイン ——実用とは何かをめぐって」『モノ学感覚価値研究会年報』第四号、二〇一〇年
鏡リュウジ「天と地の照応」『モノ学感覚価値研究会年報』第四号、二〇一〇年
黒川雅之『黒川雅之のプロダクトデザイン』六耀社、一九九三年
千葉陽『コンテクストデザインとしてのグラデーションデザイン研究—線』研究冊子、二〇一二年
堀ノ江匠『コンテクストデザインとしてのグラデーションデザイン研究—paper』研究冊子、二〇一二年
蔡融迪『コンテクストデザインとしてのグラデーションデザイン研究—paper』研究冊子、二〇一二年

第二章

石の聖地の比較研究

須田郡司
モノ学・感覚価値研究会共同研究員／写真家

はじめに

一九八〇年代、琉球大学で地理学を学んだ。その時、沖縄という独特の文化に触れ、特に御嶽（ウタキ）と呼ばれる拝所空間に強い関心を持って巡るようになった。その後、上京し日本の神社や仏閣、山岳霊場などを訪ねるようになると、聖なる場所には、たくさんの石や岩が存在していることがわかった。それはまるで、「聖地を歩けば石に当たる」といったような感覚だった。やがて石、岩そのものに興味を持ち、磐座、石神などを巡るようになる。国内のみならず世界の聖地へフィールドワークを重ねていった。二〇〇一年、南部アフリカのジンバブエで石の聖地・ドンボシャーと出会った。ドンボシャーには多くの巨石が点在し、そこは地元の人々にとっての祈りの場、つまり聖なる場所だった。その時、石の聖地は世界中に共通するものがあると感じた。帰国後、もっと足元の日本の石を訪ねようと思い、二〇〇三年から二〇〇六年までの三年間、「日本石巡礼」という石を巡る旅を行う。日本各地に点在する石の聖地を約八〇〇カ所訪ねた。その後、さらに世界の石の聖地を訪ねるべく二〇〇九年から二〇一〇年の一年間、「世界石巡礼」を行い、四〇カ国の一〇〇カ所以上の石や岩を訪ねた。その旅でわかったことは、聖地としての石の役割は、多様性を持っているということ、それと同時に共通したものもあるということだ。日本と世界の石の聖地を見てゆきながら比較研究をしてみたいと思う。

1 相似性から見た石の聖地

ここでは、これまで訪ねた日本と世界の石の聖地の経験を踏まえて、九つに分類する。

1-1 夫婦岩（陰陽石）

日本で最もよく知られていて、夫婦岩の代表と言えば、三重県伊勢市二見の夫婦岩だ（**写真1**）。夫婦岩は日の大神（天照大神）と興玉神石を拝むための天然の鳥居でもある。興玉神石は、沖合約七〇〇メートル先に鎮まっていると言われている。六月の夏至の前後一週間は岩の中央から日が昇り、天気がよければその背後に霊峰富士を仰ぐことができる。男岩は高さ九メートル、女岩は高さ四メートルで、長さ三五メートルの大注連縄が五本張られている。二見という名称は夫婦岩を象徴している。糸島市の夫婦岩は筑前二見ケ浦と言われ、遊佐町の夫婦岩は出羽二見岩の名で呼ばれている。

夫婦岩と同じように親しまれているものに陰陽石がある。宮崎県小林市の陰陽石は、まさに男女の陰陽の形を表し、古くから信仰されていた（**写真2**）。これと似たものが中国の広東省の丹霞山にある。丹霞山は、「丹霞地形」という赤色の陸源性堆積物で構成された景観に対して、中国で付けられた名称。亜熱帯地域で壮観な赤い断崖と自然の浸食作用によって形作られた地形が特徴的だ。そこには陽元石と陰元石と呼ばれる奇石があり、観光客の人気スポット

写真１　二見の夫婦岩

写真２　小林市の陰陽石

になっている。

宮城県石巻市にある釣石神社は、落ちそうで落ちない石がご神体になっているが、形が陽石に似ている。下の石が陰石で、二つで陰陽石とも呼ばれている。

また、ネパールでは、陽石と似ているものにシヴァリンガという石がある。シヴァリンガとは、シヴァ神の性器という意味。かなりリアルに表現されているが、陽石信仰の石である。

日本各地を見ると、夫婦岩・夫婦石と呼ばれる岩が六〇カ所ほどある。夫婦岩・夫婦石がある地方自治体により全国夫婦岩サミット連絡協議会が結成され、全国夫婦岩サミットなるものが毎年開催されている。そのくらい、日本人に夫婦岩・夫婦石は人気がある。古代の人々は、夫婦として一緒に長く寄りそいたい、そんな願いを夫婦岩に託して信仰してきたのかもしれない。

陽石は、夫婦和合の象徴として特に中国、インド、ネパールなどで多く見られる。

1-2　丸石（卵）

丸石は、特に山梨県山梨市に際立って多く点在している。中でも七日市場の丸石は、台座の上に高さ九〇センチほどの丸石が安置され、その周囲には小さな丸石も置かれている（**写真3**）。

三重県熊野市の花窟（はなのいわや）神社の手水舎の横にある丸石は高さ一メートルあまり、苔むした石に注連縄が巻かれ、どこか神々しさを感じさせる。

奈良県十津川村の玉置神社の玉石社の玉石は、頭だけのぞかせている小さな石だが、実際にはほぼ真球の丸石が埋められているとのこと。

熊本県多良木町の悠久石と名付けられた丸石は、高さ一・三メートルほどある。この丸石は、土砂災害の時に地中の中から出てきたものだ。多良木町には、小さな丸石を祀る習慣があって、今では太師堂の境内に屋根を付けて安置されている。

和歌山県古座川町に滝の拝という場所がある。古座川支流、小川（こがわ）にある落差八メートルの渓流瀑で無数の穴がうがたれた岩床で、ここにポットホール（甌穴）がある。その穴に落ちた石が長い時間、水の流れで回転してまわりが削られると、見事な丸石になる。丸石は、近くの金比羅神社の横に奉納されている。

五島列島の小値賀町にもポットホール（甌穴）があり、そこで作られた真球の石も近くの祠の中に祀られている。

奈良県山添村に大きな卵型の巨石がある。この石は、もともとほとんどの姿が地中に埋まっていた。ここに、山添村ふるさとセンターを造ることになり、開発のために山を造成工事したときに出土したもの

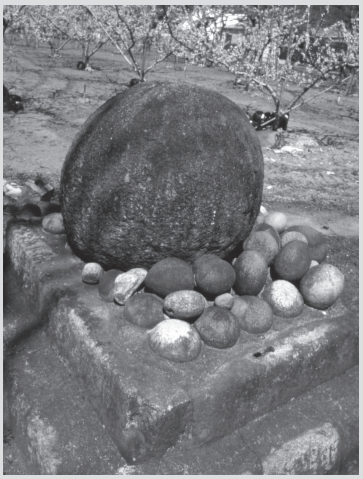


写真３　七日市場の丸石

で、台座とともに出土したことから人工的に作られたものではないかと考えられている。今では、新しく台座を作り長寿岩と名付けて祀っている。

アフリカのジンバブエの南部にあるマトポス国立公園には、奇岩怪石が多く点在している。特に卵のように浸食された石が多く点在し、周囲には、岩絵をみることができる。このあたりは、古くは先住民が儀式などをした場所ではないかとも考えられている。

オーストラリアのデビルズマーブルズは、悪魔のおはじきを意味する。ここには、花崗岩の浸食地形が広がっていて、まるで卵のような形をした丸石が点在している。この石は、アボリジニにとって虹色の大蛇が産んだ卵として信仰されている。

中米コスタリカに、謎の石球がある。この石は、バナナ農園の開発時に地中から発掘された石である。大きさはソフトボールくらいから高さ二メートルのものまである。デキス石器時代のころに作られたものと言われるが、何のために使われたかはわからない。

日本では古くから丸い形に魂が宿ると信じられている。丸石は神社のご神体、あるいは道祖神として祀られていることが多く、丸石神としても信仰されている。世界においても自然にできた丸石や人工的に作られた丸石も、信仰の対象になっているのは、共通している。

1-3　割れ石

弁慶の手割石は、栃木県足利市名草にある、名草弁天にある巨石群の一つ。名草弁天の下部は、水はほとんど溜まっていないが、池のような空間があり、その中に割れた巨石が鎮座している。武蔵坊弁慶が真っ二つに割ったという伝説がある。

兵庫県姫路市に「割れ岩」と呼ばれる岩がある。姫路市西脇の破磐神社の西南約二キロメートルの山中にあり、この岩が破磐神社の発祥の地だとも言われている。森の中に佇む「割れ岩」は高さ約五メートル、周囲約二〇メートルもある大塊石で、注連縄が巻かれている（**写真4**）。この岩には、次のような神話的伝承がある。その昔、神功皇后が麻生山から射た三本の矢のうち一本が西脇の大磐を三つに破り、これを吉兆として矢を祀ったのが、その始まりと伝えられている。

山梨県山中湖村の北東に石割山（一四一三メートル）という山があり、その八合目付近に漢字の「石」の字の形に割れた大岩がある。石割神社のご神体で、この岩は古事記にでてくる「天岩戸」伝説の地と言われる。切り立った大岩には高さ一五メートル、幅約六〇センチ、長さ約一五メートルほどの隙間があり、この隙間を時計回りに三回通ると運が開けるとも言われている。

奈良県奈良市柳生の里の森の中に「一刀石」と呼ばれる石がある。すぱっと切ったような筋から、一刀石と名づけられた。この石には次のような伝承がある。柳生新陰流の開祖、剣豪・柳生宗厳が修行中に、この山中で戦った天狗を切ったら石が切れていて、一刀石の名が付けられたといわれる。岩の表面のえぐれた凹凸は、天狗の残した爪痕だという。また、近くには、天乃石立神社があり、名前のとおり、周囲の巨石群をご神体として祀っている。天乃石立神社の巨石群は、人工的に作られたような石がごろごろしている。

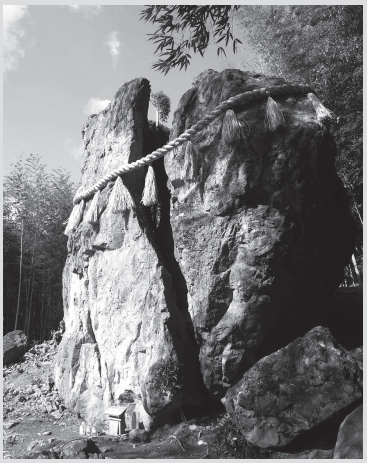


写真4　破磐神社の割れ岩

日本各地の神社に行くと、さまざまないわれを持つ割れた石や岩を見ることができる。石や岩が割れた形は、想像力を掻き立ててくれる。その多くは自然の節理で割れたものだが、切られた石や岩の隙間を見ていると、そこから何かが発生しているような印象を持つ。その形は、ある種のエネルギーの息吹を象徴しているようにも見える。特に、ナイフですぱっと切ったような切れ筋を見ると、神秘的な力を感じる。古来より日本人は、そのような形に目に見えない大いなる力を感じて、さまざまな物語を比喩として語ってきたのである。

1-4　ゆるぎ石

岡山県赤磐市郊外の小高い丘の上に岩神神社はある。林に囲まれた参道を歩き古びた木造の拝殿をくぐると、社殿（本殿）はなく、岩そのものがご神体だ。畳岩と呼ばれる巨岩は、高さ約三メートル、長さ約

八メートル、幅約五メートルの大きさで割れている。背後にも、多くの巨岩がごろごろしている。ゆるぎ岩は、まさにバランシング・ストーンで自然の造形美を感じさせる（**写真5**）。長さ五・二メートル、幅一・八メートル、高さ〇・九メートルの巨岩は片手で上から垂直に押してもびくともしない。しかし、やや斜めに押したとき、ぐらぐらっと動きだす。落ちそうで落ちないことから、受験生の信仰を集めている。

香川県綾歌郡宇多津町聖通寺の上の山には、巨岩がゴロゴロと積み重なっている場所があり、周りには石仏が奉られている。聖通寺の常盤公園南部展望台の近くに、ゆるぎ岩と呼ばれる岩がある。大きさは約三・五メートル×一・三メートル×一メートル、重さは約一〇トンもあるが、その大石を片手で動かすことができると言う。実際には、よっぽど怪力の人でなくては片手では動かないが、両手でも動かせたときは感動する。

写真5　岩神神社の畳岩

高知県高知市土佐山桑尾に落ちそうで落ちない石がある。その名は、ゴトゴト石。この石は大人の身長ほどの高さで、重さが五～一〇トンあるにもかかわらず、力の弱い子どもが押すだけで簡単にゴトンゴトンと音を鳴らして大きく揺れる。しかし、お相撲さんがどんなに強く押しても、力自慢の大人が数人がかりで押しても、まったく転がり落ちることはないという。「これは神の石だ！」と評判が広がり、いつのころからか「落ちない」祈願の名所として受験生、政治家などが足を運ぶようになったという。近くには、かつて、姥捨（うば）てがあったといわれる「山姥（やまんば）の滝」がある。さらには、平家の落ち武者が身を投げたという伝説が残される「平家ヶ滝」もあり、平家を祀った祠もある。

不思議なバランスを保って存在している石がある。日本では、揺るぎ石などと呼ばれ、実際、人の手で動かすことができる巨石があり、うまくバランスを保っている。また、よくこんな状態で石が落ちてこないなぁ、と思える石もある。そのような神秘的な石の存在に、人々は神仏を重ね合わせていたのだ。

1-5　立神

沖縄県の最西端の島、与那国島のシンボルともいえる奇岩が立神岩だ。別称頓岩（とうんがん）ともいい、伝説によれば鳥の卵を採るため男二人が岩に登り、一人は転落死した。もう一人は恐怖で降りられなくなり、神様に祈りながら寝てしまうと、起きたら岩の下にいたという話が残っている。立神岩は立神岩展望台から見ることができる。また、この岩の近くに海底遺跡があり、海から見る立神も壮観。この岩は男根の形にも似ているので、子が授かるように祈願に訪れる人もいる。

鹿児島県の枕崎市の火之神公園から海を望むと見えるのが立神岩だ。高さ四二メートルの岩が、天を指し示しているような形に見え、枕崎市のシンボル的な存在だ。この立神岩には次のような伝説がある。「沖の立神　石とは思うな　石じゃア　ござらぬ　サマお神様」。立神岩は、枕崎岬の航海安全と大漁満船を祈願した守護神として崇められている。海と川を支配する神々の中に、速秋津日子神と妹速秋津比売神の二神がいる。この神々は山立神と立神岩との間を流れる早瀬のような所で人間の罪けがれを洗い流し、祓い清めるみそぎはらいの役目をしている。明治四二年ごろまで建てられていた立神神社の祭神はこの二神で、ご神体は大岩様といって立神岩と火の神一帯を神の棲みたまう聖域として崇拝したといわれる。火之神公園から望む立神岩は、どこか龍の頭のようにも見える。この立神岩には岩礁があるため、今では釣り人で賑わう場所になっている。

佐賀県唐津市の西、湊町の海に突き出た奇勝「立神岩」は、高さ四〇メートルの玄武岩の岩だ。二本のそそり立つ岩は夫婦岩としても知られている。また、岩の中は洞窟になっていて仏像などが祀られている。

兵庫県南あわじ市の沼島にある上立神岩は、「矛先」のような形をした岩で（**写真6**）、国生み神話ゆかりの場所。高さ約三〇メートルの屹立する岩は、

くにうみ伝説のイザナギとイザナミがオノコロ島に降り立ち、巨大な柱の周囲をまわって婚姻をおこなった、「天の御柱」だとも言われている。上立神岩を眺めてみると、岩上にハート形に彫ったような窪みがあり、国生み神話の愛を感じさせる岩となっている。

日本の海岸でよく見られる巨石といえば、立神岩だ。立神と呼ばれる岩は、日本各地の海岸沿いに六〇カ所以上存在する。中でも際立って多い場所は鹿児島県の奄美地方で、奄美大島には各所に立神がある。島の沖に浮かぶ岩礁や小島には神が宿るということで崇拝されそのように呼ばれている。また、漁師は漁に出るときに豊漁と航海安全を立神に祈り、無事に帰ってきたときにも立神に感謝するという。奄美では、特に漁師の信仰を集めているようだ。そそり立つ石を見ていると、そこに何かしら自然の神秘性や畏れのようなものを感じる。それが、立神岩としての信仰と結びついていったのだろう。

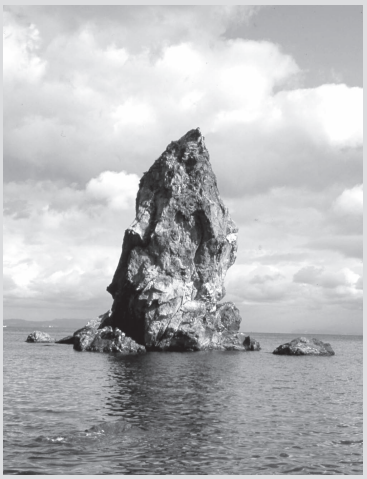


写真６　上立神岩

1-6　立石

アイルランドのタラの丘は、古代ケルトの王たちが即位した場所で、アイルランド人にとって心の故郷である（**写真7**）。二つの円形の土塁が並ぶタラの丘の玉座の中心に高さ一・二メートルほどの立石がある。これは、ペニスを模したものでリア・フェイル（運命の石）と呼ばれている。伝承によれば、真の王がその前に立つと、石は三回うなりをあげたという。

インドネシアの北、スラウェシ島の中部にランテと呼ばれる場所がある。ここには、石人像やいくつかの石の遺構がある。原っぱの中に高さ一・三メートルほどの自然石がぽつんと佇んでいる。かつて、この石の前ではさまざまな儀式が執り行われていたという。

マダガスカルの南、チュリアラー近郊の村を訪ねると、集落と集落の境に石が立てられている。この石は、高さ〇・八メートルほどの大きさで、「メモリーストーン」と呼ばれている。これは、亡くなった死者の魂が、自分の故郷に無事に帰れるように目印として立ててあるという。

徳島県吉野川市の忌部神社にも立石がある。この石は、青木の森と呼ばれる境内にあり忌部氏の祖先、天日鷲命の霊魂が鎮まる霊地と言われる。木の柵に囲われた中に高さ一・三メートルほどの石が立てられていて、忌部氏の神事に関係したものと考えられている。

日本の神社では、柱を立てる行為が重要だ。柱を立てることで、そこが特別な聖所空間になる。日本の神社をみると、木の柱を立てることが聖所空間を作る神事となるものもある。たとえば八年に一度行われる長野の諏訪大社の御柱祭だ。二〇年ごとに行われる伊勢神宮の「御遷宮」では、社の中心になる真の御柱を立てることが最も重要な神事とされる。石を立てることは、天と地をつなぐ行為のように見える。日本では石庭を作る僧侶を石立僧と呼び、石を立てる行為がすなわち禅の世界を表現する石庭作りを象徴しているのだ。世界を巡ると、高さ一メートル前後の立石の聖なる空間と出会うことが多い。

写真７　タラの丘のリア・フェイル（運命の石）

1-7　ドルメン（支石墓）

ドルメン（dolmen）とは、二つ以上の石を横に並べ、その上により大きな石を載せた机状・鳥居状の組石のことを言う。

熊本県上天草市に矢岳ドルメンと呼ばれる巨石遺構がある。矢岳神社近くの山道を上がってゆくと、左手に巨大なドルメンが現れる。ドルメンは大きく、天上石は長さ一三メートル、幅六メートル、高さ二・五メートルほどあり、重量約五〇〇トンの巨石を厚さ一・五メートルの五つの支石が支えている。内部は広く、大人三〇人以上が入れるスペースがあり、平らに削られた祭壇のような石もある。矢岳ドルメンの内部は、祭祀空間のように見える。

五島列島の小値賀町の野崎島に沖の神島神社という神社があり、その真うしろに高さ二四メートルもの石柱が立ち、その上に八畳分くらいの平石が載せてあるご神体がある。この巨石は王位石（おえいし）と呼ばれ、別名上五島のドルメンとも言われていて古くから信仰されている。特に漁師の崇敬が篤く、伝承によれば王位石の上で神楽が奉納されていたという。

写真８　アイルランドのレガナニードルメン

オランダの北部ボルゲルの近くの森の中に、ハネベッドと呼ばれる長さ三〇メートルあまりのドルメンが佇んでいる。近くにはカフェが併設された資料館もあり、家族連れで賑わっている。周囲には数カ所のドルメンがあり、ドルメンマップを見ながら自転車で周遊することができる。ヨーロッパ人にとってドルメンは、身近な存在に見える。

韓国の江華島には、世界遺産にも登録されているドルメンがある。韓国では支石墓と呼ばれる。全世界には約六万基のドルメンがあると報告されるが、調査によれば、現在韓半島（韓国）には二万九五一〇基の支石墓があると言われている。全世界にある支石墓の半分近くが韓国にあることになる。支石墓は青銅器時代の支配者階級層の墓だ。また、儀式を行う祭壇として使っていた。これらが作られたのは、紀元前二〇〇〇年から一五〇〇年ごろと言われる。

イギリス、アイルランドには、たくさんのドルメンが点在している。レガナニードルメンは、北アイルランドのダブリンの郊外の牧場の中にある（**写真８**）。この巨石遺跡は、今から四〇〇〇年から四五〇〇年ほど前に作られたものだ。その後、大陸から渡ってきたケルト人のドルイド僧たちは、この巨石遺構を使って宗教的な儀式を執り行ったと考えられている。

ドルメンは、ヨーロッパからアジアにかけて広範囲に点在している。これは巨石記念物の一つで、中から土器、石器、人骨などが出土するところから一種の墳墓と考えられる。ヨーロッパ、特にフランスのブルターニュ地方に多く、インド、北アフリカ、中国東北、朝鮮、日本にも類似のものが分布している。アジアはどちらかというと小ぶりで、ヨーロッパは大きな規模のものが多い。

1-8　環状列石

人間により意図的に並べられた石には、いくつかの種類がある。ストーンサークルは、石を環状に配置した古代の遺跡。一般的に環状列石（かんじょうれっせき）と呼ぶ。

海外では特にヨーロッパに多くの環状列石が点在している。

イギリス南部ソールズベリー平原にあるストーンヘンジは、世界で最もよく知られる巨石遺跡で、ストーンサークルとドルメンがミックスした特異な形をしている。この遺跡は、今から四〇〇〇年から四五〇〇年前に造られたものである。トリリトンと呼ばれる高さ七メートルもの馬蹄形に配置された組石を中心に、直径約一〇〇メートルの円形に高さ四～五メートルの三〇個の立石（メンヒル）が配置されていて、石の配置から天体観測の施設と考えられている。ここから二〇〇体もの遺骨がみつかったことで死者の霊と交流する場であったとも言われている。

イギリス南西部のコーンウォール地方にメリーメイドン・ストーンサークルという遺跡がある（**写真９**）。このストーンサークルは、安息日の満月の夜、メイドたちがタブーを破って踊ってしまったため神様に石に変えられたとの伝承がある。実際はこのストーンサークルの名称のメイドンという言葉が、ゲール語で祭祀という意味を持つことから、祭祀場としての役割があったと考えられる。

大湯環状列石は、秋田県鹿角市にある縄文時代後

写真９　メリーメイドン・ストーンサークル

期（約四〇〇〇年前）の遺跡で、「野中堂遺跡」と「万座遺跡」という二つの遺跡の総称である。二つの遺跡は、直径四〇～五〇メートルの外帯と一〇～一五メートルの内帯の二重の組石群からなり両遺跡とも四〇組以上の組石がある。ここにある立石は日時計組石と呼ばれ、まさに陰陽石を現している。考古学的には墓所説と祭祀施設説がある。

大分県宇佐市にある米神山（標高四七五メートル）の山頂部には、高さ五〇センチ程度の立石の環状列石がある。この山の周囲にはいくつかの石が点在している。山の麓に京石と呼ばれる高さ一・五～二メートルの立石があり、山中にも人工的に作られたと思しき石の遺構を見ることができる。石の周りを観察すると、ある立石は由布岳に向かうように立ててある。環状列石は、周囲の山との関係性の中で配置されているように見える。

忍路環状列石は、北海道小樽市忍路にあるストーンサークルの遺跡。日本の考古学史上初めて学会に報告されたストーンサークルとして知られ、一九六一年三月一〇日に国の史跡に指定された。別名、三笠山ストーンサークル、忍路環状石籬とも呼ばれる。遺跡は三笠山という小高い山の山麓の、標高二〇メートルの河岸段丘上に位置する。遺跡の広さは南北約三三メートル、東西約二二メートルで、楕円形をしている。外側に二メートルから三メートルの幅で大きさ一〇センチから二〇センチの石が環状に置かれ、その内側に高さ一メートルから二メートルの大石が配置されている。約三五〇〇年前の縄文時代後期のものと推定されている。

次に暦の役割を現す石の遺構を見てみる。アイルランドの東部ミースにヨーロッパ最古の円丘墳といわれるニューグレンジがある。直径七六メートル、高さ一二メートルもの塚は、巨大なＵＦＯが着陸しているようにも見える。特徴的なことは一年に一度、冬至の日にだけ太陽光が入り口から一八メートルの細い通路を通り抜け、一番奥の墓室にまで射し込むように設計されていることだ。天体観測や太陽信仰と関係した神殿ではないかとも考えられている。

岐阜県恵那市永島鍋山の山頂近くにあるのが高さ一・五メートルほどの二本の立石で、通称鍋山メンヒルと呼ばれている。石は、二つが寄り添うように立てられていて、見方によれば夫婦岩にも見える。この石は、恵那市の文化財に指定されており、表面には線刻や円刻がある。立石のわずかな隙間から、夏至の日の出が確認されている。古代の人々は、この石を暦として利用していた可能性がある。

環状列石は、太陽や天体観測の装置、暦としての役割が多い。また、祭祀場としての役割をもつものもある。

1-9　他界につながる石

青森県むつ市にある恐山は、下北半島の中央部にある外輪山で、標高八七八メートルにある霊場だ。高野山、比叡山と並ぶ日本三大霊場の一つで、地蔵信仰を背景にした死者への供養の場として知られている。下北地方では「人は死ねば（魂は）お山（恐山）さ行ぐ」と言い伝えられていて、亡くなった死者の魂が、この山に帰ると言われる。ここでは、夏と秋には、死者の魂を呼ぶイタコが口寄せをするイタコ祭が行われている。

島根県松江市にある加賀の旧潜戸は、狭隘な入り口（幅五・五メートル）を持つ洞穴だ。中に入ると、たくさんの小石が積まれている。それは、仏になった子どもらが親を慕い小石を積み上げたと伝えられる賽の河原だ。ある東京の方の話で、子どもさんを亡くしたご夫婦が夢枕に「私は加賀のくけどにいます。お参りにきてください」と言ったという。ここは、死者の魂がやってくる場所とも考えられている。

アイルランドのケリー州にスケリグマイケルという絶海の孤島がある（**写真10**）。この島は、かつてケルト修道院があった島だ。その近くにスモールスケリグ島という小さな石の島がある。海鳥しか住まない小さな岩島だが、興味深いことに、岩のほぼ真ん中に縦の割筋があり、どこか女陰的な形に見える。

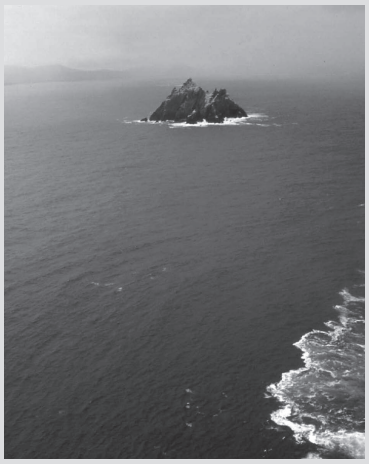


写真10　スケリグマイケル

この小さな岩の島は、この地方では亡くなった死者の魂が帰るところと言われている。

沖縄本島南部の南城市に斎場御嶽（セイファウタク）と呼ばれる隆起石灰岩でできた石の聖地がある。ここは琉球王国時代からの聖地で、聞得大君（きこえのおおきみ）の即位儀礼、御新下（おあらお）りが執り行われた場所だ。三角状の岩のトンネルをくぐることは、ある意味胎内潜りのようでもある。そこから琉球神話の発祥地である久高島を遥拝することができる。斎場御嶽は、神の島、久高島からニライカナイを感じさせる聖地である。

石は、あの世とこの世をつなぐ媒体としての役割、アナザーワールド（異界、他界）への入り口の役割がある。

2　新しい石の聖地

これまで、伝統的な石の聖地を見てきたが、ここでは、新しい石の聖地という視点でいくつかの事例を紹介する。

・新城さんの石庭

沖縄県宮古島市の新城氏の石庭（**写真11**）、そして高知県土佐清水市の北代氏の石庭（**写真12**）は、ある意味で石の声を聴く者によって造られた新しい石の聖地である。新城氏の石庭は、今から十数年前に初めて訪ねた。石庭は、新城氏宅の背後に隣接する杜の中にある。杜の中に足を踏み入れると、どこか空気感が変わる。まるで沖縄の聖所空間「ウタキ」に入ったときと共通する空気感があった。新城氏は、一九八〇年から石庭を作り始めた。いまでは六百個以上の珊瑚石が並べられている石の庭園だ。すべての石は、その土地から人力で掘り出されたもの。この庭園は、宇宙的な感覚に導いてくれる聖地のようにも見える。

写真11　宮古島市の新城氏の石庭

・北代氏の石庭

北代氏の石の庭園と出会ったのは一九九九年の冬だ。高知の唐人駄場（とうじんだば）周辺の巨石群を撮影している時、友人の紹介で訪ねた。小さな丘の上に巨石が組まれたようにたたずみ、まるで古墳のように見えた。巨石に近づくと小さな祠があり、風神が祀られていた。この石庭は、北代氏ひとりの力で三〇年近い歳月をかけて作られたもの。この石庭は黒潮の接岸するウスバエに近く、太平洋から吹き上げる風のライン上にあり、石庭の配置は、ギリシャ神話にでてくる風神「アネモス」を表しているとも言われ、アネモスガーデンとも呼ばれている。

この二つの石庭には、いくつか共通点がある。どちらもオープンに見学することができ、ほとんど口

写真12　土佐清水市の北代氏の石庭

写真13　窓を持つメンヒル（立石）

コミで人々に知られていったことだ。石庭はある意味「聖なる場所」として人々を引きつけている。そこでは、祈りとともに音楽、歌、踊りが奉納され、新しい石の聖地といった雰囲気がある。

• 窓を持つメンヒル

スペインの北西、サンチャゴ・デ・コンポステーラ近郊の港湾都市ア・コルーニャに、変わった石のモニュメントがある。コルーニャ岬から海岸線沿いに現代作家の作品が配置された彫刻公園があり、その中に、「窓を持つメンヒル（立石）」が一一個展示されている（**写真13**）。遠くから見ると、古代遺跡といった感じがする。MANOLO PAZという作家が一九九四年に制作した作品で、タイトルが「FAMILIA DE MENHIRES（メンヒルの家族）」いう。このガリシア人の作家は、自分たちのルーツがケルトであることをこのモダンなメンヒルで主張したかったのではないかと思われる。この作品は、石でできているため、おそらく百年後、数百年後、もしかしたら千年後も残る可能性がある。未来の人たちが、この作品を見たとき古代神殿と思うかもしれない。現代アートによる石の聖地である。

写真14　ピエドラ・デル・ペニョール

• ピエドラ・デル・ペニョール

コロンビアの第二都市メデジン近郊に高さ二二〇メートルの巨大な一枚岩がある。この岩はエルペニョン市のシンボルで、ピエドラ・デル・ペニョールと呼ばれている（**写真14**）。この岩山は、かつてロッククライマーの人気の岩だった。近年、この岩の割れ目の溝の部分にコンクリートの階段が作られた。上ってゆくと途中、聖母マリア像と思しき銅像が岩を見上げるように立てられている。一五分ほどで六四九段の階段を上って頂上に到着する。頂上には、カフェや土産物屋、そして展望台があり、三六〇度のパノラマ風景を見渡すことができる。ある意味、新しい石の聖地が生まれつつある、そんな印象を持つ。

新しい石の聖地は各地で生まれ、聖地は石で作られている。

まとめにかえて――重層する石への信仰

聖なる場所は、時代が変わっても、その役割は変わらないものがある。ある聖地を一つの宗教組織が信仰したとする。しかし、多くの場合はその場所は、その宗教組織が信仰する以前からの聖地であった可能性が極めて大きい。日本の山岳霊場をみれば、神仏習合の形を残す場所も少なくない。多くの宗教によって信仰されている石の聖地には時代を超えた信仰の重層性がある。

• カイラス山（中国、チベット自治区）

カイラス山は、チベットで最も聖なる山として信仰されている岩山で、チベットではカンリンポチェと呼ばれ尊崇されている（**写真15**）。この山は信仰されているがゆえに未踏峰でもある。土着宗教のボン教をはじめラマ教（チベット仏教）、ヒンドゥー教、ジィナ教、仏教の人々にとっても聖なる山として信仰されている。チベット暦の六月満月のサカダワ祭には、この山の麓にはチベット人巡礼者のみならず多くのインド人、西欧人なども訪れる聖なる山でもある。

• アダムス・ピーク（スリランカ）

スリランカ中部に標高二二四三メートルのアダムス・ピーク、別名スリーパーダと呼ばれる聖なる岩山がある（**写真16**）。山頂に岩があり、そこに足跡が残っている。その足跡は、仏教ではブッダの足跡、ヒンドゥー教ではシヴァ神のもの、イスラム教では地上に降りたアダムの足跡、キリスト教では、インドに布教にきた聖人のものと信じられ、四大宗教の聖地になっている。山の麓にはそれぞれの宗教施設が平和的に共存して建てられている、世界でも稀な聖地だ。

• 岩のドームと嘆きの壁（イスラエル、エルサレム）

岩のドームは、イスラエルのエルサレムにある聖地。ドームの中には巨大な一枚岩があると言われている。この岩は、石切場跡とも言われている。イスラム教の預言者マホメットは、この岩の上から昇天されたとの伝承がある。嘆きの壁は、紀元前二〇年、ヘロデ大王によって拡張されたエルサレム神殿の西の壁だ。ユダヤ教徒は、当時の痕跡が残るエルサレム神殿を想い、嘆いていることから「嘆きの壁」と言われている。

エルサレムは、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教という三大宗教の聖地だが、この岩の聖地を取り合うことが、二〇〇〇年近い争いの元になっていると言っても過言ではない。この岩のドームを見ていると、宗教の根っこにあるものは、石や岩といったアニミズム的な光景であるとも言える。

写真15　カンリンポチェ

写真16　アダムス・ピーク（スリーパーダ）

このように、石の聖地を比較してみると、複数の宗教がともに信仰する聖地では石や岩が信仰され続けていることがわかる。地球の基層文化である石文化は、生物多様性、鉱物多様性への理解、自然との共生・共存を学ぶために必要なものだ。石への想いは、人種・国境・時代を超えて、人類にとって普遍的であり共通するものなのだ。石の聖地は、古代から現代、そして未来をつなぐ重要な鍵をわれわれに提示している。

参考文献

野本寛一『石と日本人』樹石社、一九八二年
中沢厚『石にやどるもの』平凡社、一九八八年
鎌田東二『場所の記憶』岩波書店、一九九〇年
加藤碩一『石の俗称辞典』愛智出版、一九九九年
植島啓司『聖地の想像力』集英社新書、二〇〇〇年
須田郡司『日本石巡礼』日本経済新聞出版社、二〇〇八年
須田郡司『世界石巡礼』日本経済新聞出版社、二〇一一年
須田郡司『日本の聖なる石を訪ねて』祥伝社新書、二〇一一年

第三章

「象徴形式」としての一点透視遠近法

――「自然」概念の変遷を手掛りに

秋丸知貴
美術史家／
京都大学こころの未来研究センター共同研究員

はじめに

ヨーロッパでルネサンス期に成立した一点透視遠近法の精神的意味内容とは、一体何だろうか？

本稿は、美術史家エルヴィン・パノフスキーが「『象徴形式』としての遠近法」（一九二四年～一九二五年）[1]で提出したこの問題を、主に科学史家伊東俊太郎による自然概念史研究を手掛りに考察する。その際、特にパノフスキーがまだ十分に論じていなかった、一点透視遠近法における視点の「一点透視性」に注目する。

1 エルヴィン・パノフスキーについて

エルヴィン・パノフスキー（Erwin Panofsky：一八九二年～一九六八年）は、ドイツのハノーヴァーで生まれたユダヤ系の美術史家である。彼は一九二〇年以来ハンブルク大学で教えた後、一九三三年にナチス政権の樹立によりアメリカに亡命し、ニューヨーク大学教授及びプリンストン大学客員教授として活躍した、ヨーロッパの中世及びルネサンス美術研究の第一人者である。

パノフスキーは、ハンブルク大学時代に、当時ハンブルクにあったヴァールブルク文庫の創設者として有名な美術史家アビィ・ヴァールブルク（Aby Warburg：一八六六年～一九二九年）と交友を持ち、ヴァールブルクが創始した美術史研究の方法論である「イコノロジー（Iconology）」を確立したことでも知られている。[2]

ここで取り上げる「『象徴形式』としての遠近法」は、パノフスキーが三二歳の時に、ヴァールブルク文庫の紀要に一九二四年から翌年にかけて発表したものである。パノフスキーは、ハンブルク大学時代にヴァールブルク文庫を介して、同じくハンブルク大学の同僚であった哲学者エルンスト・カッシーラー（Ernst Cassirer：一八七四年～一九四五年）と親交を結んでおり、この論文の標題に含まれる「象徴形式」という概念も、当時『象徴形式の哲学』[3]を執筆中であったカッシーラーから借用したものであった。

遠近法は、価値の契機ではないとしても、それはやはり様式の契機ではあるのだし、さらにそれ以上のものでさえある。つまり、エルンスト・カッシーラーがみごとに造形した用語を美術史にも応用してみるなら、遠近法は、「精神的意味内容がそれによって具体的感性的記号に結びつけられ、この記号に内面的に同化されることになる」あの「象徴（シンボル）形式」の一つと呼ばれてもよいのである。[4]

なお、『象徴形式の哲学』の第一巻は一九二三年、第二巻は一九二五年、第三巻は一九二九年の発表である。

2 一点透視遠近法について

まず、パノフスキーはこの論文で、絵画における遠近法を広義と狭義に分けている。

広義の遠近法は、一点透視遠近法を含む全ての遠近感表現である。つまり、対象の遠近を、画面全体で統一された縮尺であるかどうかにかかわらず、対象の位置や大小等で表現する絵画技法である。パノフスキーはこの広義の遠近法を、G・E・レッシングを引用して、「われわれの眼からある距離のところに現われている対象を平面上に提示する学問」[5]と記述している。

図1　古代ギリシャの絵画　紀元前540年頃

この広義の遠近法は、時代や地域を問わず普遍的に見られるものであり、例えば古代ギリシャでも用いられていた（図1）。また、中世ヨーロッパの金地の背景等もこうした広義の遠近法の一つである（図2）。

一方、狭義の遠近法は一点透視遠近法である。すなわち、対象の遠近を、唯一つの消失点を基準とし、画面全体で統一された縮尺で、対象の位置や大小で表現する絵画技法である。パノフスキーはこの狭義の遠近法を、同じくレッシングを引用して、「多くの対象をそれらが占めている空間の一部とともに呈示する学、しかも空間のさまざまな面に散在しているこれらの対象がその空間もろとも、同じ一つの位置から見ている眼に映ずるであろう姿を呈示する学」[6]と叙述している。

この狭義の遠近法は、ルネサンス期のヨーロッパにおいてのみ発生した。代表例として、マザッチオの《聖三位一体》（一四二六年〜一四二八年頃）（図3）、ヤン・ファン・アイク《ドレスデンの聖母》（一四三七年頃）（図4）、レオナルド・ダ・ヴィンチ《最後の晩餐》（一四九五年〜一四九八年）（図5）等を挙げられる。

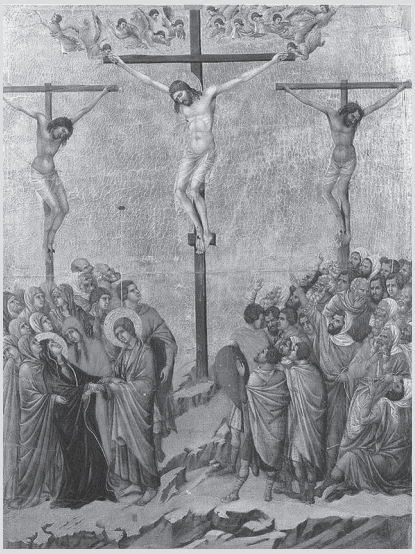


図2　ドウッチオ《磔刑図》
1308〜11年

この狭義の遠近法、つまり一点透視遠近法の特徴について、パノフスキーはまず窓の比喩を用いて、画面の透明性、すなわち支持体の物質性が意識されないことと述べている。またパノフスキーは、一点透視遠近法では、絵画空間が画面枠内で完結せずに、現実空間と地続きで広がっているかのような錯覚を抱かせると語っている。[7]

さらにパノフスキーは、この窓として見られた一点透視遠近法の画面を視覚のピラミッドの断面と見なし、全構造体の平面図と立面図を合成したものと考察している。つまり、唯一つの消失点により画面の奥行が決まれば、高さと幅も共通縮尺により決定でき、三次元性が確定されると分析している。そしてパノフスキーは、その唯一つの消失点は最も遠い奥行に、つまり無限の彼方である地平線上に置かれると説明している。その上で、この消失点が画面中央にあり、画面四隅への放射線角度が地平線から四五度である場合、絵画平面はその消失点と観者のちょうど真ん中に位置すると解説している。[8]

ここで注目すべきは、一点透視遠近法では唯一つの消失点が無限の彼方にあり、観者がその消失点と画面のちょうど正反対の位置、つまり世界の中心という特権的位置から画面を眺めている点である。

3 一点透視遠近法の正確性と不正確性

こうした「ルネサンス期に発見され」た一点透視遠近法は、近代に至るまで「正確」なものと見なされてきた。[9] なぜなら、現実の視覚に似ている上に、合理的で客観的な論理的法則性を持ち、万人に説明可能・実践可能だからである。

例えばパノフスキーは、比較対象として、古代ギリシャの遠近法は空間描写において「包括的統一性が欠けて」[10]おり、「まったく特有の不安定さと内的不整合という特徴をもっている」[11]と指摘している。つまり、古代ギリシャの遠近法では、個々の対象は触覚的・立体的に描かれてはいるけれども、それらの空間的位置関係を全体的に統一する唯一つの消失点は存在していない。パノフスキーによれば、「保存されている古代絵画のうちには、統一的消失点を有するような絵はただ一つとして確かめられていない」。[12]

これに対し、ルネサンス期の一点透視遠近法は、空間的位置関係を全体的に統一する唯一つの消失点を持つために安定さと内的整合を備えている。そして、「幅・奥行・高さのすべての値をまったく一定した割合で変えてゆき、そうすることによってそれぞれの対象に、その固有の容積と眼に対するその位置とに応じた見かけの大きさを一義的に確定する」[13]ことにより、画面は他の遠近感表現に比べて非常に正確で写実的に見える。

しかし、実は一点透視遠近法は決して正確な視覚表現ではない。少なくとも、ありのままの自然で生来的な視覚表現ではない。このことをパノフスキーは、「無限で連続的な等質的空間、つまりは純粋に数学的な空間の構造は、精神生理学的空間の構造とは正反対」[14]と表現している。

まずパノフスキーは、精神生理学的空間では基本的に無限の概念は存在しないと説く。なぜなら、知覚は初めから知覚能力の限界に、つまり知覚可能な空間範囲内に限定されているからである。またパノフスキーは、精神生理学的空間では基本的に等質性は存在しないと論じる。なぜなら、視覚にしても触覚にしても、位置や方向は生存との関わりにおいてその固有な価値を持ち、空間構成の主要な方向である前後、左右、上下などは価値において不等質だからである。[15]

図3　マザッチオ《聖三位一体》1426～28年頃

図4　ヤン・ファン・アイク《ドレスデンの聖母》1437年頃

図5　レオナルド・ダ・ヴィンチ《最後の晩餐》1495～98年

これに対しパノフスキーは、一点透視遠近法では、前述の通り、まず唯一つの消失点が地平線上に、つまり無限の彼方に置かれることを指摘する。また一点透視遠近法では、本質的に諸対象は位置関係以外の固有の自律的内容を持たない関数的存在であり実体的存在ではないので、画面全体は均質であると主張する。[16] パノフスキーは、これらにより、一点透視遠近法は、空間全体を有限の質的領域から無限の量的領域に変更していると強調している。[17]

さらにパノフスキーは、人間の眼は二つであり、その視点も常に動いているので、視点は不動の一点ではないと明察している。また人間の眼球は球体であり、網膜は湾曲しているので、網膜像は端に行くほど歪み膨らんで見えると洞察している。パノフスキーは、こうした視点の複数性や運動性や歪曲性を捨象している点でも、一点透視遠近法は必ずしも正確ではなく、精神生理学的空間とは異なっていると力説している。[18]

4 一点透視遠近法の成立条件

それでは、なぜルネサンス期のヨーロッパにおいてのみ、こうした一点透視遠近法が成立したのだろうか？

既に見たように、一点透視遠近法が成立するためには、世界は閉じて完結しているのではなく無限に開かれているという信念と、世界のあらゆる事物は等質であるという信念が必要である。またそれらの信念は、本来の身体的な視点が複数で可動的であることを無視し、視野の湾曲も無視するだけの強いものでなければならない。

ここで着目すべきは、パノフスキーが空間観や世界観は、一方では絵画として現れ、一方では哲学として現れると暗示している問題である。[19] そしてパノフスキーは、一点透視遠近法の「獲得は、同じ時期に認識理論および自然哲学のがわで達成されたものの具体的表現にほかならない」[20]と喝破している。

具体的には、まずパノフスキーは、古代の遠近法は、「世界の全体はつねに、根本的に非連続なものにとどまっていた」[21]古代の空間理論と同一の精神的意味内容を共有していたと説いている。

例えば、古代ギリシャのアリストテレス（Aristotle：前三八四年～前三二二年）は、「個々の物の特殊な位置が、あるものの他のものに対する限界」を意味し、「量の領域への質の受容という、根本においてまったく非数学的な受容の仕方をする共通空間」を設定し、この共通空間を「もっとも外がわにある天球の究極の限界としてのみとらえ」ていた。つまり、このアリストテレスの空間論は、「古代の思考によってはまだ空間の具体的に体験可能な『諸性質』、特に『物体』と『非物体』の相違がひとつの『延長体（substance étendue）』という分母の上に据えられえなかったという事実を、特に明瞭に表現して」おり、「諸物体は、等質的で無限定な量的諸関係の体系に解消されるのではなく、ある限定された容器のなかでたがいに繋ぎ合わされた諸内容」であることを示している。[22]

これに対し、パノフスキーは、ルネサンス期の一点透視遠近法は、「集合空間から体系空間へ」[23]という近代の空間理論と同一の精神的意味内容を有していると論じている。

例えば、一七世紀のルネ・デカルト（René Descartes：一五九六年～一六五〇年）は、「普遍妥当的で数学的に基礎づけることのできる規則があ」る、「空間的に無限であるが、それにもかかわらず徹頭徹尾計量的な」世界を設定する。このデカルトの空間論は、「無限な拡がりをもった、矛盾をふくまぬ一義的な空間構造が構築され、そのなかで物体と、物体相互のあいだの空虚な間隔とが法則的に結合されて、『総体（コルプス・ゲネラリテル・スンプトウム）として捉えられた物体』」であることを示している。[24]

パノフスキーは、一点透視遠近法は、この「デカルト主義によって合理化され」る近代的空間観と同一の機能を有し、「精神生理学的空間を数学的空間へ移行させること」であり、「主観的なものの客観化」であると論述する。[25] そして、「遠近法の歴史は、距離を設定し客観化しようとする現実感覚の勝利だとも、距離を否定する人間の権力志向の勝利だともとらえられるし、外界を確定し体系化するものだとも、自我領域の拡張だともとらえられる」[26]と結論している。

5 「自然」概念の変遷

このように、パノフスキーの「『象徴形式』としての遠近法」は、ルネサンス期の一点透視遠近法と、一七世紀のデカルトに代表される近代ヨーロッパ的空間観に理念的共通性を見る点で画期的な研究であった。

しかし筆者は、パノフスキーのこの論文では、まだ一点透視遠近法の最も重要な「一点透視性」が十

分に論じられていないと考える。

そこで、次に改めて、一点透視遠近法の根底にある自然観を通じてこの「一点透視性」の問題を考察したい。ここではその手掛りとして、自然概念の変遷に関する最も的確な分析の一つである、伊東俊太郎（一九三〇年～）の先行研究を要約しつつ敷衍しよう。[27]

伊東によれば、森羅万象を一つの全体として統括する「自然」という概念が最初に生まれたのは、古代ギリシャである。それは「ピュシス（physis）」と呼ばれ、最初はそれ以前の古代オリエントと同じく個別の自然現象を指していたが、次第に自然現象一般も意味するようになる。この「ピュシス」は、自律的で内在的な生成・変化、固有の性状・力・秩序・原理、そして森羅万象一般を意味し、自ずから生まれ、育ち、衰え、滅ぶ、生命的存在全体を包括する概念であった。

ここで興味深いことは、この「ピュシス」には、狭義の「自然」のみならず、「神々」や「人間」も含まれていた問題である。つまり、「人間」は「自然」の一部であり、「神々」も「自然」に内在するとされていた。このことを伊東は、全体的な「生命」的「自然」に、「神々」も「人間」も全てが同質な「生まれを同じくするもの」として内包されているという意味で、「汎自然主義（パンピュシズム）」と呼んでいる。言い換えれば、これは汎神論的自然観ということであり、実際に古代ギリシャの宗教形態が「人間」味溢れる「オリュンポス十二神」に象徴される「多神教」信仰であったことはよく知られている。

この「古代ギリシャの自然観」を体系化したのが、アリストテレスである。まずアリストテレスは、『形而上学』第五巻第四章で、「第一義的な主要な意味で自然と言われるのは、各々の事物のうちに、それ自体として、その運動の原理を内在させているところのその当の事物の実体のことである」[28]と定義している。またアリストテレスは、『自然学』第二巻第一章でも、「自然」を事物に内在する「運動の原理・原因」とし、「それ自身のうちに運動の原理を持つもの」として、「地」「水」「空気」「火」や、「植物」「動物」「人間」などを挙げている。

さらにアリストテレスは、そうした運動に関わる「始動因」のみならず、「質料因」「形相因」「目的因」の「四原因」全てを、その事物の「自然」と見なしている。そしてアリストテレスは、「自然」は、「自然に従って存在するものや自然的なものを意味する」とし、やはり自然物全体も「自然」と捉えている。[29]

ここで注意すべきは、このアリストテレスの「運動（キーネーシス）」は、単なる物理的「位置」の移動だけではなく、「実体」の誕生・消滅、「質」の生成・変化、「量」の増大・減少など、自律的で内在的な変化の要素も含んでいる問題である。つまり、ここでも「自然」は、有機的原理を内包する「生命」的「自然」として把握されている。

また、このアリストテレスの「運動」は、事物が自らの「目的（テロス）」としての「形相（エイドス）」の実現を目指す、「可能態（デュナミス）」から「現実態（エネルゲイア）」への移行と定義されている。こうした「自然」に「目的」を見ることもまた、「自然」と「人間」を同質なものと見なし、「自然」に感情・意志等の「人間」的属性を直観することに他ならない。

さらにアリストテレスは、事物は全て、素材としての「質料（ヒュレー）」と、本質としての「形相」から成り、生命体は、「質料」としての「物体（ソーマ）」と、「形相」としての「霊魂（プシュケー）」から構成されるとしている。そして生命体の生命原理は、それ無しには生物が存在しえず（形相因）、そのために生物の諸部分が存在し（目的因）、それによって生物の諸活動が営まれる（始動因）という意味で、「物体」に全体的な秩序を与える「霊魂」であるとしている。

そしてアリストテレスは、「植物」「動物」「人間」は、それぞれ順に「栄養・生殖」「感覚・運動」「理性・思考」を機能とする「霊魂」を持ち、後者が前者を含む連続的秩序を有するとしている。つまり「人間」は、「自然」と対立するものではなく、複雑形態ではあってもあくまでも「自然」の内的部分である。

その上でアリストテレスは、他を動かし自らは動かぬ「不動の動者」としての「神々」を、「自然」の「運動」の究極の「目的」である「純粋形相」として、自然学体系の頂点に位置付けている。すなわち「神々」もまた、「秩序（コスモス）」の源泉としてあくまでも「自然」に内在している。

こうしたアリストテレスの目的論的・生気論的自然観こそが、古代ギリシャの集約的な自然観であった。換言すれば、古代ギリシャ人にとって「ピュシス」は、自ずから生成変化する「生命」的「自然」全体であり、「神々」や「人間」も含んだ一つの調和的統一体であった。

こうした古代ギリシャの「ピュシス」は、古代ローマに入ると、「ナートゥーラ（nātūra）」とラテン語訳される。この「ナートゥーラ」の語源は、「ナースコル（生まれる）」であり、「ピュシス」の語義はそのまま受け継がれる。つまり、この時点では「ナートゥー

ラ」もまた、「生命」的「自然」全体を指し、汎自然主義（パンピュシズム）はまだ保たれていた。

ところが、古代ローマの滅亡後にキリスト教による中世ヨーロッパが成立すると、この「ナートゥーラ」はそれまでの「自然」概念から大きく変質する。つまり、キリスト教の教義では、創造主としての唯一絶対「神」と、被造物は完全に分断されると共に、その被造物においても、神が個別に創造した「人間」と「自然」は完全に分断される。そして、「神」と「人間」と「自然」が互いに異質なものと規定されることにより、従来の汎自然主義（パンピュシズム）的な世界全体の同質的一体性は崩壊する。これが、近代ヨーロッパの「ネイチャー（nature）」の原型である。

さらに、キリスト教の教義では、「神」の栄光を称えるための「人間」、「人間」の利益に奉仕するための「自然」という明確な役割分担が課される。従って、「神」を上位、「人間」を中位、「自然」を下位とする絶対的で断絶的な上下関係が確立される。その結果、「神」はもはや「自然」に内在などせずに、彼岸から此岸を監視する超越者となる。また「人間」は、もはや「自然」の一部などではなくなり、地上全ての主人となる。そして「自然」は、もはや何一つ「人間」的属性による類推を許さない、気心の知れぬ下僕となる。

ただし、中世ヨーロッパにおいては、まだ依然としてアリストテレス哲学の体系的厳密性の権威が強かった。また一二世紀には、いわゆる「一二世紀ルネサンス」によりアリストテレス等の文献がアラビア世界から多数流入した。[30]そのため、キリスト教の一神教的・階層的自然観と、アリストテレスの目的論的・生気論的自然観を折衷することが目指される。アリストテレスの「自然」の生命原理である「霊魂」を「実体形相」と翻案し、この折衷を「スコラ学」として大成したのが、一三世紀のトマス・アクィナス（Thomas Aquinas：一二二五年頃〜一二七四年）である。

一四世紀から一六世紀のルネサンス期に入ると、中世ヨーロッパのアリストテレス＝スコラ学的自然観は大きく動揺する。なぜなら、十字軍遠征等によるイスラム文明との大規模な接触により、そこで継承されていた古代ギリシャ・ローマ文芸の復興運動、すなわち「ルネサンス」が盛んになると共に、一四四〇年頃のヨハネス・グーテンベルク（Johannes Gutenberg：一三九八年頃〜一四六八年）による活版印刷術の開発により、それらの古典文献が広く大量に普及したからである。

さらに、ルネサンス期には、「科学」と「技術」が結合する契機が生じる。なぜなら、イタリアを中心とする自由都市では、商工業の発達につれて中産階級を中心とする市民社会が勃興し、従来「学者」と「職人」を分け隔てていた階級的障壁が取り除かれ、「学者」の論理的な数学的理論と、「職人」の実証的な技術的実践が接近する道が開かれたからである。[31]

そして一七世紀に入ると、それまでアリストテレス自然学に従属していたキリスト教本来の自然観が独立的に台頭する。その特徴は「機械論」と「自然支配」であり、その両者の典型をルネ・デカルトの主客分離的認識論に見出せる。

前述の通り、キリスト教において「自然」は、「神」が「人間」とは別個に創造した異物である。この「自然」の「非人間性」が強調されると、「自然」からは「人間」的属性としての感情や意志、つまり「生命原理」や「目的意識」、換言すればアリストテレスの「霊魂」や、それを翻案したスコラ学の「実体形相」が消去される。

このブレーズ・パスカル（Blaise Pascal：一六二三年〜一六六二年）の言う「大いなる牧神（パン）の死」[32]により、ニコライ・ベルジャーエフ（Nikolai Berdyaev：一八七四年〜一九四八年）が指摘するように、自律的で内在的に生成変化する「生きた有機的自然」は、他律的で決定論的な機械仕掛けの「死んだ無機的自然」に変貌する。

ここにおいて、事物は全て、「人間」的要素である「色」や「匂い」等の「第二性質」を捨象されると共に、「自然」固有の属性である「形」「大きさ」「運動」等の「第一性質」だけに抽象され、一様な幾何学的「延長（extensio）」として把握される。すなわち、「自然」の「生命」的な「質」は無視され、「数学」的対象としての「量」だけが扱われるようになる。

さらにこうした「延長」は、明晰判明な「要素」に分解され、抽象的・定量的に因果関係を分析される。こうした「解析幾何学」に通じるデカルトの数学的・機械論的自然観は、「普遍数学」の構想の下に、天体、地球、地上の諸事物、人間の順に、「自然」全体に適用される。事実デカルトは、『哲学原理』（一六四四年）第二部で、「自然学においては、幾何学におけるとは違った原理を容認もしないし、望ましいとも思わない」[33]と明言している。

この「物質」からの「精神」の除去と並行して、「精神」からの「物質」の排除、つまり「心身分離」も進行する。すなわち、「人間」もまた、「生命」的内実を欠いた単なる理性的な思考能力として、冷たく純粋

な「思惟（cogitatio）」に還元される。実際にデカルトは、『省察』（一六四一年）で、「精神を物体から分離すること」[34]を奨励している。

この「思惟」は、「我思う、ゆえに我あり」[35]に象徴されるように、合理的に「思う（考える）」だけで、何一つ情緒的に「感じる」ことのない、幾何学的「延長」から物理法則を数学的に「演繹」するだけの抽象的な計算的理性である。その一方で、「動物」ばかりか「人間」の肉体さえも、「思惟」とは独立した単なる物質的な「機械」と見なされることになる。現にデカルトは、『人間論』（一六六四年）冒頭で、「私は、身体を、神が意図してわれわれにできる限り似るように形づくった土（元素）の像あるいは機械にほかならないと想定する」[36]と明記している。

こうして、「延長」と「思惟」の両方から人間的・生命的要素が脱落するにつれて、「客体」と「主体」の明確な二元論的分離が完成する。ここに、マルティン・ハイデガー（Martin Heidegger：一八八九年～一九七六年）の言う「世界像の時代」が開幕することになる。[37]

さらにデカルトは、アリストテレス的「観照」を敬遠し、滑車・テコ・斜面などの職人の「機械的技術」を賞賛している。

これに関連して、デカルトの「機械論」には、当時登場したばかりの精密な「機械時計」の影響が指摘されている。事実デカルトは、『方法叙説』（一六三七年）第五部で、心臓と血液の運動を機械論的に説明した後で、「私が今説明した運動は、あたかも時計の運動が分銅と歯車の力、位置および形から結果するのと同じように、心臓のなかで目に見ることのできる器官の配置から必然的に結果するのである」と触れている。[38]

これに加えて、デカルトは「自然支配」を称揚している。実際にデカルトは、『方法叙説』第六部で、「これらの一般的知見は、生活に極めて有用である知識に到達することが可能であり、また学校で教えているあの思弁的哲学に代って、一つの実践的哲学を見出すことを、私に理解させた。この哲学によって我々は、火、水、空気、星、天、その他我々をとりまくすべての物体と力と働きを、ちょうど職人たちのいろいろな技能を知るようにはっきりと知ることによって、それらの物体をそれぞれに固有なあらゆる用途に職人たちと同じように用い、かくして我々を自然の主人にして所有者（maîtres et possesseurs de la Nature）たらしめることができよう〔傍点引用者〕[39]」と言及している。

このように、キリスト教の正統教義と極めて親縁的で整合的であることが、デカルトの数学的・機械論的自然観の肝要な点である。ちなみに、デカルト自身は時に誤解されるような反キリスト教徒では決してなく、むしろ敬虔なキリスト教徒として、その著作で、万人に与えられている理性や慣性等の自然の運動法則は神によって計画され賦与されたものであると告げていることを付言しておきたい。

6 一点透視遠近法と一神教的キリスト教

伊東による「自然」概念の比較研究の最も重要な点は、近代ヨーロッパの自然観が、正統なキリスト教の自然観に基づき、正統なキリスト教エートスと結び付いていることを指摘した点である。このことを基礎に、次に改めてパノフスキーが十分に論じていない一点透視遠近法の「一点透視性」について考察しよう。[40]

まず、個々の対象に即して複数の焦点を持つ古代ギリシャの遠近法は、世界全体を生命的存在と見る古代ギリシャの自然観と親和的である。これに対し、無限の彼方に収斂する近代ヨーロッパの一点透視遠近法は、正に唯一絶対の超越神を信仰するキリスト教の自然観と親和的である。つまり、無限の彼方に収斂する唯一つの消失点は、世界を超越し、彼岸から此岸を監視する唯一絶対の大文字の神の存在を直観させずにはいない。

また、一点透視遠近法は次のようにも捉えられる。キリスト教の自然観では、「理性」的存在である「神」は、自らに似せて「人間」に「理性」を与え、また「自然」を「理性」的に創造した。そうである以上、「人間」は自律的に「理性」を用いて「自然」を解読することが可能である。そうであれば、実生活上は神はいなくても何も不都合がないことになり、次第に「神」は理神論的に棚上げされ、究極的には無神論が到来することになる。そして「人間」は、「理性」を通じて唯一絶対の「神」の視点を踏襲し、地上の支配者として、自らに仕える「自然」を表象し、分析し、利用していくことになる。

つまり、いわゆる人間中心主義（ヒューマニズム）を標榜するルネサンス期において、唯一絶対神の似姿として理性を与えられた人間は、追放された神の玉座に座る。一点透視遠近法とは、正にこの近代ヨーロッパ的世界観を象徴化したものに他ならない。[41]要約すれば、一神

教的キリスト教文明に成立した、「主体」的自我を持つ理性的個人が機械論的自然を「客体」として睥睨するときの合理的・数学的精神態度が、絵画表現における「一点透視遠近法」の本来の精神的意味内容である。[42]

なお、ルネサンス期における一点透視遠近法が、一七世紀のデカルト哲学よりも早く成立したのは、ハーバート・リードが『イコンとイデア』（一九五五年）で示唆するように、造形的「イコン」は言語的「イデア」に先行し、[43]またG・W・F・ヘーゲルが『法の哲学』（一八二一年）で教示するように、「ミネルヴァのふくろう」[44]である哲学的言語表現はその理論的体系化において、絵画的造形表現に時間的に遅れるためと考えられる。

もちろん、一口でキリスト教的自然観と言っても、神から委託された自然管理の権限をどの水準で捉えるかにより様相が異なり、また伊東が適切に注意を促すように、鳥と対話するアッシジの聖フランチェスコのような例もあるので一概に単純化はできない。しかし、本稿では限られた紙数で論点を明確にするために敢えて問題を図式化し、また関連する他の様々な重要主題、例えばデカルトの同時代人であるフランシス・ベーコン（Francis Bacon：一五六一年～一六二六年）の自然観における「自然支配」の問題等についても割愛せざるを得なかったことを付記しておきたい。

おわりに

最後に強調しておくが、本稿はこうしたキリスト教的自然観に基づく、ルネサンス期の一点透視遠近法や、デカルトに代表される近代ヨーロッパ的世界観を、悪役として一方的に断罪する立場には立たない。これらはいずれも、一四世紀以降続発する黒死病により壊滅的被害を受けたヨーロッパを何とか復興させようとする実存的奮起という側面を持っていたと推定されるからである。例えば、農業や医療の進歩一つを取ってみても、近代ヨーロッパ文明がその後の人類全体にもたらした物質的繁栄の恩恵は決して否定されるべきではないだろう。

しかし懸念すべきは、現在ではそうした人間中心主義的な近代ヨーロッパ的自然観・世界観が、かえって公害・環境破壊や人間性喪失等の人類規模の致命的な諸問題を発生させている現実である。その観点から、自然観・世界観の具体的表象、すなわち「象徴形式」としての一点透視遠近法の精神的意味内容の解読を通じて近代ヨーロッパ文明の本質を考察することは、決して少なくない重要性を持っているように思われる。[45]

注

1　Erwin Panofsky, «Die Perspektive als 'symbolische Form'» (1924–25), in *Aufsätze zu Grundfragen der Kunstwissenschaft*, Berlin, 1985; Erwin Panofsky, *Perspective as Symbolic Form*, translated by Christopher S. Wood, New York, 1997.

邦訳、E・パノフスキー『〈象徴形式〉としての遠近法』木田元監訳、川戸れい子・上村清雄訳、哲学書房、一九九三年。エルヴィーン・パノフスキー『「象徴形式」としての透視図法』『芸術学の根本問題』細井雄介訳、中央公論美術出版、一九九四年。E・パノフスキー『〈象徴形式〉としての遠近法』木田元監訳、川戸れい子・上村清雄訳、哲学書房（哲学選書）、二〇〇三年。E・パノフスキー『〈象徴形式〉としての遠近法』木田元監訳、川戸れい子・上村清雄訳、筑摩書房（ちくま学芸文庫）、二〇〇九年。本稿の引用は全て、哲学書房の一九九三年版による。

2　Erwin Panofsky, *Studies in Iconology: Humanistic Themes in the Art of the Renaissance*, Oxford University Press, 1939. 邦訳、E・パノフスキー『イコノロジー研究（上・下）』浅野徹・阿天坊耀・塚田孝雄・永澤峻・福部信敏訳、筑摩書房（ちくま学芸文庫）、二〇〇二年。

3　Ernst Cassirer, *Die Philosophie der symbolischen Formen*, 3 Bde., Berlin, 1923-29. 邦訳、カッシーラー『シンボル形式の哲学（全四巻）』木田元・生松敬三・村岡晋一訳、岩波書店（岩波文庫）、一九八九～一九九七年。

4　『〈象徴形式〉としての遠近法』哲学書房、一九九三年、二七頁。

5　同前、七八頁。
6　同前、七九頁。
7　同前、七九頁。
8　同前、九－一一頁。
9　同前、九頁。
10　同前、三〇頁。
11　同前、二六頁。
12　同前、二三頁。
13　同前、二六頁。
14　同前、一一頁。
15　同前、一一－一二頁。
16　同前、一一－一二頁。
17　同前、一二頁。
18　同前、一三－一七頁。
19　同前、一三頁。
20　同前、六二頁。
21　同前、三二頁。
22　同前、三二－三三頁。
23　同前、六一－六二頁。
24　同前、六一－六三頁。
25　同前、六三－六四頁。
26　同前、六七頁。
27　伊東俊太郎『伊東俊太郎著作集（全一二巻）』麗澤大学出

版会、二〇〇八年〜二〇一〇年。自然概念史研究については、特に次の二著も参照。伊東俊太郎『一語の辞典　自然』三省堂、一九九九年。伊東俊太郎『文明と自然――対立から統合へ』刀水書房、二〇〇二年。

28　伊東『文明と自然』一五一頁に引用。

29　同前、一五一頁に引用。

30　特に、伊東俊太郎『近代科学の源流』中央公論社、一九七八年や、伊東俊太郎『十二世紀ルネサンス』講談社（講談社学術文庫）、二〇〇六年等を参照。

31　特に、伊東俊太郎『文明における科学』勁草書房、一九七六年の第四章「イタリア・ルネサンスと近代西欧科学」等を参照。

32　Nikolai Aleksandrovich Berdyaev, *Der Sinn der Geschichte*, 1925. 邦訳、ベルジャーエフ『歴史の意味』氷上英廣訳、白水社、一九九八年、一四〇頁。

33　伊東『文明と自然』一六八頁に引用。

34　伊東俊太郎「近代科学の思想的基盤」『科学と現実』中公叢書、一九八一年、一四一頁等を参照。

35　伊東『文明と自然』一七〇頁に引用。

36　伊東俊太郎「比較科学史のなかの近代科学」『比較文明と日本』中公叢書、一九九〇年、三〇三頁に引用。

37　Martin Heidegger, *Die Zeit des Weltbildes*, 1938. 邦訳、マルティン・ハイデッガー『世界像の時代』桑木務訳、理想社、一九六二年。

38　伊東『文明と自然』一六八頁に引用。

39　伊東『文明と自然』一七〇−一七一頁に引用。

40　一点透視遠近法の精神的意味内容に主客分離を見る研究は際限ないが、筆者が特に影響を受けた文献として次の三著を挙げておきたい。小野紀明『精神史としての政治思想史――近代的政治思想成立の認識論的基礎』行人社、一九八八年。佐藤康邦『新装版　絵画空間の哲学』三元社、一九九七年。服部英二『文明間の対話』麗澤大学出版会、二〇〇三年。また、一点透視遠近法と一神教的キリスト教の関係については、一九七二年に日本文化会議が主催した東西文化比較研究第三回セミナー「日本美は可能か――美意識と倫理」における高階秀爾の発言にも大きな示唆を受けた。日本文化会議編『東西文化比較研究　日本美は可能か――美意識と倫理』研究社、一九七三年。なお、本稿の新知見は、これらの先行研究を受けて、一点透視遠近法の「一点透視性」自体の精神的意味内容にキリスト教の一神教的自然観をより具体的に読解した点である。

41　これに関連して、パノフスキーは次のように論評している。「遠近法的な空間観は、実体を現象（ウーシア　ファイノメノン）に変えることによって、神的なものを単なる人間の意識内容に切り縮めるように見えるが、しかしその見返りに逆に、人間の意識を神的なものの容器にまで広げもする」（『〈象徴形式〉としての遠近法』哲学書房、一九九三年、七四頁）。

42　本稿の議論を前提とする西洋近代美術における一点透視遠近法の崩壊の問題については、次の拙稿を参照。秋丸知貴「『象徴形式』としてのキュビスム――一点透視遠近法的世界観から世界同時性的世界観へ」『比較文明』第二七号、比較文明学会、二〇一一年、一三五−一五六頁。

43　ハーバート・リード『イコンとイデア』宇佐見英治訳、みすず書房、一九五七年。

44　ヘーゲル「法の哲学」藤野渉・赤澤正敏訳、『世界の名著三五　ヘーゲル』岩崎武雄責任編集、中央公論社、一九六七年、一七四頁。

45　マックス・ヴェーバー（Max Weber：一八六四年〜一九二〇年）は、『宗教社会学論集』（一九二〇年）の序言で、なぜ近代ヨーロッパにおいてのみ普遍妥当性をもつ「科学」が成立したのかを問い、それとの関連で、一点透視遠近法の成立の問題に論及している。「近代ヨーロッパの文化世界に生を享けた者が普遍史的な諸問題を取扱おうとするばあい、彼は必然的に、そしてそれは当をえたことでもあるが、次のような問題の立て方をするであろう。いったい、どのような諸事情の連鎖が存在したために、他ならぬ西洋という地盤において、またそこにおいてのみ、普遍的な意義と妥当性をもつような発展傾向をとる文化的諸現象――少なくともわれわれはそう考えたがるのだが――が姿を現わすことになったのか、と。今日、われわれが『普遍妥当的』だと認めるような発展段階にまで到達している『科学』なるものは、西洋だけにしか存在しない。〔…〕同様にまた、ルネサンス期の西洋でなしとげられたドーム問題の解決や、全芸術のあのような――絵画ならば線および空間の遠近法の合理的な利用にみられる――『古典的』な合理化も、その技術的基礎はそもそもオリエントから借りてきたものだとはいえ、他ではみられないものであった」（マックス・ヴェーバー「宗教社会学論集　序言」『宗教社会学論選』大塚久雄・生松敬三訳、みすず書房、一九七二年、七−八頁）。既に広く知られているように、こうしたヴェーバーに窺われる近代ヨーロッパ文明の科学技術による自然支配への問題意識には、恐らくフリードリヒ・ニーチェ（Friedrich Nietzsche：一八四四年〜一九〇〇年）の思想的影響がある。そして、発表時期を考慮すれば、このヴェーバーの問題提起に対するドイツ語圏における美術史学的反応が、パノフスキーの「『象徴形式』としての遠近法」（一九二四年〜一九二五年）であったと想定できる。さらに、同様の思想的問題圏に、同時代のカッシーラーの『象徴形式の哲学』（一九二三年〜一九二九年）及び実体概念から関数概念への認識問題研究や、ベルジャーエフの『歴史の意味』（一九二五年）や、ハイデガーの『存在と時間』（一九二七年）等が位置していたと推定できる。

付記

本稿は、二〇一一年一一月二〇日に中央大学で開催された、比較文明学会第二九回大会で口頭発表した原稿を加筆修正したものです。

なお本稿は、筆者が連携研究員として研究代表を務めた、二〇一〇〜二〇一一年度京都大学こころの未来研究センター連携研究プロジェクト「近代技術的環境における心性の変容の図像解釈学的研究」の研究成果と連動します。同研究プロジェクトの概要は、次の拙稿をご参照下さい。秋丸知貴「近代技術的環境における心性の変容の図像解釈学的研究」『こころの未来』第五号、京都大学こころの未来研究センター、二〇一〇年、一四−一五頁。(http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/jp/kokoronomirai/pdf/vol5/Kokoro_no_mirai_5_02_02.pdf)

第一章

京都大学シンポジウムシリーズ「大震災後を考える」
――安全・安心な輝ける国作りを目指してⅣ「大震災後の『心のケア』を考える」

災害と宗教と「心のケア」――東日本大震災 現場からの報告と討議

島薗進
東京大学大学院教授・宗教学

玄侑宗久
福島県三春町福聚寺住職・作家

稲場圭信
大阪大学准教授・宗教社会学

金子昭
天理大学教授・倫理学

河合俊雄
京都大学こころの未来研究センター教授・臨床心理学

内田由紀子
京都大学こころの未来研究センター准教授・文化心理学

鎌田東二
京都大学こころの未来研究センター教授・宗教哲学／司会進行

開催に当たって

鎌田東二

1 「災害と宗教と『心のケア』」シンポジウム開催趣旨・概要

こころの未来研究センターでは、東日本大震災後、研究プロジェクトとして「こころの再生に向けて」と題する震災関連プロジェクトを立ち上げ、主に、宗教学・民俗学・社会心理学・文化心理学のアプローチから「こころの再生」に向けての取り組みを行っています。その研究活動の一環として、本シンポジウムでは、「震災後の宗教の動向と『心のケア』」をテーマとして、それぞれの現場で活動されている本プロジェクトの連携研究員の報告と問題提起を踏まえて討議していきます。

具体的には、連携研究員の鈴木岩弓東北大学教授が事務局長を務める「心の相談室」、島薗進東京大学教授が代表の「宗教者災害支援連絡会」、禅僧で作家の玄侑宗久氏が委員を務める「復興構想会議」、稲場圭信大阪大学准教授が共同代表の「宗教者災害救援ネットワーク」、金子昭天理大学教授が関係する新宗教や事務局長を務める「支縁のまちネットワーク」の被災地支援活動などの報告と問題提起を、こころの未来研究センターの河合俊雄教授と内田由紀子准教授が臨床心理学と文化心理学の観点からコメントしつつ、宗教や民俗や文化と「心のケア」の諸問題について考えていきます。

2 シンポジウム・プログラムおよびタイムスケジュール

京都大学シンポジウムシリーズ「大震災後を考える」――安全・安心な輝ける国作りを目指して―Ⅳ　大震災後の「心のケア」を考える

災害と宗教と「こころのケア」――東日本大震災現場からの報告と討議

日　時：二〇一一年七月二〇日（水）一三時～一七時
開催場所：京都大学稲盛財団記念館三階大会議室（京都市左京区吉田下阿達町四六）
第一部：一三時～一五時
企画趣旨説明：鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター教授・宗教哲学）一〇分
基調報告1：島薗進（東京大学大学院人文社会系研究科教授・宗教学）
「『宗教者災害支援連絡会・情報交換会』の活動と課題」三〇分
基調報告2：玄侑宗久（福島県三春町福聚寺住職・作家）
「福島県での被災状況と被災地支援の現状および復興構想会議の報告」三〇分
事例報告1：稲場圭信（大阪大学准教授・社会学）
「『宗教者災害救援ネットワーク』の活動と課題」二〇分
事例報告2：金子昭（天理大学教授・倫理学）
「新宗教の災害支援活動の事例と課題」二〇分
第二部：一五時一五分～一七時
討議
指定討論者：河合俊雄（京都大学こころの未来研究センター教授・臨床心理学）一〇分
内田由紀子（京都大学こころの未来研究センター准教授・文化心理学）一〇分
主　催：京都大学こころの未来研究センター「東日本大震災関連プロジェクト～こころの再生に向けて～」

3 こころの未来研究センターの研究プロジェクト『東日本大震災関連プロジェクト――こころの再生に向けて』

この研究プロジェクトは、二〇一一年四月から二年間を目安に、鎌田と内田由紀子准教授が中心となって推進していきます。参考までに、こころの未来研究センターのHPに掲載してある「研究目的と研究計画」などを以下に貼り付けておきます。（HP：http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/jp/eqmirai/2011/06/post_5.html）

京都大学こころの未来研究センター担当：鎌田東二・内田由紀子
研究期間：平成二三年四月一日～平成二五年三月三一日

研究目的

平成二三年三月一一日、東日本大震災という、未曾有の事態が発生した。地震・津波・原子力発電所の事故という三つの要素による複合的かつ甚大な影響をもたらす災害を経験したことで、日本における幸福感のあり方、社会関係のあり方は被災地ではもちろんのこと、その他の地域においても変化したと考えられる。

本研究プロジェクトでは、東日本大震災関連プロジェクトとして、宗教学・民俗学・社会心理学・文化心理学のアプローチから、こころの再生に向けての取り組みを行う。

宗教学・民俗学的アプローチとしては、「震災後の宗教の動向と世直しの思想と実践の研究」を研究題目とし、東北大学の鈴木岩弓氏が事務局長の「心の相談室」、島薗進氏が代表の「宗教者災害支援連絡会」、稲場圭信氏が共同代表の「宗教者災害救援ネットワーク」などとの連携を保ちながら、①伝統文化の心と体のワザ（瞑想・武道・気功など）を活用したメンタルヘルスケア、②伝統文化および民俗芸能・芸術、聖地文化・癒やし空間を活用した復興と再生、③脱原発社会の社会デザイン・世直しのありようを模索していく。その際、宗教的「世直し」思想と実践事例の解明とともに、二一世紀文明のあり方、その中での日本文明の位置とあり方、そこにおける伝統文化（祭り、芸能、芸道、宗教など）の継承と活かし方、自然と人間と文明との関係の中での「生態智」の再発見・再評価と再構築、聖地などの安らぎや浄化をもたらす「癒やし空間」の活かし方、などについて焦点を当てつつ考察していく。

研究計画

(a)「心の相談室」「宗教者災害支援連絡会」「宗教者災害救援ネットワーク」などの活動の追跡と連携
東日本大震災後の宗教者の災害支援活動について追跡調査し、整理する。

(b)伝統文化の心と体のワザ（瞑想・武道・気功など）を活用したメンタルヘルスケア
伝統文化の精神・身体技法の活用法を調査・整理し、必要に応じてネットワーク化する。

(c)伝統文化および民俗芸能・芸術、聖地文化・癒やし空間を活用した復興と再生
聖地文化を含む伝統文化や民俗芸能・芸術が被災地の復興にどのように関与するかを調査すると同時に、支援のあり方を実践的に探る。

(d)世直し思想と実践の解明
宗教的世直し思想と実践の歴史的事例の検証と、その現在形を探る。

〔連携研究員〕

島薗進（東京大学人文社会系研究科教授／宗教学・文学修士）
鈴木岩弓（東北大学文学研究科教授／宗教民俗学・文学修士）
玄侑宗久（臨済宗僧侶・作家）

金子昭（天理大学おやさと研究所教授／倫理学・博士〔文学〕）
稲場圭信（大阪大学人間科学研究科准教授／社会学・宗教学〔PhD. ロンドン大学〕）

4 宗教者の支援活動とこころの未来研究センターの取り組みの一端

①阪神・淡路大震災（一九九五年一月一七日）時との違い～宗教界が活発に支援活動に向けて動いている（宗教的活動：祈り・祭祀・修法・儀礼、傾聴ボランティアなど、物質的救援活動：物資輸送、泥出し、「まるごとのケア」など）。

②宗教者と宗教研究者と医療従事者との協力により、宮城県仙台市で「心の相談室」の活動が始まったこと（鈴木岩弓東北大学大学院文学研究科教授・宗教民俗学が事務局長）。宗教者と宗教研究者と医療関係者との三者間協力の仙台モデルの始まり。

③「宗教者災害支援連絡会」（島薗進氏が代表）が立ち上がったこと（島薗氏より報告）。

④政府の「復興構想会議」に宗教者であり被災者であり作家である玄侑宗久氏が委員として関与していること（玄侑氏より報告）。

⑤「宗教者災害救援ネットワーク」（稲場圭信氏と黒崎浩行氏が共同代表）が立ち上がり、インターネット上での情報の整理・統合・提供が行われていること（稲場氏より報告）。

鎌田東二氏

⑥伝統宗教ばかりでなく、新宗教諸団体の災害支援活動も活発に行われており、関西を中心にして震災前に立ち上がった宗教関係者間のボランティア活動組織「支縁のまちネットワーク」（金子昭氏が事務局長）が「支縁」活動を行っていること（金子氏より報告）。

こころの未来研究センターでは、日本箱庭療法学会・日本ユング心理学会震災対策合同ワーキンググループ委員長の河合俊雄教授が臨床心理学の立場から宮城県仙台市と石巻市を中心に現地視察し、「ケアする人のケア」や重点校へのカウンセラーの派遣などを進めている。また、内田由紀子准教授がソーシャルサポートやメディア報道の文化間比較などを行っている。

5 鎌田の「東日本大震災の被災地（宮城県・岩手県・青森県・福島県四県）の視察と一〇〇日慰霊祭（福島県相馬市）参加から

Ⓐ伝統宗教：神社

浪分神社（宮城県仙台市若林区）
鼻節神社（宮城県七ケ浜町）
鹽竈神社・志波彦神社（宮城県塩釜市）
葉山神社・石神社（宮城県石巻市雄勝町）
釣石神社（宮城県石巻市北上町）
紫神社（宮城県気仙沼市）
愛宕神社（岩手県野田村）

・**浪分神社**　創建は、貞観地震と津波被害に由来するという。平安時代の貞観一一年（八六九）に、大地震と大津波にみまわれた。その貞観津波の後に浪分神社が建てられたという。「仙台市若林区にあるわが家の近くに浪分神社という小さなお宮がある。数え切れないほど前を通っているのにここが発する警告を真摯に受け止めてこなかった。痛恨の思いでいる。八六九（貞観一一）年に東北を襲った巨大地震『貞観地震』の際、ここまで大津波が押し寄せたと伝わる。これより海側は津波の危険地帯―子孫にそう伝えようと、先人が神社を建てたに違いない」（『河北新報』）。

慶長年間（江戸時代初期）の地震と津波の後ここに稲荷神社が移築されて、名前を浪分神社と変更したという伝承もある。白馬にまたがった海神が大津波を南北に分けて鎮めたという伝説も伝わっている。地震・津波の警戒信号であり、「防災ランドマーク」になっている。先人たちの経験知が込められた「場所の記憶」と記念碑となっている。ツナミ・メモリアル。その経験知・伝承知を活かしきれなかった。浪分神社は、海岸線よりおよそ五キロほど西の内陸にある。そこからまっすぐ東に向かうと、堤防のような高さのある東沿岸道路にぶつかる。その道路の手前にも津波の痕が残っていたが、トンネルを抜けた途端、その光景に唖然とした。見渡すかぎりの平地に瓦礫の山が続いていた。

・**鼻節神社**　「鼻節」とは、「端」「切れ目」「境」、〝the edge of the world〟という意味。実際に、岬の突端に鼻節神社はある。縁起によれば、鼻節神社という名称は猿田彦大神の鼻が高くて節があったことにちなんでつけられたというが、「突端」という地形によるネーミングであると思われる。神社とは、「場所の記憶」にして記念碑やランドマークとしての性格があるので、神社の立地条件は祭神や神社名に反映している。例：分水点に立地する「水分（みくまり）神社」など。

・**葉山神社・石神社**　雄勝法印神楽は、古くは「大乗神楽」とか「山伏神楽」と称されて、修験者たちが一子相伝で伝えていた。雄勝町大浜の延喜式内社の石（いその）神社と葉山神社の千葉宮司家に伝わる『御神楽之大事』（元文四年・一七三九年）によって知られる。修験道は山形県の出羽三山信仰の拠点である羽黒修験道の系統。現

在伝承されている演目は、初矢、両天、三天、四天、岩戸開、魔王退治、道祖、日本武尊、蛭児、橋引、鬼門、荒神舞、宇賀玉、国譲、獅子など二八番。多くは『古事記』や『日本書紀』の神話伝承を題材にしたもの。石神社の磐座は、日本の神社信仰の原型的風景。祭神は「多岐津比売命」。タギツヒメ（湍津姫）とは、宗像大社の三柱の女神（たぎりひめ、たぎつひめ、いちきしまひめ）の中の一神で、宗像市大島の中津宮に祀られている女神であり、とりわけ海運漁業者の信仰が篤い。宗像の神の一神がこの磐座に降臨したとされる。昔、湖の巨岩が湾内を行く船の中から望見でき、ランドマークになっていたこともあるのかもしれない。それが道しるべともなり、精神的安定剤ともなり、海の神に護られているという思いを胸に漁労に従事していたのかもしれない。そして、大漁の際には真っ先にこの延喜式内社の由緒ある社に収穫物の魚を奉献した。そしてそこで、優美・勇壮なる雄勝法印神楽を舞った……。

・**釣石神社**　今回の地震と津波に際し、釣石神社の上まで駆け上がって命が助かった人がいた。この釣石は、一九七八年の宮城県沖地震にも耐えたことから「落ちない石」として知られるようになり、この正月には受験生ら約一万人の参拝客を集めた。人々の素朴な願望や安心を得るための身近な回路となる神社の民間信仰。それだけでなく、ランドマークになったり、災害時の緊急避難所となるなど、具体的で実用的な機能も果たしている。

・**愛宕神社**　東の海側は津波の壊滅的な被害を受けているが、西側の内陸寄りの平地にある神社の鳥居の一角から西は、まったく被害がない。仙台市若林区の「浪分神社」のように、この「愛宕神社」が「浪分け」の機能を果たしている。本殿の鎮座している高台は無事であり、そこに逃げ込んだ人たちはみな助かっただろう。京都造形芸術大学教授の地球科学者の原田憲一氏は、九州の災害多発地域の地質研究をして、災害多発地域にあっても神社が災害を免れていることが多いということを実証的に示している。神社には巨岩や巨木があることが多く、石神社や釣石神社の御神体がそうであるように、地震などでも崩れることなく、長期的に安定した「杜」を維持してきているところが多い。経験的に安定した地盤であり、その「鎮守の森」は生物多様性が保持されてきた生態学的センターであるために、いざという時の避難所にもなる。「災害」に対する伝統文化の拠点としての神社がもつメッセージ性とランドマーク性と警告はもっと注意されていい点である。

・**廃屋の屋根の上の松と木々**　岩手県久慈市の山間部の誰も住んではいないのだろう廃屋のような民家の茅葺の屋根が苔生していて、そこから大きい松が一本すっくと伸びている。その近くには数本の小さな松やそれ以外の植物も顔を出していた。土がなくても茅葺の屋根を土壌代わりにして生きている。生命というものは、生きるということは、このようなもの・ことなのだろうか。どこにあっても、どんな状況でも、どんな境遇でも、その状況や境遇を受け容れつつそこで生きる。今ここを生きる。ただ、それだけがある。それだけでよい。そんな、なんでもありかよ～、とでもいうような、少し拍子抜けするような、こわばりや緊張がほどけるような、けなげというのか、しぶといというのか、したたか・しなやかというのか、何といっていいか分からない「想定外」の開放がここにはあった。そして、強く思ったのだった。まだまだ探り当てていない「生態智」の血脈や鉱脈がある。あるに違いない。絶対に、在る。そんな、根拠のない確信とともに、私たちは東北自動車道をすっ飛ばして出発地点の仙台に向かっていた。

(B) 伝統宗教：寺院

宝鏡寺（宮城県気仙沼市、曹洞宗）
慈恩寺（岩手県陸前高田市、曹洞宗）

鎌田東二訪問先

施設名	県	住所	状態
浪分神社	宮城県	仙台市若林区霞目 2-15	無事
鼻節神社	宮城県	宮城郡七ヶ浜町花渕浜誰道 1	ほぼ無事
志波彦神社・鹽竈神社	宮城県	塩竈市一森山 1-1	灯籠８基が倒壊、１基が半壊、10 基が損傷、社務所壁が３カ所落下、石鳥居が傾斜、玉垣 75 カ所が倒壊、鉄製灯籠２基が倒壊、６カ所で石壁が突出、石段９カ所がずれ、石仏４カ所が傾斜、社務所内階段が傾斜。
立正佼成会石巻教会	宮城県	宮城県石巻市駅前北通り 3-10-30	インフラの状況：水道、電気、ガス、テレビ、固定電話・FAX などがストップ。次第に復旧。
葉山神社	宮城県	石巻市雄勝町大浜字大浜９	社殿全壊、末社・社務所・釣鐘堂流失、鳥居二基・灯籠・石碑倒壊。
石神社	宮城県	石巻市雄勝町大浜字石峯大久保山１	津波により流出。
釣石神社	宮城県	石巻市北上町十三浜字追波 305	社務所流出全壊
宝鏡寺	宮城県	気仙沼市川原崎 31	無事
金光教気仙沼教会	宮城県	宮城県気仙沼市南町１丁目 2-15	無事・救済拠点・避難所
紫神社	宮城県	気仙沼市浜見山 1-1	避難所 200 人
慈恩寺	岩手県	陸前高田市広田町字泊 53	避難者数 500 人（2011/4/22）、536 人（2011/5/10）
愛宕神社	岩手県	九戸郡野田村 26-35	無事
相馬中村神社	福島県	相馬市中村字北町 140-141	社務所の授与所内が散乱、石灯籠倒壊。／神社隣の長友公園で６月 18 日、「東日本大復興祈願並び犠牲者慰霊大採燈祭」が行われた。

Ⓒ新宗教の教会

立正佼成会石巻教会（宮城県石巻市）

金光教気仙沼教会（宮城県気仙沼市）

（上記B・Cについては、こころの未来研究センターのHP：http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/jp/eqmirai/2011-5-20_TKamata.pdfを参照ください。）

＊一九九八年八月八日と一〇月一〇日に「神戸からの祈り」（淡路島および神戸メリケンパーク）「東京おひらきまつり」（鎌倉の大仏：高徳院）という復興祈願の祭りとアートフェスティバルを神戸と鎌倉で喜納昌吉氏（音楽家）、大重潤一郎氏（映画監督、当時神戸市在住）、池田雅之氏（早稲田大学社会科学部教授）たちとともに行った。その際、オープニングで、岩手県釜石市の民俗芸能「虎舞」を釜石市の若者に舞ってもらった。民俗芸能の力や絆を感じる機会となった。

東日本大復興祈願並びに犠牲者慰霊大採燈祭

二〇一一年六月一八日、福島県相馬市中村神社・長友公園にて開催。

導師・大先達：星野文紘。羽黒山伏二六名。

口上・鎮魂の調べ：鎌田東二、岡野弘幹。

6 関連プロジェクト「宮城県・七ケ宿――命のウツワ――プロジェクト」趣意書

無限の会代表　近藤髙弘氏

（陶芸・美術家、二〇〇八～二〇一〇年度こころの未来研究センター「こころとモノをつなぐワザの研究プロジェクト」共同研究員）

日本人は、古来より自然の中に神を見いだし、畏敬の念を持って生きてきました。

自然はわれわれに豊かな恵みをもたらす一方、時として大きな災害をももたらします。このたびの、東北の大震災や津波は予想をはるかにこえた規模となってしまいました。しかし、われわれは、これからも自然と共に生きていかなければなりません。

東北の山や森の美しさ、雄大さには、いつも感動を与えられます。福島県、山形県、宮城県の三県の山々にまたがる七ケ宿町は、まさに自然に育まれた場所です。私は、一九九八年から七ケ宿町の西山学院高校内に登り窯「無限窯」をプロデュースし、一三年間、毎年夏に地元で取れる土を使い、自生する松や間伐材で窯を焚くワークショップを行ってまいりました。現在は会員も増え、「無限の会」として活動しています。今回幸いにも、登り窯や一五〇年続いてきた茅葺の工房は大きな被害もなく無事でした。

そこで、この七ケ宿の土を使い、登り窯でウツワを焼き、土、木、水、風の息吹を吹き込んだ「命のウツワ」を、被災された方々に届けるプロジェクトを、下記のような組織でスタートさせたいと考えております。もちろん、私にできることには限界があります。今後、主旨に賛同を得られる国内外の作家に協力を得ることができれば、多くの被災者の方々へ、祈りの器、文化としての器、そして、そこに繋がる命のウツワをお届けできるのではと思っています。何卒、皆々様のご賛同、ご協力をお願い申し上げます。

プロジェクト推進組織

主　催：無限の会

共　催：宮城県七ケ宿町、西山学院高等学校

後　援：宮城県白石市、河北新聞社

協　力：モノ学・感覚価値研究会およびアート分科会、東京画廊、杜間道、情報工房、NPO法人「水守の郷・七ケ宿」、宮城県七ケ宿町滑津地区住民、京都大学ワザ学および震災関連研究プロジェクト

地元顧問：安藤俊威（七ケ宿安藤家一九代当主）、鈴木文雄（無限の会監事）

アート顧問：鎌田東二（宗教哲学者・モノ学感覚価値研究会代表・京都大学こころの未来研究センター教授）、みわみちこ（杜間道代表）、山本豊津（東京画廊代表・アートプロデューサー）

推進事務局：事務局長　氏家博昭（無限の会事務局長）、事務局　西山学院高等学校内　高橋悦子（宮城県刈田郡七ケ宿町矢立平）、アート関係事務局　東京画廊（東京都中央区銀座）

台風が日本列島を直撃する最中に本シンポジウムを開催することとなりました。これもまた時の運びと存じます。

最後に、本日のシンポジウムが「こころの未来」を構想し、きりひらいていく一つの歩みとなることを心から願っています。今後ともなにとぞよろしくお願い申し上げます。

二〇一一年七月二〇日　鎌田東二

第一部　基調報告　事例報告

企画趣旨説明

鎌田東二

はじめに

シンポジウム「災害と宗教と『心のケア』」を開催させていただきます。

通常ですと黙禱を捧げるところから始めるのですが、私はフリーランス神主としてさまざまな活動をさせていただいておりますので、追悼と鎮魂の思いを、法螺貝を

吹くことを通して表したいと思います。ご理解いただければと思います。（法螺貝演奏）

次に、開催趣旨をお話しさせていただきます。

こころの未来研究センターでは、「こころの再生に向けて」という東日本大震災に関わる研究プロジェクトをこの四月から立ち上げました。そのプロジェクトを踏まえて、本シンポジウムでは災害後の宗教の動向と心のケアの問題に焦点を当てながら、それぞれの現場で活動されている連携研究員の方々に報告していただき、それを踏まえてパネルディスカッションをしていきたいと思います。

現在、私が担当する研究プロジェクトの連携研究員は五名で、みなさんそれぞれの現場で活動されています。まず、被災地仙台の「心の相談室」の事務局長を務めている宗教学者の鈴木岩弓東北大学教授ですが、残念ながら今回は本務のお仕事のため参加されませんけれども、第二回目に参加していただきます。そして島薗進東京大学教授が代表を務めている「宗教者災害支援連絡会」、また禅僧で作家の玄侑宗久氏が委員を務めている「復興構想会議」、稲場圭信大阪大学准教授が共同代表を務めている「宗教者災害救援ネットワーク」、金子昭天理大学教授が関係している新宗教の活動、および事務局長を務めている「支縁のまちネットワーク」の状況、活動などをまず話していただき、問題提起をしていただきます。

それを踏まえて、こころの未来研究センターの臨床心理学、河合俊雄教授、また文化心理学からは内田由紀子准教授が、それぞれの立場からコメントし、またパネルディスカッションというかたちで進めていきます。タイムスケジュールについては、みなさまのお手元にある資料のとおりです。

こころの未来研究センターのこのプロジェクトは、どういう目的で、どういう計画を立てているかということについて、簡単に話をしていきます。

本研究プロジェクトは私と内田由紀子さんが中心になって進めているのですが、私の方は今日、第一回目の研究集会として、それぞれの連携研究員の報告をまずきちんと聞き、どこに問題があるのか、どんな特徴があるかを確認し、それをもとにこれから先の方向を考えていきたいと考えております。

私自身は、伝統文化の心と体のワザ、あるいは伝統芸能や聖地文化・癒やし空間などの活用の問題と、これからの先の脱原発ないし卒原発社会などの社会デザインをどう構想していくか、その際、宗教的「世直し」思想はどのような役割や社会ビジョンとなりうるか、いままでの事例を検討しつつ、これからのことを考えていきたいと考えております。

一方、内田由紀子准教授が進めようとしているのは、社会心理学や文化心理学からのアプローチです。若者の適応感・不適応感の研究や、ソーシャルサポートの問題などを中心に、メディアや報道のありよう、その文化差、文化間相違点などを取り上げて検討していきます。

さて今回、三月一一日に東日本大震災が起こりましたが、一六年前の阪神・淡路大震災と大きく違っていることがあります。被災の内容と規模が違っているということが、まずいちばん大きな違いです。同時に私たちの宗教研究の立場からすると、宗教界の活動が活発に支援活動に向けて動いていることも大きな違いとして見えてきます。ここには、社会的危機と危機認識が、この一五年、一六年で変わってきているという背景があると思います。

宗教的活動としては、祈りや祭祀や儀礼・修法、また傾聴ボランティアなどがいろいろなところで行われておりますし、物質的な救援活動も進んでおります。そういう中から、「まるごとのケア」というケアのありかたも提示されてきております。

鈴木岩弓東北大学教授が事務局長を務めている「心の相談室」の活動。これは宗教者と宗教研究者と医療従事者の三者の協力によってできています。これから先の社会連携、ソーシャルサポートの一つのモデルになっていく可能性を持った活動だと思います。

その「心の相談室」は活動の開始に当たって、五月二日に宮城県庁で記者会見をしました。そこで、医療の問題、メンタルヘルスの問題、生活の問題、宗教の問題をトータルにケアしていくという「心の相談室」の方向が語られました。これもまた一六年前と違う動きです。

それから、島薗進さんが代表となった「宗教者災害支援連絡会」のいち早い立ち上がり。そして稲場圭信さんたちの「宗教者災害救援ネットワーク」や金子昭さんたちの「支縁のまちネットワーク」の活動もいままでと違う新しい展開が見られます。

こころの未来研究センターでは、日本箱庭療法学会、日本ユング心理学会震災対策合同ワーキンググループの委員長に河合俊雄さんが就任して、ケアをする人のケアとか、いろいろ被災してきた重点校へのカウンセラーの派遣などを進めつつあります。また内田由紀子さんがソーシャルサポートやメディア報道の文化間比較などに取り組んでいます。私は何回かに分けて被災地四県を巡ってまいりました。

今日は、仏教については島薗さんと玄侑さん、新宗教については稲場さんと金子さんにそれぞれの角度から報告していただけると思いますので、私の方から被災地の神社について少し報告しておきたいと思います。

被災地の神社

宮城県と岩手県の浪分神社、鼻節神社、塩竈神社、葉山神社、釣石神社、愛宕神社などを巡ってまいりましたが、非常に印象に残ったのは浪分神社です。その名前に象徴されていますが、この神社そのものが大津波を経験して「浪分」という名前になり、さらにそこにさまざまな物語や伝説が付与されていきます。

ここまで波がやってきた。ここから先は危険なのだよという、防災ラウンドマークになっている神社が宮城県仙台市若林区にある。そこの東側と西側では被害が大きく異なっております。東側の方の海沿いは壊滅的な状況です。しかし、浪分神社よりも西はまったく無事です。

また被災地の中でも、もちろん津波に流された神社もあれば、流されなかった神社もあるのですが、たとえば宮城県気仙沼市の紫神社のように、高台にある神社はもちろん大丈夫で、そこが避難所になり、避難者や地域コミュニティの支えとなる機能を十分に果たしていました。

もう一つは、石巻市雄勝町ですが、二階建ての中央公民館の屋上にバスが漂着して止まっているほどの高波が押し寄せました。この地域には、国指定重要無形民俗文化財の雄勝法印神楽があります。しかし、その神楽の衣装も神社も流されてしまった。

その地区では、九十数パーセントの人が避難所生活をしているのですけれども、彼らがもう一回神楽を復興の礎、絆にしたいと動き始めた。来年、どういうかたちで神楽を奉納することができるか。これを地域の復興の兆しとして励みにしているということを聞いてきました。

その神楽保存会の会長さんは今なお行方不明です。そこで副会長さんにお会いして、いろいろとお話を聞いて、これから先大変だけれども、まず神楽を復興する中で地域復興を図っていきたいと語られていました。

雄勝町の少し北の石巻市北上町の釣石神社には、「釣石」と呼ばれる巨岩がありますが、この岩の上に人が逃げ登って助かった。その「釣石」にはたいへん興味深い民間信仰がありまして、落ちそうで落ちないので、受験生たちが今年の正月には一万人も来たそうです。おそらく来年はもっと多い二万人ぐらいの人が来るかもしれません。

こういう民間信仰の動きもたいへん重要で、見逃せません。ある一つの大きな出来事があると、そこで縁起を担いだり、さまざまな物語が語られたりして、それが広がっていって、その地域の安心や支えを生み出していく。ユーモラスなところも含めて、庶民的で強靭な生命力を持っている。こういう機能も今回非常に重要であると再認識しました。

浪分神社と同じように、岩手県野田村の愛宕神社でも、鳥居から先はほとんど被害がありません。けれども、鳥居の前の海側は壊滅的な被害があります。この神社の立地も総合的に考える必要があると思いました。災害を研究していく際に、たとえば巨大な岩がある、あるいは巨木があるということは、そこが地域的に百年、二百年、千年、二千年と、安定して維持されてきたという証拠でもあります。災害多発地域の中で神社やお寺が果たしてきたものはいったい何であったのか、という問いかけが必要だということです。

もう一つ、生きるということを深く考えさせられたのは、岩手県久慈市の山間部を走っていたときに見た、廃屋の茅葺の屋根の上に何本もの松が生えて育っている光景です。命というのは、どこでもしぶとく力強く生きていこうとする力があるのだ。そういう、どこでも生きていこうとする力を、これから先、われわれがどんな場面でも生み出していくことができるのか。クリエートしていくことができるのかが問われていると感じたのです。

もう一つ、被災地に伝承されてきた神楽や虎舞などの芸能が避難所などで舞われたりすることによって被災者への大きな励みになったということも、伝統文化の見直しという点で考えさせられるものがありました。

それから、震災後百日の節目に、福島県相馬市中村神社や長友公園で、山形県羽黒山伏たちの祈りが捧げられましたが、私はこれに参加して、東北一帯に根差している修験道、特に羽黒修験道の持っている底力、ネットワーク、つながりの強さにも重要なものがあると思いました。

私たちの研究プロジェクトの連携研究員の仲間に近藤高弘さんという造形美術家がいますが、宮城県と福島県の県境にある七ケ宿の登り窯で器を焼いて被災地に届けようという「命のウツワ・プロジェクト」を進めています。

このような、お茶碗などの物を通して思いを届け、心のケアにつなげていくやり方もあるし、瞑想やヨーガや気功や体操など、体を使って心のケアをしていくあり方もあると思います。そういう、さまざまな心のケアへの取り組みの中で、連携研究員の大重潤一郎監督の作った記録映画『久高オデッセイ』という映画の上映もやっていこうと計画中です。

そしてさらに、宗教本来の、祈りや祭りや儀礼や音楽や傾聴という取り組みがあります。こういうさまざまな角度やレベル、フェーズから、連携支援のありようを考えていくことが必要になってくると思います。

今日は、図らずも大型台風が列島を直撃する中で、災害に関するシンポジウムを開催することになりました。これからの時代はほんとうに何が起こるか分からない。想定外の出来事が起こる時代の中で、時代の大きな重い課題も困難もあるけれども、われわれが備えや覚悟をして生きていくことの必要性を強く感じております。

このシンポジウムが「こころの未来」を構想し、切り開いていく一つのきっかけになることを心から願っております。発表者の先生方、また今日参会くださったみなさま方、充実した時間を持ちたいと思いますので、ご協力よろしくお願いいたします。

続きまして、島薗進さんに基調報告をしていただきます。

基調報告1

「宗教者災害支援連絡会・情報交換会」の活動と課題

島薗進

宗教、宗派をこえて

みなさん、こんにちは。法螺貝を聞きまして、おなかの底に染みわたるような悲しみと同時に元気が出てくるような、そんな響きに私には聞こえます。そういうモチーフでお話をしたいと思います。

いまご紹介いただきましたように宗教者災害支援連絡会というものを始めたのですが、その経緯と背景、同時に少し個人的な指摘と言うか、私個人がどういうことをそこから引き出したいと思っているかという話をしたいと思います。

今回の災害では宗教が目立った。メディアは、だいたい宗教についてはスキャンダルの報道ばかりです。数十年間、とりわけオウム事件のときなどは典型的ですが、なかなか宗教本来のものが新聞の一面や社会面に現れることはないのですが、今回はそういうことがあった。

四月一日の『河北新報』ですが、たぶん若い僧侶の方が、いかにも僧侶らしい格好で登場している。いま鎌田さんの話にもあったように、津波被害の非常に悲惨な悲しい情景のもとで、こういう写真が出るということは、もうこれ以外にやれることがないといいますか、そういうことをよく表していると私は思います。読経をされているわけですが、祈りの姿を新聞も伝えたかったのでしょう。そういうことがしばしば現れました。

これは四月二八日ごろでしたか、『日刊スポーツ』というスポーツ紙まで、全国の真言宗の僧侶の方が、これも若手でしょう、福島県相馬市で四十九日の法要をやったということを取り上げております。こういうことがニュースになるのは、読み手も地元の方も注目しているし、何か心に響くものを感じているということだと思います。

実は私は三月一一日はイタリアにおりまして、本当は三月中ずっとベネチア大学で講義をする予定だったのですが、地元の方にお願いして、そのまま帰ってまいりました。どうしても帰らなければいけないという気がしたのです。

それはイタリアの方には迷惑をかけることもあったのですが、しかし非常に快く応じてくれました。そして、その後も支援のメッセージをよく送ってくださいました。そういうことから、イタリアでは宗教文化の占める場所がかなり大きいと私は感じました。

宗教者災害支援連絡会を始めました。四枚目のスライドに出ていると思うのですが、これは要するに、宗教の別、宗派の別をこえて、みんなで協力しようということで始めたわけです。

阪神大震災のときも宗教団体、宗教者はそれぞれ大いに活躍したわけです。しかし目立たなかった。目立たないということは、実際の活動のあり方も含めて、ちょっと有効性に限界があった。

その一つの大きな理由は、各宗派、各宗教団体がそれぞれ別々にやっていた。ということは、仲間内を中心にやっていたということです。一般の方のためにやっていても、なかなかそれが広く多くの方のために活動する方向には向かなかったという反省がありました。

それで、兵庫県立大学の岡田真美子先生という、日蓮宗のお寺の主婦であると同時に、非常に優れた現代仏教の社会活動についての研究をなさっている方やほかの方々と協力して、宗教研究者、仏教研究者の方々が最初に声を上げるという感じで、宗教界のさまざまな方たちに声をかけて、宗教者災害支援連絡会を始めました。

その意味は、お互いに宗教、宗派で違うこともたくさんあるでしょうが、それをこえてできることの方が大きいのではないだろうかということですね。いざというときには、自分の教えでなければ駄目だという、仏教固有のこれとか、何々宗これを、最後は阿弥陀仏とか、最後は禅でなければということもあるかもしれません。

そういうことが必要な方、必要なときもあるでしょう。しかし、もっと広く多くの方に共に受け取ってもらえるようなところに重きを置いた支援活動をしてはどうだろうかということでありました。

情報交換会の三つの領域

毎月、情報交換会を東京で開き、それぞれの支援の活動のご報告をいただいております。だいたい三つぐらいの領域を挙げております。

一つは、被災避難者の受け入れです。今回の宗教団体の支援の一つの特徴は、とにかく逃げてくる人を受け入れる場所になったということです。避難場所というと、学校の体育館などがすぐに出てくるわけです。行政としては、そういうところをまず準備するでしょう。

しかし多くの住民がまずお寺や神社に避難した。そういうふうに機能しました。物資の供給という面では神社が非常に大きかった。これは、もともと宗教というものにそういう働きがある。いざというときには人が逃げていけるような場所だということがあったと思うのです。

また原発の被害が広がっていきますと、福島の方は遠くへ逃げなければなりません。そういうときにも、宗教だからこそ避難者の受け入れに働けるのではないか。これが一つです。

それから、被災地支援。各宗教団体は非常に優れた支援活動の実績を持っている。それを横に、お互いの

情報を通じて助け合うことによって、もっと大きな活動ができるのではないだろうか。それが第二点です。

三番目は、心のケアです。心のケアというと、まず国、行政、学者は、臨床心理士、精神科医が活動すべきだということになります。今日は臨床心理の先生方が一緒におられますし、心理学と宗教関係が大いに協働できると思うのですが、これは行政的な発想では、どちらかと言うと、医学や心理学の世界だというふうに考えがちです。しかし、本当は宗教が大いに活躍できる場所ではないでしょうか。

宗教が心のケアに入ってくると、布教をしたり、自分たちの固有の教えを説いて、いわば仲間集めをしたりというふうになるのではないか、という一般の懸念がある。ですから、こういう布教を目指すのではない場合、宗教集団としてはどういうふうにすれば心のケアができるのだろうか。これが大きな問題になるということです。

そこで私は宗教集団ではなく宗教文化を通して心のケアを考えてみたいのです。私のみるところでは、仏教の根本には悲しみがある。心のケアというのは、もちろん普遍的な心理学の議論、あるいは精神医学の治療法に基づいてなされることもあるでしょう。しかし多くの方々が心の底から癒やされるというか、あるいは悲しみを自らのこととして受け止め、それをこえていくのは、どこかに文化の背景、宗教全般の背景というものがある。それを見いだしていくことが不可欠であろうと思っています。

島薗進氏

そこでまず日本の伝統を広く見たい。それは単に仏教だけではなくて、ほかの宗教にも分け持たれているし、おそらく西洋のキリスト教とか、世界の諸宗教にも分け持たれていると思いますが、とりあえず仏教を中心にして見ていきたいと思います。

仏教のキーワードといえば、たとえば無常というのがあります。無常は死と不可分であります。喪失、失うこと、その悲しみが基本にある。あるいは慈悲。人のために何かしてあげる、思いやるということですが、そこに「悲」という言葉が付いているのがとても重要なポイントだと思います。

たとえばキリスト教でしたら、それは愛の行為と言えるでしょう。しかし、compassion、つまり、共に苦しみ共に悲しむというのが仏教が言っていることです。そういうことは、日本人の気持ちの中には、ごく自然に入っているのではないかと思います。

また仏陀はなぜ仏道修行に入ったのか。普通の仏教の説明を読んでいると、よく分かりません。しかしまず、仏陀が生まれたときにお母さんが亡くなったということが、おそらく多くの仏教徒の頭の中にあったのではないか。実際、出家する多くの方は親が亡くなった。法然とか蓮如とか、多くの歴史上の僧侶もそうです。そういうことを考えると、仏教の基底に悲しみの心情があるという見方ができるわけです。

「いろはにほへと」はまさに無常の教えでありますが、それを通して悟りの道へ向かいましょうということが書いてあります。「うゐのおくやま　けふこえて　あさきゆめみし　ゑひもせず」。夢の中にまどろんでいる人生から目覚めて仏道修行に専念しましょうということです。

しかしそれは、この世から離れて修行の道にもっぱら向かうということのようでありますが、なかなかどうも日本の仏教はそうはならない。『白骨の御文』という、浄土真宗でよく読み上げられるような文書を見ましても、死をいつも意識して、それを基に阿弥陀仏への信心を起こしましょうということであります。

災害のことは後でまた述べるとして、私が述べたいのは、いま日本の悲しみの伝統、仏教の伝統を、どうやって災害の中で生かしていくか。心のケアが行われるにしても、何かそういう大きな文化的展望、われわれの宗教的自覚が背後になくてはならないだろう。そういうものを伝統の中に見ていきましょうということです。

小林一茶の悲しみ

悲しみをこえて、力を得ていく。日本人は、どういうふうにそれをやっていたのか。こういう大変な時にこそそういうものを見ていけたらいいなということで、これからはかなり私的な、私自身はたとえばこういう人に共鳴するという例であります。

小林一茶という俳人がおります。二〇〇年ぐらい前の方なのですが、この方は分かりやすい俳句を書いた。子どもにも分かるような俳句を書いたということで知られております。俗っぽい俳句。芭蕉のように旅に出て死を見つめながら、宇宙的な響きを俳句に映し出すというのに比べると、非常に卑近な生活の句をつくった人でありますが、実は一茶の句というのは悲しみに満ちているのであります。

彼は二歳のときにお母さんが亡くなりまして、継母が来ます。お父さんのところに後妻が来て、そのお母さんに子どもが生まれてしまった。おばあさんがずっと守ってくれたのですが、一四歳のときにおばあさんが亡くなったので、江戸に出て奉公した。それから十何年帰ってきませんでした。長野の北の柏原というところの、中越地震に近いあたりです。新潟との境を接しているようなところで、比較的豊かな農家でした。

当時、江戸へ出てきますと、人口百万人ぐらいあった

のか、たいへんな都市であります。男が多いですね。なんとか生き延びていかないといけない。しかしみんな、そういう思いで来て、あまり人口が増えない。男が多いので結婚できない。長屋の中で辛うじて暮らしている。

この人は薬屋などの奉公をした後、俳句で身を立てていくのですが、それはパトロンを得て、なんとか競争に勝って少しでも番付の中で自分の名前を上げていくという生活だったのです。ですので、そういう悲しい人生を生き抜いていった人だと思います。

こんなひがんでいるような句がたくさんある。「しょんぼりと雀にさへもまま子哉」、「なでしこや　まは木々の日陰花」。はは木というのは、灌木で、ほうきみたいな葉っぱの生え方をしているのですが、その前に「まま」を付けて、日陰花というのを「まは木」という言葉と重ねたりしています。「我と来て遊べや親のない雀」。次の句は四〇代になってつくったものなので、かなり洗練された表現になっています。「亡母（なきはは）や　海見る度に見る度に」。

その上に彼は、最もよく知られた『おらが春』というのを書いております。これは、実は子どもが生まれて、その子どもが死んでしまったのです。継母と異母妹と彼は争いをして遺産相続します。そして柏原へ帰りまして、土地を小作に出して、ようやく安定した暮らしができるようになる。そして、地元の俳人を集めて俳句を楽しんでいたわけです。ある意味では、ようやく著名な俳人として余生を楽しむというところまで這い上がってきた。

しかし、そこで結婚をして子どもが生まれるのですが、子どもが次々と死んでいくということが起こりました。妻も、また亡くなっていく。あるいは、後妻と離婚する。

有名な『おらが春』は、第二子で最初の女の子であった、さとが亡くなったときの話です。疱瘡にかかって死んでしまった。その悲しさを歌っているものです。

「這え笑へ二つになるぞけふからは」。一歳ちょっとで死んでしまうのですが、これはお正月ですので、二つというのはまだ、生まれてから半年ぐらいのときです。生後六カ月ぐらいで、数えの二歳になるわけです。そのときにこんな、いかにも手放しで喜んでいるような句をつくっていたわけです。

ところが、その「千代の小松の、二葉ばかりの笑ひ盛りになる緑り子を」と。これから命が見事に発展していく。松というと、さっきの鎌田さんの写真にも出てきましたが、生命力の印、長い命の印でもあります常緑樹。そういうふうになるはずの子どもが、疱瘡神に見舞われて、神送りをいたします。疱瘡神に出ていってくださいと神にお祀りしたにもかかわらず亡くなってしまった。

「母は死に顔にすがりて、よゝよゝと泣くもむべなるかな。この期に及んでは、行水のふたゝび帰らず、散花の梢にもどらぬくいごとなどあきらめ顔しても、思ひ切りがたきは、恩愛のきづな也けり」。

恩愛の絆というのは有為の世界ですね。それをこえて向こう側へ行く。これが仏教の建前と教えでしょう。悟りとは、そういうものだということになるでしょう。

しかし、そうは言えないよねと一茶はため息をつくわけです。「露の世は露の世ながらさりながら」。露の世というのは無常であるから、無常であることをつくづく悟ったならば、仏道の世界にすっかり入りましょう。しかしそういっても、この世に執着を持って、この世の絆の中で生きていくんだよという句です。

実は一茶はかなり熱心な仏教徒でありました。真宗の門徒であったと思います。しかし、彼はどこか冷めていて、おそらくお寺の説教どおりを信じる門徒ではなかった。これが「さりながら」というところに表れているし、この『おらが春』全体が仏道に強く深く引かれながら、それとは違う。だからこそ文芸を通して彼は自己を表現しているわけです。文芸の中でこそ仏教の本来の精神が表現できる。それは彼にとっては、もしかしたら、今風に言えば宗教でなくてもよい、仏道でなくてもよかったのではないだろうか。そういうものとして話しています。

フィリップ・フォレストという現代のフランスの作家がいます。文芸研究者だったのですが作家になった。そして、日本文学がたいへん好きで『さりながら』という小説を書いた。その作品には一茶や漱石が引かれているのですが、実は、この作家はお嬢さんが三歳のときに亡くなっている。そういうことがあって、つくづくと一茶の作品を愛した人でありました。

さとが亡くなって三五日でお墓に行ったようです。「秋風やむしりたがりし赤い花」。たぶん今日みたいなすごい風が吹いたのではないでしょうか。すると、その花をむしりたがるような風だというふうにいう。「露の玉つまんで見たるわらはかな」。本当に涙が出る。そして子どもの無心さというものが際立たされているものです。

来山とか落梧など、当時の他の俳人の俳句も『おらが春』の中に引かれております。来山も子どもが死んだのです。「愛子をうしなひて　春の夢気の違はぬがうらめしい」。

そういうことがあるでしょう。今度の災害でもあったでしょうし、さまざまな災害のときにも、せめて気が違ってくれたら、もう意識がなくなってしまったらという気持ちになる方がおられるのではないでしょうか。

「子におくれたるころ　似た顔もあれば出て見ん人踊」。ちょっと子どもが通ったりすると、亡くなってしまった自分の子どものことがふっと思われて、家の前の道に飛び出して確かめたくなってしまう。こんな非常に印象的な句が引かれております。

このあいだ、柏原に行ってきたのです。一茶のお宅が残っております。一茶が死んだ土蔵が残っています。一茶はそうやって次々に子どもが死んで、最後の奥さんが子どもをはらんでいるときに一茶本人が死んでしまった。ですから、自分の子どもを知らないままにいたのですが、その七代目の子孫の方がおられます。悲しみを乗り越えて次々と子どもを作り、最後に子孫が残ったのです。

悲しみをたたえながら、たくましく生きた俳人だった

と思います。そういう精神は、今後復興の中でたびたび思い起こされることではないだろうかと思います。

無常の思想は日本の文芸の中に深く流れているものですが、どっちかというと感情的な、情緒的なセンチメンタルなものに陥りがちであると批判したのが、唐木順三という人です。戦後さほど時を経ぬ頃に『無常』という本を書いています。

それに対して、いやいや、そうでもないんだよ。そういうことはみんなよく分かった上でたくましく生きていた。それは江戸時代に特に広がってくる「うき世」という観念に表れているのだという捉え方もできます。

これは、お坊さんで西洋哲学の専門家であった橋本峰雄先生が『「うき世」の思想』という本で実に印象的に書いております。「うき世」というのは、最初は「憂き世」だったのです。その方が仏教の教理に合う。しかし「浮き世」、浮かれるようになってきた。

つまり、すぐそこに死がある生をわれわれは生きているけれども、その中で楽しく浮かれて生きている。しかし、同時にそれは水の上を辛うじて浮いているような世を渡るといいますか、そういう危ういものなのだという意識が浮き世という言葉になる。一茶の俳句の世界からそんなことが思われます。

死者と共にいる感覚を取り戻す

いま申し上げたようなことは、われわれは伝統的な宗教や習俗によって悲しみを表現し、悲しみを受け止めてきた、そのあり方を顧みているつもりです。しかし、次第に伝統や習俗と距離が生じるようになってきた。この震災の前の時期に、そういうことが言われました。もう葬式は要らないという本が出て、よく売れました。そういう中で、仏教はずっと葬式仏教で来たのだけど、それでいいのだろうかという議論が行われていたのですね。

圭室諦成先生という方は、一九六三年に『葬式仏教』という本を書いた。この方は曹洞宗のお寺の出身の、たいへん優れた歴史学者ですが、圭室先生がこれを書いたのは、日本の仏教がお葬式の方へ流れてきたころでした。それはやや仏教の本流を外れたものですが、日本の仏教はそれをよりどころにして、新しい精神をそこに込めることによって、今後、本来の仏教精神を生かしていくべきだと論じていました。

それに対して、いま大阪の應典院でたいへん優れた宗教活動をしている秋田光彦さんの『葬式をしない寺』という本があります。秋田さんは、もともと葬式をするお寺があって、その横にもう一つお寺を建てて、そこではいろいろな社会活動をしている。あるいは、市民、住民のエネルギーを集めるような活動をされています。葬式仏教とは異なるタイプの寺のあり方を実験していて、大いに注目されている。ですので、圭室先生が抱いていたようなかたちでは、もうまくいかないんだなと、多くの人は感じている。

お寺には多くの宗派で御詠歌講というのがあります。東北のお寺は御詠歌講でたくさんの女性が出入りしていたのですけれども、いまはそれもどんどん減ってきている。昔のようなお盆の情景も薄れてきています。死者とやりとりをするイタコの口寄せ、亡くなった方と共にいるということが、ごく普通にあった時代もありました。しかし、今、イタコの後継者は見いだしにくいのです。

最近の冠婚葬祭の本を見ますと、親子三人で墓参りしている絵がよく出てきます。イタコの口寄せの代わりになっているかもしれないのは、グリーフ・カウンセリングというものです。悲しみを晴らす。死者と共にいるという感覚を取り戻すのに新しい文化が必要になっているということです。

死を迎える新しいやり方が編み出されています。ホスピスはその代表的な例です。イギリスで一九六七年に、ソンダース（Dame Cicely Mary Strode Saunders）という看護師だった人が医師になってホスピスを始めた。この精神の中には、キリスト教のチャプレン制だけでは、もう患者さんの要望に応えることができない。同時に、病気を治す医療では足りない。死を迎えるケアの施設が必要になってくる。医療に、そういう側面があるのだということを思い出しましょう。そして、それは超宗教でなくてはならない。そういう理念が背景にあります。

ところが、日本でこれをやろうと思うと、なかなかうまくいかない。キリスト教系のホスピスはたくさんあるけれど、日本の仏教もビハーラというのを唱えているけれど、なかなか増えていかない。日本ではどういうわけかチャプレン制度ができない。仏教系の病院というのもあまりない。

仏教は明治以降、困った人を助けるための活動をたいへん熱心にやってきたのです。にもかからわず、それが現代に続いていない。それは制度的にも問題があった。

いま、宗教者や宗教機関が震災の支援活動に関わろうとすると、行政が待ったをかける場面がしばしばある。それは、お国が全部取り仕切るという時代精神があったのが、こういうところにも響いていると思います。

最後に、大好きな宮沢賢治、鎌田さんと私の共通のアイドル宮沢賢治についてちょっとだけ話をして終わりにします。私は先ほどの一茶の精神と、もう一つ宮沢賢治の悲しみを思い出してみたいと思っています。

賢治の大いなる悲しみ

宮沢賢治は、詩の作品を見ても、とにかく悲しみに取りつかれている。なんでそんなに悲しまなければいけないの。いま、われわれは引きこもってしまい、死を考えたりする若者と付き合っていることが多いですが、賢治にもそれに通じるところがある。なんでそんなに自分を苦しめ、悲しまなければならないのだろう。あふれ出る悲しみと言っていいと思います。そういうものに彼も取りつかれていたと思います。

『春と修羅』。修羅というのは、いつも争っている存在です。で、水の底に沈んで、いつまでも晴れたものが見

えない世界にいる。そういう存在でありますが、自分がそういうものだと常に思っていた。まことに印象的な詩句ですが、修羅としての苦しみは、若者でエネルギーが余って、自分を責めてしまったのだなと、心理学的にはそういうことになるかもしれません。

しかしそれは、彼にとっては実は大いなる悲しみだったのだと捉えられると思います。というか、あなたの悲しみを大いなる悲しみとして、彼は表現し歌おうとしたというか。そして、それが多くの人の心に響くようなものにしようとした。それが、宮沢賢治という人の現代的な意味ではないだろうか。

それはもちろん『法華経』の信仰ということにのっとっているわけです。ですから、『法華経』的なものがしばしば現れてきますが、同時に、『法華経』のことを知らなくても分かるようなものとして、彼の物語や詩作品には大きな悲しみというものが描かれていると思います。

一茶のたくましい、したたかに生きる悲しみ、そして宮沢賢治の大いなる悲しみというようなものを背後に置きながら、さまざまな宗教者が、さまざまな場所で、非常に具体的に、実践的に行っている支援活動を日本の伝統の中になんとか根付かせ、現代的な表現を見いだしていくという方向性ができればいいと考えています。

そしてそれは、先ほど言いたかったことの一つですが、たとえば私どもの集まりにはライフリンクという、自殺予防の活動をしておられる方たちもいます。特定の宗教にはよらない、そういう方たちも参加しています。宗教だけで閉じるということも、まったく必要がないということです。

もちろん宗教だからこそできる大事なことがあると思います。たとえば死者を慰霊するのに読経することがどうしても必要だということがあるのですけれども、その両面をうまく活用しつつ、悲しみをこえていく。あるいは、新しいタイプの心のケアの文化を育てていくことが、大事なように思っています。

鎌田　ありがとうございます。急がせてしまってすみません。本当は一人一人ゆっくりと報告していただきたいのですが。

次に玄侑宗久さんに報告していただきます。玄侑さんは『中陰の花』で芥川賞を受賞、その後福島県三春町の福聚寺の住職を務めながら、現在、内閣の復興構想会議の委員もされています。よろしくお願いします。

基調報告2

福島県での被災状況と被災地支援の現状および復興構想会議の報告

玄侑宗久

暴落した情報価値

こんにちは。玄侑宗久です。

私が仰せつかりましたのは、福島県の被災状況と被災地支援の状況および復興構想会議の報告です。まず被災状況ということですが、よく分からないのです。情報が乱れていると言いますか、いったいどれほどの被害があるのかが、次々に発見されているという状況だと思います。また情報管制が明らかにあったわけであります。

私は三月一二日ぐらいから原発の動向に注目していたのですけれども、三月一四日の夕方に二号機が爆発した後、一五日の早暁、午前二時ぐらいからアメダスの風向きが消えるのです。見られなくなってしまう。原発施設の中にあるモニタリングの計器も、数字がなくなります。

一六日になって、ようやく一五日の分も数字を出してくるわけですけれども、これが明らかに何分の一かにしてあったわけでありまして、いまなお隠していることもありますね。NHKテレビが明かしてしまいましたけれども、三月二一日、お彼岸真っ盛りのときに、関東にもものすごい放射性物質が流れたということはほぼ明らかでありまして、いま静岡、神奈川あたりでお茶が駄目だと言っていますけれども、あの主な原因になったのは三月二一日だろう、決して三月一五日ではないと思われます。

でも、この二一日に起こったことについては、まだ東電も国も一切言及しておりません。ですから、何が起こったのかさえ、まだ明確ではない。たとえば、いま福島県でウシの放射性セシウムが問題になっています。その原因が外に干してあった稲わらだというわけですが、宮城県から稲わらを買った業者のウシから、食べてはいけない量が出てきているわけですね。

宮城県にいつ飛んだのか。これも知らされていないはずです。ですから宮城県も、民間ではかなりモニタリングを進めていまして、仙台界隈は大丈夫なのですが、浜通りから入った内陸部、栗原町あたりからちょっと内陸の方へ、放射能の非常に濃い部分が広がっている。

これはおそらくあまり知られていないことでありまして、今後、実はこうだったというのが、どういうかたちで、どの程度出てくるのか分からないので、福島県の被災状況は今は明確には申し上げられない、という現状であります。

つまり、情報価値がわれわれの中で暴落してしまったということでしょうね。情報というのは、もちろんいま流れているものの中で、われわれの内部にソフトがあるものだけをキャッチしているわけです。地震、津波が起こってテレビの映像から流れてきたものは、ほとんど情報化できない圧倒的な情景だったのだろうと思います。

悲しみとか苦しみとか、自分の脳の中のソフトを探ってみても、そうした言葉のこれまでのイメージに該当しない映像がいっぱい噴出してきて、情報化できない苦しみというのをわれわれは初期に味わったわけです。その

後は情報が、ダブルバインドで出されたせいで、その価値が暴落してしまったのだと思います。

ダブルバインドというのは、たとえば、直ちに健康に影響を与えないと言い続けながら、いきなりホウレンソウ、原乳を全県出荷停止にしたことなどが典型的です。直ちに影響は与えませんよと繰り返し言っておいて、いきなり全県ですから。こういうことをされると、非常な不信があらゆる情報に対して芽生えます。

その状態は、その後も継続的に起こりました。たとえば、国は年間二〇ミリシーベルトをこえた場合は計画的避難区域にするので、一カ月以内に逃げなさいと言ったわけですけれども、その同じ数字で年間二〇ミリを下回れば、子どもたちも校庭で遊んでいいですよと言った。これはどう考えても、間がなさ過ぎでありまして、これもやっぱりダブルバインドだったと思います。

そういう意味で、情報価値というのが非常に暴落してしまって、「どうせ、また」という心情が福島県民に芽生えてきた。「どうせ、また」というのは最悪の状況ですね。人間が人間に接するときに「どうせ、また」というのは、もう何の期待もない状態だと思いますが、今やそういうことが起こっているような気がします。

玄侑宗久氏

ウラン大明神、プルトニウム神社

ただ、被災地全体で申し上げると、今回、東日本大震災が起こった地域は、島薗先生のお話にも出てきましたけれども、御詠歌が盛んであったりイタコがいたり、宗教心という意味では、非常に強いエリアであった。このことによって、人々のつながりというものが日本社会の中で再確認されるかたちになったのではないか。

避難所で粛々と並んで待っている人たち。あれはやっぱり日本における宗教心の現れだろうと思うのです。今回の被災地は、コミュニティがまだ力を持っている地域でありまして、たとえば義援金が出たら何に使いますかと訊かれて、お葬式をしたいと答えるわけです。津波で奪われたものの中で何を返してもらいたいですかと訊きますと、まず位牌と言うのですね。

全国的に見れば、むろん日本はこういう地域ばかりではありません。しかしそういう地域で今回のことが起こったということで、非常にクリアに見えてきたものがあるのではないか。

もともとこの国は火山列島でありまして、鎌田先生のご専門でしょうけれども、火山列島固有の神として、オオナムチという神様がいるわけです。オオナムチというのは、大穴持ちの省略形ですね。ですから、もともと大きな噴火口を持った火山です。鳥取県の大山から出雲にやってきて国づくりに参加しますけれども、その後、阿蘇にも現れて、やっぱり阿蘇の噴火のときには、あっちにいるわけですね。

わが国は、いろいろな神々が外国からも入ってきた国ですが、日本の固有神として、やっぱり火山の神が明らかにいるわけです。そういう意味では、当然、地震も津波も発生するものとして怖がられていたわけですし、怖いから、なだめるために祭るという、日本の神道の基本的スタイルができたのだと思います。

先ほど鎌田先生から浪分神社のご紹介がありましたけれども、いわき市には津波神社という、そのものずばりの神社もあります。特に浜通りというところは神社が多いところでありまして、海の恵みもいただきたいけれども、やっぱり脅威を感じる。だからこそまつる、という思想が定着しています。そういうかたちで、どんどんまつられてきたのだろうと思うのです。

福島県の、今回あまり近づきたがらない浜通り地方に、神社が約三〇〇あります。宮城と岩手を合わせた数は私の方ではちょっと分かりかねますが、とにかく浜通りというのは神社が多い。そのエリアには日本海側みたいに活火山は多くないのです。ですから、皆が祭ったのは、むしろ海そのものの脅威だったのだろうと思います。

基本的には脅威ですが、それでも恵みをいただきたいものが神になるとすれば、本当はウランもプルトニウムも神になってよかったのです。日本では、まだウラン大明神もプルトニウム神社もない。つまり、怖いということを認めなかったので、日本型の、怖いけれど恵みを願うという伝統的スタイルの中にはまってはいなかった。ごまかしていたという感じがしております。

神道の方でも、鎌田先生が発表されているように、清まるべき自然が放射能で汚されてしまったという大きなダメージを受けたわけであります。これは本当に賠償問題だと思います。神道の基盤を国の事業でぶち壊したわけで、これをどうしてくれるのかということを、本当は言ってもいいのではないかと思うのです。

でも宗教者は、あまり訴訟が好きではない。そういうことに自分の日常をつぎ込みたくないのでしょうね。結局は何でも自分の「行」にしてしまうというところがありますから、そういう行動には出ていません（一一月時点では、お寺が東電に賠償を求めるため、僧侶たちによる支援団体が三つできている）。

おびえを保つ

神道は神道で、以上のような打撃を受けたわけですけ

れども、仏教も、先ほど島薗先生のおっしゃった無常ということに、ものすごいダメージを受けているわけです。プルトニウム238、半減期は二万四千年ですか。無常ではないじゃないですか。プルトニウム244は半減期八千万年といいます。ですから、とうとう無常の原理に反するものが出てきてしまった。つまり、あまりに神道的でない、仏教的でもないというプラントが、全国各地に五四カ所あるわけです。

無常といいますとなんと言っても『方丈記』が浮かんできます。日本の中で無常観というものをある意味で結晶化させたのが、私は鴨長明の『方丈記』ではなかろうかと感じています。幸いなことに、鴨長明という方は賀茂神社の系列の神官だった、鎌田先生の系統だったわけですけれども、後に出家して坊さんになりましたので、なんとなく神仏双方をカバーする方なんです。

その方が五六歳ぐらいで『方丈記』を書いています。ですから、今の私と似たような齢で書いているわけです。『徒然草』とか『枕草子』なんかと並べて紹介されることが多いわけですが、これはまったく違う本でありまして、他の二冊と違って実にテーマがはっきりしている。

自分の思うようにならない自然災害、および遷都という人災、それに対してどう対処したらいいのか、ということが書かれています。辻風とか、大地震とか、台風、飢饉、当時のあらゆる災害体験が出てくるわけですけれども、無常なる周囲の出来事にどう対処するのかというのが、いまとは非常に違うわけです。

どういうことかと申しますと、たとえば、津波が来るので防潮堤で防ぎましょうという考え方はなかったわけです。それだったら神社は要らないでしょう、ということになる。怖くない状態をつくってしまうわけですから、怖いから祭るという神道の基本的スタイルにも反する。ですから、おびえを保つというのでしょうか、なんとか復旧はしたけれども、やはり津波は怖いよねという、おびえを保っておかないといけないのだと思います。

震災後に『方丈記』を何回か読みまして、非常に印象深かったのは、金持ちは大枚をつぎ込んで、もうこれなら大丈夫という建物をつくるわけですけれども、そういう人に限って、今回の被害のことは忘れてしまう、口の端にも上らせなくなる、というようなことを鴨長明は書いております。

長明自身、最初は京都の大原の方に、庵（いおり）を三〇歳すぎで結びます。そのときに、もと住んでいた家の十分の一になったと書いています。その庵にしばらく住んで、やがて五〇歳ぐらいになったときに、さらに今度は南の方の日野というところに再び庵を結びます。そのときは前の庵の百分の一になったと書いています。いったい最初は、どんな豪邸に住んでいたのかと思いますけれども……。

しかしそれだけ生活が縮小していけば、災害にやられても、べつに仮住まいだし、大して失うものはないですよという心境なのでしょう。庵には阿弥陀如来が祀ってあって、普賢菩薩が祀ってあって、『往生要集』が置いてあって、琵琶と琴が置いてある。そういう暮らしを五畳ほどのスペースで続けた。書いてあるものをすべて置くとちょっときついのではないかという気がしますけれども、家そのものも、どうやら組み立て式だったようです。組み立て式で可動式。ほとんどヤドカリ状態だった。

ヤドカリのことを実際に『方丈記』の中で書いていまして、「寄居」と書くんですね。福島県の郡山に寄居一家という暴力団がいるのですが、なかなかしゃれた名前だったわけです。「寄居は小さき貝を好む」と言って、いざというときのためにヤドカリはなるべく小さい貝に住むというんです。それが「減災」の考え方なんですね。

宗教施設に対する国からの援助

そんなことを考えながら私は復興構想会議という場に、ひょんなことから選ばれて参加しました。七五日間出席していたわけです。私は福島県民でもあるわけですけれども、一応宗教者でもありますから、宗教施設について特段の配慮が今回得られるようにと願っていました。復興構想というものの中に、どれだけ宗教施設に対する配慮が入れられるか、自分なりに努力したつもりなのですけれども、結果としては、文化財、祭り、芸能、そういったものの復旧、復興は、かなり手厚く盛り込めましたし、また観光資源としての神社仏閣もきちっと扱えたと思いますが、それだけでは大部分の神社仏閣は救われない。地域文化の拠点としてのコミュニティ施設という言い方でけっこうなので、文化財と併記してもらえないかということを、二度お願いしたのですけれども、何が怖いのか、特段の反対はないのに、議長がつぶやいた「憲法違反」というような一言で、入れてもらえなかったという経緯があります。

特定の宗教を特別に支援しようというのではないわけですから、決して「憲法違反」ではないわけであります。そんな会議の期間中に、私は富山県で教誨師さんの集まりがあって、講演に呼ばれて出かけたのです。教誨師というのは、あらゆる宗教者の協力を得てやっていることです。保護司というのもそうです。そうやって国家に、法務省に、宗教者全体が協力しているわけです。それなのに、こういう災害の機会には何の援助も得られないのだろうかと、つくづく考えてしまいました。

正直申しまして、お寺、神社には壊滅的な状態になっているところもございます。宗派全部を含めますと、ちょっと分からないですけれども、たとえば真言宗ですと、和尚さんが福島県で一人亡くなり、宮城県で三人亡くなった。住職死亡というのもかなりあるのです。

あるいは、お寺がまったくなくなってしまった、津波で完全に山際まで押し流されてしまったというようなお寺が、石巻かいわいには五カ寺ぐらいあります。檀家さんも九割ほど流されているという中で、どうやって復興したらいいのだろう。今後、施設の再建が大きな問題になるだろうと思います。

国は、宗教施設ですから檀家さんでつくればいいで

しょうという態度を取ります。しかし檀家さんも九割、やられています。たとえば阪神大震災のときは、宗教施設に対する国からの援助は一切ありませんでした。そのため私の知り合いの神戸のお寺も、山門が倒れたのを復旧するだけで一〇年以上かかっています。

ただ、中越地震のときは、国のお金で作られた基金から、宗教施設に対する援助がなされています。ですから、その道はある程度開いているのですが、私は今回、公の復興提言の中にそのことを入れてほしかったのです。しかし敵の壁もなかなか厚かった。しかも敵が誰だか分からないという状態でありました。

短い時間に何を申し上げたらいいのか困ってしまうのですが、いまの神社、仏閣、教会等の施設の復旧について一つ認識しておいていただきたいのは、たとえば私が属する臨済宗妙心寺派は、福島県に一億円、宮城県に二億円、岩手県に一億五千万円、寄付しています（ほかにも茨城、千葉両県に二五〇〇万円ずつ）。その全額を、全壊した同派のお寺だけにそっくり出してくだされば復旧できるのです。

しかし本山は、被災されたすべてのみなさんへの援助を優先したわけです。ところが福島県に出した一億円から、福島県の臨済宗妙心寺派のお寺にはたして援助金が下りてくるだろうか。その道は、おそらく閉ざされています。

天理教もそうです。福島県に聞きますと、天理教も億単位の寄付をされています。浄土真宗もされています。同宗派の個々のお寺によこすのではなくて、行政に寄付してしまった。だから、宗派によって違いますけれども、妙心寺派は本堂が全壊したところに一千万円援助し、庫裏も全壊していますと二〇〇万円加わる。ですから何にもなくなりましたというところに一二〇〇万円寄こすわけです。しかし、それでなんとかなるでしょうか。

自分の寺の本山が、みんなのために寄付したことは素晴らしいし誇らしいわけですが、しかし、どうやらそのお金は末寺にはまわってきそうにない。私は今、宗教と国との関係を、もう一回真剣に考えた方がいいのではないかという気がしております。それが復興構想会議という場所での問題点といえば問題点だったわけです。

残る人、避難した人、それぞれの問題

次に福島県のことに限ってお話しさせていただきます。半径三〇キロが警戒地区および計画的避難区域に入るのですけれども、そこに福島県では約六〇カ寺あります。このお寺から、ほとんどの和尚さんが避難しています。お寺にいないわけです。ただ、皆無ではありません。残っている老僧もいます。

もちろんそうですよね。二〇キロ圏内にも、まだかなり残っている一般住民がいるわけです。「ご心配ありがとう。でも、私はここで死ぬから、どうぞお構いなく」と言う人を、首根っこをつかまえて追い出すわけにはいかないでしょう。

避難指示区域から警戒区域、というふうに名前を変えたとき、国としては、ある程度の強制力を持たせたかったのですけれども、それでも出ないと言う人は出ないのです。残ったままウシの世話をしていたり、寝たきりの家族を介護していたり、です。

そういう中ですから、三〇キロまでの範囲に広げても、そこにお坊さんがいるというのは不思議ではないわけですが、七〇歳を過ぎた和尚さんで残っている方がいます。境内が毎時二・二マイクロシーベルトだそうですけれども、そのお寺をどうするのか。現状では、一般の住民に対する補償・賠償の問題はいろいろ出てきていますが、宗教施設が立ちゆかなくなったということに対する補償・賠償という話は、まだ出ていないと思います。

先ほどの神道の土台が汚されたということもそうですけれども、放射能で、そこにいられなくなった。そこにいられないという場合、鎌田先生のようにフリーランスの神主というのは、ほとんどいないわけで、またフリーランスの住職というのは、ちょっと難しいわけであります。

ですからいま、そこから逃れた和尚たちはアパート住まいをしながら、檀家さんの連絡先を一つずつ増やしている。もう散り散りばらばらで、四六都道府県に散らばってしまったわけです。ですから、市役所でさえ、ようやく九割方分かってきたという状況です。実際、一部は今でも、どこにいるのか分からない。

しかも居場所が分かったとしても、たとえば新潟に逃げていった人の中で、そこに住んでいながら、そこの住人にならないと福祉のお世話になれない。これも非常に大きい。それから、公営住宅に入れない。入るためには、やっぱりそこの市民にならないといけない。ということは、避難していった場所に住民票を移してしまうということが起こっています（これはその後、総務省が飯舘村長の提案を受け容れ、いわば二重の住民票を認めたため、暫定的には解消されている）。

つまり、いま非常に深刻なこととしてあるのは、原発立地町村を中心にした近隣市町村の行政がメルトダウンしつつある、ということです。個人への援助がある程度なされている中で、行政そのものへの援助はまだ皆無です。ですから、いくつかの町が存続し続けられるのかどうかが今後の大きな問題になると思います。

自分の感覚を信じられないという悲劇

それから、いま福島県で、もう一つの非常に大きな問題は、自殺の増加であります。宮城、岩手では、去年並みで横ばいです。けれども五月、六月と、福島県では約四〇パーセント増えています。これが、いったい何のせいなのかということを考えますと、自殺というのは原因も一概には決めつけられないと思うのですが、私はある場所で見た不思議な装置のことを憶いだしてしまうんです。

ちょうど福島県のホットスポットに指定された伊達町に、子どもの科学館というところがあって、そこにボタンを押すと自動的に竜巻が起こるという装置がありま

す。竜巻をどうやって起こすかというと、四つの風を合わせてつくります。この角度がいろいろあるらしいのですけれども、とにかく一つのボタンを押すと四つの方向から風が吹いてきて、それが竜巻になるのです。

おそらく福島県民の自殺というのも、四つぐらいの風が合わさっているのではないか、そんな気がするのです。リストラがあり、余震がいまでも続き、そして放射能への恐怖があります。個人的な事情のほかに、今は誰にでもすでに三つがそろっているわけです。しかも、何より大きいのは、放射能が、われわれの感覚にはまったく捉えられないものだということです。

われわれの目の前には今、イネが青々と育っているのです。モモもおいしそうに育っています。おいしそうなだけではなく、食べれば、何ベクレルであってもおいしいのです。だから、器械で測らないと、ベクレルもシーベルトも分からないのです。私たちの感覚を素通りしているのです。

禅は、冷暖自知といいます。われわれは自分で確かめたい。しかし世界を自分で確かめ、それで生きていけばいいのだという世界観が、このシーベルトとベクレルには通じないのです。青々と見事に育って、そのイネを気持ちいい風が吹き抜けているけれども、イネは何ベクレル、風は何マイクロシーベルトという話なのです。

つまり放射能というのは、これまで営々と築き上げてきたわれわれの感覚では向き合えない世界なのです。われわれの感じるおいしさとか、気持ちよさとか、それを信じてはアカン、あの器械で測った数字の方を信じろというわけです。これは非常にダメージが大きいです。

もともと心の病がある人にとっては、生きてはいけないぐらいのダメージだと私は思います。この目や肌や、すべての感覚で感じることを信じるなと言うのです。それがおそらく、福島県で起こっている最大の悲劇だと思います。

鎌田　どうもありがとうございました。

福島県におけるたいへん深刻な事態ですね。後のパネルディスカッションでも取り上げていきたいと思います。次に、稲場圭信さんに事例報告をお願いします。

事例報告1
「宗教者災害救援ネットワーク」の活動と課題

稲場圭信

まるごと寄り添う

みなさん、こんにちは。稲場です。よろしくお願いします。

私は阪神・淡路大震災のときは東京にいまして、島薗進先生の下で「現代宗教の社会倫理」ということに関心を持って研究していました。当時、兄が神戸の中央区にいましたので、何かできないかということで、当時パソコン通信のニフティサーブというのがあり、ダイヤル回線アップでつないでいました。インターネットはあまり普及していなかったのですが、情報をニフティサーブでいろいろと集め、六甲小学校にすぐに東京から駆け付けまして、子どものメンタルケアをしていました。

教育心理学の先生など何人かでやったわけですけれども、子どものメンタルケアという言葉は使っていましたが、やっていたことは、要は小学校で子どもたちと朝から晩まで一緒に遊ぶということです。

いま私は「まるごとのケア」という言葉を使っていますけれども、心のケアとかメンタルケアという言葉はあっても、実際にやっているのは、まるごと寄り添うというようなことでした。

今回の地震の直後から、私もどうにか大阪から駆け付けてとは思ったのですが、いろいろと仕事がある中で駆け付けられなくて悶々としていました。みなさんも、いろいろなところから情報を得て、いろいろな方が被災地に心を寄せて現場に駆け付ける。あるいは、世界各国から祈りを運ぶというようなことが報道されている。

そういった中にあって、大阪の地から何ができるか。被災地に入って継続的に活動することができないけれど、後方支援も何かできるのではないか。そういった中で立ち上げたのが宗教者災害救援ネットワークで、地震の二日後に立ち上げたわけです。

そもそもそういったことをやる意味ですが、私は阪神・淡路大震災のときも、宗教と関係ないボランティアをしていましたが、実際に被災地でさまざまな宗教者が活動をしています。私が関わっていた避難所でも、とても普通のボランティアの人たちが手を付けたくないような仮設所のトイレですね。用を足すとすぐに出たくなる汚さ。そこで宗教者の方が、黙々と目立たない清掃活動をされているのです。

どちらかというと、被災地に入ってボランティアをすると、現場で被災された方と関わって何か心が通じ合って、相手からも喜ばれる、感謝をされるという思いを受けたいというのが、ボランティアとしてあると思うのですけれども、宗教者の方が、人が見ていようが見ていまいがまったくかまわずに大切なことをされている。そういったことが、いろいろなところであります。

ただ、それが報道されない、世の中に伝わらないということがありましたが、今回は地震の直後からメディアも社会も宗教者の動きを認識するだろう。その情報を集めて発信することが大事だと直感的に思ったのです。

それは、この一五年の間に宗教者、宗教団体がNGOと連携して活動をしたり、中越地震などいろいろな地震がある中で、各教団が災害ボランティアの仕組みを育てたり、また、反貧困の取り組みなどの中で宗教者としての活動を行ったりといったことが、メディアでも少しず

つ取り上げられつつある。「社会参加仏教」といった言葉もありますけれども、時代が少しずつ変わってきたということがあります。そこで、とにかく情報を集めようということではじめました。ここでキュレーションという言葉を挙げていますけれども、私が取り組んだのは、まさにこういったことです。

フェイスブックというインターネットの無料のソーシャル・ネットワーキング・サービスがありますが、これにさまざまな宗教者の活動、インターネット上の新聞報道とか、各宗教者、宗教団体が現地で活動している情報を、メールやツイッターで送られてくるものを含めて、どんどんアップしていくということをやりました。

また、これはネット上の情報収集の活動ですけれども、これをやることによって実際に現地で活動している人、あるいは現地に入ろうという人も、この情報を見ながら、また自分の活動が全国で見られる。そのバックアップが心の支えにもなっているという話を聞いたりします。

どんなカテゴリーがあるかと言うと、宗教団体の被害状況、心のケア、被災者の受け入れとか、祈りについてという宗教者らしい活動も含めて、さまざまな活動をトータルにフォローする。地震から二日後に立ち上げて、一〇日間で一〇万アクセス以上です。フェイスブック上にアカウントを持っていない人も、グーグルとかいろいろな検索でここに飛んでくることができるので、そういったやり方で見られる方もいます。

稲場圭信氏

それと同時に、地震の一週間後に宗教者災害救援マップというのを、國學院大學の黒崎さんと、いろいろな方々の協力で立ち上げました。

被災地で全壊したお寺、流出した神社、いろいろな宗教施設がありますけれども、高台にあるお寺とか神社、宗教施設が震災の直後に五〇〇名とか千人とか避難されてきた方々を受け入れているとか、そういった情報がいろいろなところからどんどん上がってきました。

その情報を整理し、学生ボランティアにも協力してもらって、救援活動の拠点とか、被災者を受け入れている施設の情報などを入れていきました。（図を見ながら）たとえば、この図の白は被災者を主に受け入れているところです。これは私も、ようやく落ち着いたころに少しずつ現地に入って、状況を確認する作業を進められるようになりました。ここも私が訪問しましたけれども、妙心寺派のお寺です。四月三〇日の段階で四一名、六月一日に二六名とか、こういうふうに被災者を何名受け入れて、どういう状況にあるかといったことをマップ上にどんどん入れていきました。

これがどう機能するかですけれども、たとえばNGOとかNPOとか、いろいろな団体が被災地に入る。そのとき、この近くに、お寺とか神社で拠点になりそうな場所があるのか。連携するようなプラットホームですね。そういったことを考えています。

また来週も、ここにいる帝京大学の濱田陽さんとか、私のところの大学院生と共に被災地の宗教施設での救援活動、状況を調査して、マップ上に挙げて、全国にこういったものを広げていくことによって、いざというときの連携、パートナーシップをつくれるのでないか。

それはどういうことかと言うと、ここに「宗教の力」と挙げましたけれども、先ほど玄侑さんの方から、浜通りには神社が三〇〇あるという話がありました。日本全国に崇敬神社と氏神神社が、宮司さんがいなくて氏子さんが主に運営しているような神社も含めて八万五千ある。被災地三県で四千八百ぐらいあります。

お寺の方は、全国で七万八千ですけれども、三県では、ほとんどは曹洞宗で千三百です。ほかの宗派を合わせて三千。もちろん被災して、全壊とか流出しているものがありますけれども、ここに備蓄米とか水とかいろいろなものを置くことによって、いざというときに連携できる。キリスト教、新宗教も合わせて一八万をこえる宗教法人です。これはコンビニの四倍、公民館の九倍といいます。

こういったものを、先ほどのマップ上で連携させることによって、たとえば同じ地域にあるお寺、神社で半年ごとに備蓄米の消費期限をずらせば、それが消費期限を切ったら、たとえば生活保護を受けている人、フードバンクなどに回して、また新たなものを購入していく。ここに行政、自治体の予算を使って連携してもいいのではないか。そんなことも将来的にできればいいなと思って情報収集をしています。

心のケアからまるごとのケアへ

ちょっと話を変えます。先ほど、「心のケア」「まるごとのケア」という話をしましたけれども、私のいる大阪大学の鷲田清一総長がこんなことを言っています。「ことばを受け止めるにはアースが必要だ」と。被災地に入って、たとえば傾聴ボランティアとか心のケアで、被災された方のお話を聞いて、同時に「大変ですね」というふうに丸ごと返してしまうと、かえって相手に負担になってしまう。あるいは、自分がもたない。そういった中で鷲田さんは、アースが必要だと言った。

私は、宗教者が被災地でケアに関わったときには、聞く側として、まさにその苦に寄り添うわけですけれども、その全部を受け止めて自分が苦しむというよりは、やはりどこかで神や仏につなげていく。この三角印です

ね。つなげているという安心感が、話している方にもつながっていくのだと考えています。

「心のケアから、まるごとのケア」と書いてありますけれども、被災地で活動されている宗教者、被災地に現地入りした宗教者の話もいろいろ聞いたり、また現地でもおうかがいしました。そういった中で、もちろん心のケアも考えているけれども、要は現地に行って一緒に食べ物をつくって、そこに身を寄せるということがケアにつながっている。

私の知っているお坊さんの方々の中には、北海道から数日入って、また北海道に戻るわけですね。戻るときに被災者の方と抱き合って、「いつ、また来てくれる?」と涙ながらに別れる。またしばらくして現地入りすると、「よく来てくれた」と。そういった家族のような付き合いをされているお坊さんの方もいる。その方々はまさにまるごとのケアをしているのではないか。

さまざまな縁を失った人たちの生きる歩みの伴奏者ということで、一回きりではなく、一度関わったら、それが縁でずっと続けていく。そこでさまざまな専門家も含めた連携が大事になる。

私は阪神・淡路大震災のときに子どものケアをしましたが、東京から何度も行き、一カ月、二カ月、三カ月たったころ、いつボランティアを撤退するのだ、と撤退論がミーティングですごく行われるわけです。で、撤退しました。いま思えば、しまったと。一度関わったら撤退する必要はない。

よく、自立のためにはボランティアは引かなければいけないという議論になるのです。でも、一度関わったら引かなくてもいい。関係を大切にして、たとえば現場にずっといられなくて、自分の都道府県に戻っても、そこから手紙のやりとりが一〇年、二〇年続いてもいいのではないか。それが、ひいては子どもたち、あるいは大人もそうですけれども、こんなに遠くから自分のことを時折気にかけてくれている人がいる。これは大きな心のケア、まるごとケアになります。

無自覚の宗教性

もう一つ、たとえば日本は無宗教の国といわれています。特定の信仰を持っている人は二十何パーセントで、大多数は無宗教です。そういった中で、私は無自覚の宗教性ということを最近言っています。

毎週教会に行っていない、どこどこの教団に属していないけれども、日本人の中には、無自覚に漠然と抱く、自己をこえたものとのつながりの感覚とか、先祖、神仏、世間に対しておかげさま、お互いさまといった念が、いまだに強いのではないか。これは、自分自身の宗教とは思っていなくても、こういう感覚、こういった思いが、災害時とか非日常時に、心の中にふつふつと湧いてくる。それがまたボランティア活動の原動力になっている場合もあるのだと思います。

阪大の社会学の院生の三谷はるよさんという人が計量分析で、日本人のボランティアと意識について研究しています。非常に重要な研究をされていると思います。その中で、教育とか学歴、あるいは社会階層、経済力とボランティアという相関よりも、こういった宗教的なものを重要視する感覚とボランティアの相関が圧倒的に強いということが、計量分析で明らかになった。これは今後論文になるので、関心を持って見ていてください。

そういった中で、この二〇年ぐらい世界では支え合う社会という動きがありますが、いま日本の中にも出てきている。いままではお上に任せておけばすべてうまくいくという時代があったわけです。戦後、高度経済成長期、官僚主導でいい時代があった。でもいまは、さまざまな複雑な問題がある中で、行政、お上に任しておけばいいという時代は終わった。これは地震の前からですね。年金の問題、医療の問題、福祉の問題などの中で、先ほどの無自覚の宗教性、つながりの感覚が見直され始めた。目に見えない放射能におびえているわれわれ、特に福島の方はそうだと思います。そういった中で、目に見えないつながりを大切にしようという意識も出てくる。また、自発的な利他的精神に富む市民社会をつくっていこう。そんなふうにNPOの数が少しずつ増えて、また市民活動が活発になっている時代になってきている。

私は大学に勤めていますけれども、大学も大きく変わりつつあります。現代社会の問題がいろいろあって、すべてがつながりを持っている。一国で解決できる問題ではない。学際的研究というのは昔から言われていました。そういった中で、社会的実践も大事だ。これを融合させた社会貢献が、いま大学でも当たり前のように求められている。研究室に閉じこもっているだけでは駄目だという時代になっています。

最後にまとめです。まずソーシャルメディア、先ほどのフェイスブックを使った後方支援の輪というものが、今回の大きな特徴のひとつとしてある。また、一八万の宗教法人がいろいろなところと連携すれば大きな社会的力になる。無自覚の宗教性というものが、また支援の輪の原動力となる。

それから、「まるごとのケア」という関わり方です。もちろん専門家による心のケアも大事です。また、学際的な研究・実践から支え合う社会の構築といったことが、いま必要とされている時代なのだと思います。ちょうど時間ですね。ありがとうございました。

鎌田　ありがとうございました。次に第一部の最後の報告者、金子昭さんに事例報告をお願いします。

事例報告2

新宗教の災害支援活動の事例と課題

金子 昭

はじめに

ご紹介いただきました天理大学の金子と申します。私は、「支縁のまちネットワーク」というグループを大阪でやっております。

もともと、震災が起こる前は無縁社会ということがさかんに言われておりました。無縁社会の中で最も無縁な部分というと、これは家のない、身寄りのない人たちが中心の、大阪の釜ケ崎という日雇い労働者のまちがありますけれども、そこで人知れず活動している宗教者たちのグループがあります。そういったグループが自然発生的に集まって、それが支援のまちネットというかたちになって、いま私は形ばかりですが事務局長をやっています。

今日のお話は、与えられたテーマの新宗教の災害支援活動の事例と課題について、三つの事柄を中心にしてお話をしていきたいと思います。

一つは、私のテーマは、宗教の中の新宗教というところにポイントを置いて、玄侑先生がお話しされた伝統宗教とどう違うか、ということです。新宗教というのは一般名称ですので、やはり特定の宗教の話を具体的にしないとよく分からないと思います。そこで二点目として、たまたま私自身が天理大学に勤めており、信仰も天理教ということなので、天理教の災害救援活動の話をします。そして三つ目として、こころの未来研究センターという場をお借りしてのお話ですので、新宗教が、心のケアとどう関わるのか。この三点でお話をまとめていきたいと思います。

活動に見る伝統宗教と新宗教の相違

まず第一点です。新宗教の話をする前に、日本社会の中で、そもそも宗教というもの自体が非常に周縁化されている。その中にあって、さらに新宗教はもっと周縁化されている。島薗先生の小林一茶の話を聞きましたけれども、一般メディアの扱いにしても、何か継子扱いの、さらに継子になっているような気もするくらいです。

新宗教による今回の災害の救援が、あまり注目されていないように見えます。なぜか。二つの原因があります。一つは、ちょっと言葉はきついかもしれませんけれども、一般メディアが新宗教のことを報道してくれないということです。教団の宣伝になるようなことは報道しない。けれども、マイナス面があれば積極的に報道をしてくれるので、人々には悪印象ばかり残るわけです。

今回の東日本大震災のときも、宗教がまったくスルーされた報道がありました。一つ例を挙げます。三月二〇日、石巻市で九日ぶりに救出された八〇歳のおばあさんと一六歳の孫の高校生がいました。どの全国紙でも一面トップに出たニュースなのですけれども、この方は、特におばあさんの方がある新宗教の非常に熱心な信者さんだったのです。そのことについては、どのメディアもまったく触れませんでした。

私は、その新宗教の教団紙で、その一カ月後に詳しく報道されたので知っているわけです。その方が九日間生き延びた背景には、必ず自分たちは助かるという信仰信念がありました。一般メディアの方もこの信仰信念というものにも触れて報道していたら、きっと受ける人たちも違った印象を持ったかもしれないと思いました。

もう一つ、これは一般の方が新宗教全体に対して持っている一種の警戒感です。新宗教の信者がその看板を背負ってたすけに来てくれたといっても、受ける側に布教・伝道されるのではないかという心配が発生してしまうのです。私も宗教者災害支援連絡会、心のケアの担当部会の司会をさせていただいたこともあるのですけれども、実際にそうした例も発生しております。ある避難所では、「心のケア、お断り」という張り紙が出されたという話も聞きました。

渡邊太さんという若い研究者がまとめた報告によれば、宗教者が被災地でボランティア活動を行うことに関しては肯定的意見が大半である。ところが、だんだん宗教色の強い活動になっていくと肯定的意見が減り、逆に否定的意見が増えていきます。宗教者が被災地で布教・伝道するということに対しては、否定的意見が大半になってまいります。これから見ても、一般の方の宗教に対する目線というのがよく分かるわけです。

そこで、宗教全般に言えることですけれども、特に新宗教の場合は宗教協力活動ということに力を入れて、われわれの活動は決して布教・伝道ではなくて、本当に純粋な気持ちで支援に来たんですよということで安心感を伝える。そういうことで一般ボランティアに溶け込んでいく形をとるケースがあります。

大きなところでは加盟教団が七〇教団の新宗連（新宗教団体連合会）がそうですし、世界各国に宗教協議会を持っているWCRP（世界宗教者平和会議）がそうです。こうしたところが宗教協力をしながらボランティア隊とか街頭募金活動を行っております。この二つの団体の中心的な教団は立正佼成会であります。ほかの教団も積極的に関わっておりますけれども、いちばん大きなところは立正佼成会です。

さて、伝統仏教と新宗教の出番の違いというものがあるとしたら、どこにあるでしょうか。特に心のケアに関連していえば、伝統宗教か新宗教かを問わず、どの宗教でも自分たちは宗教者なのだから、宗教者ならではの支援をしたいと思っております。

けれども、伝統仏教の場合は何百年も前から、その地

金子昭氏

域に、その場所にあって、周囲の人々になじんだ存在になっています。それが非常に強みになっている。したがって、習俗に根差した葬祭支援が人々に抵抗なく受け入れられるわけです。そして、そこから心のケアの足掛かりも得やすい。一般メディアも安心して報道できます。ところが新宗教の場合は、その信者でない限り、そういうニーズがないということで、したがって心のケアの足掛かりもないということになるわけです。

天理教の災害救援の状況

ここで二点目に入ります。新宗教の事例を挙げてお話ししたいと思います。昨日、私のもとに創価学会のある副会長から創価学会の救援リポートが届きました。また、世界で最も大きな仏教NGOの慈済基金会というところから、大規模支援のリポートが届きました。こういったところをご紹介してもいいのですが、先ほど申しましたことと、関西という土地柄もありますので、天理教の話をさせていただきます。

天理教は一八三八年に立教しました。教祖は中山みき。現在は一万七千カ所の教会、教師が一六万八千人、信者が公称ですけれども一九〇万人います。東日本大震災に関しましては、①災害救援ひのきしん隊（災救隊）の活動、②信者施設の受け入れ、③その他という三点で、簡単にお話しいたしたいと思います。

まず第一に、災害救援ひのきしん隊ですが、四七都道府県、および台湾に常設されておりまして、本部と各教区が連携し合って出動しております。略して災救隊と呼んだりしているのですけれども、彼らは水色のヘルメット、作業上の制服を着用して出動するのが基本となっております。ですから、テレビなどで、民間のボランティアががれきの撤去をしていますというテロップが流れたりする中に、水色のヘルメットを着用し、作業服を着て活動している姿があれば、それが天理教の災救隊なのです。私も何回か、そういう場面を見たことがあります。

出動一カ月間のデータを見ても、後方支援を含めて福島、宮城、岩手と、すでにそれぞれ活動しております。活動の拠点は非常に大きく展開しておりまして、七月一〇日現在、その災害救援ひのきしん隊本部に聞きましたら、一一四次隊、延べ一万八一八八人が出動しています。

ちなみに阪神・淡路大震災のときには一万三四一八人が出動しておりまして、もちろん延べではありますけれども、このときのボランティアが一三〇万人といわれております。そうすると、一三〇万の中の一万三四一八人ですから、だいたい一〇〇人に一人が天理教の災救隊だったということになるわけです。もちろん、これは本部で公式に出している救援隊で、教内の有志の隊を含めると、もっと多くなるはずです。

第二に、信者施設の受け入れですが、天理市には主に天理教直属教会単位での信者詰所というのが二〇〇カ所ございます。信者が修養するための施設で、全部泊めると六万人分ぐらいあります。食事、医療、学校、雇用相談と、それぞれきちっとインフラも整えて、ソフトも完備して、被災者の方をお呼びすることになりました。

天理教では震災被災者受け入れ対策室を設置しまして、ホームページにも受け入れのご案内をいたしました。受け入れ人数が三千人、受け入れ期間が三月から九月の末までで、宿泊費と食費は九月末まで無料ということだったのです。

ところが、ふたを開けてみると非常に低調でした。七月一四日時点での数字を天理教の担当部局に問い合わせましたところ、いま入っている方は一二名、八世帯ですということでした。延べ人数にしても一〇九名、四六世帯でした。

どうして受け入れが低調だったのか。これはいくつか理由があります。まず、関西という土地柄もあって被災地から遠い。それから宗教施設であるということの抵抗感もある。そして、仮住まいとしての住みにくさもある。ちょうど避難所と仮設住宅の中間みたいなものかもしれません。「帯に短し、たすきに長し」ですね。そういったことで、ちょっと使いにくかったのかもしれません。

三番目に、それ以外の活動ですけれども、先ほど稲場先生が若いころに心のケアをされたという話をされました。天理教も心のケア対策室を設置しまして、実際何ができるのかずいぶん内部で検討されたようです。これはやりようによっては非常に危険なことにもなりかねないので、結局、子供会がいちばん安全というか、それがよかろうということで、子供会チームを派遣しました。

それともう一つ、玄侑先生もおっしゃっていたのですが、たしかに天理教も福島だけにとどまらず、東北三県にそれぞれ一億円を義援金として渡しました。けれども、義援金と同時に、教内の助け合いの天理教被災教区・災救隊支援募金というのを二本立てでやっておりまして、これは教会の復興とか、天理教の災救隊の支援金として活用しておりました。だいたい金額も同じぐらいで、三億円をこえるお金が出されております。それ以外に、いろいろな活動も行われているということです。

新宗教による心のケアの可能性

三番目の話題に入ります。新宗教による心のケアの可能性ですけれども、これは二つの考え方があると思うの

です。一つは、「心理のレベル」でとどめておくという考え方です。これは、震災体験があるとしますと、そこに心的外傷が起こる。そうすると、それを癒やさなければいけないということで心のケアが行われる。これはまったく心理学のレベルで行われるものです。ですから当然、精神科医とかカウンセラーの出番になってくるわけです。

ところが、大切な人を失ったりして、心の中にぽっかりと空洞ができる。これは意味の喪失でもあります。意味の問いまで深まるものであれば、そこに私は宗教者の出番があり得ると思うのです。

宗教者の心のケアといった場合、それは単なる心のケアにとどまらず、そこに魂のレベルをくっつけて「心魂のケア」、あるいはスピリチュアルケアと言ってもいいのではないかと思います。これはすでに臨床哲学とか看護の倫理の現場で説かれているグリーフケアとか、スピリチュアルケアのあり方を、被災地での心のケアに生かせるかもしれません。

関西においては、一六年前に阪神・淡路大震災が起こりましたけれども、まだ自分の心の中でそれが過去のものになっていない、まだ終わっていない人がたくさんいます。現在もなおスピリチュアルペインが続いている。そもそも、毎年慰霊祭が行われるということは、慰霊される亡くなった人への追悼という意味だけでなく、それと同時に、慰霊する側にも、やっぱりペイン（心魂の苦痛）があり、それを癒やすという意味もあるわけですね。そうすると、東日本大震災においては、心のケアはこれからではないかと思うわけです。

新宗教というのは、私は宗教者らしくない宗教者だと思います。普段は平服を着ているし、外見だけで宗教者とは分からない。そして、実際、いわゆる聖職者というよりは、自分もまた一生活者としての視点を大切にするというところに特徴があります。このお互いに生活者であるということで、むしろ共感的な寄り添い支援ができると思うのです。

そして、当座の支援だけで終わってしまうのではなくて、そのあとも人生の伴走者として、ずっといろいろなかたちで共に歩んでいくことができる。人間関係をさまざまなかたちで紡いでいく。文通したり、実際に会ったり、いろいろなかたちで生活者として同じ目線での交流をしていくわけです。

そういうことを考えてみると、いま避難所に行って何かをすることだけが、心のケアではないということが分かるわけです。むしろ出番はこれからではないかと思います。そして、心のケアだけをやってもしようがない。肩をもんだり、肉体仕事をしたり、一緒に汗を流したり、さまざまなケアを組み合わせて行うことに意味があると思います。

その場合も、やはり関係性が大切になりますから、地元で普段から関係性を築いてきたかどうかが問われるわけです。ここに伝統仏教の優位があって、新宗教はそうした地元での普段の関係性づくりについてもっと学んでいかなければいけないと思います。

被災地への関わり方再考

東日本大震災の被災地は主に東北地方です。関西人の私は地元ではない、別の地方の被災地に行くというかたちになります。そして、被災地の方からすると、私はよそから来た人間ということになるわけです。

その被災地は、玄侑先生のお話ではないのですけれども、非常に信仰心のあつい地域です。そうしたときに、被災地の人々の思いと救援サイドの認識のずれがどうしてもあるわけで、当然宗教者が行う場合にも、それが起こってくるでしょう。ですから、上から目線のお助け支援のようなものではなくて、まず謙虚に被災地から学ぶ姿勢が大切ではないかと思います。

精神科医の野田正彰さんは、「傷ついた人こそ、自分を尊敬してほしいと思っている。ボランティアの真の仕事は、被災者一人一人の内に人間の尊厳を見いだすことである」と述べています。ここの「人間」ということを「宗教」に置き換えたらどうでしょうか。

私は今年の五月に、仙台の近くの名取市というところに行って、被災した神社を訪れました。そんなに大きな神社ではなかったのですけれども、まったく手付かずのひどい状態でした。そういう地元の宗教施設の被害状況のことを考えてみますと、「心」のケアを宗教者が行う場合は「宗教心」へのケアになってくるのではないか。それを土地の「宗教へのケア」として行うことでやるのはどうだろうか。そんなことを考えました。

何をしたらいいか。いろいろなことができると思うのですけれども、こうした宗教施設の、まず片付けをさせていただこう。清掃させていただこう。そうすれば、その土地の神様、仏様に働いていただくこともできる。そうすれば、その土地の人々も元気になり、町や村も土地の精霊あるいは霊魂によって復興するのではないかと思うのです。

外部から来た宗教者は、やっぱり外部の人間である。そういう意識を常に持っている必要があると思うのです。まず被災地の神様、仏様に働いていただくような手助けをする活動が、私は宗教者のすべき大事な支援ではないだろうかと思っております。

稲場先生のお話で、宗教者には神仏というアースがあると言われました。アースという言い方も面白いですけれども、神仏という超越者は一種のスーパーバイザーだと思います。宗教者による心のケアがその底力を発揮できるときがあるとすると、この超越的スーパーバイザーがしっかりと働いてくれたときではないかと思います。

熱心な宗教者が陥りやすいことなのですけれども、自分の力量でこうしてやったんだと慢心するということがあってはならない。その人ではなくて、その人の背後でしっかりと、その人が信仰する神仏が働いてくださったからにほかならないわけです。

心のケアには、基本的な処方箋もあると思います。その意味で、さまざまな心のケアのガイドラインが決められてくるわけです。しかし、万能の特効薬はないと思います。そして、言葉で何かを説くということも大切かもしれませんが、相手のそばにいる。とにかく逃げないで、そこにいることが大切です。いずれは離れざるを得ないときがあったとしても、手紙とかメールとか、いろいろなかたちでつながりを保つということが大切です。

私は、そういう関わりを続ける中で、いつかはこの宗教の言葉がお互いの心に通うときがいずれ熟してくると思います。これが今後の宗教的「心のケア」の姿ではないだろうかと思うわけです。

以上で私の報告を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

鎌田　ありがとうございました。

金子さんの報告の中で、私たちが非常に印象に残っている、九日間もおばあさんと一緒に閉じ込められていた一六歳の少年が一〇日目に助けられた話がありました。非常に印象に残っているのは、その少年が「将来、何になりたいか」と訊かれたときに、「芸術家になりたい」と言っていたことです。

この少年が被災の体験をずっと持ち続けながら、どういう芸術家になっていくだろうかと、私は非常に関心を持つと同時に、感銘しました。そのとき、ああ、芸術には心の問題を丸ごと昇華させ、変容させていく力があるのではないかと思いました。宗教にもそういう力があると思っていますが、特に芸術が持つ力には宗教以上の広がりと、境界なし、垣根なしの伝わり方があるので、あの少年の言葉は今も僕の中で非常に強く鳴り響いております。

さて、以上四人の、こころの未来研究センターの連携研究員の諸先生方の報告をお聞きしました。前半の二つの基調報告は、主に伝統宗教、特に伝統仏教と社会との関わりが問題であったと思います。そこから何が今問題になってきているのか。どういうことが現実の問題として浮上してき、対処しなければならないのか。それが前半の方で話されました。

後半には、二人の事例報告の中から、現代の問題が浮かび上がりました。稲場さんのソーシャルキャピタル、社会資本や社会的貢献に関して、いったい現在、宗教はどう関わっているのか。そして、新宗教の場合、そこに関わるどういう事例があるのかが話されました。

神社神道とか仏教とかの伝統宗教の陰に隠れがちであるけれども、特に天理教などは新宗教と言っても、伝統宗教と言ってもいいくらいの伝統があると思っていますが、そういう新宗教の活動が見えないとか、隠れがちであるけれども、そういうこともソーシャルキャピタルとして、社会貢献の問題として捉え、考えていかなければならない。そんなさまざまな問題点が出てきたと思います。

ここで休憩にさせていただいて、その後、こころの未来研究センターの河合俊雄さんと内田由紀子さんからそれぞれ指定討論をしてもらい、パネルディスカッションに移っていきたいと思います。

第二部　討議

指定討論1

河合俊雄

震災対策ワーキンググループ

こころの未来研究センターの河合俊雄です。私は専門が臨床心理学で、今回の震災に関しては、日本箱庭療法学会と日本ユング心理学会で合同の震災対策ワーキンググループというのを立ち上げて、私がそのワーキンググループの委員長をしています。仙台と石巻に、いままで三回入って活動を開始しております。

指定討論を行う前に、自分がどういう活動をしているのかということに、ちょっとだけ触れておきたいと思います。小さな学会ですので、それこそ包括的なことはできないのです。そこで教員とか、医療関係者とか、ケアする人のケアということを重点的にやろうとしています。

それはどういうことかと言うと、先ほど稲場先生が言われた、話の「アースする」という部分にとても関わってくると思います。いま被災地は研修会とかがとても多いのですね。みんな、それで疲弊しています。向こうに入って思うのは、ニーズとオファーのミスマッチということが、とても大きいのではないかなと思います。

物に関してもそうで、石巻の例ですが、一方では給食がコッペパンと牛乳しかないのに、新品のサッカーボールが二〇個ぐらい積んであるとか、生徒一人当たり一〇個の消しゴムが送られてくるとか、物にあふれかえっているのだけれども、何がいちばん欲しいのですかときくと、「校舎が欲しいです」というふうに、ものすごいミスマッチが起こります。

それは心のケアに関しても同じだと思うのです。どのあたりが大事かなというと、やっぱり情報交換会というような言い方をしたりしているのですが、ケアに関わっている人たちが聞いたり、また自ら語ったりする語りをどうアースしていくかという部分がとても大事ではないかなと思っています。

それから、子どものケアということで、スクールカウンセラーを直接派遣することを始めていまして、それも、一人の人がずっと同じところに行くということを始めています。それも、先ほどの玄侑さんの話にもあったのですが、とても調整が難しいということで、その問題にも後で触れたいと思っています。

日本人のベースにあるもの

まず断らせていただきますが、鎌田先生から全員に一個ずつ質問をしろと言われているのですが、それは無理なので、こういうことをディスカッションしてほしいという、私の観点からの希望をお伝えしたいと思います。

一つは、一方で無常とか悲しみとか、日本人のベースにあるものとか、稲場さんの話の中では、無自覚の宗教性ということも言われていて、そこのつながりという部分は確かにある。

私は神戸の大震災の被災者で、震度7の地域にいたのですが、低層マンションに住んでいて、物は壊滅的に壊れましたが、建物自体の被害は比較的少なかったのです。五戸あるマンションの住人は普段は絶対顔を合わさないようにしています。朝、いま飛び出さないと電車に間に合わないと思ってドアを出ようとしても、どこかの玄関で、ガタッと音がしたら慌ててドアを閉めて、顔を合わさないようにするとか、そういうふうにしていました。

ところが震災直後は、どこで水が配られた、カップラーメン二個もらったから一個あげるとか、五戸しかない低層マンションの中で驚くべき助け合いです。あっという間に、湧いてくるように人とのつながりができてくる。

河合俊雄氏

これは日本人の何かがベースにあると思います。

それで、その後、近所で親しくなっていっしょに温泉旅行に行ったり、新しい恋愛が生まれたりしたのかというと、そんなことは全然なくて。アメリカで、飛行機が遅れるときに恋愛が生まれるという統計があるらしいですけれども、われわれは少なくともそういうことはなくて、三、四カ月たつと、また昔のように一切の交渉はなくなります。

けれども地震のクリティカルなときに、基層（ベース）にあるような日本人のつながりみたいなものが出てくる。それはすごいものだと思いました。人々の温かさ、山口組も頑張っていましたけれども、すごいつながりが出てきます。今回の地震に対しても、そのことがかなり言えると思うのです。それが一つ、確かなことだと思います。

世界観が壊れた

ただ、もう一つ、玄侑さんの話を聞いていて、私はとても共鳴したところがあるのですが、そういう世界観がひょっとすると今回壊れたのではないかとも思うのです。一方で、それは生きているのだけれども、その世界観が壊れてしまったのではないか。

玄侑さんが言われたように、津波に襲われたところには多くの神社があって、幸をもたらす水への感謝と恐れが認められます。ところがわれわれは原発というまったく原理の違う新しい神を無自覚に受け入れていたのです。そしてその神をちゃんと迎え、感謝もしないうちに、いまは追放しようとしている。それは、とてもちぐはぐなことをしているのではないかと思います。そして原発を追い出したから、この世界観の変化は、もはや巻き戻すことができないのではないかなと少し思っています。

それはどういうことかと言うと、自然に帰るとか、そこへのつながりとかいうことをベースにした世界観ではないものが入ってきてしまったのではないか。そうすると、復興の場合でも、もちろん町をどうつくるかとか、どう堤防をつくるかということはあるのだと思うのですけれども、宗教家とか宗教者の役割として、そういう世界観のレベルで、どう復興とかビジョンを提供できるかということは、とても大事だと思いました。

玄侑さんの言われた、そんな恐れのなくなる町になってどうするのだというのに、とても共感しましたね。京都というまちは塀のない都市です。ヨーロッパ人からすると、びっくりすることなのです。唯一、京都に塀をつくろうとしたばか者は豊臣秀吉で、お土居というのをつくろうとしたのですけれども、京都は何に対して守っているかと言うと、霊ですね。鬼門があって、bad spirit、悪い霊が入ってこないように守っているのです。だから、その部分はとても大事なのだけれども、逆に悪い霊が力を持ってくることを知っている。

日本史の上田正昭さんの講演を聴いて感動したのですけれども、御霊会なども霊を追い払うのではなくて、一般民衆は、悪霊であろうが何であろうが、それが来るとそのパワーをもらおうとしていたそうです。そのもたらすものと恐れの両方をちゃんと感じられるという世界観が、なくなってしまった。自然だけでないものになったということは、やっぱり宗教者は考えてもらわないといけないのではないかなと私は思っています。だから、無常とか、日本の世界観の大事な部分が、ひょっとして変わってこざるを得ないのではないか。その部分も、難しいことですが討論できればと思っています。

いかに小さな物語に回帰していくか

私みたいに心理療法をしていますと、そういう大きな物語には関わらない。たいていの人は関わらないですよ。被災者とか子どもとかが、どうしてよくなっていくかというと、小さな物語が出てくるとき、つまり、家族のもめごととか、いじめられるとか、そういう小さな物語を扱うことによって心のケアは成立していきます。だから、大きな物語から、どう小さな物語に回帰していくかとい

う部分が、ケアとしてはとても大事だと思うのです。

それで、私が三度、四度、訪問しています小学校で、たまたまですが、絵を描いていたのです。これがわりと一般的プロセスだと思うのです。これはたまたま二月に描いた自由画、小学校一年生ですね。これが地震直後です。ぐちゃぐちゃです。注目してほしいのは、ストラクチャーが壊れるというところがとても印象的で、ある種サイコティックな状況になるのです。だけど、六月になると元に戻ってくるのです。

人間の心とか子どもというのは、相当な可塑性を持っていると思います。ちゃんとリカバリーしてくるのです。ここで、また個人の物語になってくる。学校の先生が言われていましたが、「いやあ、しんどい子はいますよ。でも、そういうのは、もともとしんどい子で」と、そういう場合が圧倒的に多いです。

だから、ある時間というのはとても大事で、いま地震に遭ったショックみたいなものからは、みんなリカバリーしてくる。そして、その中でみんな、いまそろそろ悪夢を見始めることを語れるようになってくる。

それも心理療法の中で立場が分かれるのだけど、悪夢を見たら、トラウマワークをしないといけないとか思う人がいるのだけど、私はそうは思わなくて、悪夢を見るようになったというのは、もう治まってきていることだと。語るというのは、わあ、これから扱わないといけないというサインでは必ずしもなくて、治まってきていることだと私は思います。

だから、何度も訪れている小学校の先生が、「このごろ地震の夢を見るんですよ」とか、初めて津波に遭った体験とかを最近語ってくれるように、語られるようになって、ああ、治まってきているのだなと私は思いました。

けれどもそういう個人の物語で解決する部分はいいのだけど、宗教者はやっぱり大きな物語を考えるべきではないかなと私は思っています。私の立場のような心理学をしている人も、小さな物語を扱うことも大事なのですが、同時に大きな物語を考えていく必要があるのではないかなと思います。

公平性の問題

もう一つ、ディスカッションのポイントとして考えてほしいなと思うのは、公平性の問題です。玄侑さんが言われましたけど、億単位の寄付がなされているのだけど、それが全然回ってこない。公平でないから。人間の心って、なんて難しいのだろう。社会って、なんて難しいのだろうと思いました。

避難所でも、物がないのですが、ひとたび物資が来ると、あの人がたくさん取ったとか、私が家に帰っている間に配られてしまったとか、ものすごくもめます。そこが人の心の面白いところであり難しいところで、この公平性ということがものすごく難しいなと思います。

われわれの場合も、継続的なスクールカウンセラーの派遣をやろうとして、準備はできているし、コーディネートもできているのだけれども、それで、こういう準備ができていますから、文科省のスクールカウンセラーの派遣から予算を回してくださいと言うと、駄目ですと言われます。それは公平でないからと。

文科省はどういうことをしているかと言うと、第一期、第二期で六週間、スクールカウンセラーを被災地に派遣しました。それは週替わりです。六週間も行ける人はいませんから。週替わりで人が替わる、そんなことはすごく困るというふうにかなり声も上がっているのです。

だから、われわれがせっかくそういうことをやろうとしても、いや、そんな一校だけには不公平だからできないということになります。この公平性って、どういうことなのだろうということも考えていきたいなと思っています。というか、私からの提案なのですが。

見えないものと戦う

もう一つは、今回見ていると、福島の場合はとても特殊だなと思います。見えないやつをどう相手にするのか。心理学は、見えないものをもっぱら相手にしているのですけれども、妄想というのが、そこから生まれやすいし、とても危険な状況だと思います。

それから、こうやっていろいろな宗教を排除することによって、玄侑さんはご存じだと思うのですけど、福島までカルト的なものが出てきていますよね。だから、むしろ、そういうことを排除すればするほど、人々のニーズはあるのでカルト的なものが生まれてしまう。やっぱりそこは宗教が絡むべきところではないかなと私は考えています。そういう見えないものと戦うと、そのときに宗教はどういうことができるのか。そういうこともディスカッションできればいいと思います。

大きくまとめると、アースするということの大切さと、無常ということに加えての世界観の変化ということですね。それを見えないものとか、生まれてくるカルト的なものとか、考えていければと思います。

鎌田　ありがとうございました。大きく、三つのポイントがあったと思います。第一に大きな物語と小さな物語の関係性の問題、第二に公共性・公平性の問題、第三に見えないものとの関係性の問題です。では続いて内田さん、お願いします。

指定討論2　内田由紀子

陰と陽を内包する価値観

こころの未来研究センターの内田です。よろしくお願いいたします。

今日は指定討論ということですが、たいへん素晴らしいお話の後で私がどのようにまとめていいのか、力量不足で一人一人の先生方に対する質問を挙げさせていただくのがとても難しかったので、提案といいますか、ディ

スカッションの元になるようなものをいくつかご提供できればということで、お話しさせていただきたいと思います。

私の専門は文化心理学で、基本的には実験心理学的な手法で、心について研究を行ってきております。特に「文化」が付いているわけですから、日本文化なり、私たちが暮らす中での文化的な価値観であるとか、ものの考え方、社会的に共有しているような文化的な価値というものと、心の働きの関連について研究をしてまいりました。

文化心理学にはいろいろな研究があるのですけれども、いくつかの日本文化についての実証研究をご紹介したいと思います。

たとえば、陰と陽というのを考える。幸福というととてもいい意味のように思われるかもしれませんが、一方で幸福の悪い側面を思い付くこともできると思います。たとえば、幸せすぎるとかえって怖いということであるとか、ずっと運がいいことが続いていると、逆に何かを落としてしまいそうで不安になるといった感覚です。

逆に今不幸せというのは本当につらいことかもしれないけれども、それを自分を向上させるきっかけにするというようなとらえ方もあります。幸せ、不幸せにしても非常に複層的で、ポジティブとネガティブ、陰と陽が内包するような価値観があるということが、日本的心理傾向の特徴として示されてきました。

内田由紀子氏

つながりを重視する日本的価値観

それから、やはりつながりを重視するということです。たとえば、思いやりです。「おかげさま」、「持ちつ持たれつ」という言葉がご発表の中にありました。思いを人にはせる。遠くにいても、ずっと思っているよという手紙を出す、メールを出すということは意味があるよという話があったと思うのですが、まさにそれは自分の思いを他者に添わせたいという気持ちを持つこと。こういうつながりを重視することも、日本的な価値観の中で育まれる心理傾向の中に表れてきたといわれています。

また、もう一つのつながりというのは、人間同士のつながりではなくて、ホリズムといわれるものです。万物が絡み合っているというような考え方です。たとえば、ある原因と結果が一対一対応をするのではなくて、思いもよらないことと、全然別の結果というのが、ぐるぐる回ってつながっているという思考様式です。

自分の運命や行動は、自分一人で決められるものではなくて、さまざまな人の思惑、考えであるとか、偶然重なり合って絡み合っているのだという人生観が流布しているということがいわれています。

こういった日本文化の心について、集団主義とか相互協調性という言葉で文化心理学の中でも語られてきたわけですけれども、一方で、近年の日本の社会においては、非常に個人主義化が進んできたということも指摘されています。

たとえば、自分個人の選択を重視したいという傾向があります。私だけの何かというのを持ちたいという気持ちであるとか、しがらみはしんどいから自分一人でなんとか努力をしたいというような、個人主義的な価値観がグローバリゼーション等さまざまな影響のもと、戦後広まってきたと指摘されています。

ところが震災後にどんなふうに意識が変化していったのか。たとえば先ほど河合先生がおっしゃったような、弱い紐帯が意識されるようになる。それまで顔は知っているけれども、お互いあいさつもしないという人たちについて強く意識し、そこに意味を持たせていくというようなことがある。

幸福感も変化する

後でちょっとお見せしたいのですが、幸福感自身も変化するということがあります。つなぐとか、支えるとか、絆という言葉を震災後に多く耳にしたわけですけれども、こういったことが実際に見直されるようになったのではないかと思います。

本日は宗教がテーマになっているわけですが、宗教というのは特に、つなぐ、支えるという価値観を支える働きをし得るのではないかというのが、四人の先生方のお話を聞かせていただいてもった感想です。

電通総研が震災一カ月後の生活者意識をホームページで発表しています。「震災で目覚めた利他的遺伝子」という書き方がしてあります。たとえば、「自分第一主義から家族回帰へ」、「当たり前から、ありがたみ・感謝へ」、「人工的な生活から、自然と調和した生活へ」、「自分の将来のためにから、次世代の未来のために」というように、電通さんが実際に全国の二千名の方々にアンケート調査を行ったところ、つながりというものを意識したような回答が増えていたということを発表しています。

私も内閣府の幸福感に関する研究会に入っていますが、そこで被災地以外の二〇代、三〇代の一万人以上の人たちが、いったいどんなふうに人生観を変化させたのかという調査を行いました。

やはりあれだけの圧倒的な津波の映像を見て、被災地にいる人でなくても、かなりショックを受けていて、私も京大の学生なんかと話していると、三月はずっと落ち込んで何もできませんでしたというようなことが、本当

にあったわけです。

ところが、人生はまさに悪い意味での無常であり、何をやっても無駄だという虚無的・刹那的思考が増えたかというと、そうではなかった。虚無的な考えを持つ方向への変化は小さく、むしろいちばん大きく挙げられた変化は結び付きの重視でした。

もう一度自分の生活、当たり前だと思っていることを見直したいという人が増えていたのです。また震災前の一二月と、震災直後の三月に同じ人たちに幸福感について聞くという調査も行っていました。一二月の時点の幸せ感が、震災後にどのように変化したかを見ていたのですが、一つ大きく分かるのは、まず地震が起こった後に幸福感が上がった人たちがいるということです。それはどういう人たちだったかというと、震災後の幸福感の評定の時に、地震のことを思い浮かべた人たちでした。家族や知人に具体的に被災者がいないけれども、震災について思い浮かべたという人は四割ぐらいいました。思い浮かべた人というのは、どうやら震災前から少し幸せ感が高かった人たちでした。その人たちは、自分の現状をもう一度見直して、幸福の基準を変えていったと考えられます。いままで当たり前のように考えていた日常生活を見直して、自分の今ある幸福に対して感謝するという気持ちが芽生えたというふうに解釈することができるわけです。しかし逆に半分ぐらいの若者たちは幸福感の判断の際に大震災についてほとんど考えもしなかったし、その人たちの幸福感は何も変わっていませんでした。

祈ること、信じること

さて四名の先生方のお話をおうかがいして、もしもご回答いただけるならうれしいなというようなポイントを挙げさせていただきます。

まず一つ目が、祈ること、祈られることです。無自覚な宗教性を人々は持っているように思います。具体的な宗教心に直結しなくても思わず祈るといったことがあります。津波の映像を見ているときに、一人でも助かってほしいと思わず祈るというような、その祈りの気持ちです。いったい何に祈っているのか分からないけれど、とにかく祈ってしまうというメンタリティーは、日本的な宗教観として、強くあるのではないかと思うわけです。

そのような宗教観の中で考えたときに、玄侑さんがおっしゃった情報価値が暴落したということが気になりました。では精神的な価値が、これからいったいどういう意味を持っていくのか。

精神的・宗教的な価値よりも、情報的な価値、メディアで報道されるようなことや、統計的な何か、科学的に示された何かを、私たちは信じて暮らそうというようなことが近代社会の中で長くあったと思います。

そういうものが信じられなくなった中でも、人は、たぶん何かを信じようとするのではないか。何かを信じたい。何かに自分の気持ちのよりどころを見つけていきたい。自分の意見が本当に正しいのか、間違っているのかを知るために、いろいろなものを手だてにしなければならない。このような場面で宗教的なものが再浮上してくることがあるのでしょうか。

認知的な反応と感情的な反応

また、放射能のように目にも見えない、味わうこともできないものに対して、私たちはいろいろな反応をします。いま実はメディアの報道分析を行っていて、震災後の番組でどのようなことが報道されているのかということを分析しています。すると、非常に認知的な反応と感情的な反応が混在しているという感じがあります。

それはどういうことかと言いますと、たとえばセシウムは、科学的にみてかくかくしかじかの点で危ないですというように、人の認知機能、つまりは頭を使って考える情報を専門家などが提供するわけですが、その処理には時間がかかってしまいます。

そんな場面で、今度はキャスターやコメンテーターが感情的な反応を投げかける（たとえば「怖いですね」といったようなコメント）。これにはかなりすぐに反応してしまい、嫌だとか、怖いとか、拒絶したいという気持ちはすっと入り込んできます。報道の中でもニュースキャスターの意見や、被災地の人たちの反応の中に感情的な反応が多く、認知的な情報と混在して報道されているということがあります。

放射能に関する事実を私たちは目で見ることができない。味わうこともできない。だけど、そこにある事実に対して、なんとか認知的に処理しようとする。一方で、感情的なところに引っ張られていって、そこでまた新たな事実がつくられていくというような流れが、メディアの提供するコンテンツの中にあります。

こういった中で宗教的な、あるいは精神的な支柱が、感情のぶれを制御するように働いてくれるのかどうかということについて、知りたいなと思っています。

ビジョンをどう示すか

あと、これは河合先生も先ほどおっしゃっていましたけど、未来像、ビジョンをどう示すか。悲しみを背負うということも重要な一つの要素だと思うのですが、その後どうしていくか。

もしかすると、コミュニティとの関連というところから考えた方がいいかもしれなくて、稲場先生、金子先生のお話の中にあった支援とか救援ということについて、弱い紐帯やランドマーク的な役割はもちろん、コミュニティ施設としての役割を宗教施設が果たしうるということは重要だろうと思います。

その中で、「連携するとすごく社会的な力はあるのだ」というような話があったと思うのですが、これはいったいどういうかたちで実現可能なのでしょうか。

宗教に対して抵抗感があるというお話もありましたけれど、いろいろなものとつながっていることによって、その抵抗感は軽減されていく部分があるのではと思いま

すが、実際にその連携はどのような形でできるのか。これは実際的な問いですね。また、連携は来る者拒まず去る者追わず、なのか、それとも、もっと積極的に働きかけようとしているのかということも知りたいところです。

先ほど示しましたように、震災後に半分ぐらいの若者たちは、実際に被災者の知人がいなくても自分の価値観を変えたという人がいて、その人たちは自分の幸福の基準を見直すということをやっているわけです。一方で、半分ぐらいの人たちはそういう反応があまり見られませんでした。

これは若い人たちだけではなく、全体的に一つの流れとして、二極化する流れがあるように思います。あるものに強くコミットする人もいれば、全然関わらないという人たちがいる。こうした「関わらない」ところにまで積極的に働きかけて連携を模索するのかどうか。

あまりまとまりのないコメントで申し訳ないのですが、以上で終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。

鎌田　ありがとうございました。それでは早速、パネルディスカッションに移ります。

パネルディスカッション

二つの大震災と宗教

鎌田　冒頭の開催趣旨説明のところで話しましたけれど、阪神・淡路大震災と今回の東日本大震災の二つは、二〇世紀終わりの一九九〇年代と二一世紀初めの二〇一〇年代と大きくつながりながら、違う断層を見せていると思います。

神戸での地震は都市型の直下型の地震であった。神戸という一つの大都市を中心に被害があった。今回は、農村部や漁村部、広域にわたって大きな被害が沿岸部四〇〇～五〇〇キロも続いているわけです。そして、津波が加わり、さらに、原子力発電所の爆発による放射性物質の飛散とそれによる汚染という三重苦の状況にあるという点で、一六年前の問題とは大きく異なります。

もう一つ、一六年前の一九九五年三月二〇日には地下鉄サリン事件に発するオウム真理教事件があった。これもまたまた非常に大きい違いです。この事件によって、宗教や精神世界に対して危険なイメージが一挙に高まりました。日本や世界各地で、宗教に対するイメージの転換点でもあったと思うのです。

阪神・淡路大震災では「ボランティア元年」といわれたほど、ボランティア活動が活発になったのですが、宗教家の活動が見えないとか、宗教者の声が消えたというのは、あの時点でオウム真理教事件がかぶってきて、それに対する報道一色に変化したことも影響したと思っています。そして、このオウム真理教問題はまだ解決されていない。いまに至るも尾を引きずっていると思います。そして、宗教に対する社会的イメージも回復しないまま、ダメージを受けたまま現在につながっています。

しかし今回、東日本大震災の被災地で、民間信仰を含めて生活の場で宗教心や、宗教的行為、助け合いがいろいろな形で起こってき、実際に生きている。そういう、生きて動いている宗教性をベースにして、宗教的問題がポジティブな面でも浮かび上がってきています。その背景として、社会的危機、たとえば年間の自殺者三万人が十数年も続いているという状況があります。そういう点からも、宗教に対する、もう一つの違う観点や期待も社会的にあるのだと思います。

そういう中で、宗教自身、あるいは宗教教団がその大きな社会問題に対してまだまだ答えきれていないし、整理しきれていないさまざまな問題を含みながらも、しかしさまざまな宗教活動が動き始めている。今回、そういう、動き始めている生々しい現場の当事者的な側面や問題点をさまざまな観点から提示していただいたと思います。

それで、指定討論者からの全体的な質問、こういう問題点を討議してほしいということがありました。それをもう一回復習しておくと、宗教が抱える大きな特色として救済とか、世界観とかに対して大きな物語を準備するというのか、人間の生き方として、そういう物語を与える。あるいは、そういうものを支えにして生きていく力になるのかという問題。

そういう大きな物語が壊れたかもしれない中で、どういう未来のビジョンなり生き方を宗教が提示していくことができるだろうか。そういう大きな復興支援のあり方があるのかどうか。これは非常に困難な問題ですが、私は、河合さんの問題提起を聞きながら、シシ神の死を思い出しました。

『もののけ姫』という宮崎駿のアニメーションの中で、森のヌシの神であるシシ神が殺されてしまいます。シシ神が亡くなって、しかしまた微妙に復活して、森が緑に戻っていきます。しかし、山犬に育てられたもののけ姫のサンは、シシ神が死んで森が返ってきても、もう昔のあの森とは違っている。死んだものは、もう戻ってこない、という言い方をしていたと思うのです。

あの場面は忘れられない印象的なラストシーンでした。今回震災があったときに、私も神社神道の立場が一回壊れたと思ったのです。ある大きなものが壊れ倒れた。大きい伝統文化が壊れた。

その壊れたものを、どうやって回復し修復できるのか。かなり深刻な問題を突き付けられているというのが私の受け止め方で、それに対する答えは、私自身まだはっきりとしていない。そういう問題が一つあります。

それから、公平性。これは実際に社会のネットワークや、ある物資を送ったり伝えたりしていくときに非常に重要な問題であると同時に、微妙な、さまざまな葛藤、確執を生み出す。これをどう考えるのか。

それから、今回、福島原発問題が突きつけた、見えないものに対していくことについて、宗教の側からどうい

うかたちで取り組みがあり得るのか。

それ以外にも多々問題はありますが、一点一点でなくてもかまいませんので、島薗進さんから始めて、玄侑さん、稲場さん、金子さんという順番に、指定討論者が出してきた問題点に対して、考えていることを自由に語っていただきたいと思います。

大いなる悲しみと宗教の役割

島薗　稲場さんの絵にアースというのが出てきて、その後、ほかの方も言及されました。つまり、個々の方の悲しみ、苦しみを支えようとするときに、それをさらに支える大きな何かが必要だと。それが大きな物語と言えるのかもしれない。そして、それはかなり宗教に関わるものだということだったと思います。私も本当にそういうふうに思います。

宮沢賢治の話を出したのは、彼は常に、自分のやるせない悲しみを大いなる悲しみとして表現しようとしたというのか、そうすることで人と分かち合う道を求めたということだと思います。そういう試みが支援ということから生まれてきてほしいものです。

ですから、それは個々の支援の場所でも、それぞれの悲しみを大いなる悲しみに、そして大いなる物語につなげる、そういうことが起こっているのだし、そして遠くにいても、私の場合、東京で連絡をしながら、何かそういうことを求めているのではないかと思います。それは、時代の中で新しい宗教的なものを生かし直していく道を求めていくということなのかなと思いました。

それから、見えないもの、あるいは公平性ということに関わるかもしれませんが、まさに一九九五年はオウム事件が起こったので、あの震災の影響よりもオウム事件の影響で、宗教というものに対する信頼が壊れたという感じが非常にあったと思うのです。しかし、今回壊れたのは、国家とか学者とか権威あるものが頼りにならないということが、かなり共有されていると思います。

少なくとも放射能に関しては、みんな自分で判断しなければいけないので、どの専門家がどう言っていても、すぐそのまま受け入れはしないし、政府が何を言っても、なかなか簡単には「うん」と言えないと思っている。それはもう非常につらい。玄侑さんがダブルバインドとおっしゃいましたけれども、つらいことなのですが、しかしそこにはポジティブな面もあるのではなかろうか。

この間、宗教は従来の役割をこえて、たとえば路上生活者の支援とか無縁社会に対して立ち向かうということをやってきた。あるいは、個々の宗教集団をこえて社会の苦難と取り組むことをやってきたわけです。

それは、二〇世紀、二一世紀を通して、ますます深刻になってきている、われわれそれぞれが孤立していくということ、それから、失われた信頼に対する取り組みの道を見いだそうとしていたのだと考えることもできる。

そもそも放射能について、こんなに情報が信頼できないというのは、私がだんだん分かってきたことですが、つまり核時代に核を管理する人たちは真実を言わないということなんですね。それは原爆のときにそうだったし、それ以後ずっとそうなのです。

ということは、世界の権力体制が本当に住民、市民の求めているものには答えないということが、そこに典型的に表れているので、そういうところでこそ宗教の力が表れてくるはずだと、少なくとも私は思いたい。

それは絆ということなのですが、弱い絆、紐帯を結ぶというようにおっしゃったと思いますが、現代の絆には、そういう面があると思います。いわゆるネットワークで、SNSとかツイッターというものが役立つ時代です。一見はかなく断片的に見えるものが、組み合わさって有効に働く場合があり得るので、そういうものを育てていくことが、いま求められているのではないかなと思います。

宗教も協力するというときに、何か組織をつくって協力することは必ずしも必要ではなくて、いろいろなかたちでお互いが助け合っていくという姿勢を表し合うことが、弱い絆のつながりの芽をつくっていくことがあり得るのではないかと思います。

鎌田　ありがとうございます。

「今回壊れたのは国家と学者」というのは、なかなか当たっていると思います。それから、情報を操作する者というか、管理する者、支配する者、情報を提供する側に対する疑い、不信。いままでもいろいろな疑いがありましたけれども、これほど多角的多層的に信頼度が暴落したのも今回が初めてでした。

そういう中で、いま言われる弱いネットワークみたいなものから、もう少し大きなうねりのようなものが生じてきているという側面もあると思います。

では次に、玄侑さん、お話しください。

生活からくる力

玄侑　河合先生から、大きな物語と小さな物語という話があったのですけど、大きな物語ということで言うと、これだけ大きなことが起こったのだから、パラダイムシフトが起こるべきであるという考えが起こると思います。そうすると、幸福感に変化がないという人たちは、いったいどう考えているのだろうと、幸福感が少しでも変わった人たちは、いら立ちをもって思うわけです。

それが進むと、オウムがもっていたハルマゲドンを待ち望むという考え方にいくと思うんですね。つまり、いま福島県人は、もう一発来ないかなという考えさえ抱いてしまうんですよ。いや、福島県人と言ったらまずいですね。少なくとも、私のどこかにはその気持ちがありますね。つまり、もう一発、南の方に来れば何もかもはっきりするでしょう。

いま、福島で三発ぐらい来た状態で、それでもあちこちの県知事選挙では、原発推進派が通っていくわけじゃないですか。そのことに対して、実は報復したいという欲求を持つ人々がいる。

本当にそうなってしまうと、オウムのハルマゲドンな

んですよね。だから、ここを用心しなければいけない。やっぱりみんな、報復だけは考えないでいくしかないと思います。

たしかに、大きな物語は必要なのですけれども、私は、それは宗教の教義とか、そういうことであるよりも、むしろ生活なのではないかと思います。今回、被災地で無意識の宗教性と呼ばれるようなかたちで発揮されているものは、私たちの生活そのものではないでしょうか。

あの地域の人たちの暮らしを見ると、ほとんどみんな、一戸建てに住んでいます。そして、庭があって、畑があって、防風林があって、それだけの土地、屋敷を、自分のところで管理して、防風林の向こうに行かないと隣の家はないのです。それだけ距離があるからこそ、隣の人と会ったら、お茶飲もうよという気持ちが自然に芽生えるんですね。それで一〇時とか三時とかに毎日のようにお茶を飲み合っているわけです。

都市生活を送っていたら、さっき河合先生の話にもありましたように、隣に住んでいる人も無視しないとやっていけないわけです。満員電車の中に大勢知り合いがいたら、やりきれないですよ。挨拶だけでも忙しくてしようがない。

だから、都市に暮らすということは、そういう意味では非常に不自然な生活なんです。距離が近く、ほとんど肌が触れ合うような状態で、満員電車に乗りながら、べつに恋愛が芽生えるわけでもない。つまり見てないんですね。ですから都市には、非常に不自然に人間の欲求を押し込めているところがあると思うのです。

だから今回、東北で発揮されているのは、生活から来る力だと思うんです。人間とのつながりというのは、本来はつながりたいだけの距離を持って暮らせば、自然発生するんじゃないでしょうか。そんな気がします。もちろん、そこでは仏壇を大事にするとか、いわゆる慣習的な意味での宗教性、儀式性というか、それを大事にする面もあるとは思います。

それから、先ほどの駄目になったものというのは、本当にそう思います。専門家といわれる人たちですね。専門家って、こんなに飼い犬みたいなものだったのか。つまり餌をくれる方向しか向いていなかったということがはっきりしてしまった。

ですから、学者の世界でも超楽観論と超悲観論しかなくて、まともに真っすぐに見て語れる人がいなくなった。それが専門家というものになってしまった。もう一度、人は再びジェネラルにならないといけないのではないかという感じがいたしました。

公平性ということですが、赤十字の義援金もそうですけれども、公平にやらなくてはならないから、なかなか配れないというのは、あまりにも方便について無知すぎると思います。

たとえば、一つのまんじゅうを兄弟で分けるときに、きっちり真ん中で切らなくてもいいわけですよ。たとえば弟がとにかく左右同じになるように切って、次に兄貴が選べばいい。切る人と選ぶ人を変えれば問題ないし、トラブルは起こらないわけです。あるいは、余った分は仏様にという手もあるわけで、「公平」という架空の概念に振り回されているような気がいたします。

それから、見えないものに対する脅威。これも本当に大きいのですけれども、いままで、まるで放射線量がゼロだったみたいにおびえまくっているんですね。しかし、申し上げておきますけれども、みなさんがおいしいと言って食べるバナナは一本で、だいたい四〇ベクレルです。放射性カリウムが入っております。これはなんでもない普通のバナナに入っているんですよ。

また、京都人はとりわけ食べているであろうコブ（昆布）、だしを取ったりするコブですね。これには一キログラム当たり約二千ベクレル入っていますので、みなさん十分に摂取していらっしゃいます。だから、どう考えても、いままでの内部被曝だってゼロではないんですよ。

まずは普段食べていたものにどのくらい入っていたかを知り、冷静になってほしいんです。たとえばニューヨークに一回行けば二四〇マイクロシーベルトですよ。二往復でほぼ一ミリシーベルトです。そんなに怖がっていたらスチュワーデスさんなんかになれないでしょう。パイロットだって結婚もできないはずです。

そういう周辺情報、あるいは、原発以前からのあり方に関する情報をきっちり言ってくれれば、さっきの認知と感情が分離するというようなことが、もうちょっとなくて済むのではないかという気がいたします。

鎌田　ありがとうございます。稲場さん、お願いします。

共感縁が生まれつつある

稲場　三点ぐらいお答えしようかなと思います。

一つ、河合さんの方から、阪神・淡路大震災のときのつながり、マンションで急に支え合いができて、三カ月たったら、また元に戻ったという話がありました。日本人がつながりたいという感覚が、非常事態で起きるのかどうか。あるいは、文化を越えて人間に共通しているのかどうかということですけれども、アメリカでも、二〇〇五年にニューオーリンズでカトリーナの大災害がありましたね。あれは四十数万人が家を失ったというのですけれども、当時も、被災地から離れたところのアメリカ人二〇万人以上がインターネットで自分の家を提供するという声が上がったんですね。

大災害とか、そういったことが起こったときには助け合いとか支え合いが起きる。それを「災害ユートピア」という言葉で表すことがありますけれども、阪神・淡路大震災でも今回でも、そういった支え合いがあった。

その中で、先ほど河合さんの話で、三カ月で阪神・淡路大震災のときは普通に戻ったと。まあ他人というかたちに戻ってしまったところもある。阪神・淡路大震災のときにボランティアが、あれほど全国から駆け付けてボランティア元年といわれて、日本社会が変わるのではないかと言われた。私も神戸で、ボランティアをしながら

そう思ったけれども、結局変わらなかったわけです。

それから一六年間、日本社会で何が起きたかと言うと、経済が悪いなかでリストラ、人を物のように次から次へと切っていく。そして、勝ち組、負け組で分断された社会になっていった。支え合っていく、つながるどころか、ますます切れていく。そして、しまいには無縁社会という言葉で、まあ先ほど金子さんの話にもありましたけれども、そういった社会にまで突き進んでいった。

変わると思ったのに、何が日本社会をそういうふうにしてしまったのか。今回の東日本大震災で変わるのかどうかですね。私は価値観の転換というか、いまパラダイムシフトというお話がありましたけれども、まあ変わるのではないかと思っているわけです。

阪神・淡路大震災のときには、それまで近代的価値観で、効率、利益重視でひた走っていた。日本社会はこれはおかしいというので、心の時代ということが二〇年、三〇年言われている中で、阪神・淡路大震災が起きた。しかし、変わると思ったのに変われなかった。

それぐらい、われわれ日本人、現代人の中に効率利益重視、経済重視で走り続けるという価値観がこびり付いている。それを、地震が起きたからボランティアがあれほど駆け付けた。一気に変えようと思っても、それを変えた途端に、生きる意味の貧困とか、自分の生きがいは何なんだ。いままで生きてきた基盤は何だったのか。結局それをぬぐい去ることができずに、引きずったまま、ずるずるずると、新自由主義の時代、つながりが失われるような時代になっていたのです。

ただ、今回は本当に原発の問題も含めて、大きく私は変わるのではないかなと、そういう希望を持ちながら見ているわけです。それは地縁、社縁、血縁というさまざまな縁が、都市が中心ですけれどもどんどん奪われていく。東北はまだまだつながりが強い社会だということで、これも今回、被災地の協力、つながりというのもあると思います。日本全国レベルで考えると、やはり地縁、社縁、血縁といった縁がどんどん奪われていく。

そういった社会になって新たに、たとえば今回の原発、目に見えない放射線におびえている。そして子どもが汚染された食品を食べたらどうなるのかと、お母さんたちが心配して、専門家の言葉を信用できずに、自分たちでインターネット上で情報収集して、お母さん同士で情報交換しているわけですね。

まったく縁のない人同士が、一つの問題に共感を持って、被災地でないところでもつながっている。こういった共感に基づく縁、「共感縁」と私は最近呼んでいるのですが、地縁、社縁、血縁が奪われていく社会だというのは、共感に基づく共感縁が、いま生まれつつあるのではないかと。しがらみがある地域の縁、それもいい面、悪い面はあるのです。でも、新たな時代、共感を基にした共感縁というつながりが、いまの時代を変えていくのではないかなと思っています。

内田さんの方から、宗教やいろいろなものが連携して、どうやって本当に支え合うようなかたちが可能なのかというお話がありました。

ソーシャルキャピタル（社会関係資本）という、地域のつながりでの信頼、支え合いということが、この十数年言われています。宗教を基盤にして、お寺や神社にそんなものができるのかということですけれども。被災地であるお寺、これは岩手県の曹洞宗のお寺ですが、山田町の龍昌寺の住職は、地震の前からお寺をボーイスカウトの拠点にしたり、地域の人たちが常に集うような状況があったのです。

日ごろからそういう、宗教を越えてボーイスカウトとか、あるいは別の地域ではライオンズクラブといったつながりを基に、あるいは婦人会とか、お寺で、あるいは神社で子育て支援の場を設けるとか、そういうことをやっているところは、日ごろから行政と連携ができている場合もあるのです。

そうすると、地震が起きて、政教分離といわれていろいろな敷居が高いところがある中で、地域社会でそういうふうに連携を持っているところは行政とも情報交換ができていて、指定避難所になっていなくても物資が早く来たりする。今後は、宗教の垣根を越えた連携が大事ではないか。

そういった中で、島薗先生が代表を務められている宗援連のような、超宗派、または宗教以外の方も関わるような取り組みの継続が大切です。一時的にちょっとやってということではなく、今回みたいに継続して情報交換をするようなかたちが大事ではないか。

また、政教分離ということがありますけれども、今回は震災後うちの大学でも、私は宗教社会学、社会学が専門ですけれども、教育学の先生、あるいは防災ボランティアたちの先生と連携して、共同でやるプロジェクトを立ち上げて、研究をしています。

従来だったら、たとえば宗教学と教育学が一緒になって研究することは、なかなかできなかったかもしれないけれども、そういった垣根を越えた連携というのが学問の世界でもおきているし、またNPOとかNGO、宗教、お寺といった宗派、垣根を越えた連携も今後少しずつできてくるのではないかなと、希望的に思っています。

鎌田　ありがとうございます。

お二人の発言をまとめて、ポイントだけ整理しておくと、一つは、方便というものがどのようにして可能かという問題があると思いました。それからもう一つ、壊れてきている中で新たに育てていくときに、稲場さんは共感縁と言いましたが、新しくネットワーク化する、これも一つの方便だと思うのですが、そういう力を次の時代に向けてどうクリエートできるかが大きく問われていると思います。では、金子さん、お願いします。

喚起された助け心

金子　宗教者に求められるポイントとして、先ほど河合先生の方から、世界観のレベルでどう復興できるかとい

うご質問をいただきました。私は、その問いを受けたときに、宗教体験をしたのは、いったい誰だったのかということを考え直してみました。

宗教体験というと、ちょっと先走り過ぎているので、超越体験と言い換えてみると、宗教社会学の研究者である関西大学の宮本要太郎先生がこんなことを言っていました。つまり、今回の東日本大震災で本当に千年に一度の大津波が起こって、原発事故、想定外の事態、本当にあり得ないことが起こって、そして自分自身がそれを目の当たりにして、それに巻き込まれてしまった。これは一種の超越体験と言っていいのではないかと。

宗教者は、それぞれなんらかの超越体験、つまり超越者の臨在体験を持っていて、それに基づいて宗教的信仰をしている場合が多いのですけれども、いったい被災者にとって思いがけないこの超越体験のことを思うと、それはかなり宗教的な領域に近いものではないのだろうか。やはり震災に関連したある会合の中で、そういう問いかけをされたのです。

私は宗教者でもあると同時に宗教研究者でもあるのですが、この問いかけを聞いて、自分自身の立ち位置をすごく突き動かされるような思いを感じたのです。それは、語弊があるかもしれませんけれども、そういった超越体験をされた方にとって、どれほど悲痛な内容であったにせよ、余人にはできなかったある種の得難い体験だったのではないか。宗教者ならば、この超越体験から宗教体験を作り出すかもしれない。そして、宗教研究者としては、この体験をこそ研究テーマとして掘り下げるべきではないか。そのようにも考えてしまうわけです。私自身は、その意味で被災者の方の今後の宗教心の変容に強い関心を抱いています。

稲場先生がおっしゃった災害ユートピアについてですが、これは河合先生がおっしゃるように、日本人だけのつながりではないと思うのです。もっと普遍的なものであって、『災害ユートピア』という本で、レベッカ・ソルニットという女性の方が書いていたのを思い出しました。ソルニットさんによれば、基本的に何を信ずるかによって人間の行動は変わってくるわけですが、結局、人間を普段から信じている人たちは、そういう非常事態になってもパニックを起こさない。むしろパニックを起こすのは、権力者とかエリートと呼ばれている人たちだというのです。

実際、今回の大震災においても、日本人は非常に落ち着いていると世界からも評価されました。たしかに落ち着いて行動している方がほとんどです。パニックを起こしていたのは、むしろ一国の総理である菅首相だったわけですね。

パニックを起こさなかった一般の人々は、やはり普段の日常生活の中で、実はマンション住まいをして、満員電車に乗って、会社に通っているような中でも、どこかで人間を信頼していたのではないかと思います。だから、表に現れず、埋もれていった信頼感が、こうした突発的な危機感の中から不意に呼び覚まされたのではないか。つまり、誰もが持っている人間の信頼の心が、ここに至って現れたと、私は見ております。

そういうことを踏まえていろいろ考えるのです。そこで、質問の方から答えてまいります。

公平性ということでは、やはり共感と深く関係すると思うのです。つまり、自分が共感しているところには、どうしても力が入るわけです。共感の強い弱いで、その人の支援のあり方にも強弱が出てきます。それで当然だと思うんですね。

国や自治体は当然、公平性の原理でやらなければいけないけれども、民間人は自分の共感するところへどんどんやっていいと思うのです。ですから、差をつけたって全然おかしくないし、差をつけられたところは、別なところがきちっと差をつけてやってくれると信じている。

天理教の場合も、一般的な義援金と、自分たちの教会復興と活動のための支援金と、二本立てで募金を集めました。そうしたら、両方に目配りしたのか、偶然そうなったのか、義援金と支援金に同じぐらいの金額が集まったわけです。このやり方は正解だったと思っております。

もう一つ、見えないものへの対峙ということです。私も、バナナが一本で四〇ベクレルというのを初めて知ったぐらいなのですけれども、そういうふうに考えてみると、われわれの普段の日常生活において、放射能というのは決してゼロではなくて、その辺にうようよしていて、自分の中に、いつの間にか飛び込んでいる。ちゃんと自分の中にも存在している。

同じように見えないものとして、実は信仰心もそうだと思うのです。信仰心もやっぱり見えないものです。さらに言えば、見えない信仰心というものが、実は宗教者と呼ばれている人たちの中だけではなくて、一般の、自分は宗教なんか信じていませんと言う人たちの中にもあると思うのです。それが今回、そういった突発的な事態で、助け心というかたちで噴出したのだろうと思います。

今回、福島の方は原発の収束がまだ見えない状況ですけれども、それでも、徐々に日常生活へと戻っていくプロセスはあると思うのです。そうした中で、この助け心を、せっかく誰の心の中にも喚起された助け心を、ずっと絶やさずにつないでいく。自分の地域においても、被災地との関わりにおいてもつないでいく。

これに対する旗振りといいますか、実際に行動することを含めてですけれども、後押ししていくことが、私は宗教関係者の一つの役割だろうと思っております。

鎌田　ありがとうございます。いま四人の報告者の方から自分の考えを述べていただきました。

ここで、河合さんが先ほど問われた、大きい物語の中で、宗教が世界観にどう立ち向かうのかという、その世界観問題は、かなり深刻な問題の一つであると思います。

以前は、玄侑さんが言われたように終末論的な意識があって、その意識から天罰であるとか、神罰であるとかの考え方が、当然出てくる可能性があるわけですね。

今回も多少は出てきているでしょうけれども、それをブレーキさせる力も同時に起こってきている。この世界観の問題に関してじかにダイレクトに入っていくタイミング、これは非常にデリケートだという感覚がどこかいまの時期にあると思っています。それほど、実は事態は深刻で、壊れているものが大きいということだと言える。

もう一つは、玄侑さんが言われた生活の中からあるという問題。宗教の一つの特徴として、たしかに大きい世界観の物語もあるけれども、小さい生活の具体レベルがあって、この基層生活レベルでどう動いているのかという問題です。どういうふうに人々を根本から生活の中で支えているか。これも非常に大きいものだと考えます。

それら四人の方の、レスポンスを踏まえて、河合さんと内田さんから、最後のまとめ的な発言をもらって、フロアのみなさんに振っていきたいと思います。

内なるコントロールに対する目

河合　いろいろと語っていただいて、ちょっと長くなってしまうかもしれません。

物語の柱について、たしかに大きな物語のハードランディングみたいなところがとても危ないのではないかなと僕は思っています。やはり、まずは失われてしまったということを、どれだけ悲しめるか、受け入れられるかということが、とても大きいのではないでしょうか。

そして、原発の部分に関しては、たとえ原発のない国に日本がなっても、それは変わらないと思うのです。放射能は、ありとあらゆるところに入っていて、われわれが自然のままの自然って変な言い方なのだけれど、もうそんなふうには生きていないんだということは、とても大事なのではないかと思っています。

原子力って、オッペンハイマーが最初に核分裂の実験をしたときの有名な話なのだけど、その光の中からキリストが立ち上がってくるビジョンが見えたという話がありました。ある種の神とか、たぶん日本のコンテクストに入ってこない神なのではないかなと思っているのですが、それとどう付き合うかみたいなことも、実は大きいことではないかなと考えています。だけど、それをそのまま扱うというのは危ない、難しいことなのです。

それから、ネットワークのことを稲場さんが言われていたのですが、私はこんなネットワークはしていないので、友人に教えてもらったのですが、震災後のネットワークも震災一色になりました。一色になってしまって、ツイッターとかフェイスブックとかで、だいたいみんなくだらないことを書いているじゃないですか。茂木健一郎が何か買いに行ったとか。日常を言っているものが消えてしまったというところがあって、それが怖いのではないかなと。震災一色になってしまう。

むしろ、心理療法をしていても思うのだけど、日常とかつまらないことに回帰しているというか、それがとても大事なのです。ところが、そういうことを書いた人に対して、すごいバッシングみたいなのがあったりというのも聞いています。

そうすると政府がコントロールしているとか、官僚が、東電がコントロールしているとか、そういうコントロールも怖いのだけど、われわれの内側でそういうコントロールが働いているのは、とても怖いことだと思うのです。そういうことに対する目も、われわれの中で養っていく必要があるのではないかなと思います。

最後になりますが、どうしてもみんな、いまの時代を転換点だと思いたくなるし、そうではないかなと思うこともあるけれど、同時に、それが過ぎ去っていって元に戻ることもあるかもしれない。両方を持って見守っていく必要があるなと思っています。

鎌田　それでは次に内田さん、お願いします。

断片的なつながりが組み合わさって働く

内田　たとえばプルトニウム神社はできないという話はありましたけれども、経済的なところで何か恩恵があるけれども怖くもあるということに対して、それを鎮めるとかという発想にはならない。

認知と感情という話をしましたが、認知的に理解することができても、感情的にそれをきちっと受け入れて、対処することは難しい。

こういうときにメッセージが単一化されていくというのが、私は逆に怖いことだなと思います。これはたぶん何年かたってみて、また考えなければならない長期的な話ではないかなということです。

それから、つながりということに関して、断片的なつながりが組み合わさって有効に働くというのは、まさにネットワーク的なつながりのつくり方という意味で、日本的なやり方だろうと思いますし、有効な感じがします。

組織を立ち上げて、そこで自分たちが一丸となって何かやりましょうというのは、アメリカなどでは受け入れやすい社会集団のつくり方と言われているのですけれども、そういうことよりも、むしろたとえば共感縁みたいなものでもいいと思うのです。自分がなんとなく知っている人がいるとか、ちょっと縁があったとか、そういうところから広がっていくようなつながりが、日本においては力を発揮するということを示す機会ではないかなと思いました。

一つの宗教観もそうですし、一人一人の持っている価値観とか幸福感などを元にしてつながっていく。共感するところから何かつながりが生まれていく。だから、目標を掲げる集団ベースではなくても全然かまわない。そういうところが力を持つというメカニズム自体は、すごく面白いことだなと思っています。

鎌田　いま、それぞれの報告者、また指定討論者から話をしてもらいました。

少し話の観点を変えますけれども、この七月、八月は、日本の伝統文化にとって非常に重要な切り替わりの月ですね。みなさんご存じのように、お盆などの行事がある月です。伝統的には、まず六月三〇日に大祓（おおはらい）があります。

夏越の祓い。茅の輪をくぐって、新しい再生へ向けて、生活を切り替えていく。そういうときに、京都では有名な祇園祭が行われます。祇園祭は大きい社会的な疾病や災いに対して、それをいかにして祓い清め鎮めることができるかという動機から始まりました。それから、天神さんの祭りも、菅原道真公の怨霊に社会がどう対応して鎮めるかという問題意識がありました。

まもなく、東北六県では七夕祭りやお盆が行われます。今度仙台で「東北六魂祭」が行われるようですが、東北六県の魂をもう一回振り返り賦活していくことをやろうしているわけです。そういう、伝統文化がいままでどういうふうに災害や社会的危機に対して立ち向かってきたか、歴史的事例というか知恵としてあったと思います。

けれども、今回その部分ももう一回見直されていると同時に、まったく新しい事態や状況が同時に並行して起きてきている。このへんをどうつないでいくのか。壊れながら、その壊れたものをイシスのように再生・再編していくことができるのかが大きく問われていると思います。

今回、宗教を中心にして災害と心のケアを考えるというテーマを立てましたが、さらに二回目、三回目のシンポジウムを継続して行っていきたいと考える。

あと一〇分ほどしかございません。何人かの方に発言していただいて質疑応答をする時間的な余裕がないものですから、まったく司会者の独断と偏見で申し訳ないのですが、今回、この会場に、宗教者や宗教活動をされている方々が何名も来られています。

先ほど、新宗教の活動で天理教のことについて金子さんが報告してくれました。この会場に、金光教の活動をされながら「支縁のまちネットワーク」の活動を金子さんたちと一緒にやってこられた渡辺順一さんがいます。そこで渡辺さんに、震災以前からずっと活動していて、この震災を機に変わったものがあるのか、宗教界の変化や宗教的な受け止め方の変化があるのかどうかをポイントに発言していただければと思います。

悲しみに対して心を開く

渡辺順一　急に当てられまして、びっくりしております。実は私はまだ被災地に行っておりません。その中でずっとできることを、あるいは考えねばならないことを考えさせられているようなところです。

直接、お答えしきれないですけれど、震災が起きて、いままでずっと考えさせられることが一つありまして、先ほどの発言とも関わるのですけれど、たとえば報道が、あまりにも悲惨な被災地の状況一色に、ずっと塗り固められ続けている。原発のことでもそうですね。

その中で、そういうかたちで光を当てられた以外の問題が、あまりにも見えなくさせられてきている。いま、玄侑さんが福島で、自殺が四割ぐらいに増えていると言われましたが、ものすごく気になっています。

ただでさえ地域社会が力をなくし、支え合う力がなくなっていって、日本全体が高齢化していって、孤立化していく。その弱った状況の中で被災、震災、あれだけ大きな悲しみに包まれていく。

それに対して、世間の注目が、光のあたる一点に集中することによって、もっとひどい状況が知らないところ、見えないところで、どんどん進行している。そのことに対する想像力がどうなっているのかということが、非常に僕は気になっています。

そういうことも含めて、行政とか、政府とか、専門家、学者が信用できないという話がいま出てきましたけれども、報道も含めて自分たちがどこまで小さなネットワークの中で、あるいは人間的なつながりの中で、情報量を増やしていくのか。人間の悲しみに対して心を開いていくのか。そういうことが試されていく時代になっているのではないかなと思います。それが大きな物語と小さな物語をつないでいくことだと思います。

もう一つ、宗教自体がどういうふうに貢献するかとか、宗教がどういうふうなネットワークをつくるかということが問題なのですけれども、教団とか組織自体が近代化の中で疲弊しておりますので、それを開いていくのは、個人が縁の中でつながり合った出会いの力、悲しみや苦しみや喜びと出合っていく。それこそ人間力がこれから試されていって、それが時代を切り開く唯一の起爆剤になるのではないかと思います。

鎌田　ありがとうございました。

新宗教の中でも、教派神道と呼ばれてきて、もうほとんど伝統宗教になっているような天理教、金光教などは、日本の社会に根付いているとも思うのですが、しかし先ほど金子さんが言われたように、新宗教に対する偏見などの側面もあるかと思います。

最後に、天理教や金光教などの教派神道以降に登場してきた日本の新宗教の中に大本や世界救世教の方もお見えです。京都の綾部と亀岡に生まれた神道系新宗教の大本の出口孝樹さんが来られているので、今回の震災以前、以後を含めての宗教者としての捉え方や生き方、あるいは社会的取り組みに関して、考えるところがあったら発言していただきたいと思います。お願いします。

宗教として大切なところが提供できていない

出口孝樹　綾部からまいりました出口孝樹と申します。まさか指名されると思っていませんでしたので、いま口から心臓がとびだしそうな感じがしまして、鎌田先生のお声も遠く聞こえてきたような感じがいたします。

三月一一日の震災から、私たち信仰者、宗教者に対して、震災はどうなんや、これはどういうふうに捉えたらいいんや、また出口王仁三郎はこれをどういうふうに見ているんや、大本ではどういうふうに考えているんやと、常に問われるようなことが多く、また自分の中でもどのように捉えたらいいのか、あまりに大きな出来事に直面して、なかなか言葉が出ないような状況があったのです。出口なお、出口王仁三郎以来の大本には、教え、教義が

あります。そうしたものの中から言葉を紡ぎ出して大本の信者、信徒の方には発言し、またいろいろ求めてきていただく方に対しては、そのお話をさせていただいているようなところです。本当に微々たるものですけれども。

今回の震災に関して心のケアという問題や宗教者の役割についてお話がされてきたわけですけれども、一つ感じることは、宗教者が、先ほど鎌田先生がオウム真理教の事件以後、宗教界では非常に大きな問題がまだ解決されていないとおっしゃっておられましたが、宗教としての大きな遠慮というか、自らを規制する心が非常に大きくて、大切なところが提供できていないような気がずっとしておりました。

ですから、この震災で特に思いますのは、亡くなられた人たち、大切な人を亡くされた人たちに対して、われわれの言葉で言えば霊魂観や霊界観について、また、詳しくは分かりませんけれども、仏教の方であれば、亡くなられてどういうところに行かれるんや、人の生とはどういうものなんやということを、また新宗教であれば新宗教のそれぞれの本当の生の言葉で、より宗教らしく話していくことが大事であり、求められているのではないかと感じています。

同時に、私たちは教派神道の流れでありますので、やはり祭りというものが非常に大事であるのだろうと考えます。神道には日本神話があります。大きな広い広い世界観を持つ神話と、それぞれの一人一人の生活が結び付くのは、やはり祭りであると思います。神と人、神様と地域をつなぐのが祭りです。

神社が流されたようなところで祭りを行うのはたいへん困難なことではあるのですけれども、神代から続いてきた祭りを未来につないでいくことで、先も見えないような今ですが、復興の先の未来へとつながっていくのではないかと感じております。

認知と感情をコントロールする

鎌田　ありがとうございます。渡辺さんと出口さんのお二人には、突然の指名をしてたいへん失礼しましたが、今回のテーマが災害と宗教と心のケアで、伝統仏教の立場から玄侑さん、神社神道の方から私、新宗教から金子さんとか、ほかの方々も関わっているので、金光教と大本教という、関西が宗教活動の基盤である二つの新宗教の方から発言をいただきました。

今回のシンポジウムで私たちは、何か一つの方向性とか結論を導き出そうと思っていたわけでありません。今何が起こっているのか。現状がいったいどうであるのかということを、それぞれの立場からきちんと問題提起してほしい。そこにどういう理解が必要なのか。そのへんの整理はやはり学問の重要な役割だと思います。

その問題に対して、では、どんな取り組みの可能性とか方向性があり得るのか。そのへんのところを議論することを通して、先ほどの認知と感情の問題とつながりますが、感情の部分の整理しきれないもやもやとしたものをはっきりとした道筋の中で整理してみようというのが今回のシンポジウムの試みです。

宗教が宗教であるゆえんは、その認知と感情を、もう一つ大きな物語や世界観や、祭りという儀礼とか、修行という仕組みの中に落とし込んで、もう一回、「ご破算で願いましては」ではないですがリセットするというか、クリーニングする、それが宗教の持つ大きな力ではないかと思います。しかし、今までのやり方が機能しない部分がある。その部分を含めて、これから先、さらに問題点を洗い出し、検討していきたいと思います。この研究プロジェクトはこれからも続いていく研究プロジェクトですので、次の機会にもお越しいただければと思います。

最初、法螺貝で始まりました。最後も法螺貝でも閉めたいと思います。（法螺貝演奏）長時間、ありがとうございました。

被災者へ 宗教が果たす役割は

京大こころの未来研がシンポ

東日本大震災の被災者に対して、宗教はどのような役割を果たせるのか。京都大こころの未来研究センター（京都市左京区）はこのほど、シンポジウム「災害と宗教と『こころのケア』」を催した。被災地の僧侶や研究者たちが、大津波を受けた地域で神社が歴史的に果たしてきた役割や、宗派を超えた被災地支援などについて報告した。

同センターは震災直後から、宗教学や民俗学、心理学の観点で「こころの再生に向けて」と題した共同研究に取り組んでいる。その一環でシンポを開いた。

宮城や岩手など被災4県を視察した同センターの鎌田東二教授（宗教哲学）は、津波が襲った仙台市若林区の浪分神社を紹介。「過去の被災体験を伝える記念碑としての役割は今回、生かしきれたのか」と問題提起した。

福島県在住の僧侶で作家の玄侑宗久さんは、県沿岸部の浜通り地域に約300もの神社があることに触れ、「恵みをもたらす海そのものの驚異も理解していた先人が、海を鎮めるために祭ってきた」と説明する。海への畏敬が、防波堤などの防災技術が進むことで忘れられるのではないかと懸念する。

科学技術の粋を集めた原発で事故が起き、放射能汚染は広まる。線量計の数値でしか実感できない不気味さや、人災とも言える状況に、不安や不信は高まる。島薗進・東大教授（宗教学）は「阪神淡路大震災と同じ年に起きた地下鉄サリン事件で宗教への信頼が壊れた。16年後の今回、さらに国家や研究者といった権威の信頼が壊れた」と指摘する。

被災者支援における宗教の役割や心のケアを議論したシンポジウム（京都市左京区）

宗派超え 人のつながり支援

信頼回復という課題を抱えながら、各宗派は早い段階から復興支援に取り組んでいる。稲場圭信・大阪大准教授（社会学）は、ソーシャルメディアを使って宗派を超えて情報の集約・共有化を図っている。「放射能のわが子への影響は大丈夫か」といった、ソーシャルメディア上で同じ思いを抱く人々のゆるやかな連帯に注目する稲場准教授は「地縁や血縁など従来の人間関係の希薄化するなか、『共感縁』が生まれつつある」と期待する。人のつながりを支えることに宗教の役割を見いだす意見が相次いだ。

鎌田教授は「被災後に何が起きているか。どのような理解が必要か。研究を通じて整理していきたい」と締めくくった。

（芦田恭彦）

京都新聞　2011年8月2日朝刊

第二章 第二回東日本大震災関連シンポジウム

災害時における宗教的ケアと宗教的世直し思想について

鈴木岩弓
東北大学大学院教授・宗教民俗学
金子昭
天理大学教授・倫理学
稲場圭信
大阪大学准教授・宗教社会学
島薗進
東京大学大学院教授・宗教学
井上ウィマラ
高野山大学准教授・スピリチュアルケア学
鎌田東二
京都大学こころの未来研究センター教授・宗教哲学
／司会進行

ごあいさつ

研究プロジェクト代表　鎌田東二

本日は、京都大学こころの未来研究センターで行っている研究プロジェクト「東日本大震災関連プロジェクト～こころの再生に向けて」の第二回目の研究集会を行います。四時間という短い時間の枠内ですが、実のある議論ができれば幸いです。ご協力、お願い申し上げます。

第一回目の研究集会・シンポジウムは二〇一一年七月二〇日に行い、その内容はこころの未来研究センターのHPに掲載してありますので、ご一読くだされば幸いです。アドレスは、http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/jp/event/110720.pdf です（本誌第4部第一章）。

本日は第二回目の研究集会・シンポジウムになりますが、この間に、東日本大震災に関連して、本研究プロジェクト連携研究員の大阪大学大学院准教授・稲場圭信氏が『利他主義と宗教』（弘文堂、二〇一一年一一月）を上梓しています。また鎌田が『現代神道論――霊性と生態智の探究』（春秋社、二〇一一年一一月）を出版し、また本年三月一〇日には、同じく連携研究員の玄侑宗久氏と鎌田との共著『原子力と宗教』（対談、角川oneテーマ新書、角川学芸出版）が出ます。ご一読くだされば幸甚です。

本日のプログラムは、以下のとおりです。

日時：二〇一二年一月二四日（火）一四時～一八時
場所：京都大学百周年時計台記念館　会議室Ⅲ
発表者：
鈴木岩弓（東北大学大学院教授・宗教民俗学）
「心の相談室と東北の宗教文化」
金子昭（天理大学教授・倫理学）
「宗教的世直し思想について」
コメンテーター：
稲場圭信（大阪大学准教授・宗教社会学）
島薗進（東京大学大学院教授・宗教学）
井上ウィマラ（高野山大学准教授・スピリチュアルケア学）
司会進行：鎌田東二

資料を用意してありますので、ご参照ください。また、別紙資料にありますように、被災地支援の一つとして、岩手県大槌町の仮設住宅に住む主婦の方々が編まれた手

芸品を「サンガ岩手」（代表：吉田律子さん）の仲介により販売していますので、購入していただければ幸いです。よろしくお願いいたします。

趣旨説明

鎌田東二

みなさん、こんにちは。こころの未来研究センターの鎌田東二と申します。

ただいまより、こころの未来研究センター主催の研究プロジェクト、東日本大震災関連プロジェクト「こころの再生に向けて」の第二回研究集会を始めます。

みなさんもご存じのように、昨年度の研究計画のなかにはこのプロジェクトは入っておりませんでした。三月一一日に東日本大震災が起こって、急きょ、こころの未来研究センターとして、どういう取り組みができるのかを相談した結果、二つの方向の研究プロジェクトを一つにまとめながら推進していくことになりました。

一つは、宗教学や民俗学を中心にしながら、私が担当して、「こころの再生に向けて」、宗教学アプローチの研究会をやっていくことで、その第一回目の研究集会を昨年七月二〇日に、こころの未来研究センターのある稲盛財団記念会館で行いました。

そのときにも申し上げましたが、京都大学全体が震災関連のプロジェクトを連続シリーズでやっておりました関係上、一般公開でたくさんの人に来ていただくねらいもありまして、一六〇名余の方々に来ていただいて研究メンバーが顔見せ的に発表し議論するという形となり、問題点を大きく網羅的に把握することには役立ったけれども、問題を深く掘り下げるまでには至りませんでした。

そういう前回の反省点を踏まえて、第二回目の研究集会では、みんなが考えていることを自由に言える時間や環境を持ちたい、できるだけ議論や質疑応答や意見交換をする時間を持ちたいと考えて、このような形に設定しました。

鎌田東二氏

第一回目の研究発表の内容についてはすべてこころの未来研究センターのホームページの震災関連ページにＰＤＦで公開しています。

四月から五カ月余りたちまして、この間に、連携研究員であります大阪大学大学院准教授の稲場圭信さんが、『利他主義と宗教』を一一月末に弘文堂から出版されました。これについて、みなさんのお手元にチラシが配布されていますので、ぜひご購読いただければ幸いです。私も同じ一一月に被災地を巡った記録も収めた著書『現代神道論――霊性と生態智の探究』を春秋社より上梓しました。

また、連携研究員でもあります臨済宗妙心寺派の僧侶で芥川賞受賞の作家であります玄侑宗久さんと私が、対談形式ですが、『原子力と宗教』という題で角川ｏｎｅテーマ新書を三月一〇日に発売することになっております。

今日は最初に、東北大学大学院の宗教学講座で宗教民俗学を担当している鈴木岩弓さんに発表していただき、四五分ぐらい議論をしていきたいと思います。その際に、稲場圭信さんと井上ウィマラさんにコメンテーターとして一〇分ぐらいずつ、それぞれの立場からコメントをしていただきます。そして休憩後、金子昭さんの発表になります。コメンテーターとして島薗進さんに一〇分ほど話をしてもらって、また議論をし、総合討論に入っていきたいと思います。

鈴木さんの発表題目は、「心の相談室の活動と東北の宗教文化」、金子さんは「宗教的世直し思想について」です。どちらもパワーポイントやワードの資料がありますので、それを見ながらお聞きいただければと思います。

以上が本日の流れですが、休み時間等に、島薗さんが代表をしている宗教者災害支援連絡会で話をしてくれたサンガ岩手の吉田律子さんが岩手県大槌町の支援に入っていて、その大槌町の主婦の方々が自分たちでつくった手芸品を支援の一環として販売しておりますので、ぜひ購入、カンパをしていただければと思います。

それでは、鈴木岩弓さんの発表に入っていきたいと思います。

発表1 心の相談室の活動と東北の宗教文化

鈴木岩弓

宗派を超えた「心の相談室」の成りたち

こんにちは、東北大の鈴木と申します。

これからお話しさせていただきますが、この題名、鎌田さんからいただいたまま踏襲しております。ただ、東北の宗教文化はあまりにも大きいので、どこまで話せるのか分からないのですけれど、なんとかこういう方向でお話しさせていただこうと思います。

まず、概括的なところから。一月二〇日現在の警察庁

調べで言いますと、東日本大震災の死者は一万五八四五人、行方不明者はまだ三三八〇人もおり、家屋の全壊は一二万、半壊は二四万戸となっています。

ともかく、ものすごい数の死者が出たということです。近年の日本では年間に一〇〇万人を超える死者が出ていますが、宮城県では毎年二万人ぐらい亡くなっています。今回の震災では宮城県内で九五〇七人が亡くなっているのですが、宮城県の年間死者数の半分ぐらいが、この一回の震災で生まれてしまったことになるわけです。

震災に関しては、想定外の三要素として、マグニチュード9・0の大地震。それから、遡上高最大三九・七メートルの大津波。そして、「想定外」と言って許されるかどうかは別として原発問題。この三点がよく指摘されます。

今日、私が発表するのは、そういう状態である宮城県において「心の相談室」という活動をやっておりますので、まずそのお話をいたします。第一回目の研究会のとき、鎌田さんから、そのへんの話をしろということだったのですが、私はちょっと公務の都合で出られませんでしたので、あらためてそのへんのお話からはじめさせていただきます。

われわれの活動に出てくる一つのキーワードとして、超宗派的な活動ということがありますので、その実現性などについて私の考えをお話しいたしますが、今日のお話はあくまで鈴木個人の意見であって「心の相談室」の公的な見解ではありませんので、誤解のないようにお聞きいただければと思います。

さて、東日本大震災における「死」というのは、災害死です。災害によってもたらされた死というのはあくまで突然の死、つまり、病院で長いこと患ったのちに予想された中で迎える死ではなくて、「突然の死」だったわけです。

ですから、多くは死に対する準備が不足している。残された者にとっても身近だった人が、たとえば、手をつないで逃げていた家族が、津波にあって自分が手を離してしまったので波にのまれて亡くなってしまった。そのようにして訪れた突然の死であったのです。

ですから亡くなった本人もたぶん、自己の死ということをあまり意識する暇もなく、死に対する準備なんてことはもうほとんどないままに亡くなったのではないかと思います。そうなったときに、残された人には病死などの時以上に心残りとか、後悔とか、悔いというものが、よりいっそう強く生じているのではないかと思います。

東日本大震災においては、宗教が、阪神大震災に比べて、ずっと活躍している印象があります。新聞にもよく名前が出てくる感じがします。阪神大震災を契機に「心のケア」の問題が世に知られるようになってきましたし、同じく阪神大震災の起こった一九九五年はボランティア元年という言葉もあるように、ボランティアの活動が市民権を得るスタートになりました。しかしこの件に関しましては、「宗教と社会」学会のシンポジウムでしたか、山折哲雄先生が、震災時の活動に際し宗教者としての特質が見えなかった、その活動は宗教者でなくてもできたことではないかと、ちょっと批判的なこともおっしゃっていました。当時は、あえて、宗教団体だということをあまり言わない、言えない、そういう状況もあったのではないかと思います。

それが東日本大震災においては、宗教者がその名前を表に出して活動しています。臨床心理士などの活動は当然、「心のケア」ということでやられていますが、各宗教教団、宗教者も教団などの名前を出して活発に行っています。これは、宗援連（宗教者災害支援連絡会）などのほうからの資料などでもよく分かることではないかと思います。

そういう中で、仙台でも宗教者の間で何かやっていくことはないだろうかということで、ある意味では、自然発生的に組織化されていった宗教者の組織がございます。それが今日お話しする「心の相談室」です。

「心の相談室」の設立前史から見ていきましょう。仙台市内の宗教者の有志たちは、震災のあった直後の三月から、身元不明者も含めた震災犠牲者の弔いをやっていました。どこでかと言うと、葛岡斎場という、仙台市営葛岡墓園に併設されている仙台市営の火葬場でした。その火葬場に、仙台仏教会、キリスト教連合などを核にして、宮城県宗教法人連絡協議会の有志が常駐して死者の弔いを無償で行っていたのです。

こうしたことができたいちばんのきっかけが、実はこの宮城県宗教法人連絡協議会という組織にあり、この組織のスタンスが「心の相談室」という超宗派的組織の成立を可能にした原動力になったのではないかと思います。宮城県宗教法人連絡協議会について簡単にお話ししますと、設立はけっこう古いのです。仙台宗教団体協議会というのが一九五八年、当時の宗教団体間の連絡を緊密にして世界平和を目指そうというかたちでつくられたようです。それは実は宮城県主催の宗教法人事務研修会と絡んでいて、行政が宗教法人をまとめて指導する核にしようという思惑で開催されていたのです。

ところが県の一方的主導に不満を持った人たちの間から、各宗派代表者会議という名称変更が提案されました。最初は、県主催の実務的な話で始まった組織であったのだけれど、行政主導の組織でいいのだろうかと疑問をもち、宗教者同士が交流を図るべきではないかということで、方向付けに変化が見えてきました。ちょうど大学紛争が終わる頃ぐらいですかね。世の中の動きも、こういう方向だった頃ではないかなとも思います。

とはいえ当時は宗教法人が連帯したあるべき姿を実現しようという志向もあったものの、県の目指す「宗教法人法」に基づく事務の適性化を推進する流れのほうが強かったようで、事務局は宮城県の総務部にありました。

これが八〇年代になると、新たな展開をしていきます。各宗派本山等研修会というのが始まりまして、会に加入している法人が相互に、今年は永平寺へ行こうとか、今年はお伊勢さんに行こうといった具合に、各法人の本部

鈴木岩弓氏

などの宗教施設を巡ることをやりだしました。

その上、宗教間対話の促進を目指して、各教団から、たとえば、「清め」ということに関して、どのようなスタンスをとっているのか報告してもらい、一種のシンポジウムになるような話題が考えられていました。そうした中二〇〇〇年になりますと、ついに事務局が県から加盟団体の輪番制に変わりました。ちなみに今年度は天理教がやっております。

話をもとに戻しますが、この宮城県宗教法人連絡協議会があったから、宗派を超えた弔いの場ができるようになったと思われます。その頃は、仙台市葛岡斎場にて、遺族への宗教的ケアをやる場を開設しておりました。ただ、これは仙台市の施設ですので、仙台市からは四月末までという制約が付いておりました。

（スライドを見ながら）これは『河北新報』のものですが、牧師さんとお坊さんが並んで座り、ご相談に応じているところです。こういうかたちで待機し、依頼を受ければ無償で、また身元不明者の火葬の場合にはどなたかがさっと行って最後のお勤めを果たしていたのです。

四十九日に当たる四月二九日には、南三陸町という宮城県北の津波被害の大きかった町で、牧師さんと、曹洞宗を中心にしたお坊さんたちが、賛美歌を歌い読経しながら鎮魂の祈りを捧げて歩きました。これに参加したメンバーも、「心の相談室」に集まってきた人々が中心でした。

弔問の機会の設定から

五月からは、新生「心の相談室」が始まりました。この組織を率いる室長が、爽秋会の岡部健さんという、在宅ホスピスの推進でたぶん日本でいちばん有名なお医者さんです。そこに相談員として宗教者やカウンセラーなどが入り、その事務局を私のところで引き受けるよう依頼がありました。さまざまな宗教者同士をまとめるときに、たとえば、お寺で会議をやると牧師さんは来づらい、神社でやるとお寺さんは行きづらいということもあります。宗教というのは、ぎりぎりのところでは価値観の問題ですから。そういう意味で、国立大学の宗教学ならばいちばんニュートラルだろうということで、話があったのだと思います。

ちょうど私も、震災後の自分の位置を模索しており、震災を対象に科研費を取ろうなどといった研究者レベルの話ではなくて、今回のこういう問題に、人間として自分から関われるようなすべがないものだろうかと思っていたところでした。ですので、これだったら気持ちよくできるなと、自分自身のなかの、ちょっと嫌な部分を捨てて素直に入っていくことができました。その結果、人を救えない宗教学者が、人を救う宗教者をコーディネートしてみなさんの調整をしております。

五月二日には「心の相談室」の存在を知ってもらうために、県庁の記者クラブで記者会見を行いました。この案を出されたのは牧師の川上さんで、なかなか手慣れた感じで会見を行いました。（スライドを見ながら）真ん中に座っていらっしゃるのは、宗法連の今年のまとめ役である天理教の方です。ほかに牧師さん、神主さん、各宗派のお坊さんといった方々が出席されています。このときには鎌田先生も来られて、写真などを撮られておりました。新生「心の相談室」は、弔いからグリーフケアまで一貫した切れ目なしのご遺族に対する支援を行おうということでスタートしました。この裏には、これだけ大きな悲嘆に暮れる人たちが出たときに宗教が出てこないわけにはいかないだろうという気持ちが、とりわけ岡部のほうにも強くて、そのあたりを押さえる方向で進めようということになりました。

ですから、「心の相談室」の活動内容は、まず弔問の機会を設定しようということで、当初は電話相談を考えていました。それから、震災犠牲者、特に身元不明者に対する合同慰霊の場を設定しようとしました。また併せて講演などの啓蒙活動をしようということで、震災直後の五月七日には講演会の企画を計画しました。

この写真は、そのためのビラ配りです。これは青葉通りという、仙台ではけっこう大きい通りなのですけれど、そこにいろんな宗派の人が立ってビラを配っています。この時には二人、ムスリムのインドネシア人にも参加してもらいました。

この二人は私のところの大学院生なのです。なぜ彼らが入ったかと言いますと、今回の震災では、表には出てないのですけれど、ムスリムも犠牲になっているのです。この写真の彼が仙台地区のムスリムをまとめている人なのですけれど、地震があった直後に塩釜港にいるインドネシア人漁船員と電話で話したのだそうです。しかしその後、今に至るまで行方知れずなのです。ついこの間も彼に確認したのですけれど、いまだに見つかっていないというのです。

そういう意味では、ムスリムも犠牲になっているわけで、キリスト教、仏教、神道、イスラームも入ってさまざまな宗教が協力し合ってビラ配りをしています。

そして迎えて七日に、「祈りの心、東日本大震災に宗教はどう向きあうか」という企画を東北大を会場にして開催しました。ここには、上智大の高木先生、小西先生、龍谷大の鍋島先生そして東京大学の島薗先生と、地元宮

城県の宗教者の方が集まって報告をされ、標題の問題を考えました。

また「心の相談室」ではブログを作って公開しております。東北大の文学研究科のサイトに入っていますが、「心の相談室」「仙台」の二語で検索していただくと容易に見つけることができると思いますので、ご覧になっていただければと思います。近ごろはそのサイトで、後述しますラジオ放送の内容も聞くことができるようになっています。

「お茶っこ飲み文化」から生まれたカフェ・デ・モンク

さて、そうして時間が経ってきますと、傾聴しなくてはいけないと言っていながら、相談の電話がかかってこないことが問題となりました。これは被災者の気持ちがまだ落ち着かず、おそらく時期が早すぎたためであったり、こちらの電話番号が周知できていなかったという理由が考えられたのですが、「これは困った」となりました。そこで、待っているだけではいけないと考えまして、「カフェ・デ・モンク（Café de Monk）」を動かすことになりました。

これはお坊さんたちがやる移動喫茶店で、被災者との対面的な場をつくるために、ケーキとお茶、コーヒー、あるいは、お抹茶を持って被災地に行き、「カフェで文句」を言ってもらおうというのです。カフェ・デ・モンクの名付け親は、金田諦應という曹洞宗の老師ですが、当該地域の「お茶っこ飲み文化」を基盤に考案されました。

東北地方は、ご存じの方はお分かりと思いますが、お宅を訪問すると「まあ、あがらいんわ」と言われて家に上げてもらい、こたつの前に座らされて、「まあ、お茶でも飲まいんわ」とお茶をもらうのですけど、そのときに、漬物か何かを「さあ、さあ、さあ」と勧められるのですね。「ああ、どうも、どうも」とか言いながら、そういうものを食べながら、お茶を飲みつつお話をすることが多いのです。これがまさに「お茶っこ飲み」の慣行なのです。そこで雑談をする。カフェ・デ・モンクでは、そのお茶の席を傾聴の機会にしようと考えたのでした。これが始まったのは、五月でした。

カフェ・デ・モンクはその命名の裏話にあるように、非常に遊び心満点で運営されています。たとえばここでかかっているバックグラウンド・ミュージックは、セロニアス・モンクの曲ですし、その音が流れるスピーカーはボーズ、といった冗談のようななかで、関わっていく側も肩肘張らずにゆったりと参加しています。とはいえ、被災地に入っていた多くのボランティアが正月で帰省していった一二月三一日にも、被災者に少しでも温かい気持ちで正月を迎えてもらおうと年越しそばを出すカフェ・デ・モンクまでやりました。

カフェ・デ・モンクでお話をしていくうちには、じゃあ、うちに来て仏壇を拝んでくれと言われて、曹洞宗のお宅の仏壇を浄土真宗の方が行って拝んでくるなどということもあり、被災地の方々から感謝されております。地元の人にとっては、仏教宗派の違いというのは、実はあまり関係ないということが示される場面ですね。

現在、「心の相談室」はどうなっているかと言うと、簡単にまとめると、まず合同慰霊祭を月命日でもあります一一日にずっとやっています。また電話相談は、毎週水曜と日曜の三時から一〇時までというかたちになりました。カフェ・デ・モンクは相変わらず各地で開催しています。さらに地元のＦＭ放送で同名の『カフェ・デ・モンク』という番組をやるようになりました。最後に講演会、講習会。これは、電話相談員の講習会とか、著名な先生方の講演会をやっております。

以上についてスライドを見ながら多少補足してみましょう。これは、百日祭。百カ日のとき、六月一八日の仙台市葛岡墓園での合同慰霊の場です。このときは、まだまだたくさんの身元不明者の遺骨が、その人が身につけていた物と一緒に安置されていました。

このときは斉藤軍記さんという天理教の代表の方が司祭をしました。まず、天理教形式で儀礼を行った後、牧師さんやお坊さんが、順繰りに自分の宗派流のお祈りをされました。それ以降、毎月一一日に、今月は曹洞宗、今月は神道、今月は浄土真宗という具合に、順繰りに回してやっています。仙台では、身元不明の遺骨は二柱だけになりました。これがすべて引き取られたら、ここでやる意味はなくなりますのでやらなくなるのでしょう。

電話相談は、先ほど言いましたように、神主さんだとか、お坊さん、牧師さん、神父さん、そういう人たちがやっています。相談日の前半と後半に二分して、二人の相談員を置いて、スーパーバイザーも一人つけています。そういうかたちでやっていますが、相談依頼は近ごろまあまあ来るようになっているようです。中には何度も繰り返しかけてこられる人もいらっしゃいます。

また移動喫茶と同名の『カフェ・デ・モンク』というＦＭ番組を一〇月初めから一二月三一日までやりました。先ほどお名前が出てきた玄侑宗久さんも、ここで二度にわたってお話しいただきましたし、日野原重明さんにも、二度にわたってやっていただきました。これはYouTubeで聞くことができますので、もしよろしければ聞いていただけたらと思います。

ＦＭ放送の反響はものすごくありまして、このときに、電話相談の案内や、移動のカフェ・デ・モンクの予定をお知らせすると、「ラジオで聞いたから、来た」という人もだいぶ増えてくるのです。

そういう意味で、やっぱりラジオの効果はすごいと思っております。これは、岩手と宮城と福島の地元ＦＭ三局に流していますけど、そういうところでやっていると、われわれの活動のかなり大きな力になっていることが分かります。そうした反響の大きさに応える意味から、一月からまた三カ月、番組を延長して新たなスピーカーによるお話を毎週一回放送しております。

「臨床宗教師」養成にむけて

中長期的な展望としましては、チャプレン的な専門職を養成しなければいけないだろうと考えております。ただチャプレンとかビハーラ僧と言ってしまうと、特定の宗教が色濃く出てしまいます。チャプレンはキリスト教だし、ビハーラ僧は仏教だというわけです。これをできるだけニュートラルな呼称にしたいということで、取りあえずいまは「臨床宗教師」と言っています。

このように、自分の宗教を押しつけるのではなく、死を見つめている人々を導ける人はいないだろうかと考えておりますが、これが、ＰＣＴ（Pastoral Clinical Training）にも通じることなのかなと思っています。超宗派的な宗教者に対する訓練をする必要があると考えています。

ただここでしばしば考えていることは、伝統的な宗教文化に対する理解がどうしても必要だろうということです。たとえば外来宗教を突然、被災した海辺の村に持ち込んでも、それはちょっと受け入れられないだろう。やはり、被災地の伝統的な宗教文化を理解しなくてはいけないだろうと考えています。

たとえば、祖先祭祀の問題で、先祖のたたりなんて言い方を聞くことがよくあるのですけれど、そういう話は、お寺や神社のほかに、巫女さん、拝み屋さんに関わる中で当たり前に出てくることなのですね。

ですから、こういう文化を理解しないで自分の一つの宗教だけを押しつけられても、クライアントになる被災者はちょっと違和感を持つだけで、何も通じないということになるかと思います。

近ごろは、おばけを見たとか、海のなかから目がのぞいていたとか、これは秋ぐらいからずっと出ている話ですけれど、そういう話がいっぱい出てきているわけです。そういう感覚を、いわゆる宗教者がどう説明していくのか、このあたりはすごく重要な問題になるのではないかと思っています。

将来的には、東北地方に臨床宗教師の養成機関がつくれないかなどと考えていますが、この件に関しては最後の最後に一言ちょっとお話しします。それで、東北地方に宗教者によるグリーフケアを根付かせられないか。東北地方にというのは、今回、被災者がものすごく出ているところで、ここに今すぐ即効性を持って、できるだけ早い時期にそういうことができる人を養成できないだろうかと考えています。

将来的には、みとりの現場に宗教が入らないことを解消するような、つまり、まさに病院チャプレンのような感じでやれるところが出て、在宅ホスピスの推進と協調関係が生まれてきたらいいのではないかというのが岡部室長の考えになるわけです。

あの夜の世界を語るメッセンジャー

そういうときに問題になるのは、宗教者による心のケアなのだけれども、まず一つ、大前提として押さえておかなくてはいけないのは、心のケアというのは、宗教者だけができる、宗教者だからこそできるとは言えない部分があるということです。精神科医とか、お医者さん、臨床心理士、いろんな方たちと連携プレーでやらなくてはいけないのだけれど、そういった枠組みの中で宗教者がどう関わるかということを考えてみたいと思います。

宗教者ならできるという宗教者の特質を考えてみますと、宗教者とは早い話、あの世の世界を語ることができるメッセンジャーだということですよね。つまり、どんな宗教であっても、現世のことだけを語るのではなくて、死後の世界のことを語ってきたことが他の「心のケア」従事者との大きな相違点なのです。

そのあたりのことを語れること、それをどう生かしてやっていけるのだろうかということがポイントだと思います。スピリチュアルな――この言葉は難しくてスピリチュアルと言ってしまっていいのかどうかなのですけれども、スピリチュアルな側面からの心のケアが求められていると思います。

そういう中で、たとえばこの写真は、亘理郡山元町の全壊したお宅、八月に撮ったものです。全壊したお宅の土台だけが残されていますが、海のそばなのですね。そこにはこうしたかたちで、明らかに慰霊的行為がなされています、たぶんご家族、あるいは関係者がやられているのだと思います。こういう光景が、被災地のそこここに見られるわけです。

人がこういうことをする理由を考えると、やはり、死んだ後の人々の供養、もう少し言うと、死後霊魂の存在を想定しての行動が多いのではないかと思います。

死後霊魂の存在についてまとめたグラフを見ますと、一九五二年以降、新聞社がいろいろやっており、二〇〇三年は私が科研費で実施した全国調査の結果なのですけれど、信じるという人が、青い部分です。このグラフは、「信じる」よりも「信じない」人の割合だけを見ていただければいいのですけれども、「信じない」は二〇％から三〇％は常にいるわけです。これ以外は、信じるというのは、ちょっと恥ずかしいから言わないという人たちを含めていると考えたらいいと思うのですね。つまり、死後の霊魂なんか存在しないと言える人が常にだいたい、二〇～三〇％いるのですけれども、それ以外のところで言うと、断言するか否かは別にして、信じる人がけっこういるということです。だから、こういう死後霊魂の存在を信じる人々に対して、今後どう関わったらいいのかということが、今回の震災においても重要な課題になると思います。

伝統的な宗教習俗に目を配る

そこで問題となるのは、布教にならないかたちで宗教者が超宗派的な宗教的救いをもたらすことはどうしたら可能になるのかということだと思います。

自分の宗教を布教することなく、宗教的な救いはもた

らされるのかということを考えますと、これがすごく重要なことになるのですが、私自身としては、簡単に言えば、先ほどの民間信仰とか、伝統的な宗教習俗に目を配るということ、このあたりを理解する必要があるのではないかと思うのです。

たとえば、盆行事がありますね。盆行事というのは、明らかに、経典的な信仰と、経験的な信仰が、ずれつつ共存している。釜蓋朔日とか、盆の入りという言い方をしますが、このとき、地域で一般にどう言われているかというと、地獄の釜のふたが開いて先祖が帰ってくると言うのですね。

お盆が終わると先祖が帰っていく。どこへ帰っていくか、それは言わないのです。でも、翌年もまた、地獄の釜のふたが開いて先祖が帰ってくる。そうすると、お盆が終わって先祖を送る先は地獄だということになります。ひどい話ですよね。われわれ子孫は人でなしのことをやっていることになるのだけれど、誰もそんなことは言わないですね。

このあたり、民俗的な考え方で話は済んでいるわけなのですね。こういうふうな理解で、先祖が帰ってくるのだと考えて、やっている。だから、ふだんは地獄にいるのかどうかということは、普通は考えないのです。

ところがこの問題は、宗教の問題として考えたときに、お盆は浄土真宗では絶対必要ないはずですよね。実はうちはお東さんなのですけれど、うちもお盆になるとちゃんとお坊さんが来るのです。でも「お宅の先祖はもう浄土に行っているのだからお盆なんて必要ない」とは、絶対に言われないのですね。

これはどういうことかと言うと、お坊さん、僧侶にとって、お盆は先祖供養と考えるのではなくて、仏法に対する機会を提供しているといった感じに読み替えてやっていらっしゃっており、これをやらないと、信者からは「困る」、「うちの和尚さんがやってくれない」と言われてしまうからやっているわけですね。

こういう問題は、いろんな民俗宗教のなかに出てきます。私が山形県で調べている「もり供養」もそうです。浄土真宗の方も先祖供養をやるために来るのです。それで、私は一回、いじわるにも、「真宗がこのような信仰に関わるのは変ですよね」と冗談めかして言ったら、「いや、分かっているんですけど、それを言われると檀家に顔が立たないし、まあ、まあ」という言い方をされたのです。まったくそうなのだと思うのです。結局、宗教の原理原則を語っているだけでは、現実に布教というか、人々の信仰を集めていくのはなかなか難しいことだと思うのです。

もう一つの例。南三陸町細浦の徳性寺、ここは私が五月以来折に触れて入っている被災地なのです。いろんな人が被災地に来るのですけれど、たまたま、三屋裕子さんといって、バレーボールで有名な方が来られたのですね。

彼女はアシックスと一緒にこういう小さい集落を回って、ボール、Tシャツをみんなに配り軽い運動をする活動を行っているのです。

ここで、みんなで運動をし終えると、何をやったか。「果報団子」をやったのです。これはまさに民俗的な行事なのです。果報団子というのは何かと言うと、弘法大師が一夜の宿を求めたけど、家が貧しかったので、つくった団子のなかにわらが入っていた。そこで弘法大師さんに、「ごめんなさい」と謝ったら、弘法大師は、「これは果報だ、めでたい、めでたい」と言って喜んでくださったという。こういうことに来歴を持つもので、弘法大師の誕生日といわれる旧暦一一月二四日に行うのですが、このときは一一月二三日のお休みの日にやったのです。

無病息災を祈る行事なのですけれど、宮城県でもこういう行事をやるのです。一部の団子に、萩の枝を一センチぐらいに切ったものが入っているのですね。それがあると、「当たり」ということで、徳性寺のご住職が賞品をくれるわけです。

参加者はみな、すごく楽しそうに団子を噛み、当たっているかどうかを確かめ合い、入っていると大喜びするのです。みんな食べながら、「あ、ないわ。これ、あんたにあげる」と言ってかじった団子を人にあげたりして、子どものように騒ぎながら楽しそうに食べていました。

これが終わったとき、あるおばあちゃんは「震災以来こんなに笑ったのは初めてだよ」と言って帰って行かれました。おじいちゃんたちが来ないのはちょっと心配ですけど、おばあちゃんたちは、そういう具合に気分も軽く参加されていたのです。

教義にこだわりすぎない

次に、実際にケアに関わる個々の宗教者は、自分の個別宗教に基づいてケアをするのかという問題を考えてみましょう。その場合の宗教性はどういうふうになるのか。このへんの問題ですけれど、私自身としては、宗教が広まっていくことを考えてみれば、次のように考えるしかないのではないかと思っています。

宗教の歴史というのは、その教えが完全に決まってしまってからは変わらない宗教なんてあり得ないわけです。言わずもがなのことですけれど、インドで生まれた仏教は、中国や朝鮮、日本に来る間に、たとえば、日本だったら妻帯するなんて、こんな大ごとの変化が起こって、それでいて日本人は何の不思議もなく仏教だと言って信じているわけです。

こういうことを言い出すと、宗教の教えが変わらないでいるなんてことはあり得ないわけです。さらに心強いのは、古野清人先生のキリシタン研究のなかに、「純粋、または正当な世界的な宗教、その信奉する教理、教義はしばらく別にして、現実には存在しない」と、そこまではっきり言い切っていらっしゃいますね。まさにそのとおりだと思うのです。

どんな教えもみんな、どこかで曲がっていきながら、広まっていく。それが当たり前だということで、それは「宗教の民俗化」、「民俗の宗教化」という捉え方ができ

ると思うのです。これにはちゃんとネタがあって、大正大学の藤井正雄先生が、「仏教の民俗化、民俗の仏教化」ということを言っていらっしゃるわけですけれども、まさにこんなかたちにして宗教は広まっているわけです。

（スライドを見ながら）ここにお示しした図、ちょっと、いい図かどうか分からないのですが、こういうグラデーションがあるわけです。こっちが思いきり教義的な部分が強い。対して、反対側は思いきり経験的で、ぶつぶつのお地蔵さんだからいぼ取り地蔵だとか、思い付きのような感じでやっていく経験的、民俗的な信仰。その間に濃淡がある。

このうちのどこに自分の立ち位置を持ってくるか、それだけの話であって、こっちをひん曲げたら駄目だではなくて、どこらへんまでひん曲げられるか、おそらく、そこらへんの立ち位置を考えて、実際に宗教が広まってきたと言えるのではないかと思うのです。こういうことを考えていくと、五月七日に東北大学でお話しいただいた鍋島直樹先生の、南三陸町の役場施設で最後まで「大津波警報がでています」と放送で避難を呼びかけていた女性職員のお葬式を彼が執り行ったというお話を思い出しました。先生は仙台にある西本願寺の別院に泊まり込んで、毎日のように海の被災地に行っていらして、本当に一生懸命やっていらっしゃるのをご覧になった遺族の方から、「あなたにやってほしい」と言われたというのですね。

私は鍋島先生から、「私、あした、彼女の葬式をしなくちゃいけないんです」と言われたことに対し迂闊にも「あ、彼女は浄土真宗だったんですね」と言ってしまったのです。このへんが宗教学者の浅はかさで、龍谷大学の先生がやるのだから、浄土真宗、しかも、お西でやるのだろうと思ってしまっての発言だったのですが、彼はぽつっと、「知りません」と答えられました。「私は知りません。ただ、先生にやっていただきたいと言われたのでお引き受けしました」と。

つまり、求めている側も、この先生は曹洞宗かどうかとか、そんなのは関係ないのですね。お坊さんとしてきちっと一生懸命やってくれた、この人なら家族の葬儀を出してもらって全然問題ないというわけです。

たぶん鍋島先生は、浄土真宗的な司祭をされたと思います。読むお経も、曹洞宗とは違うと思います。だけれども、そこのところは、遺族の人はこだわってないのですね。弔いをやってもらえるかどうかです。

つまり、ここ（教義）ばかりにこだわって進まないのではなくて、意志をどういうところに持ってくるかで進むことが、いま、ひとつ求められていることなのではないかなと思います。ただ、限度がありますよ。じゃあ、教義はなくなってもいいのかという話ではないのですけれど、どこへ立ち位置を持っていくのかというあたりが重要なのかなと思います。

お坊さんも参加してクリスマスコンサート

それに近いことで、これも「心の相談室」でやっていたことで、一二月二〇日に石巻でクリスマス・ランチコンサートをやりました。これは、石巻の結婚式場が会場を貸してくれたのです。この施設のそばには、石巻の中でもものすごく大規模な仮設住宅の集合地があります。そこの人たちを招待して開催しました。

ここには牧師さんやお坊さんが入り交じってお世話しているのですが、赤い帽子をかぶっているなかに、お坊さんたちもいっぱい入っているのです。クリスマスプレゼントを配りますと、もう、みなさん喜んで、久しぶりにゆっくりできるということで、ごちそうを食べ、プレゼントをみんな子どものように喜んで受け取っていました。特に、これは、金田諦應老師なのですけれど、頭にこんなトナカイの角を付けています。このようなことをする人のことを仙台あたりでは「おだつもっこ」と言います。「ふざけんぼう」といった意味です。

次の写真は、数珠を差し上げているところです。この時は希望者があっという間に列を作りました。谷山という浄土真宗のお東さんと曹洞宗の金田老師が一人一人の手を握りしめて数珠を差し上げていました。

つまり、「クリスマスだから、曹洞宗、浄土真宗は出ない」のではないのですね。これは一種の日本の民俗行事と考えればいいわけで、こういうなかで歌ったり、踊ったり。これ、本当に踊っているのです。

そしてさらに、おばさんがお坊さんを捕まえて、みんなの前で一言、「このお坊さんに救われた」と言ったのです。自分のところにずっと来てくれて、本当に救われたということを、楽しく踊った後に、わざわざみんなの前で披露している。こういう感じになっているのです。

ただ、逆に、これは彼への悪口でも何でもないのですけれど、牧師さんはさすがに、この数珠のときには、一切手を触れなかったですね。この写真は宗教学者としての目で撮ってしまったのですが、仏教の数珠を配るところへは、キリスト者の彼は入らなかった、入れなかったということだと思います。これは、彼にとってのグラデーションの立ち位置が、どのへんかということだと思います。トナカイの角を付けられる曹洞宗のお坊さんとは、たぶん、ちょっと立ち位置が違うのではないかなという気はします。

祖先祭祀の危機

最後に、これから困った問題になるのかなと思うのが、祖先祭祀の危機です。日本人の宗教のベーシックな部分に祖先を祀るということがあるわけです。いろんなかたちがあると思います。それが、被災地の一部では、自宅から位牌、遺影、過去帳が流出し、寺院からも位牌、過去帳が流出し、墓地からは遺骨、墓石が流出するという事態が起こってしまったわけです。

これを写真でお見せしますと、まさに祖先の依代が喪失してしまう事態が一部で起こっていることが分かります。仙台より南のほうは、だいたい津波が来てもあまり

強い津波じゃないので、一階がやられるだけで済んでいるのです。だから、全壊なのですけれども、倒れていないのですよね。こういう家が多いのです。一階だけ何もなくなっている。

仏壇というのは、普通一階に置きますよね。だから、仏壇の中にあったものが全部なくなっているのです。同じことで、お寺の一階も全部やられています。檀家の位牌は位牌堂などみんなこういうところにあったのですが、流されてしまっています。位牌も、過去帳も流されているわけです。そうなると、先祖の名前が分からない。

さらに、これはいまのお寺の墓地ですけれども、墓石がぼろぼろに倒れているわけです。さらに倒れているだけでは済まず、こうやってカロートの中が洗われてしまっているのです。全部洗われて、骨が出て、どこかに行ってしまっているわけです。残っていることもあるわけですが。こうなってくると、先祖の依代がまったくなくなってしまうのです。

日本には、死後三三年とか五〇年たつと、個別の死者の祭祀はしなくて、まとめて鈴木家先祖代々とか言って、「死者全員を先祖としてまとめて供養してるよ」という「弔い上げ」と呼ぶとても便利のいい装置があります。

今回流されたのは三十三回忌になる以前のモノも多々あって、本当に何年か前の死者でも、戒名などをメモしていなかったら死者の依代はもう全然なくなってしまうのです。そうなると「先祖代々」にすればいいという言い方もあるのだけど、このあたりはどうなっていくのかなと考えています。

今日は「心の相談室」の活動をご紹介しましたが、物の支援を切り口にして、心の支援をやっている現状をお伝えしました。今後はとりわけカフェ・デ・モンクは効果がありますので、移動喫茶でお茶やコーヒー、ケーキをお出しするところを通じて、いろいろお話しする機会をつくるという意味での、心の支援をなんとかやっていこうと思っています。

地域文化に根差した活動、先ほど言いましたように、カフェ・デ・モンクは、お茶っこ飲み文化ですけれど、こういうところが、伝統文化による生活規制がけっこう強い被災地においては、すごく重要なのかなと思います。

契約講という、葬式を担う相互扶助組織が特に海辺のほうはまだ盛んでした。それから、檀那寺との親密度もあります。

要は、被災者の価値観への目配りが、非常に重要になるのだろうと思います。ですから、弔いの現場では、超宗派的なケアの可能性をなんとか考えて、被災者の持つ宗教的伝統に理解を示す方向で、入り込むことができないかと考えています。

「実践宗教学講座」

最後の最後に、これは東北大のなかでの活動を紹介しますが、方言をやっている小林隆教授のところでは、『支援者のための気仙沼方言入門』というものを配っております。地元の文化を理解しないで入られてもしようがないという意味で、方言の専門の先生ですけれども、こういうものをつくってまず言葉を理解して現地に入るお手伝いをしています。

それから、いま、私の足下でちょっとした展開が起こっています。ここだから、初めて言う話ですが、実は、東北大の文学研究科に寄附講座をつくることが教授会では決まりました。「実践宗教学講座」といいます。

それは何かと言うと、先ほど申し上げた、最終的には臨床宗教師を養成するための前段階として想定しているもので、理論的に、いままでのスピリチュアル関係のところを総括して、今後どういう方向を目指すべきかを提言する理論と実践の講座で、学生は採らず、三年間の年限付きの寄附講座を考えています。

いまのところ、キリスト教系のいろんな集団からのお金を中心にして、そこへ仏教も入る可能性が出てきているのですが、そのお金で三年間運営する話になっています。教授会は通ったので、これから本部に上げるところで、そのための書類づくりで、このところガタガタしております。なんとか、四月から実現する方向でやっていきたいと考えております。

そういう方向ができますと、宗教の社会貢献のほうにもつながると思いますし、もう少し言えば、心のケアに、宗教者として関わりを持つ方向付けみたいなものが、いままでのものを総括しながら、新たに提言できるのではないか、そうできたらいいなと思っています。

私の発表はこういうところで終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。

鎌田　どうもありがとうございました。

私は宗教哲学や民俗学を専攻対象にし、経典的信仰の立場と経験的信仰の立場の間を往来する立場にいるので、鈴木さんの発表は非常によく分かりますし、共感できます。

では早速、稲場さんに一〇分ほどコメントをしていただきます。稲場さんは宗教の社会貢献の問題を研究されてきて、七月二〇日のときもその立場から発表されました。東日本大震災後にどういうネットワークや動きが宗教界や社会において出てきているのかとか、ソーシャルサポートのあり方について幅広く研究されています。それでは、稲場さん、お願いします。

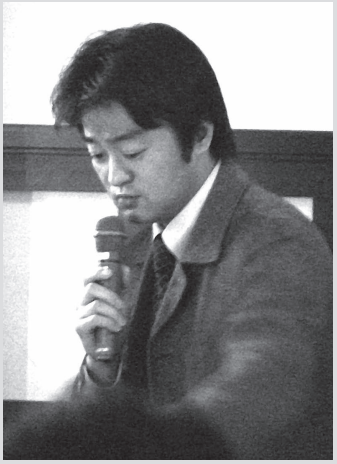
コメント1

稲場圭信

「心の相談室」の多岐にわたる活動

みなさん、こんにちは。大阪大学の稲場です。

鈴木先生の「心の相談室」のカフェ・デ・モンクのお話は、東京で行われている宗教者災害支援連絡会のほうでもご報告いただきまして、今日もあらためて、その後の活動の広がりをいろいろと教えていただきました。


稲場圭信氏

非常に多岐にわたるので、一〇分間で何に触れるかが非常に難しい。私の後に、スピリチュアルケアの領域の専門家の井上ウィマラさんがコメントされるので、私はいくつかピックアップしてコメントします。

「心の相談室」の活動は非常に多岐にわたり、電話相談から、弔い、そして、カフェ・デ・モンクのほうに変わっていったことと、ラジオの話もありました。先ほど、心のケアに関わることで、宗教者ならではという話がありました。また、あの世の世界に触れられる、そういったことをやってきたのが、宗教者、専門家であるというお話がありました。

実際に現地でも、そういうニーズがあるというのは私にも分かります。そこで、被災者の反応として、そういった方もいるし、そうじゃない方もいるなかで、宗教者は、融通無碍というか、臨機応変というのですかね、相手を見て、機根に応じて、宗教者が説いていると思うのですけれども、もうちょっと、こういうことがあったという、エピソードも含めて知りたいです。

これは、東北の文化にも関連するということで、先ほど民俗宗教の話もありましたけれども、ほかの地域ではどうか。東海・東南海・南海連動型地震もこの先あるでしょう。そういったときに、違う地域で、どのような対応ができるのかも、また重要なことと思います。

それから、諸宗派、諸宗教、超宗派の連携がうまくいっているという話で、これは震災の前から三〇年ぐらい宮城県で宗教者の連携があった、その土台があって、うまくいっているというお話でした。その後、実際にこういう活動をする上で、先ほどの川上さんの、数珠には触れないということにもありましたけれど、ここまでは踏み込めるというのには、意見の対立、価値観の対立があるのではないか。そこには、やはり葛藤があるのではないか。それをうまく乗り越えるために、たぶん、夜を徹して話し合いをしたりしたこともあるのではないか。これはちょっと大変だということもあれば、それを教えていただけたら、ほかの地域での今後の取り組みにも大きく役に立つのではないか。

あと、行政との連携、問題、課題が、最初のほうでちょっと触れられていましたけど、実際に進めていく上でどうだったのかも、知りたいところです。心のケアということでは、基本的に、宗教者以外の動きが、行政ではやはり多いと思うのですね。

ちょっと大阪府の話をします。大阪府も三月二五日から心のケアで入っていました。詳細は大阪府のホームページにもあります。心のケア相談室という名前で、小学校でやっていたらしいのです。

医療チームの専門家の人たちなので、震災の一週間後から入って、だいたい一〇〇日以内で撤退してしまう。災害反応で「ハネムーン」といわれる、気分が高揚して助け合いが起きているいい状態のときに、この専門家の人たちは入っている。もともと精神疾患のある人が対象だったり、当然ながら、身体的な問題が起きている人が対象です。それから、消防士とか、地元の警察の方々、遺体捜索とかに関わっている方のケアをしているわけです。基本的に三カ月弱で撤退してしまうのですね。

だから、宗教者の息の長いケアは、ちょっと違うのではないか。そこらへんも、宗教者ならではということが、その長い関わりで出てくるのではないか。

これは、神戸のほうですが、「こころのケアセンター」の加藤寛さんがこんなことを言っています。（外の）医者が来たら、「よそ者には話さない」と。地元の宗教者、自分たちのことが分かっている人には話すということを、こういった専門家、医療の方々も分かっているということですね。

言葉を受け止めるにはアースが必要

それから、「聞く」リスクです。こころのケア、傾聴ボランティアで、関わった一つの成果のように、津波で家が流されたことを話してもらえたから通じ合えたと感じるボランティアの人も多いと思いますけれども、専門家が聞くことのリスクもあるのです。宗教者は、ここらへんで、もっとうまく入っていけるのではないかとも思います。

医療の側の専門家の人たちが仙台の避難所に入っていました。最初ピンクのジャケットを着て入っていって、ピンクの人が話を聞いてくれると好評だったらしいのですけれども、だんだん敬遠されるようになったのです。これは、東北だけじゃないですけれど、日本のなかに精神的な病に対する偏見がある。あそこの娘がピンクの人と話していたと。そういうことから、ピンクのジャケットをやめて、名称もストレス相談室に変えたということがあるのです。

大阪府も心のケアなどのジャケットを着て入っていったのです。私がちょっと親しくしている、大船渡に入っている北海道のお坊さんが、被災者と本当に家族的な付き合いをしているところに、大阪府のこころのケアチームが、「心のケア」というジャケットを着て入っていって、被災者の方々が非常に嫌な思いをしたそうです。

大阪府から行った人たちは、心のケアの専門家ですけれど、何か話すことや相談はありますかと言って入っていったらしいですね。そうしたら、「なんでおまえらに

話さなきゃいけないんだ」と言われたこともあったみたいです。

そういったなかで、やはり、医学的、心理的なものだけではない、もっと深い心に関わるニーズがあるということは、鈴木先生の話にもありましたし、いろんな方々からも聞くところです。

そういったことから、『カウンセラーと宗教』という本のなかで、カウンセリングはもともと宗教家の仕事だと書きました。宗教者でも、心のケアの専門家ではないから、なかなかとおっしゃる方が多いのですけれども、カウンセリングの専門家の方が宗教者のカウンセリングを見て、むしろ、熟練したカウンセラーが何年もかかるような難ケースが見事におさまっていくと。治るとかではなくて、宗教者がそこにいて、何かを聞くことによっておさまるという表現を使っているのですね。これはやはりすごいなあと私も感じました。

大阪大学の前総長の鷲田清一さんが、言葉を受け止めるにはアースが必要だと言っています。被災者が心のケアで専門家に話す。でも、それを聞いている側が、そのままもともに全部受け入れてしまったら、聞く側も苦しいし、実は話している側も苦しいという話を聞きました。

真摯に聞いてくれているのはありがたい。でも一方で、「ああ、そうか」と、同じように共感して、苦しそうな反応をすると話す側も苦しくなるということもあるようです。だから、鷲田さんは、聞く側にはアースが必要だと言っているのです。

私は、アースというよりも、神、仏。宗教者はやはり、上のほうに図を書くのがいいのかなと思ったりします。そういうことがあって、宗教者の心のケアはちょっと違う領域まで踏み込んでいるのかなと考えたりしました。

最初に戻ります。宗教者の関わり方は、医療の専門家や精神科医の、よく言われるワンセッション、どれぐらいの時間でやるという、オン、オフがはっきりしているのとは違って、もっと奥深いのではないかと思います。

それから、連携です。行政との問題とか。こころへんは、今後も全国で行政と宗教者のさまざまな連携が必要なので、大きな課題です。先ほど、そういった専門の資格を持った者を生み出していくという話もありました。以上です。

鎌田　ありがとうございます。いま、三つの大きなコメントの柱があったと思いますので、後で鈴木さんにお答えしていただきます。

井上ウィマラさんは、高野山大学にスピリチュアルケア学科ができたときに准教授として赴任されましたが、次に、井上さん、コメントをお願いします。

コメント2　井上ウィマラ

JDGSの誕生

私はパワーポイントの用意がないので、二人の先生のお話に付け足すかたちでお話しさせてください。いま、お配りしたプリント「災害後の悲しみに寄り添う支援の在り方」は、『緩和ケア』、以前は『ターミナル・ケア』という名前で出ていた雑誌で、「東日本大震災・いのち・つながりをいつまでもこころに」という特集を組んだ時のものです。鈴木先生のお話に出てきた岡部先生が冒頭に書いています。その次に金田住職も書いている。それから私の順番でした。ここに、私自身の活動も含めて思うところが書いてありますので、それをご紹介しながら鈴木先生のお話にコメントするかたちでお話しさせてください。

3・11の前後、私は複雑性悲嘆の研究者と面接する予定を組んでおりました。複雑性悲嘆とは、今回のような非常にトラウマティックな災害であるとか、殺人事件とか、戦争などに出会いますと、人間のこころは非常に傷ついて、それがこんがらがってくると、うまく悲しめなくなります。涙を流して悲しめないと、その悲しみは身体化して、非常に複雑になり長期化して、医療的介入を必要とするようになります。それが、プロロングド・グリーフとか、コンプリケーティッド・グリーフと呼ばれ、研究対象になってきています。

そうした複雑性悲嘆などの場合に、PTSDの治療法として仏教瞑想のマインドフルネス瞑想が注目されています。エクスポージャー（暴露法）といって、辛い記憶を少しずつ思い出しながら馴化していくのですが、その補助作業のような形で取り入れられている呼吸法が、実は仏教瞑想のマインドフルネスに端を発したものだったと考えていただければいいと思います。こうした関係で、複雑性悲嘆の研究者の方が話がしたいと私のところに連絡をとってきてくれたのですが、面接の約束をしていたのが三月一五日でした。

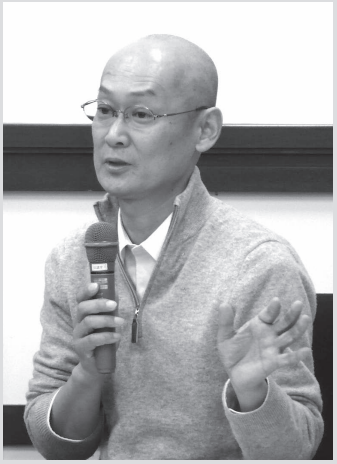
二人とも、こんな大きな出来事の直後に会うことになるとは思っていませんでした。彼女は阪神・淡路大震災の被災者でもありました。そんな出会いがきっかけで、ジャパン・ディザスター・グリーフ・サポート・プロジェクト、JDGSというプロジェクトができました。

最初は関西のメンバーだけでプロジェクトを組んだのですけれども、関東でも国立精神・神経医療研究センターの先生方が同じような活動を始めていて、関東と関西で別々の情報を流してはいけないということで、統合してJDGSができました。年が明けてホームページができましたので、関心のある方はJDGSで検索してご覧ください。

一七頁の上に、「被災地の外部から被災者を支援する」というリーフレットが載せてあります。たとえば、被災地にはさまざまなボランティアの方々が入ってゆきますが、いろいろトラブルも発生しています。神戸のときからの学びがありますので、そうした情報を集めて、こういうことに気を付けてくださいという情報をまとめました。

小さい字なのですけれど、最初の項目を読んでみます。

被災した人を弱者として何々してあげる、かわいそう


井上ウィマラ氏

にといった態度や話し方をしないでください。相手の自尊心を傷つけることになります。また、頑張ってと安易に励ますことも控えましょう。どう頑張ればよいのかも分からないときがあります。頑張ってや、頑張ろうという言葉は、何と言えばいいか分からないときに自然と出てくる言葉ですが、できるだけ使わないようにしましょう。

では、「頑張って」という一言が出てきそうになったときに、どうやって思いとどまればいいのかというところまで盛り込みたかったのですけれど、リーフレットではそこまで書けません。そうしたもどかしさを抱えながら、最小限の言葉で最大限の情報を伝えようとしました。被災後一年ぐらいは、リーフレットを使った情報提供が有益だという、海外での先行研究もありますので、いくつかのリーフレットを発行いたしました。

私は二回しか被災地に入っていませんけれども、一七頁の写真で見ていただけるように、がれきの撤去作業から、仮設住宅でのお茶っこサロンまで、いろいろな体験をさせていただきました。

次の一八頁に移りますと、惨事ストレスということが出てきます。震災当日や、その後の救急救命期に救援活動に入った自衛隊や消防とか警察とか、あるいは、遺体を捜すために船を出していただいた漁民の方とか、非常に大きなストレスを抱えました。

その時直接そこにいないとしても、被災地に入って支援活動に携わり、その、あまりのすさまじさに、無力感に打ちひしがれ、日常に戻ってきたときに現実感を失ってしまったり、自分は何か悪いことをしてしまったのではないかという罪悪感にさいなまれたりすることがあります。そうした状態を惨事ストレス（クリティカル・インシデント・ストレス）と呼ぶのだそうです。

ですから被災地から帰ってきたら、専門家であってもボランティアであっても充分な休みを取るとか、お互いに体験を話し合うとか、周囲が充分なねぎらいの言葉をかけるとか、それなりのケアが必要だということも分かっています。

宗教的ケアと専門的な心のケアの組み合わせ

一八頁の後半に、「地域性に根差したこころのケアの構築を」というところがあります。鈴木先生の話にもつながるのですけれども、東北、仙台近辺の被災地で活動されている心理士やカウンセラーの方が数人集まってくださいまして、そこでお話をうかがう機会がありました。そこで語られたのは、やはり東北独特の精神文化、風土があるので、心理士やカウンセラーという名前、立場で聞こうとしても、同じ方言を使う人であっても、仲間であっても、やはりどうしても語れない、語ってくれないことが多いということでした。

でも、そうした困難さを通しても伝わってくる被災者の罪悪感の問題とか、遺体との対面に関わるさまざまな苦しみがありました。あるいは、ある被災者の方が、仲間の遺体、遺骨安置所の番をしているのですが、生き残った家族には、自分が何をしているかという内容を話すことができずに、毎日、そのボランティアの現場に通わなければいけない。そうした方々の心のケアはどうしたらいいのかとか、いろいろなお話をうかがうことができました。

やはり、言葉によるカウンセリングだけではなくて、ボディーワークと呼ばれるような身体的なアプローチ、声を出すこと、伝統的な芸能や祭りなどを生かして、多様なかたちで悲しみを表出できる、そのエネルギーを共有し合えるようなかたちのグリーフケアが必要ではないかなと思いました。

泣いても、怒ってもいいんだよという環境を提供することです。たとえば、先ほどの鈴木先生のお話に出てきた、笑ってもいいということがあります。「こんなに笑ったのは初めてだ」というのは、それまで止まっていた時間が流れはじめたということです。そうした、集団的な表出環境の提供と、個人的なカウンセリングが有機的に絡み合うことが必要だろうと思います。そのためには、宗教だからこそできるケアに、医療、心のケアの専門的な視点から分かってきたことを組み合わせる必要があります。

たとえば、ＰＴＳＤとグリーフはどう違うのかということを理解しながら、先ほど出てきた「最近おばけが出てくる」とか、「海から目が見ている」といった現状に対して、どういうふうな関わりをするのがご本人にとっていちばんいいのかを考えてゆく必要があるでしょう。宗教的な、あの世のスピリチュアルなこととしてだけではなくて、それはもしかしたら、心の傷から出てきているものとして見たほうがいいのかもしれない。そういう心理学的・医療的見地を持ちながら、その人のナラティブに寄り添っていくかたちがいいのではないかと思います。

それを痛感しましたのは、海外の災害研究の論文をチームで翻訳したときのことです。私もパークス先生という方の論文を翻訳しました。その先生も含めて、何人かの方、特にＰＴＳＤの専門家の方がおっしゃるには、ＰＴＳＤが癒えて初めてグリーフに移ることができるということ

でした。「ＰＴＳＤの傷が癒えた人は、さめざめと泣かれるのですよね」という専門家の言葉がありました。

ＰＴＳＤの治療というのは、自我機能の回復に関するものではないかと思います。トラウマによってバラバラになってしまった機能の統合性を回復して、しっかりと悲しめるまで自我が立ち直ってゆくことのお手伝いです。その後で、あらためて悲しみをいかに癒やしていくか、感情を表現して、そこに意味を見いだしていくかという過程が続きます。そういうグリーフの話とＰＴＳＤの話を見分けられるようになること。しっかりと見分けながら、時に重なり合って見える複雑なところを読み解きながら、宗教がどういうふうに関わっていくのがよいかと考えていく必要があると思います。

災害研究では、医療の手が行き届く範囲は本当に少ないので、これまでは自然に治るだろうという見方をしていた部分が多いのです。その、自然に治るだろうというところに、宗教が果たしていた役割がどれほどあったのか。薬の治験をしても、三〇％はプラシーボ効果だそうです。でも、そのプラシーボに何か大切な意味があったのかもしれないのです。そういう視点が重要だと思います。

東北には伝統的な祭りがたくさんあって、神楽もあります。その神楽の頭（かしら）が流れ着いて、神社に届けられているという話を聞き、見に行ったことがありました。そこの神主さんのお話では、神楽や祭りが、まちを再建していくときの人のつながりの大きな支えになっているとのことでした。そうしたことを含めて、東北独特の伝統的な文化を、いかにして一緒に涙を流して、怒ったり、笑ったりしながら、もう一回町や人々のつながりを作り直していくための、新しい依代にしていくことができるかということです。トラウマという視点と、グリーフケアという視点から、祭り文化を再検討して、現代によみがえらせるためのつながりづくりを考えなければいけないのではないかと思っています。

スピリチュアルと家族の問題

最後にもう一つ。あの世の話に関わることなのですけれども、スピリチュアルケアの現場にいて思いますのは、スピリチュアル、あるいは、あの世と言われることの七、八割は、家族の問題であると私は確信をしています。

三、四世代にわたって、その家族のなかで起こった自殺、他殺、あるいは、人工妊娠中絶、さまざまな語り得ない問題があります。それが人生の生きにくさをつくって世代間に伝達されます。スピリチュアルという装いを持つと、その語りにくさが少し表現しやすくなるのではないでしょうか。スピリチュアルな問題を考えるときには、上に三、四世代、下に三、四世代ぐらいのスパンで、その家系に特有なナラティブというか、物語の絡み合いを考えなければいけないと思います。

そうした、家族の間のつながりを最初に心理学のなかで指摘したのは、おそらくユングのファミリー・コンステレーション（家族布置）という考え方だったと思われます。身ぶりという非言語的コミュニケーションによって、感じ方や生き方のパターンが伝達されるということです。スピリチュアルと言われる背景に、どんな家族の生きにくさがあるか、あるいは、つらくて語れなかった記憶があるのか。それと同時に、その家系が持っている明るさとかユーモアとか、生き抜く強さがあるはずです。そうした家系の問題として見直すことの有用性です。

鈴木先生のお話で、お墓がなくなって、位牌が流されたので、先祖崇拝が難しくなったということがありました。逆に言うと、それをいかにチャンスに変えていけるかという視点をもつことです。宗教者が、先祖を祀るための依代を失った、そういうときにこそ、自分の家系について、家族の問題について、もう一回家系図をつくってみるとか、家族歴を採集しなおしてみるとかすることができるはずです。生育歴、家族歴という視点に立つと、医業職、心理職の人にはつながりやすいと思います。

ちょっと言い方はおかしいかもしれないけれど、遊びの道具というか、プレイセラピーのような感じで、家族について思い出して、うれしかったこと、悲しかったこと、よかったこと、もっとこうしたかったことなどを語ることができる舞台装置を提供することが必要ではないかと思います。具体的には、私は、カウンセリングのなかで使えるコンステレーションという手法を考えて、いま医療の現場でも使えるように紹介しています。

スーパービジョンと宗教

もう一つ、アースの問題。稲場先生が鷲田先生のアースという視点を語ってくれましたけれども、これは、心理職の現場の人が、困難な事例に出会ったときに、自分自身の生まれ育ちを含めて先輩からカウンセリングしてもらうことに通じます。スーパービジョンと呼ばれます。先達に、自分の問題を話してみる必要があるのです。

日本では医療や心理の現場で、スーパービジョンの制度がないに等しい状況です。だからこそ、スピリチュアリティの問題が医療に入りにくいのではないかと思います。鷲田先生はアースという言い方をしたけれど、スーパービジョンという言い方をすれば、現場の方はよく分かってくださると思います。

心理職、医療職の方々がスーパービジョンを受けるシステムが整うために、宗教が何を提供することができるかが問われていて、これに答えられなければ、宗教は見放されるかもしれません。だからこそ、いま、みんなが現場で頑張ってくださっているのではないかなと期待したいと思います。

鎌田　ありがとうございました。特に最後に指摘された問題、位牌とかが流された後の家族が自分たちの家族のあり方や家系をどういうふうにして振り返り再構築していくことができるかは重要な問題点だと思います。私の観点からすると、いままで鈴木さんの話された民間信仰の世界のなかにある地域の伝統芸能の強さや、祭りや祈

りが震災後どういうふうに生かされるかは先祖崇拝の話ともつながってくると思います。

鈴木さんに質問がありましたので、まずそれに答えていただいてから質疑応答に入りたいと思います。

宗教者ならではの被災者の反応

鈴木　お二人とも、ありがとうございました。

順番にお話ししたいと思いますが、最初に稲場先生からの、宗教者ならではの被災者の反応はということですけれども、先ほど申し上げましたように、たぶん被災者の人たちには何教の教えがどうのこうのと、そういうレベルの話はあまり意味はありません。反応のある方もいらっしゃるけれど、多くはそうじゃないと思います。そういう意味で言うと、そのあたりの部分は民俗宗教的なものの方が強くなるのではないかと思います。

早い話、宮城県の宗教色はどうなのかと言うと、圧倒的に曹洞宗が強いのです。今回被災したお寺もすごく多い。寺族も含めてお坊さんにも亡くなられた方がおありです。曹洞宗というのは、どちらかというと、仏教のなかでは何でも取り込む方向ですので、民俗宗教的なものとの関連はある程度うまくやられているのではないかなと思われます。

被災者の方たちの反応は、宗教者なら誰でもいいとはたぶん思っていないのですけれども、一歩引いて見れば、そういう地元の宗教的伝統の枠組みがあれば、あまり教義に関わることなく救われる方が多いのではないかなという気がします。

超宗派的な連携がうまくいっている要因

それから、超宗派的な連携がうまくいっている要因は何かというご質問は、私もあまりはっきりとは言いがたいのですが、宗法連が長い歴史をもっているということはたしかに影響があると思うのです。

宮城県宗教法人連絡協議会のようなものが、他県でどうなっているのかいろいろうかがうのですけれども、たいてい宮城県のような関係は聞こえてこないのです。けんかしているよとか、あんまり仲良くないみたいだよといった話は聞きましたが、県単位の宗教団体が、きれいにまとまって共同で何かをするというお話はあまりない。そうなりますと、それを長年やってきて、みんなで何かしようと考えてきた宮城県は伝統は大きいのかなと思います。

そのなかで葛藤はないかというお話もありましたが、実はあります。これは、先ほど申し上げたように、人を救えない宗教学者が、人を救う宗教者をコーディネートしているわけですけど、そのために、すごく苦労している部分はあります。というのは、やはり、突出する教団もあるのです。もう、走りたくて、走りたくて。そのような教団の動きに時には足止めをするということがあります。その逆に、死者の弔いを超宗派的に行うことにあまり積極的でない教団もあるのです。関係者の方がいらして気を悪くされるといけないのですが、神道の反応が、死者の弔いに関しては他の教団と比較して相対的に遅いのです。たいへん申し訳ないのですけれども。

鎌田　私も、関係者ですが（笑）。

鈴木　すみません。ただこれは裏を考えるとよく分かるのです。つまり死者に対する対し方が、神道は、一般には〈群としての死者〉が得意なのですね。〈個としての死者〉にはあまり大規模には対峙されていないのです。

宮城県においては、そもそも神葬祭が少ないのですね。ですから〈個としての死者〉と対峙する機会はそれほど多くはないのです。それに対して、英霊のためといったかたちの、〈群としての死者〉を取り扱うのは、神道はすごく得意でよくやってこられたし、伝統があると思います。ですから今後次第に顕在化してくると思うのですが、震災死者をまとめた形で慰霊する場は、神道としてすでにやっていらっしゃるしこれからもやられると思うのですが、この震災で亡くなった個人の弔いをすることは、神葬祭でなかったならば、やりにくいのかもしれません。

とはいえ宮城県神社庁も、今回の震災に対して多方面からいろいろなところで被災者の支援に当たっていらっしゃいます。「心の相談室」としての活動に、宗法連の各教団が共に歩調を進めることができることを実現したく思っております。

ちょっと余計な言い方で、気を悪くされたらすみません。批判するつもりじゃないのです。宮城県神社庁も、今回の震災に対して多方面からいろいろなところで被災者の支援に当たっていらっしゃいます。

行政との連携

次に行政との連携の話ですけれど、「心のケアセンター」が宮城県につくられることになっています。ただ、ここは医療と臨床心理士の方がメインで、宗教者が入っていないのです。それを、なんとか「実は、関係する」というシステムにしようというのが岡部さんの狙いです。岡部さんは、「心の相談室」もいずれそこへデータとかを出し、タイアップすることを考えられています。

その一環として「心の相談室」では、宮城県内で宗教団体がどういうかたちで関わっているかのデータベースを現在制作中です。各教団ではそれぞれつくられていますが、地元の小さな村まで入って、どこがどうしているというあたりまでとなると、教団本部というよりやはり地元が動くしかないので、それをつくっています。

聞き取り調査はいい傾聴ができる基礎

あと、宗教者ならではということについては、少し余計なことですが、私は、今回被災された地域の中に、ずっと昔から調査している所が何カ所かあるのです。南相馬がそうですし、相馬がそうです。私のフィールドの中には、地域の三分の二ぐらいの方が流されたという所もあるのです。そういう、昔お祭り調査のために何泊もした

ような所で人が亡くなっていることがあって、そういうところの人々と話すというのは、宗教民俗学的なフィールドワークをするということが根っこにはあるのですが、長年入っているがゆえに、早い話、いい傾聴を行っているような気がしております。いい傾聴と言うと変ですけれども。

つまり、長年入っていたフィールドですね。家族構成とか、もっと言うと、社会の構成も分かっているわけです。そういう所の人と話すと、バックグラウンドが分かった上での話ですから、傾聴のつもりではなく調査のために行っている話であるにもかかわらず、話し相手は何かすっきりされたような、傾聴と一部通じるところがある。つまり、フィールドワークというのは、長年行っている所に限って言えば、長年の調査地で調査することが、結果として傾聴になっているといった思いを強くしました。聞き取り調査は、人と人との間でいい傾聴ができる基礎、基盤を持っているということなのでしょう。

家系図をつくる

それから、井上ウィマラさんのほうのお話で、僕が先ほど投げかけた今後の問題、祖先祭祀ですね、すごくいいヒントをいただきありがたく思います。たしかに家系図をつくり直すなどといった課題は、残された人々の気持ちを整理していく際の大きなきっかけになると思います。それは素晴らしいと思います。そういうなかでやっていくことは、たぶんすごく有効だと思いますので、チャンスを見て試してみたいと思います。

井上さんはちらっと、遊びとしてやってもいいと言われましたけれど、実は、この遊びとしてという部分、「心の相談室」全体が、先ほどからカフェ・デ・モンクがちょっとおちゃらけた感じでやっているところがあるんだと言いましたけれども、あれがいいと思っているのです。「心の相談室」の運営をしかめっ面をして、必死になってやっていたって、こんなの絶対地元には受け入れられませんよね。やはり、ちょっと遊び心が必要で、先ほどの金田諦應さんのさまざまな遊び心を持った被災地の人々との交流は、素晴らしいものだと思っております。私にとっては、今回の震災を契機にあの人と出会ったのは、一つの宝物だと思っているのです。あのお坊さんは、こっちが一生懸命真面目に話していると、ぽろっと外すような、そういう会話を平気でやってくる人なのですね。真面目にやることは必要なのだけど、生真面目だけがいいわけではなくて、遊び心を持った行動が、たぶん地元の方にもすごくいいのだろうと思います。

そして、井上さんがおっしゃったように、祭り文化から地域を再興する。これはたぶん、地域の人がいちばん入りやすい方法だと思いますし、いま宮城県では、特に神楽関係では、レスキューの方も多数入っているようですので、そういった活動が、一つの大きなきっかけになるのではないかと思っております。

鎌田　ありがとうございました。では、みなさま、いかがでしょうか。所属、お名前を言ってからお願いします。大本の高木さん、お願いします。

質疑応答＆討議

共同体的な社会が復興して死者の弔いも完結する

高木明彦　神道と言われたので、その範疇に入っているかどうか分からないですけれど、教派神道の一つの大本の例です。

たとえば、震災があったとき、死者と、残されている犠牲者で、病を抱えたり、それこそPTSDにかかっていたり、いろいろ心理的な悩みを持って生きている方、同じ東北でも、自分のところは被害を受けなかったので救われたような感じで生きている人たち、いろいろあると思うのです。

私は、宗教者と定義されると、果たして私は、宗教者として生きているのか？　人生の半分以上は、むしろ市民とか、俗世に生きているほうが日常的なので、その定義のなかには当てはまらないと思うのですけれど。

私たちは、震災は死者を突出してまつって、それを慰霊するだけでは総合的な救いが達成されたとは思わない側におり、そういう教風というか、風土で育っています。

極端に言うと、それは永遠の課題なのですけれど、やはり、こういう震災が起こらないようにしたい、また、震災が起こった場所が復興して、物質的に素晴らしいものが回復するという意味だけではないのですが、前よりも、共同体的な仲間意識や助け合いの村型の大家族的社会だとか、村でなくても、いま失われている絆という言葉、そういうものが高まる集落、都市が復興して、初めて死者の弔いも完結するのだと。これは、ちょっとした変化球かもしれません。申し訳ないのですけれど。

それは置いておきまして、実際に、宗教祭礼、祈り、葬式。亡くなった方の命日だとか、この後十年、二十年とあろうと思いますので、そういうことを踏まえて思うとき、一つ面白いのは、被災者は、宗教の種別を選んでいないということを教えていただきました。

大本であろうが、キリスト教であろうが、何か真剣に取り組んだり、この人なら本当の悲しみを語れると被災者側が判断したときに、初めてわれわれは宗教者と言えるのであって、自覚として持つのは重要なのですけれど、勝手にわれわれが分類して、宗教者までいっていないのではないかという反省を非常に厳しく抱いています。

鎌田　ありがとうございます。では、鈴木さん、お答えください。

まず死者の問題を考える

鈴木　ありがとうございます。私の言い方がまずくて誤解されてしまったなら申し訳ないのですが、先ほど私が神道と言ったのは、いわゆる神社神道のことでした。い

わゆる教派神道をイメージしてお話ししたわけではないのです。

震災の問題が死者の慰霊だけではないというお話も、そのとおりだと思います。こうした問題もたぶん、私がさっき言ったグラデーションで考え、どのへんのこととして言うかということでちがうのではないかなと思うのです。

差し当たって、われわれが考えているところでは、まず死者の問題を考えるのが当面の課題で、そこを切り口にして、その後は濃さを変えて動いていくということになるのではないかと思います。

また被災者は宗教を選んでいないというのは、本当にそう思います。ですから、具体的に言うと、キリスト教の方が何か祈っているときも、みなさん、一緒に手を合わせたりしているのです。先ほどのクリスマスパーティーですけれど、牧師さんがお話しされ、最後に祈りましょうと言ったとき、大半の人々はプロテスタントの信者ではないはずですけれども、大概の人が手をこうやって、祈っていらしたのですね。だから、日本人は、そういうような異教のしぐさをやるということをそれほど大きな壁と考えないのだと思います。

そういう意味で言うと、宗教を選んでいないということはあると思います。でも、最終的には、鍋島先生の葬式の司祭でお話ししたように、やはり、本当に気持ちがあるかどうかは、被災者はよく見ているのですね。

被災地にはいろんな教団が入ってきたのですが、被災者ということで避難所に入り、布教活動に励んでいたという困った問題も起こっていました。出ていってもらおうとすると、自分は被災者だから避難所にいる権利があると言って出ていくことを拒んだりしたそうです。

鎌田　井上さん、どうぞ。

PTGを通した医療と宗教のつながり方

井上　死者だけでなく、復興というテーマに絡んでですけれども、トラウマ関係の研究で、ポスト・トラウマティック・グロース（PTG）という概念が出てきています。そういう大きな出来事の後で適切なケアを受ければ、それはその人の魂と言いますか、存在の成長につながるという視点です。

現実にはその反対に、個人やコミュニティ全体が腐敗してしまうような場合もあるわけですが、災害ケアの研究からはPTGもありうるということです。宗教者は、それに対応するようなかたちで、これまで宗教が行ってきた宗教的ケアが魂の危機と成長にどういうふうに寄与してきたのか、そこで儀礼はどのような役割を果たしてきたのか、そうしたことをちゃんと説明することが必要だと思います。

PTGのなかで大切なのはエビデンスですが、レジリエンス（修復可能性）とスピリチュアリティが大きな柱になっています。宗教がそこで発言するのは、とても有意義なことであり、必要なことだと思います。

そのときに、たとえばPTSDの症状と言われるようないくつかの状態があって、それを確かめるためにお医者さんや研究者が喜ぶような、質問の仕方、報告の仕方があります。そういう手法を宗教者も上手にうまく使って、自分たちの具体的な宗教的ケアのなかで、「こういう話が出てくるのですが、それはこういうふうに語られています」というふうに持ってゆくのです。そして、「こういうふうな見方の転換ができると、こういうふうに変わります」ということを宗教者が答えられるように、エビデンスではないですけれども、そういうものにも対応できるようなあり方につくり変えていくことで、PTGという概念を通して、医療と宗教が新しいつながり方を見いだす可能性は十分にあると思います。

鎌田　そういう面では、鈴木さんが話された「臨床宗教師」が、心理学や精神医学やほかの宗派も含めて、幅広く宗教儀礼全般を考えることができたならば、今の問題に対してもっと適切に対応することが可能かもしれません。他にはいかがでしょうか。

超宗派と超宗教

熊谷誠慈　京都大学「白眉プロジェクト」の熊谷と申します。非常に興味深いご発表で、たいへん勉強になりました。一つ気になった点が、超宗派とおっしゃる場合に、宗教の壁を越えるという超宗教なのか、あるいは、同一宗教内の宗派の壁を越えるという超宗派なのかというので、分かりにくい部分もありまして。

たとえば、先ほどの数珠を取られなかった方が、カトリックなのか、あるいはプロテスタントなのかという点で何か違いがあるのかとか、あるいは、仏教の場合だと、普段は文句言い合いながらでも、こうした危機的状況下になると、超宗派で結束する場合があると思うのですけれども、それが、神道と仏教という異なる宗教間でどうつながっていくのかという超宗教的な点に関しましては私もまったく分かっておりませんし、お聞きしたいなと思います。

それから、先ほど、神道の側が、いわゆる群れの死者に対しては効果を持っているという話で、ああ、なるほどなと思ったのですけれども、逆に、仏教のほうは個に対してある程度強いのかなと思ったのですが。

また、仏教は瞬時的な局面に対しては強いかなと思うのですけれども、神道は、わりと継時的な強さがあるのかなと思います。たとえば、最近法事とかをなさる方がだんだん減ってきていると思うのです。三回忌、七回忌、十三回忌と、昔の方はされていましたけれども、最近はどんどん減ってきて、一周忌で終わりにしますという方が増えてきていると思うのです。

それに対して、神社には、「去年お参りしたから、もう来年はいいです」と言う人はおられず、ずっと毎年毎年みなさん行かれるという、何か継続的な力は持っておられるような気もします。

たとえば、何か神道が震災復興にリアルタイムでコ

ミットしにくい点があるならば、必ず逆に、何かの面では神道が持つ強い部分があると思いますので、仏教も神道も足並みそろえて、同時に何かをするというより、お互いの長所と、ある意味では短所の部分を、うまく差別化しながら進めることができるのかという点について、非常に興味があります。

仏教の弔い上げという装置

鈴木　ありがとうございます。まず、超宗派の話からです。この用語は、最初こう言っちゃったからそのまま言っているというところが、正直言ってあります。なぜならば、実は、超宗派と言うときには、超教派とか、そういうつもりで言っていただけではなくて、神道、仏教、キリスト教、イスラム教、そういった、個別宗教を超えてというつもりでもあったのです。

あったのですけれど、今度、超宗教と言ったら、宗教現象を超えたものというふうに考えられてしまう。そういう読み方もできますよね。そういう意味で、超宗教という言葉を使ったら、「宗教を超えた何をやっているんですか」という話になっちゃっても困る。

実は、最初の頃から、われわれのなかで、超宗派という言い方で言ってきて、宗教、各教団を超えたとか、教派も超えたというつもりでも、だから、宗教法人も超えたと言いますか、そういうようないろんなレベルを含めてのところで、何となくごまかしているというのが正直なところです。

あらためて考えると、超宗教って実は使いにくい言葉なのですよね、ということにもなります。ですから、ちょっと痛いところをつかれているのですが、では、いい言葉はあるかなと言われると、いますぐはなかなかできないというところで、勘弁してください。

それで、仏教が刹那的、神道が継続的な力があるというのは、そういう言い方も、もちろんできるかと思います。たぶん、一つは、神葬祭を選ぶというか、神葬祭をやっていく方が非常に少ないというのがあります。そこは大きなことで、これは、近世から現代の日本の宗教史の流れのなかで、そうなってしまったということもあるかと思います。

それと、これは私の個人的な意見ですが、仏教のいわゆる弔い上げというのは、すごくいい装置なのですよ。三三年、五〇年、そこを過ぎたら、あとはもう個別に故人のことを弔わなくてよくなるのです。そのイエの先祖代々にはいるわけだから。

つまり、仏教の弔い上げという装置を経ることで、「先祖代々」の位牌を祀っておく限り、個別死者の弔いとして特別なことはしなくてよくなるのです。ダレベエさん個別のは、もう三十三回忌で終わってもいいわけです。ところが、私が気になっているのは、戦死者です。戦死者は、いまずっとそのままですよね。お墓もずっとそのままあって。だから、戦死者、とりわけ、第二次世界大戦のときの戦死者の場合、われわれはよく目にするのだけれど、いつまでどこまでやるのかなということが、すごく気になるところですね。

だから、そこは、仏教はうまくやっているなと思うのです。先祖代々を祀っていれば忘れてはいないのですもん。忘れてないのだけれども、個別の死者の弔いはやらないですませるシステムをつくっているわけです。でも、年限を設けない継続的な力というのは、逆に、力と言っても、プラスの力じゃない場合も出てくるのかなという気はするのです。

このあたり神道のほうもいま神葬祭をいろいろ考えていますね。各県の神社庁レベルでもやっていますし、本庁のところでももちろんです。いろんなところで神葬祭をどういうふうにすべきかを検討していますが、このあたりはやはり難しい、よく分からないところなのかなという気がします。これからも考えてみたいと思います。ありがとうございます。

夜の神道文化の再検討

鎌田　そろそろ時間がなくなってきたので、ここで前半の発表を締めくくりたいと思うのですが、最後に私のほうからコメント的に感想を述べたいと思います。

まず、フィールドワークをしていた人がいい傾聴ができる可能性があるということ。それは重要点ですね。救えない宗教学者が救える可能性をどこかで持っているということは救いですから。

私はこの三〇年、天河大辨財天社に通ってきました。三月一一日に東日本大震災があって壊滅的な被害があったのですが、九月三日・四日に天河から十津川・熊野川流域にかけて台風一二号の影響によって非常に大きな被災を受けて、森林も深層崩壊したのです。

私は天河に三〇年近く通っていたので、鈴木さんがおっしゃっているように、天河の土地の人たちと次の段階の結びつきというか、話ができるような状況が生まれました。

そういう意味で、いいフィールドワークかどうかは別にして、長年通っていることが次の段階へ踏み込むきっかけになることは間違いなくあると思います。そのときに、宗教学者や研究者といえども、研究を越えてより実践的な立場に立つことが可能なのではないか。この天河大辨財天社について、かつて私は、気功家で評論家の津村喬さんと共編で『天河曼陀羅――超宗教への水路』（春秋社、一九九四年）という本を出しておりますが、ここは今日のパワースポットブームの発祥地であり、超宗教・超宗派のモデルの神仏習合神社です。

ともかく、フィールドワークや傾聴という観点からも、東北大学に寄付講座で実践宗教学の講座ができることをこころから願っていますし、高野山大学のスピリチュアルケア学科にももっともっと頑張ってほしいところでもあります。それが一つ。

第二に、神道についてですが、国学神道にも本居宣長の神学と平田篤胤の神学の二つの系統があって、本居宣長は言ってみれば昼間の神道。昼間の、天照大神や皇室を中心とした神道です。そこでは死後の世界を基本的に問わない。この世の次元の問題を中心に考える。それに対して、出雲大社とか、平田篤胤の神学は大本にもつながっていきますが、夜の神学、冥界・霊界・月の神学です。

この平田篤胤の系統は、死後の魂の鎮まりなくして大和心の完成もないのだという立場です。この流れをもう一回、震災以後考え直すことが、私たちの神道のサイドにいる人間にとって重要になります。つまり、夜の神道の文化や流れを再検討することが課題なのです。

いま、鈴木さんのいろいろな発表を通して、「心の相談室」という具体的な超宗派の活動が実際の民間信仰との間のグラデーションのなかでこれから先どんな課題を解決しながら、また発展させながら取り組むことができるか、一つのモデルケースとして、「心の相談室」自体を研究対象にしても面白いかもしれないとも思います。

そういう意味で、これからいろんなレベルの研究が考えられていかなくてはいけないのではないかとも思っています。それこそが、先ほど井上さんが言ってくださった、スーパーバイザーのあり方ですね。いろんな次元にアースする、抜いていくレベルを持つことによって、われわれの世界がもう一回リサイクルし、循環して、いい空気が流れることができる。

東北大学や東京大学や、東京や京都や大阪で行っている研究など、いろんなものが息抜きをして、気を流していくことができたならば、こういう研究が持っている可能性ももっと先へ進んで連携していくことができるのではないか。そういうことをこの震災プロジェクトとしては望んでおります。

では、一〇分間の休憩の後に、金子昭さんの発表、「宗教的世直しの問題」に移ります。そして、最後にもう一回、総合討論的な時間を持ちますので、そのときに、鈴木さんの問題についても、再度コメントなり、意見なりを言っていただければと思います。

休み時間の間に、大槌町のサンガ岩手の方たちがつくった手芸品を手に取って見ていただき、購入していただけるとありがたく思います。

（休憩）

鎌田　それでは始めたいと思います。天理大学おやさと研究所教授の金子昭さんにより「宗教的世直し思想について」という表題で発表していただきます。よろしくお願いします。

発表2
宗教的世直し思想について
金子昭

ご紹介いただきました、天理大学おやさと研究所の金子と申します。

先ほどの鈴木先生のお話は、非常に臨場感あふれたものでした。やはり自らも被災地におられて、被災者の方と常に関わりつつ、ご自身も支援を継続されているご様子がありありと伝わってまいりました。

私自身は関西の人間ですし、ここは関西です。関西にいると、どうしても東北の被災地と距離感があるわけです。私たち関西の人間も、できれば被災地に行って何か支援をしたいという気持ちは強いけれども、なかなか行くことができない。しかし気になる。この距離感は、単に物理的なものだけでなく、関西と東北の間の文化的・民俗的な意味でのものでもあり、鈴木先生のご発表からそれを感じてもいます。それで、私の発表は中立的な意味で申し上げるわけですが、被災地からワンクッションを置いたこの関西という地域の中で、震災後一年近く経ったこの時点で、宗教者として何が考えられるのか、また何ができるのか、ということについてお話ししたいと思います。

私が今回、「宗教的世直し思想について」ということを取り上げたのは、震災から一年近く経過して、緊急支援という段階はひとまず終えている現在、宗教者の思想や行動は、その後どこに向かおうとしているのか、ひとつ見極めてみたいという思いがあるからです。

もちろん、被災地への支援活動そのものは、先ほどの鈴木先生のお話ではないですけれども、常に現場密着型で、今後かたちを変えて進められていくのはたしかです。宗教者たちは今回の支援において、阪神大震災以上に大きな活動をしてきた。そのときに、「自分たちもこういうことができたのだ」、あるいは「こういうこともできるのだ」という宗教が持つ潜在的な力と言いますか底力について少し反省的に考え直しつつあるようにも見えるのです。私の発表は、そういう意味であまり臨場感はなく、むしろ宗教哲学的にちょっと理屈っぽい話になるかもしれませんので、あらかじめお断りしておきたいと思います。

天譴論でも神義論でもなく

まず初めに、震災に際して、わが国の宗教者はどう判断して、どう動いたかということを考えてみたいと思います。東日本大震災が起こったときに、わが国の宗教者は、私が知る限り、明確なかたちで天譴論だとか神義論というものを打ち出さなかった。あるいは打ち出せなかったようにも思います。

大きな災害が起こったときに、われわれはどうしても、そこに何か意味付けをしたくなります。プレートが衝突して、こんな大津波が起こったという科学的説明だけでは、どうしても満足できない。何かもっと納得したいという思いがあるわけですね。

納得の二つの型として、天譴論と神義論というのがあ

り得ると思います。どの宗教においても両者の傾向があって、あるいは宗教的立場をはっきり取らない人であっても、天譴論的、あるいは神義論的な考え方を表明する方がいます。

天譴論というのは、ご存じのように、蓄積された人間の過失が、享楽主義とか我欲とかいったものが神仏の怒りを招いた結果、このような災害が起こった、つまり天罰を食らったという考え方です。しかし、そのようなことを今さら、したり顔で説かれても、どうにもならないところがあります。宗教者がそんなことを言うなら、なぜ予言できなかったのかと、かえって責められるかもしれません。それに天譴論は、それ自体、もともと後ろ向きの因果論の文脈で説かれているということもあって、説けば説くほど人々を意気消沈させるという性格を本質的に持っています。

もっと問題なのは、天譴論というのは、自然災害と人的行為との関わりに対して、最も安易で傍観者的な解釈ではないか、ということなのです。つまり天譴論を説く人は、当事者として現場にいないのです。自分は関係ない。だから説けるわけです。そういうことを念頭に置き、天譴論を最も説いてはいけない人がいるとすると、それこそ宗教者ではないかと私は思うわけです。

これに対して、神義論（弁神論）というのがあるわけですけれども、このような大きな苦難が起こったのも、万能で自然な神仏による深い思惑があるのだというわけです。これには客観的なタイプと、主観的（主体的）なタイプとがあって、客観的なタイプというのは、よく言われるライプニッツ流の予定調和説がその典型的な例になりますけれども、さすがにこれでは他人ごとのような感じがするので、いまはもう少し深められた主観的（主体的）なタイプの弁神論を見聞きすることがあります。

それはこういうものです。大災害は人間にとっては大きな不条理であって、どうしてこんなものが起こってしまったのだろうか。いや、これもまた人間（人類）を正しい方向へ導くために下された大きな鉄槌に違いない。やはり神仏の慈悲として受け止めなければいけないのではないか、いやそのように受け取るべきだという考え方です。

でも、不条理をなんとか理屈付けよう、納得しようという気持ちは分かるのですけれども、これでさえ、力ずくで説明し、無理やり納得させようとすることになってしまって、実は説得力がない。ですから、多くの宗教者は東日本大震災に際して、実際、語るべき言葉を失ったはずです。

現実の世界というのは、どんな宗教の教義であっても、性急な解釈を拒む手ごわさを持っております。この問題に対していたずらな思弁をこらし、もっともらしく合理化して説明する前に、むしろ、まず突き付けられた現実そのものに直面して、その中で各自が何をなすべきか、自分に可能な手助けを行うのが先決ではないか。

実際、多くの宗教者たちは、いや宗教者でなくても多くの人々はそう思って、大災害の報道に接するや、直ちに立ち上がり、被災地の支援、あるいは後方支援に自らのあり方を定位したわけです。これは正しい方向性であったと思います。

ここから言えることはどういうことかというと、宗教をはかる究極の尺度は、天譴論であれ、神義論であれ、世界を教義的な解釈で理屈付けることではなく、むしろ、その宗教が人間をいかに生き生きとして倫理的な実践活動に促すかどうかにあるということです。

自分の実践を後ろから後押ししてくれるものがある、あるいは存在があって、これを自覚的に認めるのが宗教だと思うのです。ですから、理屈ではたとえ納得できなくても、頼るべき存在がそこにいることを直感する立場、それが宗教ではないかと思うわけです。

拠って立つべきは、私たちの内側に感じるところの超越的な存在者（神仏）であって、苦難や孤独の中にあってこそ、この存在者が臨在することを特に痛切に感じられるものです。どんな危機にあっても、自分がなんらかの神仏と共にあると自覚しているとき、私たちはたしかな地盤の上に立っていると感じることができるわけです。

それゆえ、私たちがなすべきことは、神仏の臨在の下に生きているということを自覚しながら、人間として直面する難問を粘り強く解決していくことなのです。実際に宗教者が被災地で、さまざまな多岐にわたる活動を行っているのもその表れではないでしょうか。しかも、いわゆる宗教者と呼ばれる人だけではなくて、そういう実存的な潜在力は実は誰もが持っていると思うのです。

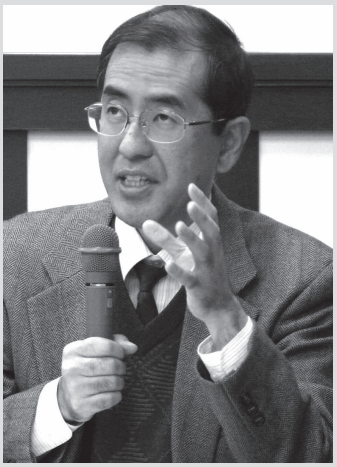
人々はそうやって被災地に関わってきました。そして、あれこれ問題に取り組んでいる中で、だんだん時間が経ってまいります。被災地にも日常性がだんだん戻ってきます。そんなとき、これまで一生懸命、被災地のために支援をしてきた宗教者たちが、ふと自分たちが生きている世界というか、世の中全般にまなざしを向け直す瞬間があります。実は、そのときに「世直し」という観念が表れてくるのです。自分は今まで被災地救援にばかり目が行っていたけど、今自分がいるこの社会自体だって、無縁社会とか格差社会とか貧困社会とか、いろいろな問題をかかえているではないか。世の中、これでいいわけがない。なんとか自分たちの力で変革していくことができないだろうか。これが宗教的世直し思想として結晶していくのです。

私は、宗教的支援の活動の延長で宗教者自身が気付いた宗教的世直し思想について、そうした意味をこめて取り上げた次第であります。

〝世直し力〟の本質は〝宗教力〟

世直しと言っても、では「世直しとはこれこれこうである」と、ポジティブに定義するのは非常に難しいところがあります。私は、むしろ、世直しとは何でないかというところから考えたほうが分かりやすい気がして、あえて極端な対比で考えてみたいと思います。

これまでも、宗教が上から社会を変えようという動き


金子昭氏

がありましたし、いまもあります。たとえば、宗教団体が政党を支持して、国や政治を動かしていこうとするのがもっとも分かりやすい例です。しかし、世直しというのはそういうものとは違うものではないか。世直しが、草の根の人々から澎湃と巻き起こるものであるとすると、それと対極のものこそ、上からのトップダウンの改革ではないかと思うのです。

阪神大震災のときでも東日本大震災のときでも、新たな宗教ブームとか、宗教教団ブームは起こりませんでした。おそらく今後も起こらないだろうと思われます。しかし、私は、代理現象あるいは擬似現象のようなものは起こっているような気がするのです。関西に住んでいるとよく分かるのですけれども、今をときめく人気政治家の橋下徹氏と彼の大阪都構想を見ていると、この現象などはむしろ宗教学の用語で説明したほうが分かりやすいような気がすることがあるのです。

つまり、「大阪都」は橋下氏自身もそう明確な具体的設計図は持っていないし、まして一般の有権者にはよく分からない。よく分からないけれども、実現すればすべてがよくなるのではないかと、なんとなく思いこんでしまっている人がたくさんいます。つまり、一種の「地上天国」のようなイメージです。また橋下氏についても、彼は独裁者と言われていますが、そもそも独裁者というのは悪い言葉ですけれども、なんとなく肯定的な意味合いで使われるようになってきて、橋下氏こそが閉塞した大阪というか、関西を救ってくれる一種の「救世主」のように見られています。そういう雰囲気を感じることがあります。

しかし、私自身は、この雰囲気は非常に危ういと思っています。なぜなら、時代の閉塞感というものがあるにしても、このような上からの改革では決して突破できないと思っておりますし、むしろトップダウンの「改革」に過度に期待して人々が政治に受け身になり、かえって無力感と依存心ばかりが広がるからです。草の根の世直しも、このような上からの改革とは無縁のものです。世直しの担い手は、やはりどこまでも庶民というか民衆であって、民衆が下から自分たちの力で変えていくものだと思うのです。

現在、福島第一原発の事故を受けて、反原発運動が起こり、原発の是非を問う住民投票などの動きが各地で起こっています（大阪でもありますが、それこそ民衆の自発的な動きにもかかわらず、橋下氏はなぜかそれを価値がないとして批判的に見ていますが）。この反原発運動とよく重ね合わせて取り上げられている人物が、明治時代後半の鉱毒反対闘争で知られる田中正造（一八四一－一九一三）です。

今からみれば時代的な制約などもありますけれども、田中正造の鉱毒反対運動の射程は、草の根の民主主義に基づいた、常に絶えざる世直しの運動へと伸びていると思います。足尾銅山の開発も、原子力発電も、いずれも、お上が産官学の挙国一致で推進してきた国策でありました。それに対する真っ向からの反対運動なのです。

そのような反対運動に挺身しているのは誰なのかというと、これが在野の人たちなのです。要するに民衆です。あてにならないのはお上なのです。そして、在野中の在野たる者は、いったい誰なのかと考えてみたときに、それは宗教者ではないかと、私は考えているのです。宗教者がそうした草の根の活動に関わり、その思想が活動の精神的支柱になるとすれば、これが〝民衆力〟を発揮させる民衆宗教の力になるのではないか。政府の権力に同化しないで、自らは常に対抗する力であり続けるのです。

最近、「新しい公共」ということが言われています。私たち民間の者が主体的に言っていく分には問題ないと思うのですけれども、政府のほうから言われたり、ボランティアも無償の労働力として使ってやろうという行政の動きに対しては、常に警戒心を怠ってはいけないと思うのです。

私は、田中正造のイメージでもって、宗教者のイメージを少し脱構築してみたいと思っております。宗教者というのは、肩書ではなくて生きざまであります。田中正造もたしかに晩年はキリストの信仰を深めました。けれども洗礼はついに受けませんでした。彼にとってなにより大切だったのは、聖書に書かれてある精神で行動することだったのです。

彼が鉱毒反対の拠点にしていたのは仏教のお寺でした。そこに事務局を置いて中央政府に「押し出し」を行う拠点としていたわけです。だからといって、田中正造はキリスト教者だったのか、仏教者だったのか、詮索しても大して意味がないと思うのです。

伝統仏教の例が鈴木先生のお話の中で出てきましたが、お坊さんたちも、別に悟りすました僧として行動をしているわけではなくて、聖（ひじり）のように民衆の中に分け入って活動しているように思います。

聖という言葉は、いわゆる職業的宗教者とか、在家の求道者との違いとか、あるいは伝統宗教と新宗教の違いとかも、あまり意味を持たないようにしてしまうところがあります。

宗教がかけがえのない一人一人の人間を大切にする限り、私は、それは真の宗教として、いずれも民衆宗教だと思っております。一人一人の人間を大切にするということは、一人一人の人間の内面性、つまり一人一人の心

か魂を大切にするということです。もし民衆宗教が社会の構造を変えていくとしたら、一人一人の心の内面に触れることによって人間の内面的変革から行っていくものであろうと思われます。

その意味で、世直しもまた、内面性の変革に由来するものだと言えるのではないでしょうか。世直しは、単なる生活改善の自力更生運動といったものではありません。このような宗教者イメージを敷衍して別な言い方でまとめ直してみると、次のように言えると思います。

つまり、超越的な存在とのつながりにおいて、内面性が豊かである人間が真の意味での宗教者です。うまずたゆまず人々のために黙々と尽くしている人は、自ら意識しているか否かを問わず、実はきわめて宗教的な人だと思います。

そういう人は、活動への無限のエネルギーを得る火種を自分の内面において絶やすことがありません。だから、活動もずっと継続できると思うのです。

人間的エネルギーだけでやっていては、やがて枯渇する。あるいは疲弊して力尽きてしまうということがあるわけです。けれども、宗教者は火種を別なところに持っている。それは常に絶やされることがない。この無限のエネルギー源は、先ほど出ました「アース」という言い方にもつながってきますし、あるいは「スーパーバイザー」の存在ということにも関係してきます。これがあることが宗教者の強みだと思うのです。

世直しの性格とそのイメージ

ここで、世直しの性格についても触れていきたいのですが、それには二つあると思います。

一つは、文明の転換という意味です。文明の転換と言っても、やはり人間の内面的な革新から生まれるものです。外面とか内面という対比については、社会心理学者のエーリッヒ・フロム（一九〇〇－一九八〇）がうまく説明しているので、その考え方を拝借して説明してみます。

現代文明およびその生活様式を、フロムは「持つ様式」の最たるものとして表現しました。ところが、大災害は、まさにこれらの人間の「持てるもの」、有形無形の財産を直撃してしまうわけです。

これらのものはみな、私という人間の外側にある存在ですが、それがすべて剝ぎ取られて、いわば人間がホームレス状態になってしまうのです。そういう状態になったとしても、やはり私がいるという事実は残ります。それが、フロム流に言うと「ある様式」となるわけです。

私という人間の中心はどこまでも私自身の中にあって、ある意味、自分の外側にあるものを剝ぎ取られたら、内側のものへ目を向けざるを得なくなるという側面もあります。「ある様式」というのは、私の内側から湧き上がってくる人間的な力であって、それに即して生きるということです。

フロムは、これを「生産的能動性」という言葉で表現しているのですけれども、まさにそれは、私という人間が「ありたい」という、実存的な自己実現の意志にほかなりません。

またその達成には、心中深くから喜びが必ず伴ってきます。これは、フロムの言い方をそのまま使って言うのですが、「持てるもの」がすべて取り去られても存続する不朽の「いのち」であります。

突如として出現する大災害は、人間の「持つ様式」を激しく揺さぶりました。「持つ様式」と「ある様式」というのが、実は人間にとって実存的な意味で二者択一の可能性であるということがここで分かったわけです。このとき、「ある様式」における「生産的能動性」を超越的存在に由来する普遍的な救済意志の表れとして自覚するのが、宗教者のあり方です。

ちょっと難しい言い方をしてしまいましたけれども、「生産的能動性」というのは、内側から湧き立ってくる力と言いますか、エネルギーを一つの火種にしまして、それを、自分だけではなく、自分以外の存在をも生かしていこうとする大きな意志として自覚するということです。そういうことができる存在が宗教者だという位置付けなのです。

そしてもう一つの世直しの性格は「谷底せり上げ」です。これは、天理教教祖の中山みき（一七九八－一八八七）の言葉ですけれども、ここで民衆宗教と草の根民主主義との関わりが出てくると思うのです。

「せり上げ」という言葉ですが、歌舞伎などで、役者が舞台の上に、いまは機械を使っていますが、下のほうから上げられる仕掛けのことです。それと同じように、社会の周辺や谷底にいる人たちが社会の表舞台にせり上がっていく。

ここでは、最も低い立場に置かれた人々と同じ目線に立っているということが指摘できます。周辺や谷底にいるというのは、いわば社会から排除されている状態ですけれども、それが社会の表舞台にせり上がる。つまり社会の中へと放出されて、自らがエンパワーされていく。それによって社会変革の一翼を担うことができるのです。そこからこの世の高いところに向かって逆流を起こす。これが世直しになるわけです。

幕末維新期には全国で世直し一揆や打ち壊しが頻繁に起こりましたが、そういう極端なかたちではないにしても、人々が自分たちの力で世直しをしようとして立ち上がってきた歴史があるわけです。時代は変わっても、その気概は私たちの中に伝わっています。これこそ、草の根民主主義というものであって、そうした気概を自ら身をもってなし得るのが在野中の在野的存在である宗教者ではないかと思うわけです。

ここで少し視点を変えて、世直しのイメージについて、日本語から見ておきたいと思います。「世が直る」ということには、生命力が更新され、充実されていくことが含まれています。

小林一茶の『おらが春』の中に、「稲妻やひと切づつに世が直る」という句があります。稲妻が、ぴかりぴか

りと光るたびにイネの作柄がだんだんよくなってくる。このありさまを形容するのに「世が直る」と言っているのですけれども、生命力が更新されて充実していくという、このイメージは、中山みきの『みかぐらうた』にも反映されているように思われます。

『みかぐらうた』の一下り目の中に、「四ツよのなか」とあります。これは「よのなか」ですから世界という意味もあるのですけれども、大和方言では「豊年満作」、つまり稲の生命力が充実して大きな収穫を得たありさまを言います。手踊りの形も、「勇みの手」といって勇んだ手で前進していくあり方で表されています。

同じくその二下り目のところに、「三ツみにつく、四ツよなほり」とあります。ここで「世直り」が出てきます。『おらが春』では、「稲の作柄がよくなる」という意味でしたけれども、『みかぐらうた』の場合は、後の文脈と関係させていけば、「この世は立て替わる」という、より広い意味で解釈されるのが妥当だと思うのです。実際、手踊りの形としても、世界を見渡し世界を変えようとするかのように、足を一歩前へ大きく出して、ぐるりと回るという、かなり大きなものです。

この後、「五ツいづれもつきくるならば」（どの者も、皆この道についてくるならば）、「六ツむほん（謀反）のねえ（根）をき（切）らふ、七ツなんじふ（難渋）をすくいあぐれば、八ツやまひ（病）のね（根）をき（切）らふ」と続きます。謀反、難渋、病という三つの悪を断ち切る。ここのところが、具体的な内容として世直りの内容になってくるわけです。

誰もがこの教えにつき従うならば、神は、力強く積極的に、この世の謀反や難渋や病気の根を断ち切っていく。つまり、そういう積極的な社会変革的な内容を持っている。みきにおける神のメッセージは、明らかに不平等な世の中、さまざまな不幸せに満ちた世の中を変革していくことにある。そういうふうに受け取ることができると思うのです。

では、世直しはどういうステップを踏んで進められるか。どの宗教もおそらく似ていると思うのですけれども、先ほどから天理教の話をしているので、天理教の例で説明をさせてもらいますと、中山みきの直筆の『おふでさき』というものがあります。その中に、こういう歌が二首続けて書かれているところがあります。それは、人間の助け合いが神の救済を引き出すという場面です。

このさきハせかいぢううハいちれつに　よろづたがいにたすけするなら　十二号九三

月日にもその心をばうけとりて　どんなたすけもするとおもゑよ　十二号九四

上の「たがいにたすけするなら」の主語は人間です。その内容も、相互に助け合うという、人間としての助け合いです。下の「どんなたすけもする」の主語は神です（月日というのは神の言い換えです）。「どんなたすけもする」というのは、神ならではの助け、救済に当たります。となると、この二つの歌を合わせて考えると、人間がまず助け合いをすることで、そのたすけ心を神が受け取って神ならではの助け（救済）をするというステップを踏みながら、人間と神との共同作業によって世直しが進んでいくというように受け取ることができると思います。どの宗教にもそうした〝世直し力〟というのがあると思います。それをどういうふうに発揮していくかで、その宗教の力量が問われてくると私は見ております。

〝世直し力〟の内には自由の〝創造力〟がある

苦しんでいる同胞や衆生の姿を見て、自分だけが安閑として生きていいのかという負い目の感覚は誰しも持つでしょう。さらにそれは、自分に可能な責任を果たしていかなければいけないという、やむにやまれぬ思いとして表れます。被災地の現場をテレビで見て、もう居ても立ってもいられなくて、自分にできることは何かないかと動きだす気持ちです。

このような思いが、究極的には社会変革を促す希望の力になっていく。何か自分にできることをしなくてはならないという責任感を延長させていけば、そのような希望の力に至りうると思うのです。

では、その希望とは何かということです。哲学的な定義みたいになってしまうのですが、私は、希望というのは、未来を自分のところへ来させようとする現在の姿だと考えます。

目の前の困難な課題が解決され、世の中の苦難や不幸がなくなった世界を、われわれは未来のイメージとして持ちます。その未来をまさに自分のところに来させようとする。そのいまの姿が希望だというわけです。この希望というのは、絶えず能動的で主体的なものであって、その意味では、受け身的かつ傍観者的な期待とは区別されます。

何よりも、この世の中のさまざまな問題に気が付いた私たち自身が、下からの民衆力で自分たちを押し上げて、せり上げていかなくてはいけない。上から社会を改革してもらうことを待っていては何も始まらない。いや、むしろそういう受け身の姿勢がいちばん危ういと思います。

そうしたことをふまえ、宗教それ自体が人間を苦難から解放する自由の〝創造力〟を持っているというところを説明したいと思います。

私は、七月二〇日のシンポジウムのときに、本日ここにおられる関西大学の宮本要太郎先生が以前私に言われた問いかけを紹介したことがあります。つまり、被災地の人たちは大津波という、不条理に満ち、あり得ない現実に遭遇しました。これは苦痛に満ちてはいるけれども、一種の超越体験ではないかというわけです。これはたしかにそのとおりだと思います。

ただ後になって考えなおしたのですが、なるほどこれは超越体験かもしれませんけれども、それはまだ宗教的体験にはなっていないと思うのです。超越体験が宗教的

体験になるためには一つ条件があると思います。

その条件というのは、苦痛や苦難が確実になくなるという信念あるいはビジョンと言いますか、それをその人が持つかどうか、または持っているかどうかということです。これが宗教的信仰だと思います。これを持っておりさえすれば、超越的体験が宗教的体験に変わると思うのです。

この宗教的信仰を通じ、超越的な仕方で救済の可能性を無限に羽ばたかせることで、過酷な現実を乗り越えることができるのではないか。生存がいかに悲惨や苦悩に満ちていたとしても、それをこの現実に左右されない究極的な未来（あらゆる苦難から解放されているというビジョン）から、超越的に意味付けることができると思うのです。

あくまでも現実の認識は、目の前の悲劇を直視しているわけです。けれども、自分の中の希望あるいは意欲は、その悲劇を越えたところに置かれています。

どんなにこの世の現実に打ち砕かれたとしても、そのように自らの生を未来から超越的に位置付けるならば、それが新しい意味世界の経験になります。つまり超越的体験がここで宗教的体験になり得るわけです。その意味で、希望のビジョンを生み出す〝想像力〟は、人間を苦難から解放する自由をこの世に実際に作りだす〝創造力〟にもなり得ると考えてみました。世直し力には自由の〝創造力〟があるというのは、そのような意味です。

では、実際にこの世に創造すべきものは、いったい何でしょうか。私は二つ考えています。

まず一つは、この世における善の循環というものであります。現代の聖ということを先ほど申し上げましたけれども、この世にあって、この世を超えた境地から、この世に自由に関わる存在、それが聖だと思います。そうした姿勢を自ら示すことによって、宗教者は、従来的な地縁、血縁を超えた「宗教縁」と言うべき縁で人と人をつないでいくことができるのではないかと思うのです。

それは、通常の意味での支援というよりは、むしろ縁を支える「支縁」、つまり人々に寄り添って、人々の縁を支えていく営みです。宗教者の役割は、人々の間に分け入って、人々の縁づくりのために力を貸していくことにあるのではないか。そうして縁を支えられた人が、今度は別な人の縁を生み出し、自分はその人の縁を支えていく。それが善の循環です。この言葉は実は、後で紹介する台湾の慈済会でよく言われる表現ですが、このようにして、人々の間に助け心を喚起し、人間相互の助け合いの世界を現出させていくことが、宗教者による草の根の世直しの一つのベースになってくるのではないかと思うわけです。

もう一つ創造すべきものとして、これは言葉としては硬いのですけれども、精神（霊）の共同体であります。私は、宗教縁で結びついた人々の集まりという意味で、精神（霊）の共同体という言葉を使いたいと思っています。

この言葉そのものは、ベルジャーエフ（一八七四―一九四八）というロシア出身の宗教哲学者に由来するもので、精神（霊）に目覚めた人格、つまりこの世を超えた何者かに、自分はたしかにリアリティを持ってつながっているという感覚を持った人間が、自分と同じような思いを持った者と自由な良心に基づいて形成する関わり、ソボールノスチのことです。

たとえ信仰対象や教えが違っても、宗教者同士の間に、一種の精神的、あるいは霊的な共同体は成立し得ると思います。自分たちがそれぞれの宗教を信じているところから、その象徴的表現形態は異なったとしても、それぞれに神仏の超越的存在につながっていることに由来する精神（霊）的、スピリチュアルな連帯感があるからです。

さらに言うと、宗教に所属しているか否かにかかわらず、なんらかのスピリチュアリティに目覚めて、そういう人たちが、人格相互の自由な交わりを行っている場においては、どこにでも精神（霊）的共同体が成立すると思うのです。

今スピリチュアルという言い方をしましたが、これはいわゆるスピリチュアルブームの現象でいうスピリチュアルとは、ちょっと違うと思います。つまり、精神（霊）的共同体とは、自分だけで自己完結しないで、自分から交わりをつくり出し、関係性を広げていくイメージです。ですので、スピリチュアルブームのような個人化とか、癒やしとは違うのではないかと思っております。

慈済会における善の循環とその課題

このあとは、今述べた善の循環という点において、無縁社会を突破することを目指している一つの宗教団体のお話を紹介したいと思います。世直しの観点から見た、一つの宗教の動きとして聞いていただければ幸いです。

台湾に本部がある慈済会（財団法人仏教慈済基金会）という団体があります。これは、会員が五〇〇万人いる世界最大の仏教ＮＧＯ団体でありまして、この教えの中に、明確に無縁社会の解決を目指す理念が含まれています。その理念の下で、積極的な実践を行っている社会参画型宗教と位置付けることができる団体です。

どういう理念があるかというと、非常にシンプルなものです。「無縁大慈、同体大悲」という言い方を彼らはよくします。無縁大慈というのは、無縁の者にも大きな慈しみをかける大きな愛のことです。同体大悲というのは、同じ体であれば、どこが痛んでも自分の痛みとして感じるということです。手の指ひとつ痛くても、それは自分の痛みだから、自分自身が痛いのです。同じように衆生の苦しみを自分の苦しみとして受け取りなさい、というわけです。

このモットーの中に、無縁を有縁化する思想が語られていると考えることができます。そういう実践を行う人はみな、人間菩薩だと言います。

仏の目から見れば、人間的にはたとえ無縁の者であっても、仏の大きな慈悲で包めば、すべてが有縁の存在になってきます。この慈悲は、儒教の仁愛、キリスト教の博愛、あるいは天理教の親心ともつながってくると思う

のです。宗教の教義を越えたところで、それがつながっていくならば、善の循環からさらに進んだ精神（霊）的共同体、スピリチュアルな共同体（ソボールノスチ）まで行くのですけれども、実際はそこまでは行きません。

しかし、この精神を有するならば、誰もがお互いに関わりある存在であるということに気が付かざるを得ないわけです。慈済会の活動は、こうした基本理念に基づいた仏教ヒューマニズムの展開であります。

善の循環による無縁社会の突破ということを、慈済会は次のように理解しております。

たとえ悪い因縁、因果の連鎖があっても、自分のところでそこを断ち切って、善の縁につなぎ替える。さらに悪縁を良縁に転換することによって、人間世界が織りなす因縁因果の縁を、全体として善が循環するかたち、姿に変えていく。これによって、人間菩薩が再生産されているという言い方をするわけです。

善の循環は三つの性格を持っております。

一つには、善の循環は菩薩ネットワークの展開という性格を持っています。自ら発心して菩薩道に目覚めた人が慈悲喜捨の実践を行えば、それによって多くの人が助けられます。その助けられた人が、今度は自分も菩薩道に目覚めて多くの人々を助けていく。助けられた人が発心して慈悲喜捨の実践を行っていく。このサイクルです。これが拡大再生産されていく。

これは、稲場圭信先生が新刊書の『利他主義と宗教』（二〇一一年）という本の中で、「利他行ネットワーク」という言葉で表現されていたものと、ぴったりと重なるものであります。

二つ目には、善の循環は心の内面における循環的展開でもあります。つまり菩薩行の利他的実践を展開していくことによって、実践する者の仏性が磨かれていく。自らの仏性が磨かれていくならば、なおいっそう菩薩行に励むことになるわけです。これは活動そのものにおいても、救援と救済が一体化した展開になっている姿と受け取ることができると思います。

自らの実践によって、それが修行というかたちを取って自らの心のケアになり、心が磨かれて、ますます実践も深まっていくということです。

三点目には、この循環過程は慈済会の拡大再生産過程にも重なるということでもあります。善の循環が慈済会への活動へと人々を取り込んでいくことでもあります。しかし、ここで、宗教が社会活動をしていく一つの大きな問題が出てまいります。つまり、慈済会の拡大発展がイコール善の循環過程そのものになってくると、精神（霊）の共同体からずれてくる側面も出てくるのです。

東日本大震災でも、慈済会は大きな義援金給付を行いました。慈済会は多岐にわたる大規模な救援を行ったのですけれども、その中でも最も大きなものは、昨年後半の半年の間で、二五の被災地市町村の約一〇万世帯に、金額にして五〇億円を超える住宅被害見舞金を届けたわけです。これは、慈済会の人たちが、世界中の慈済のメンバーに呼び掛けて集めたお金です。

台湾全体では、一七〇億円の義援金が日本に届けられたと言いますけれども、この慈済会の五〇億円は、たしか入っていないはずです。ですから、いかに慈済会の五〇億円という金額が桁外れに大きいかということが分かると思うのです。

その見舞金配布の現場を私も取材させてもらいましたけれども、被災者の方が、慈済会の簡易ユニフォームを着て、自ら募金を呼び掛けていました。助けられた人が助ける人になっているわけです。私たちは慈済会の支援を受けました、だからみなさん、いっそう支援の輪を広げるために募金してくださいということなのです。

慈済会は、被災地に自前で学校を建てるということも言っております。実際に台湾大地震の後に五〇校の校舎を自前の資金で建築した実績があるので、こういうことを申し出ることができたわけですけれども、いささか懸念があります。これも台湾で取材して気が付いたのですけれども、同会による建設をめぐって、やはり文化摩擦が起こっているのです。慈済会の創設者・現代表の證厳法師をたたえるモニュメントが同会の建設した施設（学校や住宅群）の中に建てられているとか、法師の標語が至るところにあります。また慈済会の建設した住宅で、菜食主義が奨励されて、これに反発する声も台湾先住民の間から上がっています。

仮に日本で慈済会に学校をただで建ててもらった場合、もしかしたら、後々の教育方面において、教育内容にも慈済の精神文化を反映してほしいなどの要望あるいは指導が入ることもあり得るのではないか。そういう懸念もあります。

慈済会は、非常事態に強い団体ですけれども、むしろ被災地が日常性を取り戻していったときに、慈済会の本当の意味での底力をもっと地味で地道で着実な仕方で発揮していくことが強く求められると思います。そうすることによって、世直しに結び付く民衆力をもっと効果的に引き出せるはずだと、私は思っています。

ソーシャルキャピタル（社会関係資本）には二類型あると言われます。つまり、対外的な関係性を構築する「橋渡し型」と、自分自身の独自性、固有性を保つ「結束型」の二類型です。

慈済会の活動は、今回非常に大規模だったのですが、慈済会だけで行われた、いわば孤立した活動であって、義援金給付でも群を抜いて金額が多いだけに、ほかの民間団体にとっては一種抜け駆け的なパフォーマンスに映らなくもなかったところがありました。その意味で、慈済会の善の循環も、今後は外に向かって、よりいっそう開かれたものであってもいいのではないかと思うのです。

今後、長期的な支援が続いていくわけですけれども、慈済会も一つのソーシャルキャピタルとして、「結束型」として自分自身の独自性、固有性を保ちつつ、どこまで台湾の団体として、日本の東北という異文化に対して共存共栄していくかという、その「橋渡し型」としての性

格がいっそう強く問われてくるだろうと思われます。慈済会の事例は、われわれが日本の宗教者、宗教団体のあり方を考えるときの他山の石になるのではないかと考えております。

私は、宗教や教団の別をこえた精神（霊）的共同体を世直しのイメージの先のほうに思い描いています。これは、さまざまな宗教者が、それぞれの教えの違いをこえて、世直しをしていくときのつながりのあり方のイメージとして理解していただければと思っております。以上で発表を終わります。ご清聴どうもありがとうございました。

鎌田　どうもありがとうございました。実は私は、自分の生涯の課題としているのは「世直し」で、それこそがいちばん重要な課題だと考えております。けれども、「世直し」とはいったい何なのかという問い詰めなくしては「世直し」の押し付けであったり、「世直し」をしようとして逆に世の中が悪くなったり人間関係が悪くなったりするという事態や構造もいままで経験してきたわけです。

そこで今回、東日本大震災が起きたときに「こころの再生に向けて」という研究プロジェクトを実施するときに二つのことに注意しました。

一つは、現場の声をきちんと聞くということです。それで、鈴木さんや、東京や大阪のほうでいろいろな支援ネットワーク化をしている島薗さん、稲場さん、黒崎さんたちの活動を聞くことができる研究会にしたいと考えました。

もう一つ、近世の終わりから近代にかけて起こってきた民衆宗教と言われる神道系民衆宗教や仏教系の民衆宗教の世直し的な運動とはいったい何であったのか、そしてその運動は今日なおどのように有効であるのかという課題をこの研究会の場で率直に議論し再検討したいと考えたのです。

そういう方向性を最初から決めていましたので、第二回目の研究集会には、最大の関心事の「世直し」の問題を日本の宗教史や宗教文化の諸相を踏まえながら、ここで練り直すというか、鍛え直し、問い直したいと思っています。

今日は、その最初のとっかかりを、天理教の背景を持つ金子さんに問題提起していただき、さらにここには金光教や大本の方々も来てくれているので、日本三大民衆神道系世直し宗教が、全員三揃い、三位一体で揃っているので、その問題を論議する最強軍団であると思います。世直し問題とはいったい何であるのか、ぜひみなさんにお訊ねしたい。

もう一つ、スーパーバイザー的な役割として島薗進さんにお越しいただきました。島薗さんは若いころから天理教や金光教を中心に教祖研究をしてきた方なので、この問題にコメントしてくれるのにふさわしい人だと思います。では、島薗さん、よろしくお願いします。

コメント　島薗進

犠牲を前提とした生活をしてきた

今朝は授業がありましたので、早く来たくてもう気もそぞろでしたが、しようがなく、授業が終わってから駆け付けまして、新幹線の中で走ろうかと思ったのですが、それはあまり意味がないと思いとどまりました。三時過ぎにやっと来られたということです。

とてもお話が盛り上がっていて、すぐに自分も一生懸命話をしたいという気持ちになっております。金子さんの話は非常に豊かで、言いたいことが、私もたくさん出てきてしまうという感じですね。

最初のお話ですが、天譴論でも神義論でもなくというのは、そうだろうなと思いながら、これはどう考えたらいいのかと思ったことがあります。というのは、田中正造もそうですが、これは原発問題のほうに触発されている面が大きいですね。

つまり足尾銅山や水俣病と、今回の福島原発はつながるところが多くて、要するに、棄民というか、国が地域の住民を見放すというような事態が起こっていることが大きな問題になっています。世直しということを考えたときに、これはちょっと忘れられないことではないだろうかと。

全日本仏教会は一二月一日に、原発によらない生き方を求めるという宣言文を出しています。この中には、天譴論でも神義論でもないけれども、今回の震災の中で、原発は人災の面が大きくて、したがって、どこかでわれわれは、物質的な欲望の下、何かに犠牲を強いてきたということを見直さなければいけない。犠牲を前提とした生活をしてきたということの証明に原発というものがあるというのが全日仏、仏教会の指導層、ある種の方たちの中には分け持たれていると思います。

私自身も実は、岩手、宮城、福島で、震災の支援ということで共に歩むということに参加したいという気持ち、そして活動をしております一方、科学者集団の一員として、学問が国家、産業界の側に付いて、人々に犠牲を強い、見殺しにすると言いますか、そういう立場を取ってきたことに対する活動と言いますか、科学に何か大きな間違いがあったということの問い直しと二本柱でやっている、その間で、やや股裂きになりながらやっているところもあります。

それで言うと、金子さんは、もしかして阪神・淡路大震災と東日本大震災を連続性で受け止めていらっしゃる。やはり今回は福島の人が苦しみ続けていることが私の場合、重いです。東京でもホットスポットの地域の人がすぐ近くにいる。東大の場合、柏キャンパスというのがありまして、その近くの住民は、とどまるべきか去るべきかということで非常に苦しんでいるという。

そういうところで活動していますので、世直しの問題というのは、どこか自然災害の中から立ち直っていくところに世直しを見るというところがある、金子さんのお

島薗進氏

話の基調はそうだったし、私もそういうことを基調にして震災支援の活動をしているのですが、しかし、社会の仕組みの中に何か間違ったことがあって、それに対して何かしなくてはならないという側面も、やはり今回はあるなと考えています。

ただ、宗教との関わりで活動する場合、そういう問題を表に出すと決してうまくいかないだろうと思っていることはあります。

私の人生の歩みから言うと、ベトナム戦争や学園紛争のころに、理系から文系に移って、思想、宗教のほうへ移ったということで、いわば若いときに、ちょっと世直しのほうへ行きまして、跳ね上がったり、浮き上がったりして、自分は中身は何もないのに、そんなに跳ね上がっていたということを痛切に感じて、やはりここは宗教みたいなことから考え直さなければ駄目だという経験をしました。ですので、世直し派から心直し派へ変わったのです。

しかし、世直し的なものは、ずっと、うつぼつとして自分の中にあるわけです。今回はちょっと目覚めてしまって、また跳ね上がっている気配があるので、みなさん、ぜひ押さえてください。ツイッターなどでは跳ね上がりをしているのですけれども。

やはりいま日本は大きく問われていて、原発問題というのは、いまの世界全体の構造の問題を問いかけている。それに多くの人が巻き込まれている。そして福島の人たちは、その中でうめいているというか、そういうことが阪神大震災とは非常に違う何かだということも思っています。

田中正造的な動きは、私どもの大学に児玉龍彦先生という方がいて、あの方は、もしかしたら現代の田中正造かもしれないようなことをしています。彼は盛んに「お母さん革命」ということを言っています。つまり、大きな組織の人は全然立ち上がらないけれども、地域住民の方が、いろいろな横の連携をつくって、いちばん必要なことのために行動を取る。それがじわじわと力になってくる。市町村のほうが県よりいいし、県のほうが国よりいいと。

新聞で言うと、中央の新聞より地方の新聞の方が真実を伝える可能性がある。そういうふうなこと。それもまたソーシャルメディアですか、そういうもののほうに真実を求める人が多いということが起こっています。これはエジプト革命とかと通じるところがある。

何か近代社会、特に国連の安全保障理事国などがつくってきた現代社会が持っている虚妄というものが暴かれている、そういう面があるのですね。つまり放射能の被害について、うそで塗り固めているわけです。それはアメリカやイギリスやフランスがつくってきたもので、そういうことは、いまお母さんたちのほうがよく知っているというようなことが起こっています。

盛り上がり過ぎですね。ちょっと跳ね上がり過ぎだか、盛り上がり過ぎだか、浮き上がり過ぎだかがあります。

私は、仏教界のそういう声明には、わりと共鳴しています。多くの檀家さんの中には、原発が大事だという人もいる。そういう中で、しかし、浮き上がらずに、脱原発とも、反原発とも言わないで、原発によらない生活のほうへ行きましょうと。その基本は、人の犠牲のうえに成り立っているような生き方を改めていきましょうということですね。

それは、何か大事なことを言っているなという気がしています。金子さんの言っていることと、ちょっとずれていると思いますが、何か反応していただけるといいかなという気がしています。

結束型、橋渡し型

もう一つ、伝統宗教と新宗教は、金子さんのお話から言うと、新宗教は結束型、伝統宗教は橋渡し型ですね。私は東京にいて、岩手、宮城など、支援活動をしている方のお話をうかがっているだけなので、どこまで当たっているか、みなさん、ご存じだったら教えていただきたいのですが、新宗教、たとえば立正佼成会とか創価学会とかの方は、やはりまずはメンバーの救済ですね。メンバーといっても、縁の薄いメンバーがたくさんいますので。そういう人たちを助けるということを中心にやっています。

余力があったら外へということもあるのですが、あまりそちらのほうへは手が伸びていないですね。ですから、仲間の救済をしてきた団体は、いまも仲間中心の救済活動になりがちです。

伝統仏教会は広い連帯を求めている。臨床心理士とか医師等の協力も求めるし、まさに鈴木岩弓さんのお話とつながりますが、いろいろな新しい可能性を求めていますね。高野山足湯隊というのがありますし、曹洞宗の青年会の活動があって、宗教色はいったん横に置いておいて、とにかく被災者の目線で、いろいろなものを教えてもらったり、元気付けたりしてもらいながら、こちらから出せるものを何か提供しようというボランティア精神を発揮しているわけです。

しかし、これはどちらかというと、少数の、副住職の運動みたいなところもあるわけです。檀家さんが一緒に動いているかというと、そういうわけではない。そうい

う人たちもいますが。

あるいは、福島県で子どもたちの支援活動をしているお坊さんもいるのですけれども、どちらかというと、少数の有志が活動をしている。ですから、この伝統宗教と新宗教のギャップみたいなものがある。

そこへ行くと、もしかすると、教派神道はその間になるのではないだろうかという気もしているのですね。ここにはいらっしゃらないですが、東北には、松緑神道大和山とか、大和教団というような神道系で大変な被災をした団体があります。そういう方たちは地域の住民とも近いので、少し違うのかなと想像しています。創価学会とか立正佼成会と比べると、結束型よりは橋渡し型になるような性格を持っているのかもしれないと思います。

話がいろいろ分裂しておりますが、以上が二つ目のことですね。

原発と希望

もう一つは、最初の話とまたつながってくるのですが、世直しと言うときに、希望を見て復興というのは、阪神大震災ではそうだったと思うのですけれども、福島の人たちは、要するに分裂とか、亀裂というのがある。

放射能の影響をどのぐらい評価するかで、常に争いが起こっているわけです。家族の中で争いが起こり、近所の方と争いが起こり、話し始めたら、相手がどういう見解を持っているかを探りながら、話し方を変えなければいけないというふうなことが起こっています。そういうことが、今後ずっと続くと思われるのです。そういう中でどういう支援が行われるのか。

そういうときに、希望の話では少し足りないと言いますか。原発も、ある時期は希望だったのですね。希望のほうへ、希望のほうへと、科学者は、あるいは産業界も政治家もそちらの話をして、リスクのほうを軽んじてきたということがあります。

超越体験と宗教体験の区別のことも、私の理解では、宗教体験のほうに希望があるように言われたと思います。しかし、むしろ最初に答えがない、津波の中に感じたものは何か。そのことの中にとどまるともおっしゃいましたね。そちらのほうから出てくるようなもの……。

金子さんのお話の中には、宗教者という面と、誰でもがという面と、両方あったと思います。内面性豊かなというのは、最後にそういう救いを信じるということと必ずしも一致しないかもしれないということも私の中にはあります。

私のことを、「縁なき衆生」と言う方はたくさんいらっしゃるのですが、本当にそう思っておりますので、やや言いにくいことを言っております。

いままで私は、原発問題と震災問題を別に使い分けて、自分の中でバランスを取っていたのですが、今日の金子さんのお話は、私をそこの真ん中へ放り投げた、そういう内容でしたので、やや混乱しながら矛盾したことを申し上げていると思いますが、以上で終わりにいたします。

鎌田　ありがとうございます。とてもいいコメントをしていただいたと思います。それでは、金子さんのほうに、島薗さんのコメントに答えていただいて、それから質疑応答や、意見交換をしていきたいと思います。

質疑応答&討議

世直しの問題提起

金子　島薗先生、どうもありがとうございました。コメントしていただいた内容は、三点ほどあったかと思います。

一つは、原発の問題。二つ目は、伝統宗教と新宗教のソーシャルキャピタルとしての違い。三つ目は、希望という言葉では片付けられないものがあるのではないかというご指摘。この三点について、うまく答えられるかどうか分かりませんけれども、私はこういうふうに考えております。

一つ目の問題ですけれども、たしかに今回の大震災において、もし原発の問題が発生しなかったとすれば、つまり、もし福島第一原発が無傷のまま残り、ただ大津波の被害だけで終わっていたとしたら、東日本大震災の救援とか、社会のその後の動きというのは明らかに別の展開になっていただろうと思われます。

原発というのは、明らかに人災です。だからこそ、そこに世直しの問題提起が強く出てきたと思うのです。阪神大震災の場合は、一七年たったときに、被災者の方のまだ残る心の傷への癒やしや、亡くなった方への追悼というふうに、内面の問題にますますシフトしていっている。宗教的ケアも、そういった内面的ケアのほうに移るだろうと思われるのです。

しかし、人災、つまり人間が起こした災害に対して、それはいったい誰がどういうかたちで起こしたのか、また、われわれ一般市民もどこかで関わっているはずではないかということで、社会の仕組み、あるいは文明のあり方に対して、大きな意味でそれを変える運動が、これからいっそう起こってくるだろうと予想されるのです。そうした運動は実際に起こっていて、ますます広がりを見せています。

そういうときに、世直しという問題提起がどのように関わってくるか。私はこういう問題提起も含めて、発表いたしました。

二つ目の伝統宗教と新宗教のソーシャルキャピタルとしての性格づけですけれども、たしかに傾向性としては、島薗先生がおっしゃったとおりだと思います。ただ、天理教は二本立てで考えていたのです。

義援金に関してもそうでした。天理教本部としては、各自治体にそれぞれ渡した義援金と、もう一つ、自分たちの教会の復興、あるいは自分たちの「災害救援ひのきしん隊」が出動するための支援金と、この二本立てでやりました。義援金と支援金という言い方をしておりまし

たけれども、これを並行して集めて、たしか両方ともほぼ同じ三億円近く集まりました。

ですから、橋渡し型と結束型というのは、二者択一のものではなくて、総合されてしかるべきものであって、伝統仏教であっても、お寺が破壊された、また檀家さんが苦しんでいる、そういう内側の者に対して、やはり同じ仏教教団からの手厚いケアも、一般の人たちへの支援とは別に要求されるでしょうし、そういう意味で結束型の要素があると思うのです。

新宗教の場合も橋渡し型があります。外に向かって活動するという側面です。天理教の場合、災害救援ひのきしん隊が大規模に出動しましたけれども、それはまったく教内中心ではなく、外向きの活動に終始していました。

三つ目の、希望ということですけれども、たしかに原発は、われわれ日本人の戦後の一つの希望であったかもしれません。しかし、それはわれわれが豊かな生活をするために、前のめりになって推し進めてきた希望であって、むしろ受け身の期待という言葉のほうがいいかもしれません。これをすることによって、何かいいことがあるのではないかと思う。原発によって豊かな暮らしができるのではないかと思う。これは能動的な希望ではなくて、受動的な期待だと思うのです。

しかし、どん底に落ちたところで、なおかつ、まだ自分という人間が曲がりなりにも生きているというところから、つまり身一つになっても、外側のものが全部剝ぎ取られてホームレス状態になったとしても、やはりそこから生まれてくるものに拠りどころを持って、主体的に生きていくことができる。そういう生き方を考えた場合、希望という言葉自体は、もっとこれから深めていくと概念としても非常に力強いものを発揮できると思っております。以上であります。

鎌田　ありがとうございます。七月二〇日のときは時間も不足して、議論するような状況ではありませんでしたので、金光教の渡辺さんと大本の出口さんのお二人に、こちらのほうから指名して、今回のシンポジウムについて思っていることをお話しいただいて締めくくりました。

その渡辺順一さんと出口孝樹さんが前回に引き続いて第二回の今日も来てくれています。天理教・金光教・大本は「世直し」三大宗教だと思いますが、金光教や大本から「世直し」について、自分たちのスタンスや感覚、あるいは立ち現れてくるジレンマや問題点などを含めて率直に語っていただければと思います。渡辺さん、お願いします。

善とは何なのか

渡辺順一　まずは金子先生、ありがとうございました。特に世直しということについて、ここ何年間か、金子さんが語っておられたことを知っておりまして、きちんと考えていかないといけないということを、私も思い直しております。

というのは、資本のグローバリズム、国などを越えて資本主義が暴走するような無政府状態が世界中にまん延していて、その中で、一人一人が孤立化されていく。自己責任論で、つぶされていく人間はそのまま放置されていく。そういう状況になっております。

政治も信用できない、国も信用できない、会社も企業も信用できないという中で、では、宗教とは何なのというときに、心の救いだとか、一人一人の慰めだとか、寄り添いだとかだけで済ませていいのだろうか、ということは思います。

資本のグローバリズムに代わるような大きな物語、人が生き得るような物語、未来を構想できるような物語を、時代社会に対して提示できないとすると、それは宗教としての値打ちが、やはりどこか足りないということではないか、と思わされました。

ということなのですが、しかし別の面で考えると、たとえば金光教祖は、自分が生き神であることを最晩年に否定するのです。俺はただの土を掘る百姓だ。むしろあなた方が生き神ではないか。つまり、この言葉で言うと、あなた方が菩薩ではないか、ということを言うのです。

金光教祖は、「人代（にんよ）」である今の世を「神代」に戻していくのだ、という「世直し」的なイメージも語っているのですけれども、その神代というのは具体的な社会体制ではなくて、神々と大自然と人々との関わり合いの状態を表すような、現れ出る一つの「状況」を表すような言葉として提示していたのではないかと思っております。

それが一つの社会体制になってくると、二元対立になってきて、現実の政治体制との関係の論理が働いてくるので、宗教的な世界イメージとは違った、非常にやっかいなことが起きてくるのではないか。

金子先生が言われた、善の循環とか、慈済会の例は非常に分かりやすく、面白い事例だと思うのです。先住民族に対して善の行為を行うけれども、彼らにとって、それが善かどうかというのは検証されていかない。善は一つではなくて、無数にあって、ある者からすると悪でしかないというようなことですね。それが、現代のいま、慈済会によって実験されているというふうに見たほうがいいのではないかと思います。

そういうことも含めて、では、善とは何なのか。人が助かるとは何なのか。理想の世の中とは何なのか、という問いを問い続けてきた。それが民衆宗教と言われる教祖たちの言葉だったのではないかと思っております。

鎌倉時代の新仏教運動も、おそらくそうだったと思います。鈴木大拙が、日本的霊性と言うのだけれども、その内容は民衆的霊性との出会いということだと思います。開祖たちは、京都から流刑地である関東に移らされて、そこで猟師や漁師など民衆が持っている霊性、光と出会って、それまで抱いていた自分の宗教的な、教義的な体系をもう一度再構築させられている。

善なる教義を、関東の地に持っていったのではなくて、持っていた体系自体、何が善で何が悪かという観念自体が、祈る言葉も知らない、教義も知らない、そういう民

衆が持っているその霊性によって再検討させられて、再構成させられた。そういう経験が鎌倉新仏教であった。

幕末維新期の新宗教運動も、そういう経験を教祖たちがしたのだと思うのですね。そういうトータルな動きの中で、もう一度、ではどういうような世の中構想ができるのかということを議論していかないと難しいのではないかという気がしております。

鎌田　ありがとうございます。次に、大本の出口さん、お願いします。

「立て替え、立て直し」

出口孝樹　綾部から参りました出口と申します。大本信徒連合会に所属しております。私は不勉強ですので、信仰的な立場からしかお話しすることができないのですが。

大本も、世直しという言葉で語られることが多い宗教です。戦前、二度も弾圧を受けたのも、そのあたりが一つの原因になっていると思います。

私は、宗教者、信仰者にとっての世直しというのは、各宗派、宗教の教えを実践する、教えをお伝えしていくということ、深めていくことそのものであろうと思っています。

先ほど鈴木先生は臨床宗教師という試みについてお話しくださいました。非常に興味深いテーマだと思っております。ただ、どこまで踏み込めるのかという思いもあります。臨床宗教師として、基準を設けて活動を行っていくときに、ここまでは共通化できると線引きをして活動することができたとしても、その先に、それぞれの宗教の個性があって、言ってみれば、その宗教のいちばん肝心なところ、救いの言葉であったり、大切なものがあるような気がいたします。そういったところで、宗教が宗教として求められている役割を果たすことができるのかと考えておりました。

私は、宗教的世直しというのは、組織としての目に見える活動ももちろんあるのですが、それぞれの宗教の、宗教であればこそ発せられる救いの言葉、仏の言葉、キリストの言葉などであって、そういったものを、もっとこの時代に、しっかり力強く発信していくことが、求められているのではないかと思っております。

大本では、世直しという言葉よりもよく言われるのが、「立て替え、立て直し」という言葉です。これは、震災と合わせて考えるとき、非常に注意を要する言葉だとも思っております。

立て替えというのは、一つは破壊を意味します。たとえば、大三災や小三災もそうでしょう。大本が受けた宗教弾圧もそうでしょう。また、個人の心や感覚にも当てはめられるものでもあります。

その後、立て直しによってそれ以前よりもさらに素晴らしい世界が構築されていく。

どういうことかと申しますと、立て替え、立て直しや世直しというのは、平和で穏やかな時代には求められないことですね。やはり時代が非常に困難な局面を迎えている、たとえば戦争中であったり、今回の大災害などで、困難な時代に求められることが多いのだと思います。

出口王仁三郎は、立て替え、破壊という非常に悲しいこと、これは悪魔が行う。立て直し、再生は神が行うと言っていますけれども。それは別々に行われるのではない、一体で起こってくるものだと。つまり、立て替えという困難なことがあって、それを乗り越えていこうとする、また、その悲しみの中から、新しいものや喜びを生み出していこうとする力があるのだと。

つまり、立て替え、立て直しというのはセットだと。世直しも、やはりそういう困難な時代にこそ生まれてくる思想や願いであるのだろうと思っています。ですから、宗教的な世直しの思想が、この震災という困難を乗り越えて、素晴らしい未来へと立て直していく力になることを願っています。

すみません。まとまらない話になってしまいました。

鎌田　ありがとうございます。それぞれ、金光教の活動をし、大本の活動をしているお二人から話を聞いて、七月のシンポジウムとのつながりの中で問いかけてくれましたので、金子さん、島薗さんに、いまのお二人を含めて、コメントしていただいて、それから、また自由に議論していきたいと思います。

宗教の側の善と被災地にとっての善

金子　渡辺先生、出口先生、どうもありがとうございます。お二方のお話を聞かせていただいて、別々に答えるというよりも、まとめて私の思うところを申し上げたいと思います。

世直しという言葉は、大本の言葉では、立て替え、立て直しとセットになって使われる。しかもそれは平和の時代に出てくる言葉ではなくて、困難な時代だからこそ出てくる言葉である。私もそのとおりだと思います。いまの時代はまさに困難な時代であるという認識、この共通認識に立って、われわれは考えるし、行動していかなければならないと思うのです。

ただ、世直しを進める場合にもそれぞれの宗教の教えというものがあって、その教えの持つビジョンとか物語がそのままのかたちで使えるかどうか。これはいまの非常に多元化した社会の中では難しいだろうと思います。それを無理にやろうとすると、たとえ援助者の側に熱い思いがあっても、援助を受ける人たちの気持ちよりも、自分たちの善を押し付けてしまうということになりかねない。それは渡辺先生のご指摘のとおりだと思います。

鈴木先生のご発表の中でも聞かせてもらいましたけれども、自分はこの宗派の僧侶として行ったけれども、相手は民俗的な土着のやり方でやってほしいと言ったので、このやり方でやるといったように、自分の宗教がということではなくて、宗教を越えたところで、現場の被災者の方にとって必要なこと、あるいは現場の被災者の方によって求められていることをやっていく、それを進

めていくことが被災地にとっての善ではないかと思うわけです。

その意味で、こちらが持ち込んだ善ももちろんあるでしょうけども、それを被災地にとっての善と付き合わせながら進めていく。このやり方しかないと思います。

宗教の言葉が力を持つときというのが仮にあるとしても、当然、ＰＴＳＤで混乱しているときにそんなことを言っても無理ですし、あるいはグリーフケアの段階に至ったとしても、直接それを語って納得してもらえるかというと、これもまた別です。同じ宗教者でも、あなたならいいけれども、この人は困るとか、やはりそういうことも出てきますし。

言葉とか、物語とか、もちろん教えの中身も大切ですけれども、何よりも問われてくるのが、宗教者という生身の人間の姿ですから、これも以前に稲場先生がおっしゃっていたのですけれども、宗教者の人間力というのが問われてくるのではないかと思っています。

鎌田　では、島薗さん、お願いします。

宗教の側の善と被災地にとっての善

島薗　私は、本当に心強い仙台の「心の相談室」と「支縁のまちネットワーク」があるので、東京での宗教者災害支援連絡会もできているという気がします。それぞれに特徴があって、その話も、今日、いろいろうかがえたと思うのです。

支縁のまちネットワークは、先ほど渡辺さんがおっしゃったように、無縁社会化、人々が世界中で孤立していっている。それをなんとかしたいという大きな世直しのビジョンがやはりあると思います。これは非常に貴重なものだと思っています。

原発もそうだし、津波でも、これからますます孤立して、仮設でいつの間にか亡くなっているという可能性が非常にあって、無縁社会的な問題と、震災の問題はつながってくる。福島などは人口も減ってきてしまうということで、本当にこれは重要な問題意識です。

先ほど、一種政治的なほうから世直しを考えるのと、日々の生活の中から世直しを考えるということを分けたつもりです。どちらかというと、学問をしたり、本をよく読んだりする人は、政治的なほうからそういう問題を見るし、生活の中で宗教を大事にしている人は、そちらのほうから入っていく。その両方を、私は共に大事にしたいと思います。

いま起こっていることは、政治あるいはそういう思想が好きな人、書物が好きな人が、心の問題をやらなければこの問題は解決しないよという方向へ向かってきているのではないか。だから、なんとか、両方の方向をつなげることができないか。ですので、仏教界の知的なリーダーの方たちが原発について、リーダーシップを発揮していい発言をしていると私は思うのですが。

立正佼成会や天理教にもそういう発言をしてほしいなという気持ちはあるのですけれども、しなくてもいいやというか、しないほうが本来だと。つまり、そういう問題に、すぐに関心がいかない人のほうが多いので、そういう人のところから、場所から考えるという感覚です。これがすごく大事だと思います。

鎌田　ありがとうございます。ここでちょっと視点を変えて、次に、二つのアプローチを取り上げてみます。

今、宗教的世直し思想、宗教中心に議論をしてきました。ここに、造形美術家の近藤高弘さんが来てくれています。近藤さんは、こころの未来研究センターで、モノ学やワザ学の連携研究員として共同研究をしてくれていますが、昨年夏に、福島県と宮城県の県境の七ケ宿で「命のウツワ」という陶器をつくって、それを被災地に届けるという支援活動をしてきました。つまり、アートやものづくりといったことから「世直し」という問題にどういうアプローチがありうるかを聞いてみたいと思います。

それから、その隣に座っておられる関西大学の串崎真志先生は、臨床心理士で、臨床心理学を専攻されています。今日の話は宗教学者が中心になっていますけれども、心理学の立場から、今起こっている震災後の心のケアとか、今まで言われてきた中での問題点などを串崎さんの立場から指摘していただけたらと思います。では、まず近藤さん、その後、串崎さんにマイクを回したいと思います。

器を届け、つぎは料理を

近藤高弘　近藤高弘と申します。いま鎌田先生に言っていただきましたように、家内が仙台出身だということもありまして、たまたま、昨年までで一三年間、東北の山の中の七ケ宿というところで毎年夏にワークショップをしてきました。

地元の山から土を採って、東北の山の中ですからアカマツが豊富にあるので、その間伐材を利用して、登り窯で焼き物をつくるというワークショップを一三年間やってきた延長線上に、今回、このような災害がありました。

自分に何ができるのかということで、ワークショップに参加していただいた方とか、あるいは同じものづくりの人たち、いろいろな方と協力して、七月、八月、そして一〇月、作品を二千点ぐらいつくり、また一〇月一〇日に、これも鎌田先生、鈴木先生に来ていただいて、シンポジウムを七ケ宿で行い、それ以後、宮城県を中心に各被災地、岩手、福島に器を届けるということをしてきました。

器をどういうふうに届けるのかというのがすごく大きな問題で、結果的には、人のネットワークで配るしかないというので、鎌田先生や鈴木先生、あるいはお寺の関係のご住職、あるいはＮＰＯで活動されている方々にお渡しして、本当に喜んでもらえる、あるいは困っておられる方に配るしかないと。

つくったといっても、たかだか二千点しかないわけです。だからそれをどういうふうに配るかということは、本当に分からなかったのですけれども、この活動は、で

きれば、いろいろな方々のご協力の下、今年も、あるいは来年も継続していきたいと思っています。

もう一つ、私も昨年、石巻の仮設住宅に器を配布に行きました。私が感じたのは、みなさん、たしかに器を差し上げると喜んでくださる。いまの仮設住宅の殺伐としたところでは、手作りの器を喜んでもらえるのだろうと思っていますけど、それだけではなくて、特に仮設住宅での、仕事もない、目的もないという状態の中で、何かもうすこしその器を生かしていけないかと考えています。

実現するかどうか分からないのですけれども、いま、たまたまフランス人の建築家の方と、屋台プロジェクトというものを考えています。つまり、屋台をつくって、フランス人のシェフに来てもらって、地元のおばさんやおばあちゃんと一緒にコラボレーションをして、ビストロなり、フランスの料理をつくる。その料理を、またわれわれがつくっている器で食べてもらうというような、本当に小さなことですけれども、そういうプロジェクトができないかと。

単に配るだけではなくて、器やそういうものの中で、まだ実現できるかどうかは分かりませんけれども、次の段階のきっかけになっていかないかなということも考えながら、今年もこのプロジェクトを続けたいと思っております。以上です。

鎌田　ありがとうございます。では、串崎さんから。

心理学、臨床心理学の限界

串崎真志　失礼いたします。関西大学文学部の串崎と申します。私の専門は臨床心理学で、昔は臨床心理士をしていましたけれども、いまはやめております。心のケアについては関心があって、いろいろと考えてきました。今日は、先生方のたいへん貴重なお話を聞いて、さらに考える機会になりました。ありがとうございます。

臨床心理学や心理学の立場では、対象が個人であるということが、おそらく大きな特徴です。みなさんもご承知のように、個人の心をターゲットにしている。それはへたをすると、個人のいわゆる癒やしのようなもので終わってしまう。そこに、やはり大きな限界があると私は思います。

それは心理学の側から言えば、なんとかして越えていかなければならない限界です。つまり個人の癒やしではなくて、つながりと言いますか、稲場先生の言葉でいう利他主義が見えてこないといけない。けれども、どうしてもうまくいかないところがある。もちろん個人の心を突き詰めていけば、つながりが見えてくるという考え方もあるとは思います。けれども、それはなかなか難しい。心理学あるいは臨床心理学の一つの限界だと思います。

それを踏まえると、今日のお話で、宗教の持っている力をさまざまに拝聴しまして、一つは、みなさんが、やはり地域の自然なつながりの中で活動している。このことが、宗教のたいへん大きな力になっていると感じました。

もう一つは、生と死を踏まえて話す。超越と言っていいかもしれませんし、あるいは、生きることと死ぬこととのつながりを考えることが、宗教の大きな力になっているような気がしました。この二つは、心理学や臨床心理学も考えてきたところですし、いろいろと工夫しようとしているところもあるのですが、やはりなかなか力が及ばない。その点において、鈴木先生の最後のお話、臨床宗教師という新しい活動、つまり宗教が宗派あるいは教派を越えて活動する領域をつくり上げていくというお話などは、私もたいへん応援したいという気持ちで聞かせていただきました。どうもありがとうございます。

総合討論

構造欠陥を突破するには

鎌田　近藤髙弘さんはものからアプローチをして心の問題、心のケア、悲しみとか、苦しみとか、グリーフケアのところへどのようにしてタッチしていくことができるのかという課題に取り組んでいます。

そこにおいて、「もの」だけではなくて、もう一つ、料理など「こと」を起こさないと、ただ「もの」だけだったらそこから先へは入っていけない。それをどういうふうにして「こと化」していくのか。そのときに、料理であるとか、いろいろなつながりをもう一回新たにイベント的に生み出さなければいけない。そのイベントも通り一遍のものではなくて心のひだに触り、身体に染み通ってくるものやことが必要です。

同時に、個の心に集中的に関わってきた臨床心理学も、限界というのか、これまでの方法論では、特に今回のような大きな出来事が複雑骨折しているような三重苦のような状況の中では太刀打ちできない。宗教の今までの方法も太刀打ちできない。今までのものづくりとか産業も対応しきれない。

いろいろな意味で、構造欠陥みたいな状況の中にあるのが現状だと思うのですね。だから、そこをどうやって突破していくのかが大きな課題になってきます。

その突破口となるワザはこれから編み出していかなければいけないので、実験的にいろいろなことをやらなければいけないと思っています。

さて、もう二人、聞いておきたい人がいます。一人は黒崎浩行さんです。黒崎さんは今回からわれわれのプロジェクトの連携研究員に加わってくれました。黒崎さんは國學院大學にいるので、先ほど鈴木さんが神社、神道の対応が遅いということを言われていた。この問題は、英霊のような、群れの神道からするとどう言えるのか、お考えを自由に述べてほしいと思います。

鈴木　あまり大声で言わないでください。

鎌田　いやいや、いいんですよ。大声で言いましょう。私も鈴木さんの立場だったら大声で言う。言わなければいけないんです。たしかにそうだと思うから。

臨床心理学は個に立ち向かい、仏教は個とコミュニティと両方に立ち向かいました。しかし、神道はこれまでコミュニティの絆となる祭りはやってきたけれども、個の心のひだにはなかなか関わることができなかった。けれども、先ほども鈴木さんの話に出てきたように、神楽や芸能などの地域文化を通してもう一回つながりの世界へ入っていく。このへんの問題について、黒崎さんからコメントがほしいです。

それから、黒崎さんの前に座っている宮本要太郎さんは、筑波大学で一緒に宗教学者の荒木美智雄先生のところに博士論文を提出した仲間ですが、荒木先生がやろうとしてきた宗教の創造力という問題をどう考えるかを語ってほしいと思います。

金子さんの話の中にも、宗教の創造力の問題が宗教的世直し思想の問題として出てきました。宮本さんはその問題を物語る力とも関連づけて考えておられるので、そのあたりのこともコメントしてほしいと思います。ではまず、黒崎さんから。

田植踊りの再現を通して

黒崎浩行　黒崎と申します。よろしくお願いします。先ほど、渡辺先生がおっしゃったことと、ちょっと関係があるかなという気がしております。

私は、七月二一日にいわき市へ行ってまいりました。福島県浪江町の請戸地区というところで行われていた田植踊りをそこで再現しましょうということで、その保存会の人たちや子どもたちが集まって、「アクアマリンふくしま」という小名浜にある水族館、ここも津波でやられたんですけれども、そちらで再現をするイベントを、いわき市のある神職の方が音頭を取って、いろいろ奔走されて、人を集められて行われました。それを見てきました。

浪江町の請戸地区というのは、津波と地震と、そして原発事故で避難しなければいけないという三重苦を負っているような状況の中で、特に二本松市に避難された方が多かったのですけれども、その方たちとか、東京にも避難されている方たちもいたのですが、そこの田植踊りが披露されたのです。

この田植踊りは江戸時代にかたちづくられたらしいのですが、東北地方はどこでもそういう状況はあると思いますが、風害、水害、そしていわゆる干ばつですね。農業をやっていくのに非常に厳しい状況というのは、何年かに一回は起こってくる。飢饉とかですね。

そのたびごとに、神社でさまざまなお祭りをして、再興を祈ることを繰り返してきた。それが一つのかたちとして田植踊りになった。田植えの踊りですから、豊作の祈願でもあり、請戸地区の場合は豊漁祈願もそれに伴っていたということで、そういった踊りがいまに伝承されてきました。

しかし、震災と原発事故によってそれが崩れ去ると言いますか、崩壊させられるという状況にあった。それをなんとかして福島県に踏みとどまって継承していこうという動きを、いわき市の神職の方がされているのを目にしました。

これは報道されていますけれども、飯舘村で、いまでもまだ避難されない、特にご高齢の方を対象にして奉仕をされている神職の方がいらっしゃるとか、そういう状況があるということを聞いています。

金子先生から、足尾の田中正造の例が挙げられましたけれども、いま私の大学の院生で足尾の神社を調べている学生がいまして、足尾銅山は閉山されていますから、だんだん過疎化が進んでいるんですけれども、ちょっと神社がうち捨てられているような状態になっているという状況があるそうです。

神社が、こういった近代化や開発に、ある種順応していくかたちや、人々がそこに暮らしていくために、さまざまな苦難を経験するのだけれども、それをなんとか結束して乗り越えていこうというときに、お祭りをやったりする。

そういう場として営まれてきたということがあると思うのですけれども、それが、原発事故とか、足尾の場合は開発で鉱毒事件を起こすわけですけれども、その開発が終わって廃れていくというところで、神社はどうやって現地の人たちと共に踏みとどまっていけるのかというところが試されている、そういう状況にあるという気がしています。

これは、世直しというベクトルとはまたちょっと違うところで宗教者の役割が現場にあって、それに対応している動きがあるのではなかろうか。そのへんのところをバランスよくきちんと見ていかないといけないのではないかということを私はいま感じております。

鎌田　ありがとうございます。では、宮本さん。

民俗知の再生

宮本要太郎　ご紹介いただきました関西大学文学部の宮本です。串崎さんとは同僚です。

特に金子先生の、民衆の世直し力に対する「希望」をうかがいながら、あらためて民衆宗教について考え直しておりました。と言いますのも、先ほど鎌田先生が名前をお出しになった荒木美智雄先生の下で私が宗教学の研究を始めたときに、やはり民衆宗教の創造力ということがいちばんの問題だったからです。

金子さんのお話を聞きながら、思い出したことが一つあります。実は、荒木先生が生前、一つの宿題を出してくださって、まだ答えが出ていないのですけれども、それは民衆宗教と民俗宗教の関わりをどう考えるかという問いでした。

そういうことを思い出したのは、最初の鈴木先生のお話の中に、民俗ということへの問いが出てきました。ついで、金子さんの話で、民衆宗教ということが出てきました。私の中では、その両者の関係が、特に未曽有の災害を経て、宗教者に何ができるかが問われているまさに

このときに、この民俗宗教と民衆宗教がいったいどういうふうに関わって、まさに世直しに携わっていけるのかということをずっと考えておりました。

鈴木先生のレジュメの中で、宗教の民俗化と、民俗の宗教化と、二つのベクトルがございますね。それで行きますと、民俗というのは経験的信仰で、民衆宗教というのは経典的信仰というか、教義がそこに付け加わっていったというような捉え方ができると思います。

一方、金子さんのおっしゃっている民衆宗教、民衆力ということに関わって言いますと、幕末以降に誕生してきた、本来民衆宗教であったものも、こんにち民衆宗教であることが難しくなっている時代、非常に厳しい時代であろうかと思います。

なぜそうなのかというと、先ほど渡辺さんがグローバリズムの話をされたのですけれども、宗教が組織として、教団として活動をしていこうとすると、こんにち非常に強い磁力がグローバリズムの方に働くわけです。

そういうわけで、私も多くの宗教者を知っていますけれども、特に良心的な人であればあるほど、こういうグローバルな磁力と、実際に現場で、まさに聖的（ひじり）に生きていくことの間で揺れ動いている人たちはたくさんいらっしゃると思います。

つまり、聖として生きていこう、民衆宗教の担い手として生きていこうとしている人はたくさんいるのですけれども、その人たちが組織の一員となったときには、それを許さないというか、阻害するような状況が現代社会に非常に強く働いているということを危惧しております。

そういう意味では、金子さんがおっしゃるように、いわゆる民衆の中に分け入って活動する聖のような存在、こういう人たちを、もっともっと育てていかなければならないのではないか。

そういう意味で、私は、聖というのはむしろ民衆を生み出すと言いますか、あるいは人々に民衆として生きることの大切さを自覚させて、民衆として生きることを促すような存在であると思います。

ここで言う民衆というのは、自分の抱えている難儀も、この社会が抱えているさまざまな難問も、自ら能動的に、主体的に変えていこうとする。そのように、神仏の力を借りながらも、能動的に、主体的に世界を変えていこうと積極的に世直しに関わろうとする人々だと捉えますと、そういう民衆を生み出す、そういう意味での民間宗教者、聖というものが、現代であるからこそ、まさに強く求められていると思います。

その際、これまでの伝統的な民俗知と言ってもいいんでしょうか、そういったものをいかに再生するかということが、特に東北では課題になっています。そのことに関連して言いますと、いま、黒崎さんから一つの例が紹介されましたけれども、伝統的な民俗知を再生していくときに、そう簡単にはできないと思うのですね。

というのは、担い手である共同体が崩れているわけですから、共同体の再生からやらなければいけない。そうすると、共同体を再生していく中で、さまざまな宗教者たちが、もっと積極的にそこに関わっていって、それぞれの知恵を出し合って、新しい宗教民俗を生み出していく。そのことが新しい縁を生み出し、その縁を支えていくことになるのではないか。それがまさに、超宗派的、超宗教的ということにもなるのではないか。その意味では、私は、新しい意味でのニューシンクレティズム（new-syncretism）というか、そういうものを生み出す起源になるのではないか。そのへんにちょっと期待しております。

鎌田　残り時間が一〇分余りになってきました。そこでまず、民俗宗教と民衆宗教との間の問題もありますので、鈴木さん、金子さんに最後の発言をしていただき、グローバリズムの問題などを含め、島薗さんに答えていただいて、最後はカール・ベッカーさんにこころの未来研究センターの代表として締めのまとめをしてもらって、六時に終了したいと思います。では、鈴木さんのほうから。

震災を過去の話として考える人がいる

鈴木　ありがとうございます。いま、宮本先生のお話の最後に、ニューシンクレティズムという言葉が出たのですけれども、僕は活動しながら、ちょっとそんなことを考えているところです。

先ほどから言うように、僕らは人を救えない宗教学者ではあるので、本当に宗教をつくっていく気は全然ないわけです。だから僕らの方としては、そういう環境を見ていくだけですけれども、やはり宗教者の方々が話す場を僕らは設定しますから、そういうところで何か新しいものが出てくれば、そういうものはぜひやっていただいていいと思うんですね。

そういう意味では、民俗知をいかに再生するかはすごく大事だと思いますし、お祭りもすごく大事だと思っています。エミール・デュルケームの言うことに出てくるかどうかはともかく、本当に社会をまとめ上げるには、そういうお祭りの仕事というのは素晴らしいものがあります。

先ほどお見せしたクリスマスパーティーみたいな、たかだか数時間やったものですけど、あの準備のためにも、いろいろな人が集まってきて、いろいろな関わりをしていました。

そういうことで地域がまとまっていくというところがあると思いますので、まさに地域がなくなったところ、たしかに先ほどから何度か出てきた、近藤先生の話にも出てきた石巻などでは、仮設住宅がざっとつながっていくようなところがあるんですね。そこに新しい共同体がどうできていくのかを考えると、そういうところがすごく重要かと思います。

あと、聖とグローバリズムと言いますか、そちらの教団との問題。これはものすごく感じています。先ほども、どなたかおっしゃった中で、副住職は動くけれどもと、

まさにそうですね。心の相談室に井上先生も来られましたし、いろいろな方が見えます。僕らのまわりでも、近隣の方からいろいろな方が来られるのですけれども、多くはご自分の判断で来られているんですね。

教団とは全然くっついていない。教団に言うと、こんなことと言われる。あるところで、具体的にお名前は出しませんけれども、被災地に入って、思わず海の方へ向かって祈られた仏教者の方がいらっしゃるわけです。その方は、ある仏教系の大学の先生でして、その話を、仏教系の大学へ帰ってちらっとしたら、先輩の先生から、「そんなことをして何になる」と怒鳴られたというんですね。その先生は悔しくて研究室で泣いていました、とおっしゃっていましたけれども。

ある意味では、そういう経典的なほう、教義のほうに忠実に行けば、「そんなことをして何になる」という話でしかないんですね。でも、そうせざるを得なかったという人の気持ちを全然分かってもらえなかったというあたりに、やはりギャップが相当あるなという感じがします。

さらに言えば、話が飛んでしまうかもしれませんけれども、僕はあるところで、研究費を獲得するための研究の企画の審査をやったんですけれども、やっぱりいま、震災で研究費を得ようという人がものすごく多いんです。そういう人がプレゼンをやったんです。

その方は何て言ったかというと、「すみません、震災は終わりましたが、まだ原発の方は続いていますね」と。震災のことでお金を取って、研究していこうという人だったんですね。僕はつい腹が立って、言ってはいけなかったかもしれないんですけれども、文句を言いました。

「僕は東北大学から来て、まさに被災地にいます。誰も震災は終わったなんて思っていませんよ。震災は終わったと思って調査に入るなら、それはあまりにも被災者をばかにしているのではないですか」とつい怒ってしまいました。怒るべき場所ではないですけれども。

そういうふうに、いまはもう、世間では過去の話として考えている人が多くなってきているわけです。だから、教団の中でも、場合によると、そういうことも起こってくるのでしょう。

そうではないという部分で、仏教で言えば、特に副住職クラスの方たちが一生懸命やっていらっしゃる。そういうところがあるので、そのへんを、本山の方、あるいは教団本部の方にきちっと見ていただけるとありがたいと思います。

そんなことでよかったでしょうか。ちょっと話がずれてしまったかもしれませんが。

鎌田　ありがとうございます。次に、金子さん。

宗教学者と宗教者のコラボレーションの可能性

金子　宗教者と宗教学者の関わりということで、あらためて気が付かされるのですけれども、たとえば、心の相談室は東北大学が中心となって鈴木先生がやっておられる。それから、宗教者災害支援連絡会は、島薗先生が中心となって東京大学でやっておられます。

私も、かたちばかりの事務局長をしているのですけれども、大阪で支縁のまちネットというグループに関わっていて、そこは大阪市立大学、関西大学、また私のような天理大学の研究者が関わっているのですね。

宗教学者と宗教者のコラボレーションが、これからの支援の新たな展開において、もしかしたら大きな力を発揮していくのではないかと思っております。鈴木先生や島薗先生は優れたコーディネート能力がおありになり、また幅広い見識もお持ちですので、宗教者の側も教えられるところが非常に大きいと感じております。

民衆宗教と民俗宗教についてですが、私は民俗宗教ということはあまり考えたことはなかったのですけれども、民衆宗教について一言申し上げたいと思います。民衆宗教という言葉はたしかにありますが、大衆宗教という言葉はないと思うのです。大衆、つまり人間をマス（塊）として捉えるような宗教は、宗教ではないと私は思っております。なぜなら、一人一人を大切にするというところから民衆宗教の発想が始まっていくわけで、民衆宗教の世直しというのは、一人一人が力を付けていくために、宗教者が力を貸していくことだからです。

宗教者といえども、やはり生活者でもあります。その生活者であるという視点を、いわゆる伝統宗教の僧侶の方よりは、新宗教の人、普段は平服で行動している人の方が気張らずに出せるし、同じ生活者という立場でずっと人と関わっていくところに力点を置いているように思えます。

これはよく金光教で言われていて、私も好きで時々拝借して使わせてもらっている言葉ですけれども、「人生の伴走者」という言葉があります。その人の人生に寄り添って、同じ生活の中で交わりを深めていく中から、新しい宗教民俗がつくられていくことができればと思います。

私自身、まったく未熟ながら宗教研究者と宗教者の二足のわらじを履いているようなところがあって、いま支縁のまちネットの活動に関わっておりますけれども、自分に何ができるだろうかと、試行錯誤をくりかえしながら歩んでいきたいと思っているところです。

鎌田　ありがとうございます。では、島薗さん。

島薗　宗教学者が果たす役割と、教団が果たす役割とが似たようなものになってもいいのではないかなという感じも持っています。

こういう活動をしていて、非常にやりがいがあるのは、聖的な方たちと会ったり、そういう活動のお話を聞けることが非常にうれしいですね。元気が出てきます。

今日は、近藤さんのような方もそうですし、岩手から「大槌はらんこ」の方も来ていらっしゃるし、土生神社の阪井さんもいらっしゃる、そういうところがあるというのが希望なので、私が話すよりは、サンガ岩手の方と、阪井さんにちょっと話を聞きたいなという気がするんですが、どうでしょう。

鎌田　ここにはサンガ岩手の方は来ていなくて、私たちが支援として委託販売をしているのです。

島薗　ああ、サンガ岩手からのものを預かっておられるんですか。

鎌田　はい。今日はみなさんに販売協力を呼びかけているんです。では、次に、阪井さんに話をしていただきましょう。阪井さんは、大阪の神社の宮司さんですね。

小さなことに心を込めてやっていく

阪井健二　大阪の岸和田にあります土生神社の宮司の阪井と申します。突然のことで、何を話していいのか分からないのですけれども、神社で、いろいろな支援活動というか、そういうまね事をやっているんですけれども、ある福島県の神社の宮司さんが、支援に何が欲しいか聞かれたら、氏子さんが欲しいと。時間がたつにつれだんだんいなくなっていくと。避難もされていかれるということで。そういう話が伝わっているのです。あまりにも大きな出来事だったのですけれども、やっぱり小さなことに心を込めてやっていくことが大切だと思わされたこと。

福島県から避難して来られているある青年と出会って、彼が何世代にもわたって避難していかないといけないかもしれないという状況の中で、やっぱり福島県の伝統と言うか、地域のことを守っていかないといけない、そういう支援を助けてくれないかということで、ここに集まりまして、福島県のことを勉強しています。

関西に避難している方が、地元の伝統をどういうふうにして守っていくのかを考えていこうということで、そういう取り組みをこれからやっていきたいなと思っています。よろしくお願いいたします。

鎌田　ありがとうございました。それでは最後に、カール・ベッカーさん、こころの未来研究センターを代表して、締めの言葉をお願いします。

過去、現在、未来について

カール・ベッカー　恐れ入ります。ご発話なさった方々とお集まりのみなさまに御礼を申し上げます。長い話にならないように、コメントを三本柱にまとめます。過去、現在、未来についてです。

過去に関しては、一七年前の阪神大震災で同じ打撃を受けても、人が二分されてしまいました。つまり、震災から何も学ばずに、なかったことにしたい、少しでも早く元通りになりたい、という人と、震災によって自分の価値観や世界観を問い直し、たとえば物質や富より人間を大事にしたいという新しい価値を考える人とがおられました。その心理的な差は何なのかは分かりませんが、今日の話にも見え隠れしていましたね。

現在に関して言うと、今日の話は大きく分けて、自然悪に対して、人間はどうにもできないときに、鎮魂祭やら、葬儀やら、宗教的儀礼などによって、その運命をなんらかのかたちで受け入れられるというような話を、鈴木先生はなさったかと思います。天災のような自然悪に対して、人間悪というものもあります。人間悪に対して、結束力を持って、よりよい社会を作ろうではないかと、一揆運動をはじめとして、いろいろな世直し思想が幕末などに現れました。つまり自然の運命を宗教的に受容する力と、歪んだ社会を世直し運動で改革する力について学ばせていただきました。

近未来については、これから臨床宗教師という新しい資格や制度とその教育を考えていくものですが、関西大学のお二人から、非常に重要な示唆を受けたように思います。つまり臨床宗教師の役割と作業が、福祉士や心理士に還元できるものであれば、新制度は要らないというわけです。むしろ宗教にしかないもの、たとえば死後のことまで視野に入れて、物質だけに還元できない側面をさらに加えられたら、運命を受け入れるような儀礼や祈りの力と、場合によっては、社会を直す力とが現れます。こころの問題を脳活動だけに診断しがちな心理学や、社会資源や財政だけに還元しがちな福祉学と違う見方ができるようになればいいという希望を持って終わらせていただきたいと思います。

どうぞ今後ともよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

「世直し」のありようを深く問いかけていく

鎌田　こころの未来研究センターは、倫理学・宗教学のカール・ベッカーさん、認知心理学の吉川左紀子センター長、臨床心理学の河合俊雄さん、脳科学・神経科学の船橋新太郎さんと私を入れて五人の教授と、准教授の文化心理学の内田由紀子さん、そして助教・研究員のみなさんとあわせて十数名の小さな所帯ですが、今申し上げたように、脳科学から宗教学まで、本当に多方面に広がりを持ちつつ、「こころ学」の創成という課題を掲げて研究活動を続けています。

そのこころの未来研究センターの研究活動の一端は、東北大学に今度できるかもしれない実践宗教学講座とかなり内容的につながる部分があると思いますし、島薗さんが東京大学でやっておられる死生学講座とも密接につながっていきます。また、大阪大学の社会貢献の稲場さんのところとか、いろいろなところとつながりを持っています。

こころの未来研究センターはもちろん研究センターですから、研究を進めていくということが一つの柱ですけれども、同時に今の時代の中に、どういうソーシャルネットワークやソーシャルサポート、社会貢献に研究をつないでいくことができるかということも大きな課題となっています。というのも、何と言っても、名前が「こころの未来」ですからね。「未来」に関わる研究がセンターの大きな役割であり、方向性であると思います。そういう意味で、こういう研究会を継続して、さらに問いを深めながらつながりも深めていくということが必要だと考

えております。

そこで、来年度も、年に二回か三回、節目節目に研究集会を開き、その次の問題や、直近に起こっている課題を確認しつつ議論していきたいと思います。たとえば半年後の七月ごろ、この場に玄侑宗久氏に来てもらいたいと思っています。半年後、福島ではいったいどういう事態が起こっているのか、再度、現場からの報告と同時に、もう少し理論的なというか、思索的な議論を深めていきたい。その両方を課題として、第三回目、第四回目を来年度に実施したいと考えています。

本日、私は、プリント一枚の挨拶文を用意しました。その裏面に、「無縁社会から有縁社会へ ――現代の『エンの行者』の修行とは?」という文章を印刷しております。私は、この「縁の行者」となることを二十年以上前から公言しているのですが、時代の流れで言うと、「エンの行者」の「エン」は、一九八〇年代はお金の「円の行者」たちが日本社会を席巻しました。

でも、これからの二一世紀は、私が昔から言っている、みんなの「縁」をつなぐ、縁つながりの「縁の行者」こそが本当に必要だと思っています。そういう意味での「縁の行者」でありたいといつも思っています。

私は自分の活動課題として「世直し」をやりたい。でも、そのとき、「世直し」とはいったい何なのかを深く問いかける必要があります。「世直し」だと思って自己満足に走って、それが逆の「世曲り」をしているというケースもあるからです。

そういうことも含めて、「世直し」のありようを深く問いかけていくことが、世直し思想をさらに練り直し、問い直して、鍛え直していくためには必要であると思っています。そのためにも、みなさま方のいろいろなお力をこれからも必要としていますので、今後ともぜひよろしくお願いしたいと思います。

最後に、私の縁結びの力は法螺貝でしかありませんので、法螺貝演奏で、今日の縁結びを閉じさせていただきます。（法螺貝演奏）

みなさま、ほんとうにありがとうございました。お気をつけてお帰りください。

【当日配布資料「無縁社会から有縁社会へ ――現代の『エンの行者』の修行とは?」】

私は、奈良県吉野郡天川村の天河大辨財天社という神仏習合の神社によく参拝に行きます。そこには、役行者が弁財天女を感得して祀ったという伝承が残っています。この修験道の開祖とされる役（エン）の行者に倣って私は二十年以上前から「現代のエンの行者」を名乗り始めました。「現代のエンの行者」の「エン」の字には、「役」でも「円」でもなく、「縁」をあてます。つまり、現代の法力・験力・霊力とは、空を飛んだり、病気を治したりする呪術的な力よりも、個々が持てる力をさらに大きくつなぎ結び相乗させていく「縁結び力」、すなわち「むすびのちから」であるというのが私の考えです。

同時に私はこの二十数年、「現代大中世論」という主張を繰り返してきました。現代は中世のような乱世で、それも中世の規模を拡大再生産したような巨大な乱世であるというのが私の見通しでした。最新拙著『現代神道論――霊性と生態智の探究』（春秋社、二〇一一年一一月三〇日刊）では、それを、歴史は直線的に発展ないし変化していくのではなく、螺旋構造的に前代および前々代の課題を隔世遺伝的に延引させ引き継ぎながら拡大再生産していくという「スパイラル史観」として提示しています。

この「現代大中世論」は、〝地縁・血縁・知縁・霊縁〟という「四つのチ縁」の崩壊現象とそれを踏まえた再建への課題を指しています。地域共同体や家族の絆の希薄化と崩壊。知識や情報の揺らぎと不確定さ。「葬式は要らない」とか「無縁社会」と呼ばれるような先祖祭祀や祖先崇拝などの観念や紐帯や儀礼が意味と力を持たなくなった状況。物質的基盤から霊的・スピリチュアルなつながりまですべてのレベルでチ縁が崩落し、新たな効果的な再建策やグランドデザインを生み出せないでいるのが現状です。

「スパイラル史観」から見ると、古代と近代、中世と現代に共通の問題系が噴出しています。古代と近代の共通項とは、巨大国家の確立、すなわち帝国の時代の到来です。古代帝国と近代国民国家の確立の中で覇権を争い、中央集権的な国家体制の確立を見、植民地支配を含む「帝国化」の過程が進んだのが古代と近代の特性です。

対して、中世と現代には、二重権力や多重権力に分散し、権力と社会体制の混乱が深刻化していきます。日本では、源平の合戦や南北朝の乱や応仁の乱が続き、朝廷・天皇と幕府・征夷大将軍という二重権力体制が進行し、西欧においても十字軍の戦乱により教会と封建諸侯に権力分散していきますが、この時代はまた宗教・霊性・スピリチュアリティが自覚的に捉えられた時代で、日本では一向一揆などが起こり、現代の「パワースポット」ブームにも該当するような蟻の熊野詣や西国三十三ヶ所などの聖地霊場巡りが流行しました。この時代に、「無縁・無常・無情」が時代的キーワードとなっていきます。政治経済や文化面だけでなく、自然そのものが繰り返し猛威を振るい、対策を講じがたい疾病が流行します。それが中世的「乱世」の現実でした。

さてここで考えておきたいのは、故網野善彦氏の『無縁・公界・楽――日本中世の自由と平和』（平凡社、一九七八年）の「無縁」論です。網野氏は、「無縁」概念を「自由」や「公界」と「楽」と絡めつつその積極的肯定的意味を掘り起こしつつ論じ、「無縁」が駆け込み寺や四条河原など治外法権的なアジールであり、権力的な主従関係や税の取り立てなどから切り離された中世的な「自由と平和」を孕んでいることをポジティブに描き出すことで「暗い」中世像を一新したのでした。その網野的な観点を敷衍するならば、中世社会においてはそれま

での律令体制的な社会的「縁」から「自由」になって「法外」な活動を展開することが可能となります。それは確かに一方では社会秩序の混乱であり戦乱でありアウトローですが、もう一方では活動の「自由」と「新縁の構築」を生み出したわけです。そのような新縁の結び方を提唱したのが葬儀に関わった遁世僧や法然や親鸞や一遍などの念仏僧や日蓮や道元らのいわゆる「鎌倉新仏教」や唯一宗源神道を提唱した吉田兼倶でした。

とすれば「無縁」にも、消極的無縁と新しい縁の構築＝新縁結びにつながる創造的・積極的無縁があるということになります。そのような、網野氏が洞察した「自由」と「新縁結び」に連動するような「無縁」の一面もしっかりと見通しつつ、現代の「無縁社会」を捉え直し、これからの社会構想を考えなければならないと考えます。これまでの悪しき縁やしがらみから「自由」になって新しい社会づくりを志す人びとは最初「悪党」視されますが、そのような「悪党」こそが新しい時代の「世直し」の担い手にもなり得るという「無縁社会論」のパラドクシカルな全体構造を見据えつつ、「絆」や「つながり」や「有縁」のありようを構想したいと考えています。

（鎌田東二記）

宗教者が見た東日本大震災

東日本大震災と宗教、心のケアについて語る玄侑宗久さん（左から3人目）ら＝京都市左京区で

東日本大震災は、地震と津波、原子力発電所の放射能漏れ事故という甚大な被害をもたらしている。被災地ならずとも、人の心のありようは変化しつつあるのではないか。「京都大学こころの未来研究センター」は20日、宗教と「心のケア」を考えるシンポジウムを京都市左京区で開いた。約130人が参加し、福島県の臨済宗妙心寺派寺院の住職で芥川賞作家の玄侑宗久さんは「何万年も半減しない放射能は、仏教の無常の原理に反してしまう」などと語った。【鶴谷真、写真も】

玄侑宗久さん「無常の原理に背く放射能」

玄侑さんは、原発から大量の放射能が流れた事実がすぐに公表されなかったり、「直ちに健康に影響ない」とされながら野菜が突然出荷停止になった事態を受け、「福島では情報価値が暴落し、『どうせ、また』という心情が芽生えている」と分析。福島県の浜通りには300もの神社があるといい、「地震や台風など自然災害が怖いから、神様を祭ってきた。『おびえ』は大切。国の原発事業はウランやプルトニウムを怖いと認めず、神道の基盤をぶちこわした」と憤った。

さらに「外には気持ち良い風が吹き、おいしそうな桃がなっている。でも、ベクレルやシーベルトの数字しか信じるなと言われている。気持ち良い、おいしいという当たり前の感覚が通用しない。心に不安のある人にとっては、生きていけないほどのダメージだ」と語ると、会場は静まりかえった。

「心のケア」主題に京都でシンポ

同研究センターの鎌田東二教授（宗教哲学）は、被災地の神社を巡った。仙台市の浪分神社は、平安期の大津波の後に「ここまで波が来た」として建てられたといい、岩手県には鳥居の手前まで壊滅、奥は無事という神社もあった。「神社に巨岩や巨木があるのは、そこが長期にわたり安定しているから」で、「防災の記念碑」としてもっと注意を払うべきだと指摘した。

宗派を超えた「宗教者災害支援連絡会」の代表を務める島薗進・東京大教授（宗教学）は、阪神大震災時に比べ、合同法要などを報じるメディアが多い点に注目し、「読み手の心に響く話題なのだろう」。また、死と不可分の「無常」や、思いやりを示す「慈悲」などの言葉から「仏教には悲しみの音調が流れている」とし、俳人・小林一茶が肉親を失いながら、文芸の中でたくましく仏道を表現した例を紹介。今後の日本人の生き方のヒントになり得る視点を示した。

島薗さんが「行政関係者は、心のケアと言えばまず臨床心理士か精神科医。宗教者は布教するのでは、と警戒される」としたのに対し、天理大の金子昭教授（倫理学）は「宗教はより深い『意味の喪失』に直面した際に出番がある」と述べた。震災2日後にネット上に「宗教者災害救援ネットワーク」を開設した稲場圭信・大阪大大学院准教授（宗教社会学）は「寺院と神社、さらにキリスト教や新宗教などが行政やNPO、大学と力を合わせれば、多くを失った人たちの伴走者になり得る」と語った。

毎日新聞　2011年7月28日夕刊

第4部　東日本大震災「こころの再生に向けて」シンポジウム記録

第三章　第三回東日本大震災関連シンポジウム

こころの再生に向けて

玄侑宗久
福島県三春町福聚寺住職・作家

島薗進
東京大学大学院教授・宗教学

稲場圭信
大阪大学准教授・宗教社会学

黒崎浩行
國學院大學准教授・宗教学・神社研究

一条真也
株式会社サンレー社長／北陸学園大学客員教授

井上ウィマラ
高野山大学准教授・スピリチュアルケア学

鈴木岩弓
東北大学大学院教授・宗教民俗学

鎌田東二
京都大学こころの未来研究センター教授・宗教哲学
／司会進行

開催に当たって　鎌田東二

みなさま、こんにちは。本日は、京都大学こころの未来研究センターで行っている研究プロジェクト「東日本大震災関連プロジェクト～こころの再生に向けて」の第2回目のシンポジウムを行います。

本日は、ご参加、まことにありがとうございます。四時間という短い時間の枠内ですが、実のある議論ができれば幸いです。ご協力、お願い申し上げます。

東日本大震災に関連して、本研究プロジェクト連携研究員の大阪大学大学院准教授・稲場圭信氏が『利他主義と宗教』（弘文堂、二〇一一年一一月）を、玄侑宗久氏が『無常という力「方丈記」に学ぶ心の在り方』（新潮社、二〇一一年一一月）と『福島に生きる』（双葉新書、双葉社、二〇一一年一一月）と『地蔵のこころ、日本人のちから』（佼成出版社、二〇一二年一月）を、鎌田が『現代神道論――霊性と生態智の探究』（春秋社、二〇一一年一一月）を、また玄侑宗久氏と鎌田が共著で『原子力と宗教』（対談、角川ｏｎｅテーマ新書、角川学芸出版、二〇一二年三月）を、島薗進氏が『日本人の死生観を読む――明治武士道から「おくりびと」へ』（朝日選書、朝日新聞出版、二〇一二年二月）などを出版しています。個別にみれば、連携研究員のみなさんがさらにたくさんの論考やエッセイや対談などを雑誌などでも発表してきています。

本日はそれらを踏まえて、東日本大震災後の一年間の

出来事や活動を振り返りつつ、確認・整理・未来展望をしていきたいと思います。

私自身は、写真家の須田郡司氏とともに、二〇一一年五月に第一回目の被災地訪問（約四〇〇キロ、六六頁表参照）、六月に福島県相馬市での一〇〇日慰霊祭参列、一〇月にまったく同じ場所を第二回目の訪問（その際、近藤高弘氏制作の「命のウツワ」を届ける）、一一月に「命のウツワ」を福島県相馬市の仮設寺清水寺（本寺は浪江町）に届け、そして二〇一二年五月には、さらに被災地沿岸部訪問を拡大して青森県八戸市から福島県南相馬市と浪江町との立ち入り禁止区域の境まで約九〇〇キロを巡りました。その時の見聞の一端は、「モノ学・感覚価値研究会」のHP（http://homepage2.nifty.com/mono-gaku/）の「研究問答」欄に掲載しています。

これらのほとんどの寺社を、この一年半弱で三回ないし四回訪問しつつ、渡り鳥のように、あるいは遍路のように、時期を定めて定点観測するように追跡調査をしてきました。その過程で、宮城県石巻市の雄勝法印神楽の復興支援に少しですが協力してまいりました。本日一五時過ぎに、その雄勝法印神楽のリーダーである伊藤博夫会長さんたちがこの場に来られる予定です。そこで、この間の経緯など少し話していただこうと思っております。

実は、昨日、七月一〇日から一三日まで、石巻市立雄勝中学校と石巻市立大須中学校が京都へ修学旅行に来ているのです。その大須中学校の生徒に同行して、雄勝法印神楽の伊藤博夫会長をはじめとする神楽師三名がともに京都入りしました。そして本日の朝九時から一二時まで、京都市立開睛小中学校との神楽上演を含む交流があり、そのあと生徒たちは午後三時から京大博物館を訪問するスケジュールですが、その時間帯に伊藤博夫会長さんたちがこちらに来てくれることになっています。

このプロジェクトは、昨年、甚大な被害を受けて修学旅行が取りやめとなった石巻市立雄勝中学校を支援するために始められたものです。雄勝・大須の両中学校がいずれ統合することが決定したため、今年は二校で修学旅行を実施し、大須中学校の生徒らが神楽を学んでいるから師匠方も同行したとのことです。これらは協賛金や寄付金で実施している事業のようです。そして、このコーディネートをしているのが、文部科学省の社会教育アドバイザーであり、石巻市の被災校のキャリア教育コーディネーターの石川さんです。昨夜、石川さんからのメール連絡で急遽、そのようなかたちになりました。

本年五月五日、私は國學院大學の黒崎浩行さんや須田郡司さんと一緒に、大須中学校のある雄勝町の大須八幡神社で奉納された雄勝法印神楽を見学してきました。その大須中学校の生徒たちの修学旅行と本シンポジウムが鉢合わせするとはなんという有難い縁組でしょうか！

東日本大震災から一年四カ月、その間に起こった事柄はさまざまで、日本社会も混乱と混迷の中にあるかに見えますが、そうした中で着実に「こころの未来」を構想し、切り拓こうとする歩みもあると確信します。本日は四時間という短い時間ですが、本研究プロジェクトの連携研究員諸氏とともに虚心坦懐に議論できれば幸いです。なにとぞよろしくお願いいたします。

二〇一二年七月一一日　鎌田東二拝

プログラム

日　時：二〇一二年七月一一日（水）一三時～一七時

場　所：京都大学稲盛財団記念館三階大会議室

趣旨説明：鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター教授・宗教哲学・民俗学）一〇分

基調報告1：玄侑宗久（作家・福島県三春市福聚寺住職）「福島の現在と宗教の役割と課題」四〇分

基調報告2：島薗進（東京大学教授・宗教学・死生学）「宗教者災害支援連絡会の活動一五カ月を振り返って」三〇分

コメンテーター：稲場圭信（大阪大学准教授・宗教社会学）一〇分

報告1：黒崎浩行（國學院大學准教授・宗教学・神社研究）「被災地の神社と復興の過程」二五分

報告2：一条真也（本名：佐久間庸和：株式会社サンレー社長・北陸学園大学客員教授）「東日本大震災とグリーフケアについて」二五分

コメンテーター：井上ウィマラ（高野山大学准教授・スピリチュアルケア学）一〇分

鈴木岩弓（東北大学大学院教授・宗教民俗学）一〇分

ディスカッション・総合討論　六〇分

第一部

趣旨説明

鎌田東二

（法螺貝奉奏）

みなさま、こんにちは。こころの未来研究センターの鎌田東二と申します。今日は二〇一二年七月一一日です。昨年三月一一日に東日本大震災が起こってから、ちょうど一年四カ月になります。午後二時四六分には、みなさまと一緒に黙禱をささげたいと思いますので、その時間になりましたら、起立して黙禱したいと思います。

開催にあたりまして、本シンポジウムの趣旨説明をさせていただきます。ちょうど一年前、二〇一一年七月二〇日に「災害と宗教と『心のケア』」というテーマで、第一回目のシンポジウムを行いました。

そして、二回目は二〇一二年一月二四日に半公開の研究会のかたちで、少人数で宗教的世直し思想をテーマにした議論を行いました。その際、宗教民俗学専攻の鈴木

岩弓東北大学教授に、仙台で展開されている心の相談室や「カフェ・デ・モンク（Café de Monk）」の活動について紹介してもらいながら議論を深めていきました。

そして今日、第三回のシンポジウムとなります。このような一般公開のシンポジウムは一年に一回、できれば、七月「一一日」という節目の日に、今後とも続けていければと考えております。

第一回のシンポジウムの際に、この研究プロジェクトの全体的な紹介をいたしましたので、ここではそれを繰り返すことはいたしません。その際の議論は、こころの未来研究センターのホームページ上（および本誌）にすべて公開されておりますので、議論の内容をご確認いただければ幸いです。

昨年から今までの展開

ここでは、昨年からどのような展開になっていったのか、話をしておきたいと思います。

去年の七月二〇日の第一回目のシンポジウムの後、京都新聞が事後報道してくれました。その後、私たちは二〇一一年一〇月に第二回目の追跡調査をし、この春の二〇一二年五月に三回目の追跡調査を行いました。その第二回目の追跡調査のときに、こころの未来研究センターの連携研究員として、一緒にいろいろな活動をしてくれている陶芸家で造形美術家の近藤高弘さんが、「命のウツワ」と銘打ったお茶碗を宮城県の「無限窯」という登り窯で二千個つくってくれたので、それを宮城県と岩手県と福島県の被災地の方々に届けました。その際、鈴木岩弓教授が事務局長を務める「心の相談室」にも届けました。

今日のシンポジウムにも途中から参加してくださると思いますが、石巻市雄勝町の雄勝法印神楽の神楽衆の方々にもこの「命のウツワ」を届けました。千葉修司葉山神社・石神社宮司さんや、伊藤博夫雄勝法印神楽保存会副会長（現会長）さんたちに受け取っていただきました。実は、その雄勝法印神楽の伊藤博夫副会長さんたちと、今日の午前中に京都市内の開睛小学校・中学校でお会いしていたのです。

たとえば、この雄勝法印神楽などの民俗芸能が東日本大震災後の復興のプロセスの中で、地域の絆となり、力となっていることを強く感じてきました。いかに民俗文化・伝統文化が地域の重要な基礎・基盤となっているか、絆となっているかを再確認させられたように思います。

岩手県大槌町の仮設住宅にも昨年「命のウツワ」を届けましたが、そこの手芸グループの「はらんこ」の方々のつくった手芸作品を後ろの方で販売していますので、ご協力・ご支援いただければありがたく思います。また、福島県浪江町から相馬市に移住せざるを得なかった仮設寺の真言宗の清水寺にも「命のウツワ」を届けてまいりました。

そして、今年の五月一日から六日まで沿岸部だけで約四五〇キロ、内陸部も合わせるとトータル九〇〇キロを石の聖地の写真家の須田郡司さんと共に巡ってまいりました。そして、各地に残っている神社や仏閣、民俗芸能のいま現在がどういうものであるかを見てまいりました。

その途次、玄侑宗久さんから、宮城県気仙沼市の陸前階上にある地福寺というお寺のことを紹介されて、訪問してまいりました。この陸前階上の辺り一帯は陸中国立公園の一つで、岩井崎や伊勢浜があるたいへん風光明媚なところですが、海岸線に近く、集落は壊滅的な被害を受けました。地福寺は高台にあって、一階天井近くまで津波が押し寄せましたが、なんとか堪えて、このお寺が地域の避難所となりました。

そこの住職が片山秀光さんですが、伝統的な法話のスタイルの説談説教を現代のジャズやラップなどと絡ませながら、新しい説教節で法話をされているとてもユニークな方です。そういうかたちで、被災した人たちの心の中に、楽しさと、勇気と、面白さや力、エネルギーをかき立てながら、もう一度人々の生活の意欲や生き方や地域を再活性化させたいという活動をされている方です。

けれども、このお寺より東側の海岸沿いの集落は、壊滅的な打撃により一軒も家がありません。私たちはこの気仙沼市から石巻市雄勝町に入っていきました。その雄勝町では、今回五月五日の大須地区の八幡神社の例祭を皮切りに、各地でお祭りができて、そこで雄勝法印神楽が上演されました。大須では、お祭りの際、神輿衆が恒例によって海の中に神輿を担ぎ入れました。これは、地域復興の一つの力強いかたちであり、シンボルになったと思います。

神楽衆は、復興プロセスの中で、自分たちの地域のハードの面では、まだまだ再生、復興が立ち遅れていてできないけれども、いちばん重要な自分たちの民俗基盤であるところの神楽が復興する中でさまざまな励ましとつながりが生まれ、神楽を通して世界的なネットワークや支援を得ることができたと言われていました。

そういう意味で、民俗文化が持つ潜在的力は非常に大きいものがあると、あらためて感じた次第です。なお、雄勝町は、町の真ん中の二階建ての中央公民館の屋上に大型バスが津波で流されて乗っかっていましたのが、今は取り外されて、下に降ろされておりました。

修学旅行で雄勝法印神楽を上演

今日の朝、京都市東山区六波羅裏門通にある、小・中一貫校の京都市立開睛小・中学校に行きました。その近くには空也上人が開基したと言われる六波羅蜜寺があります。ここには運慶の子の康勝がつくったとされる、口から六体の阿弥陀仏の小像が吐き出されている有名な重要文化財の空也上人像があります。平清盛とされる僧形坐像もあります。

その小・中学校に雄勝町の中学生が行って、雄勝法印神楽を上演したのです。雄勝町にある雄勝中学校と大須中学校両校では、中学生たちが雄勝法印神楽を総合学習で学び、一地域と学校とが一体になって地域伝統文化を

継承しています。

まもなく合併する両校の中学生たち、全校生徒一四人ぐらいの大須中学生の三年生三人、全校生徒四〇人ぐらいの雄勝中学校の三年生一四人、合計一七人のグループが、昨日から修学旅行で京都に来ていて、去年から支援活動や交流活動のあった開睛小・中学校で、今朝、太鼓の演奏と雄勝法印神楽の上演をしたのです。そして、本日まもなく午後三時過ぎには、この会場に、両中学校の囃子方として同行した伊藤博夫会長さんたちが来てくださることになっています。

こういう交流を通して、いろいろなかたちでの復興支援の現在を見通すことができます。私たちは、原発の問題を含め、環境や経済や政治の問題など、いろいろな問題を抱えていますが、このプロジェクトでは、宗教を一つの切り口にしながら進めてまいりましたので、今日も、本プロジェクトに関わってくれている連携研究員の宗教学者や宗教家にこの一年間の活動を振り返って報告してもらい、議論の場にしていきたいと思います。

まず最初に、福島県福聚寺の住職で、また作家でもありますます玄侑宗久さんに、今日の最初の発題「福島の現在と宗教の役割と課題」というテーマで話をしていただきます。では、玄侑さん、よろしくお願いいたします。

鎌田東二氏

基調報告1
福島の現在と宗教の役割と課題

玄侑宗久

分かりにくくなった福島

こんにちは、玄侑宗久と申します。いまみたいに資料があるとたいへん分かりやすいのですが、なにも資料がなくてすみません。資料は使わないほうが坊さんらしいということで、ご容赦ください。このタイトルは鎌田先生に付けていただきました。決して文学的ではありませんが、後で内容がすぐに分かる、シンプルなタイトルであります。

福島の現状はと訊かれれば、しばらく前までは、ぐずぐずしている感じかなと思っていたのですが、いまはぐずぐずを越えまして、ぐちゃぐちゃという感じですね。それと同時に、「なし崩し」という言葉も浮かびます。

去年のいまごろには、何をしなければいけないかということが、だいたいは分かってきていたわけです。まず、除染。それから、継続的な線量の測定による健康管理。あるいは、賠償の問題があり、産業復興があり、雇用づくりがあり、また、風評被害の払拭ということが課題であろうと思われておりました。

それをとにかく進めていけばいいのだなとみんな思っていたのですが、私の印象としては、なかなか絵に描いた餅は食べられないという感じがありまして、いちばん肝心な部分が放置されたまま、いろいろなことをしている、しようとしているので、上滑りになっているのではないかという印象があります。

いちばん肝心なことは何かと申しますと、除染にしましても、どこまで低減させればいいのかと。現在の放射線量をみんな測ることはできるのですが、その解釈はそれぞれに任されています。ですから、〇・一五マイクロシーベルトでも怖がる人は出ていく。そして、〇・五、〇・六マイクロシーベルトでも大丈夫だと思う人はそこにいるという状態なのです。

年間一ミリシーベルトというのがいまは目標値になっています。私は、これは幻の数値だと思っているのですが、年間一ミリシーベルトを目指すことは、かなり非現実的であるということが分かってきています。

二〇〇二年の資料ですけれども、全国の各都道府県で、すべて県庁所在地での測定ですね。それで見ますと、二〇〇二年の時点で、年間一ミリシーベルトを超えている県が一一県あります。言ってしまいましょうか。一番高かったのが、その時点では富山県です。次が、石川県です。あとは順不同にしますが、福井県、岐阜県、滋賀県、兵庫県、鳥取県、広島県、山口県、愛媛県、香川県です。ここが、年間一ミリシーベルトを超えています。

それは、「自然放射線量でしょう」という声が聞こえそうですけれども、たとえば、その二〇年前に日本で一番線量が高かったところは、二〇〇二年に第一位の富山県とは違うのです。二〇年前には、岐阜県が一位です。なぜ抜いたのか。ぐいぐいと追い上げて抜いてしまったのが富山県と石川県です。福井県も、かなり上がってきました。何か、これはやはり西の方から飛んできているよなという感じが、私はするのですが。

ですから、環境放射線量といっても、いつ、どこから飛んできたものが混じって、そうなっているか分からないわけで、福島県も、まもなく環境放射線量と呼ばれるだろうと思っております。

現在は、何ミリシーベルトぐらいまでは大丈夫なのかということを、個人の判断に完全に任せています。お好きにどうぞという具合ですね。いま現在、約六万二千人の福島県人が県外で暮らしています。自宅に戻れていな

玄侑宗久氏

い方々が、津波被災者も含めてですけれども、一六万人を超えています。

この六万二千人という、県外へ出ていっている方々が、どうなれば戻るのかというのが、まったく見当がつかない状態です。何と言うのでしょうか、出ていったそのときには、爆発するかもしれないという危機感がありましたし、いまのように、ある程度落ち着いてきたこの状況とは違うわけですけれども、でも、落ち着いたと思えるいまも、戻らない。果たして戻ってきてくれるのか、どうしたら戻ってくれるのかが分からないのです。

というのは、必ずしも放射線量の低いところに避難生活をしているとは限らないからです。福島県一律で高いと思っていらっしゃる方も多いのでしょうが、実はそうではないわけです。たとえば、福島県でも、川内村、今回、全村避難を決定した村の中心部は、〇・一五マイクロシーベルトです。ということは、放射線量が、神戸よりも、京都よりも低いのです。

ところが、そういう地域なのに、出ていったまま多くの人々が戻りません。出ていって、いまや、そこに根を生やし始めています。しかも、県内に避難した場合は、川内村の仮設住宅が一番多いのは、郡山市です。郡山市は毎時〇・五マイクロシーベルト以上あります。〇・一五マイクロシーベルトの川内村から、〇・五マイクロシーベルトを超える郡山に避難して暮らしているわけです。

遠藤雄幸村長が「帰村宣言」をしました。できる限り戻ってほしいわけです。戻れる人から戻りましょうと、柔らかいお誘いですが、切実な願いなんです。「どうして戻らないのですか」と訊きますと、公式見解だけが返ってきます。「除染がまだだから」、それと、「雇用がない」。そう答えるのですが、果たして、本当にそうなのか。

除染がまだというのは、毎時〇・一五マイクロシーベルトを、どこまで除染するのかという話になるのでありまして、それだったら、国中除染しないとならないことになるわけです。本当は、除染すれば戻るという単純な話ではないのではないかという気がしております。

一つ言えるのは、川内村はたいへんなんです。子どもが学校に通うのに、高校がないので、バスに乗って最寄りの駅まで出て、そこから汽車に乗って高校に行くのですけれども、そのバスも採算が合いません。子どもたちが乗るバスを走らせてもらうために、年間三〇〇〇万円を村がバス会社に出しているのです。ほかに乗る人も、それほどいない。いわば、とっても不便な村だったんです。さらに、はっきり申しまして、水道がない。これには、井戸水でやっていくのだという思想も半分あります。こうして、それほどに不便だという側面もあるわけです。特に子どもの進学を考えた場合には、放射線量どころの話じゃないよという部分があるのです。

ところが、公式見解では、そういうものは出てこない。非常に分かりにくくなっているんです。ぐちゃぐちゃというのは、いろいろな意味を込めて申し上げたのですが、ぱっと見でどうしてこうなっているのかという理屈がちょっと見えなくなってきています。

風評被害と放射線に関するメンタルケア

先ほど「なし崩し」と申しましたけれども、たとえば福島県は、「農業を、ぜひみなさん再開してくださいよ」という方針です。新たに人を雇ってくれる農家とか、新規に農業に参入したい方には補助金を出しますよと大々的に支援しようとしているのですが、申請があったのはわずか三件です。宮城県、岩手県の方は、農業の再開率が六〇％を超えていますが、福島県は一七％です。果たして、この土地での農業はやっていけるのだろうかという点が、ものすごく大きな不安になっております。

先ほど「風評被害払拭」という課題を申しましたけれども、「風評被害はないんだ」と言い切る方もいるのです。つまり、危ないものには近づかないに越したことはないという考え方からすれば、少なくとも福島県は他県より明らかに危険なのだから、それは風評ではなくて実害の可能性が高い、ということです。

これは、大震災以前から、日本人の中に芽生え始めていた考え方だろうと思います。特に医療の世界で、盲腸を切るのにも死亡例の話までしておくという、悪しきインフォームド・コンセントです。要するに、最悪のことまで話しておけば、訴えられることはなかろうという態度ですね。本来は、インフォームド・コンセントというのは、患者の十分な納得を得るための十分な説明なわけですから、必要とされるわけですけれども、そういうかたちではなくて、最悪のことまで言っておけば訴えられませんよという、保身のすべとして使われている部分があるわけです。

その態度が、低線量の放射線に対しても取られている。いいか悪いか、分からないものは、悪いと考えておいた方がいいでしょうというんです。NGだといっても疑っておいた方がいいでしょうと。そういう態度に、あちこちでぶつかります。

その態度が半歩進めば、福島県の人とは結婚しない方がいいでしょうというところに、すぐに入ります。でも、そういう差別的な態度を取っているとは誰も思っていない。そういう傾向があるようです。福島県人ではない場合はそれでいいのだろう、いいのかもしれないとも思い

ます。ただ、福島県に住んでいると、その考え方では住めないわけですので、非常に乖離が激しくなっています。

いま、放射能の問題というのは、放射線に関する心療内科というのですか、心理ケアの学科が南相馬の市立病院にできました。放射線に関するメンタルケアをする科です。もう放射能の問題というのは、実にメンタルな問題なんです。そういう意味では、これは宗教の問題でもあるのかもしれないと思います。

実際、放射能について、表立って話題にすることは本当に少なくなってきています。「どのぐらいが安全だろうね」とか、そういうことをあらためて話すことはなくなってきています。そうするとどうなるかといいますと、深層心理の方にいってしまうというのでしょうか。ですから、福島県から出ていっている六万二千人というのは、実は出ていかない人々自身の中に住んでいる潜在意識のようなものなのです。

つまり、私の中にもそうしたい気持ちが無意識に存在している。昼間起きているときは、そんなことはないと思っているわけです。でも、夜眠ると、大変な悪夢にうなされる人々が大勢いるのです。心理療法をされている方のリポートを読んでみると、「解離」という症状も出てきています。それは、やはり表面上は平気に暮らしていながら、自分の中に、福島県から出ていくような、何か別のキャラクターが解離するのではないかという気がしております。

産業の復興ということでいいますと、いま新聞によっては、非常に大きく扱っていますけれども、産業復興企業立地補助金というものを、国が大盤振る舞いで「出す」と言っていたわけですが、あまりにも申請が多かったために、「三分の二を援助する」と言っていたのを「三分の一にしたい」と。あるいは、新規雇用にかかわらない、たとえば、「食堂とか、そういった福利厚生施設の建設費まで三分の二を出すことはちょっとできない、六分の一にまけてくれ」という話が出てきていまして、国と県が盛んにやり合っております。

これも、銀行の人などに聞いてみますと、大きな企業がその規模を拡大して、大量に人を雇おうということですから、なかには今回の震災被害とは関係ないケースも混じっている。この機に乗じて、というと言葉は悪いかもしれませんが、そういう側面も感じられるように思います。ですから、何の世界でもそうですけれども、大きいところはさらに大きくなり、ちょっとダメージを受けたところは、それがどんどん広がる、という方向にあるような気がします。

壊滅的な打撃を受けているのは、農業者、漁業者です。もちろん林業もありますけれども、これが回復することが果たしてあるのだろうかという思いがあります。

風評被害というものは、われわれは、あると思っています。この間、六月二三日ですか、WHOが日本に来もしないで、政府発表のデータをコンピュータ上でいじってつくったものを発表しました。あんなひどいものはないです。何をやっているんだろうと思いました。

福島県の警戒区域内は除いて、飯館村と浪江町以外の県内全域をみんな同じ色で染めたのです。ほかの県は、全部違う色です。どういうふうにすると、そういう色分けができるのかなと思って、よく見てみると、一から二〇ミリシーベルトを同じ色にしているのです。ほかの県のほうは、一から二ミリシーベルトです。これじゃダブっているでしょう。しかしそういうことをすると、とにかく福島県だけを違う色にできるんですね。本当にすごいことをするなと思いました。

風評被害を除きたいというのは、やはり非常に大きな欲求としてありますので、私の町に実生プロジェクトというものを立ち上げたのですけれども、そこで、多少予算がありましたので、全国のお寺さんにお願いしまして、各県二カ寺以上ということで、放射線量計をお願いしました。その土地の環境放射線量を測っていただきたい、と依頼したんです。なぜ、お寺さんに頼んだかというと、お寺さんは厄介なことを言いませんので、ありがたいことです。もともとこれは女房のアイデアで、女房が電話をかけまくりまして、あっという間に、一〇三カ所のお寺が受けてくださったので、北海道から石垣島まで、全国各地の放射線量を測り続けています。その第一弾の結果が、今月末には出てきて発表できると思っておりますので、お楽しみにお待ちいただきたいと思います。

福島県だけに放射能があって、ほかはほとんどないというように思われているのが何とも切ないわけです。私は一時、放射線量計を持って全国を歩いていた時期がありますから分かりますけれども、本当に三春町を出てきて、こっちに来ると、こっちの方が高いのです、申し訳ないのですけれども。ですから、そのへん、詳しくご報告したいなと思っております。

非常時態勢の仕組みのなかった行政

なかなか宗教に話が進みませんが、もう一つ、大事なことですので言わせてください。いま福島県で、国や行政の動きを見ていて感じるのは、県民は非常時だと思っているのに、態勢が平時なのです。というか、非常時の態勢が組まれなかったことが非常に大きい。

平安時代ですと、普段は左大臣の指揮権が一番強かったわけですが、戦争とか、病気が発生したり、事故が起こったり、そういうことになりますと、右大臣が一番の指揮権を持つのです。まったく指揮系統が変わるということがあったわけですね。

今回、復興庁というのは、既成の省庁を超える力を持たせてもらえませんでした。ということは、既成の省庁が、それまでのあり方をまったく変えない中で復興作業をしていかなければならない。このことが、とても困難なことだという気がしています。市町村長にすれば、お願いに行く場所が一カ所増えただけの話ですから、復興のためといっても、ままならないことが多すぎます。

たとえば、どういうことかと言いますと、除染するの

に、全国で人を募っているのはご存じですか。雨が降ると除染が休みなので、うちの寺にも人が来ます。「除染で三春町に入っているのですけれども、ちょっと来てみました」と言って、佐賀県の人、あるいは、姫路の人が来たりします。「雨の日は除染ができない」ということで、いろいろ聞いてみると、全国からそうやって大勢来ているのです。

どこで応募したのですかと訊くと、「姫路で雇われた」「佐賀で雇われた」わけです。そして現場にやって来てみると、元請けが清水建設で、その間に三つほど入って、四次請けで雇われていた。はっきり言って、四次請けで（日給）一万二〇〇〇円です。五次請けになると八〇〇〇円になります。一次請けはいくらだと思いますか。これは言わない方がいいですか。言ってしまいますね、四万六〇〇〇円です。除染と堤防づくり、これがある以上、ゼネコンは少なくとも一〇年以上は安泰です。

「海と共に生きる」ということ

しかし、そういう中で、それで本当にいいのかという動きがあちこちで出てきています。先ほど映った気仙沼の地福寺さんの片山さんの周囲でも、気仙沼として「海と共に生きる」というスローガンを立てたのです。あれだけ海にやられながら、海と生きることはやめられない。ということで、そういうスローガンを立てて、コンクリートものの堤防は一切つくらないあり方を選択しようと、大勢の人が動き始めました。

いったいどうするのか。コンクリートの防潮堤をつくらないで、しかし、実績を持っている方がいるのです。『瓦礫を活かす「森の防波堤」が命を守る――植樹による復興・防災の緊急提言』という著書のある宮脇昭さんという方がいまして、海外でも多くの実績を残しています。今回、松島の被害が非常に少なかった。ああいう島を人工的にいくつもつくるのは不可能ですけれども、松林の間に常緑の照葉樹を植えようというんです。その土地にあった、タブとか、サカキとか、ツバキとか、そういう木を植えていこうという計画です。

幅一〇メートル以上ないと効き目も少ない。幅一〇メートル以上のものが、五年たつとかなりのボリュームになります。こういう森を、がれきを積んだ上につくりましょうということを、宮脇さんは実際にやっていらっしゃるのです。世界何十カ国で植林をしてきた方です。

それを、復興構想会議の議長であった五百旗頭真さんと、それから、その下の検討部会というところのトップであった飯尾潤さんのところに、宮脇先生は話に行ったそうです。「ぜひ、こういうやり方を取り上げてほしい。復興構想会議で扱ってほしい」というのを宮脇さんは提言したんです。ご著書で初めて知りました。そんな話は、復興構想会議ではまったく出てきませんでした。そして、国の方針として、嵩上げとか高台移転とか、防潮堤を何メートルにするかというような話になっていたように記憶しております。

いま、本当にいろいろな意味で、自然観というか、そういうものも問い直されているのだろうと思うのです。神道のベースには、自然の驚異というものがあります。それをなだめて祀るというのが古代神道の基本ですから、そこを崩すわけにはいかない。一五メートルの津波が来た土地で、一六メートルの防潮堤をつくったとて安心はできないわけですし、一六メートルの防潮堤で隔てた海が、恵みをくれる海であることは、もうないでしょう。泳ぐ場所でさえなくなる。

ですから、そうやって戦って敵に回すのか、それとも、いざとなれば逃げる覚悟で、もう少し自然と共生できるやり方を選んでいくのかです。そこが、すごく問われていると思うのですけれども、そういう議論が復興構想会議で煮詰められることはなかったのです。議論の話題にしてくれなかった部分があります。

ついでに申し上げますが、除染の方法も、国が定めたやり方でないと、お金が出てきません。ところが、国が定めたやり方というのは、基本的に、表土を削るというものです。お釈迦さまは、「鍬を入れることさえ殺生になるから、してはいけない」と言った方ですから、当然表土を削り取ることなど許すはずもない。そんなことを持ち出すまでもなく、農民にとっては、何年もつくってきた栄養分豊富な部分を捨てることですから、決定的なことですよね。

はたして、それがベストな方法だろうかという疑問が、農民の間には、起こってきています。しかし一方には、いろいろなやり方を試している人たちがいます。有機的なものを入れ込んでいって、実際に線量が下がることも起こっています。ただ、国が定めた方法じゃありませんから、補助金は出ないということになります。しかしそれでもやはり、国の指示するやり方ではやらないぞ、という人々が出てきています。それ自体は喜ばしいことではないかと思うのですが、国の方はなかなか苦々しく見ているようであります。

泥の中だからこそ蓮は咲く

いま、元の警戒区域の中にあるお寺というのは、だいたい六〇カ寺ありますけれども、そこを国は、立ち入りできないとされた場合は、「基本的に、買い上げて、国有化したい」と言っているのですが、お寺はそういうことができるだろうか。つまり、代替えの土地を用意してくれて、墓地もここでどうですかというものを用意してもらって、そして、檀家さんすべての了承を得て、「では、そっちに行きましょうか」ということにならないといけないわけですが、そんなことが可能でしょうか。

私は不可能だろうと思います。お寺、神社もそうだと思いますけれども、あのエリアの中にあるお寺や神社は、どうなっていくのだろうと、正直不安でいっぱいです。

いま現在も通いで、住職さん一家が毎週掃除に行くとか、中には、檀家さんに月二回集まってもらって掃除をしているところもあったりしますけれども、本尊さまも

そこに置いたままなのです。もちろん、仮設に持ってこられる本尊さまではないですし、アパートに置いてもしようがないということもあって。あの中の神社仏閣が、どうなっていくのかというのが非常に不安です。

そういう逆境といいますか、困難なことが多い福島県ではありますけれども、最近、私の頼りにしている経典は『維摩経』です。ヴィマラキールティという、維摩と言われる人が主人公ですけれども、非常にすごいことが書いてあるのです。「仏法を助けているのは魔王である」。六二の外道というものがあるらしいですけれども、それがあるからこそ仏法に立ち返ろうと思う。あるいは、自分が非常にひどいことをしてしまった。自分の中に煩悩があるので、もう一回でも、何回でも、仏道に立ち返らせてくれる。

だから、そういう意味では、煩悩も悪事もそれじたいが仏道へと促すキッカケになる。いまは放射能というものが魔王なのでしょうし、菩提心を起こさせてくれるありがたい放射能さまなのかなと思っております。泥の中でしか蓮は咲かないといいますけれども、いまの福島は本当にぐちゃぐちゃの泥の中ですので、蓮が咲く最良の環境にあるのかなと思っております。

最後になりますが、本当は天災などへの自然観だけでなくて、その中に動物も含めたいわけで、その意味で二〇キロ圏内は本当にいまたいへんです。ウシがまだ千頭以上います。基本的に、同意を得なければ殺してはいけないという状態のままですが、ホルスタインは自分だけで増えることはできませんけれども、和牛は自然交配ができるのです。新しく生まれている子どもたち、子ウシがいます。それは、耳標がありません。耳標がないウシに関しては殺してもいいという書面を、農林水産省はこの一月に出しました。果たして、それが、日本人の生き方なのだろうか。そう、強く思うんです。

イノシシもどんどん増えています。イノシシは、クマと棲み分けますので、ナメトコ山のクマがいる岩手県にも、秋田県にもイノシシはいないとされていたのです。ところが、いま、イノシシが両県に出ています。北上しているのです。

美しい蓮の咲き乱れる、野生の王国。福島はいま、すごいところになりつつありますけれども、とびきりの仏法が生まれるのではないかと期待しております。どうもありがとうございました。

鎌田　玄侑さん、ありがとうございました。

一年前はぐずぐず状態、一年後のいまはぐちゃぐちゃ、なし崩し、そういう状態になっている。そのことも含めて、後半の第二部のディスカッションで、さらに議論をして深めていきたいと思います。

では、時間も貴重なので、次に進めたいと思います。島薗進さんの「宗教者災害支援連絡会の活動一五カ月を振り返って」、よろしくお願いします。

基調報告2
宗教者災害支援連絡会の活動一五カ月を振り返って

島薗進

海にひびく祈り

みなさん、こんにちは。私の三月一一日以後の活動は、普段の研究教育活動を少し減らしまして、災害支援と原発問題に関わってまいりました。その二つは大いに関わり合っているのですが、少し焦点がずれております。

原発といっても、私が関わったのは放射能の影響問題ですけれども、これは科学者や専門家に大きな責任があると思います。政府、東電ももちろん責任があるのですが、それを、政府、東電も、そういう問題については科学者に相談するわけなのです。しかし、その科学者が適切な情報を提供していない、できない状況になってきたことが、いちばん大きいと思っていて、どうしてそうなっているのかということを考えています。

最近はそういうこともありまして、福島のほうへ行くことが多いわけなのですが、数回になります。ですので、そんなに詳しく土地の状況を知っているわけではないのです。

私が最初にこのことに関わろうと思ったことは、東京にいてもできることをまずやってみようということでありました。宗教界の方たちが居ても立ってもいられないということで、早くから救援活動に動かれました。しかし、それは、各団体、各個人は、それぞれにたいへん立派な活動をしていらっしゃるのですけれども、横につないでみたら、もう少しいろいろなことが分かってくるし、力ももう一つ充実してくるのではないだろうかということで、横の連携を作っていこうと考えました。つまり、助ける力があちこちで動きやすくしようというわけです。先ほど、ぐちゃぐちゃとか、ぐにゃぐにゃというのがありましたけれども、逆に言えば、マグマのようにいろいろ出てきている。これを少し横の連絡を付けて、方向付けができればいいなということで、いろいろな活動を始めてまいりました。

そもそも、今回は宗教に人心が向かっている気配がある、そういうことがまずあります。（スライドを見ながら）新聞でも、こういうふうに僧侶も、比較的若い僧侶が、これはたぶん向こうには、まだたくさん遺体が転がっている状況でしょう。四月一日です。そういうところで、読経している、こういう姿が新聞に報道されることが多かったです。新聞はだいたい宗教については、スキャンダル以外めったに報道しないのです。しかし、今回は、読者も追悼の気持ちを持っている、そういうときに、こういう光景を出したい気持ちがあったということですね。多くの人たちが悲しみ、痛みを分かち合いたいとい

島薗進氏

うときに、宗教は不可欠なのではないだろうか。このように法要に来ている、読経の声が聞こえる、そういうことが必要だと感じた。

そして、多くの方が、家へ帰れない、なかなかご仏壇を運ぶことはできない状況ですから、まずはお墓へ行ってなんとかしたいということです。（スライドを見ながら）そのお墓がこんな状態になっている。辛うじて、お骨だけでも取り出そうということで、こういうふうに、すぐお墓へ行ってなんとかしたいという気持ちです。日本人の中にある、それは、すぐにみんな理解できると思います。そういう中に、われわれの心の奥深いところにある宗教心というものが見えてくる。

脈々と流れる宮沢賢治の精神

（スライドを見ながら）これは、岩手県陸前高田の近所だと思いますが、神社です。これは階段の近くなので、別の神社です。ほとんど流されてしまった。この場合、立派な鳥居だけ、石の鳥居が建っているので残っているのですが、社殿はないのです。それでも、これは八月の初めでしたが、社殿はなくてもお参りができる体制をつくっている、こんな状況がありました。

支援に行く人、あるいは、地元の方が心を通い合わせながら支援活動をしている。その中で、宮沢賢治という人が多くの人の心に浮かんだ。これは岩手県の詩人であることも関わります。（スライドを見ながら）そして、これは、宮沢賢治が描いた絵に、後から色を付けたものですが、『雨ニモマケズ』は晩年の賢治が手帳に書いていたもので、決して発表するつもりはなかったのですが、こういうものがまことにに懐かしく感じられた。ここで心に残るのは、たとえば、「慾ハナク　決シテ瞋ラズ　イツモシヅカニワラッテヰル」、こういうふうな言葉が、何か腑に落ちる。「ジブンヲカンジョウニ入レズニ　ヨクミキキシワカリ　ソシテワスレズ」です。

そして、ここに「東ニ病気ノコドモアレバ　行ッテ看病シテヤリ　西ニツカレタ母アレバ　行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ」と、「行ッテ」というのが大事なのだと気が付いた方たちがいるのです。何か手伝いに行くのですが、しかし、その前にまず行ってと。何もできることがないのに、行ってどうするのだということだけれども、しかし、「行ッテ」というのが大事なのだと感じられたのです。

いまも玄侑さんのお話の中にも、そういうニュアンスがあったと思います。福島へ行くと、やはり「来てくれて、それだけでいい」と言っていただけると、われわれは少しほっとする。福島の土地そのものが汚れているので行きたくないとか、ある方に聞いたところでは、福島の方はお土産を出すと、そのお土産はどこかで捨てられてしまうのではないかという気持ちがしてしまうという。そういうときに、行って、そこで何かをする、そういう意味がこの詩の中にあったのだと、あらためて気が付くことがありました。

ちなみに、先ほど玄侑さんが言った『なめとこ山の熊』、イノシシではなく岩手県にはナメトコの山のクマがいるというのは、宮沢賢治の作品の名前です。そこには、猟師が出てきて、クマを殺すのですが、実は、心の中ではクマと友達である。そして、その猟師自身も商人にいじめられているという話でありました。

こういう賢治の姿が懐かしく思われる。被災地の方もそうでしょうし、あるいは、支援活動をしている方もそうでしょう。

実は『雨ニモマケズ』には「デクノボー」と出てくるのです。「ミンナニデクノボートヨバレ　ホメラレモセズ　クニモサレズ」と。デクノボーというのは、『法華経』に出てくる常不軽菩薩という人を、賢治なりに文芸化したものなのです。そう言われております。

常不軽菩薩というのは、どんな人にも仏性があるので、どんな人に対しても拝むのです。なので、何も軽んじない、常に軽んじない菩薩という意味です。しかし、サンスクリットでは、元の意味は、常に軽んじられるという意味だそうです。そんな、誰でも拝むと気色悪いといって石を投げられる。ですので、いつも、逆に敵意を浴びせられる、そういう存在でもあります。

そうまでして、彼は何をしようとしているのかというと、増上慢という、慢というものを下げる、そこから解脱する。そういうことを狙っている。また、それは辱めを受ける、それを忍ぶ、「忍辱（にんにく）」という言葉が仏教にはあるのですが、そういうものを仏教の核心と考えている。

これは、菩薩行というものの中に、そういうことがある。菩薩行とは、自分自身が仏になるための修行をするのに先立って、困っている人のために何かをする、そういうことであります。

仏教のいろいろな修行を表す言葉の中では、仏教というと戒定慧の三学を営むのですが、つい定とか、慧を中心に考えがちです。定は、瞑想修行であり、心を静める非常に大事なことであります。慧は仏の知恵を学ぶ、実際にはお経を学んだりすることです。

しかし、戒というものがあります。身を慎む、そちらの要素というものが、賢治にとっては非常に重要だった。賢治はベジタリアンでもありましたが、生きものを傷付けない。生きものを傷付けることは、われわれがなんらかのかたちでそうしなくては生きていけないのですけれ

ども、まずは人間自身を傷付けない。そう思います。

三学と並んで六波羅蜜という実践目標があります。大乗仏教の修行方法ですが、布施、持戒、忍辱、精進、そのあとに禅定と知恵があります。前の四つは、慢とか忍辱とかいうことに関わることであろうかと思います。

現代社会にマッチした支援活動

天理教の方たちもたいへん熱心に活動しております。天理教では、八つのほこりを払うというのです。私は、いわゆる新宗教、明治維新前ぐらいから出てきた宗教は、仏教系にしろ、神道系にしろ、新宗教と言えると思っております。そして、伝統的な仏教とそんなに違わないのだと思っているわけです。

その新宗教の基本的な実践の中には、「心なおし」というものがある。心を清め、心を改めていく。その心を改めていくかなり重要な部分は、慢に関わっており、そして、人に対して優しく関わる、共に生きていく気持ちを起こすことではないかと思います。

ですので、そういう新宗教の理念は、どちらかというと、明治から戦後にかけては、仲間づくりを熱心にやるという方向に働いた。つまり、信仰仲間をつくって、お互いに励まし合って、元気付けていく。非常に孤立して弱っている人たちが実際、仲間に入ることで元気になっていく。そういう方向で働いてきたと思います。

しかし、一九七〇年代以降というのは、そういう仲間づくりということが、ややうまく機能しない、あるいは、むなしく感じられる。そして、外との壁をつくるようなことに見えてくる。そうであったと思います。そういう中で、仲間の外に、むしろ開かれた活動の中で心なおしというものの可能性が見えてくる。そうあったのではないかと思います。

（スライドを見ながら）これは、真如苑です。真如苑という団体は、そういう意味では、そういう流れを非常によく表している。非常に熱心に瞑想修行をやります。個人主義的でもあるのだけれども、しかし、同時に、ＳｅＲＶ（サーブ）という団体を持っていて、たいへん熱心に支援活動をしています。

そして、これは、阪神・淡路大震災の影響が大きいのです。多くの新宗教は、これまでも災害支援をたいへん熱心にやってきたのですが、それは、長い伝統を持っているだけに、新しい時代のやり方には、やや距離がある場合がある。真如苑の場合は、少し後発でありますが、阪神・淡路大震災で身に付けたような、現代社会になかなかマッチした活動が行われていると思います。

ですので、この東日本大震災で行われている宗教界の支援活動というのは、災害の支援という面で、伝統を継承していると同時に、一九七〇年代以降のより個人主義化してくる、そして、固定的な集団をつくるよりは、ネットワーク的な関係の中でお互いを力付けていくというふうな、そういうタイプの性格を持っているものではないかなと思います。

たとえば、グリーフケアです。（スライドを見ながら）このパンフレットは、上智大学でつくったものですが、こういう言葉は阪神・淡路大震災のときにはまだなかったのではないですかね。そのころから出てきた。ということは、亡くなって、以前なら、お通夜があり、法事があり、親族集団の中でお互いに悲しみを分かち合っていた。そういうものがばらけてきてしまって、悲しみが晴れない、共に晴らす仲間が見つけられない。そのために、いろいろな企てをしなければならない。グリーフケアというのは、自分のような悲しみを持っている人たちが寄り集まるということです。似たような悲しみを持った人たちが寄り集まる、そういう場を探している人たちがたくさんいる。そのようなことが背景にあった。

宗教者が連携し始めた

一方、孤立して助けの道を非常に見つけにくい人たちが増えている。仏教会では、若い人を中心に、そういう人たちに手を差し伸べることが行われるようになってきていた。

『ルポ仏教、貧困・自殺に挑む』（岩波書店、二〇一二年）は、見事にそういうものを捉えた本だと思います。磯村健太郎さんの本で、テーマは自殺や、貧困です。自殺をしたいと思っている人が、といっても、自殺をしたいのか、なんとかこの世で生きる道を見いだしていきたいのか、そういう人に、彼らの方もどこへ助けを求めていいか分からない、外からも彼らにどう手を差し伸べればいいか分からない。しかし、お坊さんたちがそういう人たちと連絡を取ることで、立ち直りのきっかけを見いだす、そういう活動が増えてきているということです。

あるいは、貧困です。釜ケ崎に行きますと、といっても、私はこういう活動をしている方に連れていっていただいて、一泊、釜ケ崎の最高級ホテルに泊まったというだけであります。最高級ホテルというのは、一泊二千円代でありますけれども。それでも、少し分かったことは、韓国からのキリスト教系の団体ががんがんやっている。そして、食べもののない人が礼拝に参加すると、パンをあげている。そういうタイプの支援をしている。

他方、静かに待っている宗教者もいる。本田哲郎神父さんという方がおられますが、二畳か、三畳の部屋にお一人で住んで、教会の二階で散髪をしている。礼拝に決して「来い」とは言わない。しかし、そういうかたちで、そこにいる、さっきの「行って」です。そして、いつの間にか、路上生活者たちと友達になっているというか、そんなタイプの支援活動です。こういうことが、この一〇年、二〇年人知れず進んでいた。

こちらは寺というか、お寺自身も、普段のそういう地域社会の安定した檀家さんとのつながりというものが、お寺の活動の基礎でありますけれども、都市などでは、高橋卓志住職の神宮寺は必ずしも都市地域ではないですが、もっとさまざまな人に手を差し伸ばす、必ずしも、葬式、法事中心の活動にとどまらない、新しい活動をする、

そういうお寺が増えてきているということがあります。

これは、磯村さんの本に出ているのですが、この高橋卓志さんたちのことは、上田紀行さんが『がんばれ仏教！』（ＮＨＫブックス、二〇〇四年）という本に書いたりしまして、このお寺は法要にも千人集まるとか、すごいお寺なのですが。もともと豊かな資源があり、たいへん有能なお坊さんなので、そういうことができる。どこでもできることではないのではないかということですが、こちらの本には、もうごく普通の僧侶の人たちが当たり前の活動として、決して気負いもなく、そういう活動をしていることがよく書かれております。

これは宮沢賢治の『農民芸術概論綱要』の言葉でありますけれども、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」と。こういう言葉は、仏教の経典の中にはごく普通にあるものではないかと思います。それをこんなふうに、宮沢賢治は言い換えているのです。こういうふうな気持ちで救援活動を、ごく当たり前のこととしてやっている。そういう方がたくさん増えている。それは宗教界でそうだということではなくて、一般のボランティアをなさっている方の精神と、その宗教的な背景、つまり日本の文化の中へいつの間にか入り込んでいる宗教的精神には通じるものがあるのだと、私は感じております。

しかし、そういうものが少なくとも日本では見えにくかった。みんなが無宗教だと思っていて、宗教者が来ると怖いという感じで、布教活動はやめてくださいと。避難所などにも、宗教団体の名前を名乗っていくと、まず、ノーということになってしまう。しかし、避難所にいる方の中にはたくさん、ごくしばらく前に大事な人を失って、まともに祈る助けを必要としているとか、いろいろな困難を抱えている人がいるわけです。宗教者が力になれないはずはないのです。しかし、そういうニーズがあっても、少なくとも、行政を通したら受け入れてもらえない。遺体を処理するときにだって、僧侶が入ってくることを拒んだ行政組織もあったわけです。

そういう中で、宗教者が横に連携することが始まった。仙台で、まずは火葬場で、宗教を超えて連携しながら待機しているところから、心の相談室というものが始まりました。これについては後で鈴木さんが説明されると思うので、あまり詳しくは述べません。だんだん拡充してきておりまして、宗教、宗派によらない活動で、それぞれの宗教の立場はあります。もちろん、深く人々を導こうと思えば、各団体へ入っていくこともありうるわけですが、取りあえず、そこまで行く前の段階で、いまニーズを抱えている方たちの願いに応じたことをする。そのためには、宗教、宗派を超えて連携する必要がある。こういう活動です。

最初は弔いから始まりまして、だんだん心のケアのようなことになっていった。悲嘆ケアというのは、グリーフケアですが、「カフェ・デ・モンク」というものが重要な活動で、要するに、お菓子、お茶を持っていって、被災者の方とお話をする。傾聴ボランティアのようなことも進めておられます。これは、もともと医療の関係者と緊密に協力しているわけです。つまり、最期のみとりを熱心に、この仙台地域でなさっていた岡部（健）先生という医師の方が、心の相談室の室長でもあります。

つまり、これは災害時の心の相談室であると同時に、平時にも、死のみとりに関わる協力組織になっていく可能性があるというのです。そのために、東北大学でも、実践宗教学という講座ができたという状況です。これは、鈴木先生からご説明があるかもしれません。

宗教者災害支援連絡会の試み

私どもは東京で、いわば、それに対応する活動と始めた。それが宗教者災害支援連絡会で、私がその代表です。

こういうものをつくりまして、いろいろな宗教団体がやっている支援の情報を交換する。それで、各集団や個々人がより充実した活動をしていくための力になろうということです。この理念がここに出ております。重要なことは、困っている方の立場で、それに応じた活動をする、そのために何ができるかを協力して考えていく。

四月一日に立ち上げまして、毎回、だいたい情報交換会というものをやりますと、五〇人から七〇人ぐらいの方が来てくださる。東北などからも、宗教者の方に来ていただいて話をするということです。ほかにもいろいろな集いをやっております。（スライドを見ながら）これは、情報交換会を一回から九回やりましたという話です。毎回、このような支援活動をやっている宗教者の方のお話を聞きながら、お互いの意見を出し合う、情報を交換する。

そして、いろいろなイベントもやっております。これは、国際宗教研究所というところと連携して行ったシンポジウムです。神道の方、キリスト教の方、創価学会の方、そして、先ほどのサンガ岩手、大槌町で支援活動をしている吉田（律子）さんという方、こういう方の話を聞きながら討論をする。

これは、今年四月一四日に東大の安田講堂で行われたもので、ハンガリーの大使館も協力してくれまして、ハンガリーの音楽家、東京藝術大学のアンサンブルに協力していただき、埼玉県加須市に避難している双葉町の方たちをお招きしました。バングラデシュの方たちがカレーをつくってくださり、東大の構内を案内して、音楽会をやり、そして、シンポジウムをやった。こんな活動もいたしました。イスラムの方も、かなり熱心に活動してくださっていまして、そういう状況についてもうかがいました。

これは、私どもの宗援連（宗教者災害支援連絡会）の事務をしてくれている浄土宗のお坊さんです。展示をしまして、どんな団体が、どういうふうに支援をしているかということを紹介し合った。

これは、東京藝術大学のアンサンブルです。みんなボランティアでしてくださったことです。

これは、そういう中から出てきている、先ほどの動き

ですが、日本の病院には、何でチャプレンがいないのか。人が死ぬときには祈りを必要とするでしょう。あるいは、何か話をしたい、死というものについて、自分一人で考えているものを超えていきたいという気持ちがあると思います。私のおじも、亡くなる前に私を呼び出しました。たぶん、私が宗教学をやっていることが大きく影響していると思います。何かそういう気持ちを多くの方が持たれますよね。遺族の方も、家族の方も、何か相談したい気持ちがあるのではないかと思います。欧米ならば、当然そこにチャプレン、施設付きの牧師、神父さんがいたりするわけです。そういう役割を日本でも育てることができるのではないか。

刑務所には、教誨師というものがあります。刑務所から出てきた方には、保護司がつきます。そういうことでは、宗教者は大いに活躍してきたのです。では、何で刑務所だけなのか、非常におかしな状況です。精神科の先生方と話すと、精神科の方たちがその代わりをするようになっているところもあるわけですが、それは、本来は彼らの任務ではないわけです。これは新しい動きです。

宗教の枠を超えた協働の存在として

やはり阪神・淡路大震災から、今回の震災を通じて、大きく変わってきた。これは、公共空間の中に宗教が現れてくる。その現れ方は、特定宗教団体として現れてくるのではなくて、宗教団体の枠を超えた協働の存在として役割を果たすようになるということです。

ごく最近、こういうシンポジウムが大正大学で行われました。臨床心理の先生も来ていただいて、どういうふうに、こういう役割が展開していくかを考えているということです。

いま、われわれが力を入れているのは、保養プログラムです。全国の方たちが、福島の子どもたちに、少しでも元気な時を過ごせるように、たとえ放射能を浴びていても、元気に過ごせば、免疫力が回復するということで非常に大事です。ウクライナやベラルーシ、つまりチェルノブイリの人たちはいまでもやっています。二〇年以上を経てです。そういうことで、これをぜひ頑張っていきたい。これは、真如苑が企画しているものです。こんなプログラムです。

私どもは、曹洞宗の伊達市にある成林寺さん、こちらは曹洞宗の青年会の現地対策本部ですけれども、ここと組んで、いろいろ活動させていただいております。若い方ばかり、僧侶の方が、ある程度、放射線の量があるところですけれども、ここを拠点として、岩手、宮城、福島の支援活動をしているわけです。私どもは、宗援連としても少し経験しようということで、これは相馬郡新地町です。仮設住宅の集会場でお話を聞く、天理教の方たちと宗援連のメンバーが何人か来てやらせていただいた。

これは、二本松の浪江町の方たちが避難している場所です。ここには玉三郎も来たそうです。玉三郎と比べると、ずいぶん私どもは人気が少ないかなと思うのですが、玉三郎は来たけれども、「握手はノーだ」と言ったということで、実は評判がたいへん悪かったです。

福島市のつるりん和尚は常円寺さん、この方は除染活動をたいへん熱心にやっていらっしゃいます。自分のお寺の境内を置き場に解放してやっておられる方です。学校に行く通学路には、かなり放射線量が高いところがあります。まだ二〇マイクロシーベルトも出てしまうところがあるのです。そういうところを若い僧侶の方たちと、私どもが一緒にやらせていただいたわけです。

最後です。これも、阪神・淡路大震災からだんだん出てきたものですが、いま、学生もする足湯隊というものがあります。足湯といっても、温泉ではなくて、バケツに湯を張ってマッサージをする。そうすると、その間にだんだんお話をするようになる。一種の傾聴のための方便でもあるわけですが、高野山の足湯隊の方たちがたいへん熱心にしています。私の思うところでは、これは、被災地の方たちもたしかに慰むと思うのですが、実は、支援する側の人たちが修行しているというニュアンスが非常に強いと思います。学生もやるのです。そして、学生たちも心を開く、若い僧侶たちもこういうことを通して何か大きなものを学んでいると思います。

先ほど本田哲郎神父の話をしました。彼は六本木の教会から釜ケ崎へ行きまして、最初に釜ケ崎の方たちに毛布を配って歩いたら、おっちゃんから、「おお、よく来てくれたな」と声を掛けられたと、そのときにはっと気が付いた。「自分が相手のことを思いやるというよりも、よほどそのおっちゃんの方が神父のことを思いやってくれている、そういうことに気が付いた」と言っております。そんなふうなことがあるのだと思うのです。つまり、支援するということは、こちらから力を出すのだけれども、向こうから力をいただいている、そういうようなことがある。

これは、宮沢賢治の『マグノリアの木』という短編です。マグノリアというのはモクレンです。これは、かなり深い仏教哲学的な意味のあるものですが。天使と諒安というお坊さんが出会う。暗い暗い気持ちになっていた諒安の頭上の空がぱっと晴れて、天使が下りてきて、こういう歌を歌う、そういう場面です。そして、こういう会話がある。

「あなたですか、さっきから霧の中やらでお歌いになった方は」「ええ、私です。又あなたです。なぜなら私というものも又あなたが感じているのですから」「そうです、ありがとう、私です、又あなたです」。

よく分からないような、まさに禅問答のような話ですけれども。しかし、ここには何か支援活動などの大きな意味が現れる、見えるのではないか。自他不二という言葉が仏教でありますが、そういうことを通じて、自分と他者との間が、お互いが異なるままで近くなっている、そういう場面が生じる。そういうことが経験されているのではないだろうか。そういうことを思います。

このへんで終わりにしたいと思います。

鎌田　どうもありがとうございました。ここで休憩をして、それから稲場さんにお話しいただきたいと思います。そして、第二部の頭で、みなさんと一緒に追悼の黙禱をささげたいと思います。では、よろしくお願いします。

コメント

稲場圭信

福島にいる方々の苦悩

みなさん、こんにちは。大阪大学の稲場と申します。私はスライドを使わないので、このままで話をさせていただきたいと思います。午後二時四六分、後半の始まりに追悼がありますので、時間に気を付けながらお話ししたいと思います。

いま、玄侑さん、そして島薗先生のお話、発題がありまして、これを一〇分以内にまとめるということですけれども、とてもまとめられないので、どうしたらいいのかと思いましたが。まず、少し振り返りたいと思います。

玄侑氏のお話から、福島にいる方々の苦悩というものが非常に強く伝わってきました。私も、先月末に宗援連の世話人の一人として、福島に行かせていただき、また、岩手、宮城にも何度か回らせていただきました。やはり、宮城、岩手に比べて、福島の現状というのは、先ほどシンポジウムの前にも、玄侑さんから聞きましたけれども、「一年たっても変わらない」「しばらく前はぐずぐずしている感じで、いまはぐちゃぐちゃ、なし崩し的」と玄侑氏が表現される現状は厳しいものと感じます。

私も回らせていただいて岩手、宮城もまだまだ本当に大変な状況が続いていると思いますが、ただ、そういった中にあって、少し先が見えるというか、何を取り組んでいけばよいか、復興とはいきませんけれども、復興の足掛かりになるところがすこしずつ見える中で、福島は、先が何も見えない中、いろいろなことがぐちゃぐちゃになっているというお話をいただきました。人は先が見えれば、大変な中にも何か希望を見いだせる。しかし、福島はなかなか先が見えない。私も除染に一度参加させていただきましたけれども、除染の作業によって、ある程度の放射線量が低減された。でも、その表面を削った土を持っていく場所が決まっていないということです。

先日は、伊達市に行かせていただきました。国の予算の二四〇億円で除染を八月から本格的にするということになっているようですが、伊達市でお話を聞くと、「置く場所が決まっていない。たぶん、八月になってもできないだろう」と。そういう状況にあるようです。

先ほど、玄侑さんから『維摩経』の中に一つ、仏法を助けてくれている魔王という話がありました。困難な中、泥の中にこそ、蓮の花は咲く。また、野生の王国という言葉もありました。いろいろな動物も危険な状況の中で生きている。そういった中から、新たな仏法というか、道が生まれるのではないかという話でした。

島薗先生からは、これまで個別に宗教者はいろいろな活動をしてきた、今回はそれを横につなぐことの重要性があるのではないかということから、宗援連の活動の始まりがあったということでした。

日本人の中にある無自覚の宗教性

そして、宮沢賢治の詩も出てきました。賢治の詩の中に、「世界全体が幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」といったものがありました。これは宗教界だけではなく、一般の人、ボランティアの人の精神にもつながっているのではないか。

私は、震災以降、昨年の一二月に『利他主義と宗教』という本を出しました。その中で、「無自覚の宗教性」ということを言いました。これは、日本人の中では、七割以上が自分を無宗教だと思っている。しかし、その中にあって、先祖からのいただいた命、また、神仏のご加護によって生かされているとか、おかげさまの念というものは、多くの日本人にまだ根強く残っている、共有されるものではないか。そういった中から、人と人とのつながりの中に、困っている人に対して思いを寄せる、ボランティアというものに、またつながっているのではないかと考えています。

そして、先ほど、宗援連の動きから、また、死についてという話、心のケア、そして、公共空間の中に宗教が現れていること。保養プログラムとか、除染だけではなく、足湯隊とか、いろいろな話がありました。これを通して感じたのが、仏教の中にある四摂法です。布施、愛語、利行、同時。支援での取り組みというのは、一方的に自分が支援をしているという立場よりも、先ほど、ボランティアに入っている人たちが何か逆に学ばせてもらっている、気が付くことがあるとか、そういった同じ目線、あるいは、下から、足湯などはまさに、下からボランティアに関わるようなかたちですけれども、学ばせていただく、苦に寄り添うあり方もあると感じました。

こういったことを通して考えた中に、やはり、私は持続可能な社会というものを、いま多くの人たちが、日本人だけではないですけれども、考えるときではないかと思います。私はいま四二歳ですので、日本で原発が進められた歴史と同じ歩みを歩んできたわけです。その中で科学の粋を集めた原発が一つ夢のようなものと説かれてきた。そこには、自然はすべて人間がコントロールできる、効率の重視、また世界観としては個人、そして、市場経済が重要視されていく価値観がありました。いま、それが根本的に問われているのではないか。

苦に寄り添う

そういった中で、宗教というものをどう考えるかということです。私自身は、いまいろいろな宗教を見る中に、やはり救いがなければ宗教ではないのではないか。これは、宗教社会学では、救済論という、英語でsoteriologyという領域です。

多くの宗教というか、すべての宗教には救いが説かれている。でも、それは、それぞれの宗教によって、救いの意味が異なっている。場合によっては、非常に身近なところと言いましょうか、病気から救われたい、ある宗教によって救われる。経済苦から逃れたい、あるいは、人間関係、こういったものを「貧病争」と呼んできましたけれども、そういったところからの救いを求める。あるいは、心の面での安らぎを求めるとか、さまざまな救いを求めて宗教に道を見いだそうとする。もちろん、究極的な魂の救済も説かれる。

そして、何か災いが起きたときには、人はどうして自分にこんなことが起きるのか。どうして原発が、福島であのような事故になってしまったのか。女川ではなく、あるいは、いま大飯原発が再稼働していますけれども、そこではなく、自分たちのここで起きてしまったのか。どうして自分がこの地を去らなければならないのか。どうして、自分だけが生き残って、手を引いて一緒に逃げていた子どもが流されたのか。妻が、旦那が流されたのか。そういうふうに生き残った人は、「どうして自分に?」という思いを持つわけです。

それに対して宗教はさまざまに、その災いの理由も明らかにしてきた。これは、災因論という災いの元を説く教えがあります。

稲場圭信氏

ただ、一方で、いま震災以後、宗教者、宗教界が、この災禍がどうして起きたのかということに、あまり触れないという状況だと思います。一方で、宗教がそういうことに言及しなくていいのかという声もあります。

私は被災地を回らせていただいて、仮設住宅、いろいろなところで被災者の声も聞くうちに、やはり、原因が分かったところで、そこに救いはない。たとえば、理屈でいえば、地震がここに起きて、津波が何分後に来る。そして、そういった中でこうなってしまった。科学的に理路整然と言ったところで、どうして自分の家族が命を落としたのか。その説明を淡々としてもらっても、そこに救いはないわけです。

あるいは、宗教的な因果応報とか、そういったことを説かれても、その人の心が安らぐことはない。こういった中で、いま、宗教者が現地で取り組みをされているのは、徹底して苦に寄り添うということです。

人によっては、自分の生まれた故郷を離れて、人によっては仮設住宅で。先ほど何マイクロシーベルトであれば大丈夫だとか、駄目だとか、これは個人に任されているという話がありました。これが価値観の問題にもなっている。線量が高くても、「自分は大丈夫だ」と言う人もいれば、ほんのわずかでも「絶対に嫌だ」という人もいる。

そういった中で、退く人、去る人も、さまざまな苦悩を持ちながら、そこを去る。残る人も、重いものを背負っている。そういったところに、ただ一緒にいてくれる人、たとえば、先ほどの「カフェ・デ・モンク」のような、お茶を一緒に飲みながらとか、あるいは、身の回りのことを一緒にしてくれるとか、そういう寄り添いの支援があって、そこに、なんらかの救いへの道が何かもたらされているのかもしれない。

宗教というものには、救いがあるものだ、それが宗教である、また、災いについて、さまざまな理由付けをするのも宗教であると捉えられてきた部分もあると思いますけれども、いま、そういったものを越えて、苦に寄り添っていく宗教者が多数いらっしゃいます。

これは、実は震災で急に出てきたものではなく、日本社会にあっても、先ほど一九七〇年代以降から、人がつながるというよりは、個別の生きものとして人間が社会の中に生きていかざるを得ないような、これは、移動性の高い社会になって、生まれた故郷で一生を過ごすという社会ではなくなった中で、社会構造的には、人は一人で生きていくというほうにどんどん進んでいく。そういった中で、やはり死というもの、生きるということ、苦というものを誰かと共有したい。そういったことが、われわれの中にあると思うのです。

いま、さまざまな自助グループ、セルフヘルプグループがあって、苦というものを体験している人が寄り添いあって、そこに救いを求めるようなかたちもあれば、宗教者の方々が支援活動をしている、そういったいまの世の中です。

ちょっとまとまりませんが、あと一分ぐらいで終わりにします。いま、時代の転換期とか言われています。これは、阪神・淡路大震災のときも言われました。しかし、その後の一七年、一八年、私たちの生きる社会は、支え合い、ボランティア社会になるどころか、人をもののように「使える／使えない」で切り捨てていく、自己責任、新自由主義社会になってしまった。いま、原発問題があり、未曽有の大災害の中で、人が人として生きていくことはどういうことなのかが問われている。

こういった中で、宗教というものに対して、人々が目を向けていくという指摘もあります。二〇年、三〇年たったときに、日本社会がどうなっているか、そのときに、「あのときに、お父さんたち、お母さんたちはどういうふうにしてその時代を生きたの。そのときの社会問題を、そして、人々の苦というものをどう受けて、そのときに生きていたのか」と問われたときに、恥ずかしくない大人でありたいという思いを私も持っています。いま、大学

で教えていて、若い学生も、そういった思いを持っているので、何か暗い世の中ではありますけれども、そこに希望もあると思っています。

時間になりましたので、これぐらいで終わります。ありがとうございました。

鎌田　とても時間が短いのですが、ここで四分間休憩させていただきます。第二部が始まって、一〇分間の休憩をもう一度取ります。一四時四五分にはお戻りください。一緒に黙禱をささげたいと思います。

第二部

鎌田　今、雄勝法印神楽衆の指導者の方々三人に来ていただきました。後半のシンポジウムの中で、伊藤博夫会長さんにご挨拶していただきたいと思います。

では、時間がまいりましたので、みなさまと共に一分間の祈りをささげたいと思います。ご起立いただけるでしょうか。部屋を暗くしてもらって、心を静かに東日本大震災で亡くなった方々のご冥福と、傷ついた方々の心の苦しみに思いをいたしながら追悼いたします。

（祈り）

追悼の祈りを終わります。ご着席ください。

これから第二部に入るのですが、その前に、いま伊藤博夫会長さんのご紹介をさせていただきました。実は伊藤会長さんは、私たちが出会ったころは副会長さんでおいでした。会長の高橋仁夫さんが津波で流されて行方不明という状態でした。その高橋仁夫会長さんは雄勝法印神楽の生き字引と言われるぐらいにたくさんのことを知っていらして、献身的に指導に当たられていました。昨年の一〇月一〇日まで、ご家族の方々は葬式を出すことができない、気持ちの整理ができない、まだ遺体が見つかっていないのでそういう気持ちになれないという心の状態でした。そして、一〇月一一日に葬儀が執り行われました。そういう中で伊藤博夫さんが次の会長に交代され、雄勝法印神楽が見事に復活しつつあります。そしてそのことが雄勝地域の復興活動の中で大切な意味合いを持っています。

では、ここから後半に入ります。第二部では、最初に國學院大學の黒崎浩行さんに「被災地の神社と復興の過程」の提題をいただきます。続けて、一条真也さんに「東日本大震災とグリーフケアについて」提題をいただきます。そして、東北大学教授の鈴木岩弓さんと高野山大学准教授の井上ウィマラさんにコメントをいただいて、討議に移ります。では、黒崎さん、お願いします。

報告1
被災地の神社と復興の過程

黒崎浩行

はじめに

みなさん、よろしくお願いします。

今日、たくさんの方にお集まりいただきまして、私がこのような場でお話しさせていただくなんて、たいへん申し訳ないなという気持ちがございます。といいますのも、タイトルの「被災地の神社と復興の過程」ということでお話をいたしますけれども、私自身は東京の國學院大學という神道系の大学におりまして、もちろん、それほど大きな被災をしているわけではございません。そういう当事者ではない立場から、どのようなことが言えるのかというのはたいへん悩ましいところでありました。

ですが、一応、二つの脈絡から、この東日本大震災と神社、あるいは宗教者の関わりについて、何かしら関わらせていただく脈絡といったものがありましたので、まず、そのことを先に触れさせていただいて、それから、ご報告にまいりたいと思います。

一つは、先ほど稲場圭信さんがコメントされましたけれども、彼に誘われて「宗教者災害救援ネットワーク」というフェイスブック上のページなのですけれども、そこに、さまざまな宗教者の災害支援活動の情報を流していく、共有していくという活動に誘われました。これは、被災地にはいないのだけれども、宗教研究者として何かしら、この宗教者の支援活動をみなさんに知っていただく、あるいは、その間の横の連携を図るための一つのきっかけづくりになるのではないかということで、その活動に参加させていただいたことが一つの脈絡としてありました。

もう一つは、私は國學院大學の神道文化学部というところに所属しております。國學院大學は、東京にあります神道系の大学です。日本には、もう一つ、伊勢にあります皇學館大学という神道系の大学があります。その二つのうちの一つで、全国の神職を養成しています。神主さんを養成するカリキュラムをやっている大学です。

國學院大學には、およそ一万一千人の学生がいるのですけれども、そのうちの一〇九人の学生が、津波、あるいは原発事故の被災地に実家があって被災しました。神道文化学部でも一一人の学生が実家を被災し、大学としては、その学生たちの支援に、学費減免等のサポートを行ったわけです。

私は「神社ネットワーク論」という科目を神道文化学部で持っています。現代のさまざまな課題を持っている社会と神社が、その状況に巻き込まれながらも、どういう取り組みをしているのか、具体的な事例を紹介しながら学んでいく授業を一〇年間続けておりました。

けれども、この東日本大震災に遭って、「その被災地の神社、あるいは全国の神社界全体が、どのような支援の取り組みをしているのか、また、そこからどういうこ

とが学べるのか」について、ぜひとも、この機会に学ばせていただきたい。もちろん、「そこに、どのようなかたちで支援をさせていただけるか」ということも含みながら、学ばせていただきたいということがありました。

それで、昨年の五月ぐらいに、そういった一つの研究プロジェクトを、学部のほかの二人の教員と共に、共同研究というかたちで立ち上げて、現地調査、現地でお話をうかがってまいりました。今回、お話し申し上げますのは、その二つの脈絡の中で、いろいろ学ばせていただいたことをお話しすることになります。

先ほどの玄侑宗久さんのお話の中で「乖離」がございました。福島において、出ていくのか、あるいは、とどまるのかという状況の中での、一人の精神の中での乖離もあるでしょうし、コミュニティの中での乖離もあるかと思います。そういった問題。それから、自然との関係の中で「敵対と共生」というキーワードもあったかと思います。そういったことにも、今回お話しすることは関係があるのではないかと、いまになって思いますけれども、現時点では、まだ整理がつかない状況でお話しすることを、最初にお断りさせていただきたいと思います。

また、プリントの「はじめに」のところに、二つのアプローチを書いておきました。これは、一つは、私も現地にお話をうかがいに足を運ぶことを何度かさせていただきましたけれども、「深いところまで入って、その方たちが、どのように被災者の方たちの心の支えになっていったのかを、本当に聞けたのか」というと、何か、やっぱり心もとないところがあります。

そういったことに関して、ご関心のある方は、実は今日、会場にもいらっしゃるのですけれども、川村一代さんという方が書かれた『光に向かって』という本が今年の四月の末に出版されております。そちらを、ぜひお読みいただきたいと思います。

神職の方、あるいは宮司夫人などが、被災地で避難されてきた方やさまざまな方と心を通わせながら支援を行っている姿が描かれておりますので、そういったところもぜひ、ご関心のある方は、お読みいただければと思います。私は、まだまだ、そこまで入り込めていなかったような気がしております。

また、もう一方で違うアプローチとして、「では、社会の側が、どれだけ神社や祭りというものを、この災害に遭って、支えとして必要としているのか」を、どちらかというとクールに見つめ直すという立場もあるかと思います。その立場も重要なことだと思うんですけれども、それをしっかりと客観的に検証するところまで、まだ、この一年の中では私自身はいたっておりませんでした。

そういったことも踏まえながら、若干、中途半端であり、取りあえずではありますけれども、現地を歩かせていただき、また、いろいろな資料、データ等も参照させていただきながら、今日の話をさせていただきます。

避難所・心のよりどころとしての神社

まず、神社本庁では震災対策室というものを設けて、各地の神社の被災状況を調査し、神社それぞれに対して義援金を届ける。あるいは、さまざまな神社本庁の定めている規則、あるいは法的な問題などへの解決の糸口を模索している。そういう状況があります。

こちらは、昨年の一二月に月刊『若木』という神職向けに発行されている冊子、定期刊行物に載せられているものですけれども、この東日本大震災の被災地において、どのような数、規模で神社の被災があったのかを示しているものです。お手元のプリントの一頁目のところに、被災三県と呼ばれる岩手県、宮城県、福島県の状況を数字で抜き出しておきました。

福島県のところの右側の欄に※がありまして、そこには「本殿・弊殿・拝殿の全壊・半壊」の横に「二四三」と数字があります。これは、先ほど玄侑宗久さんも触れられましたけれども、警戒区域にあって実態が確認できない神社の数が二四三社あったのです。今年の四月に警戒区域が狭まりまして、立ち入りができるようになった地域がありますので、この二四三は、もう少し減ったとは思いますけれども、昨年七月段階での数値としては、二四三社が、どのような状況にあるのか、立ち入ることもできないので分からないという状況であったということです。

『神社新報』という毎週一回発行されている神社界の新聞がありますけれども、そちらでは、昨年の三月二一日号から八月一五日号にかけて、個々の神社が、どのような被災状況にあったのかということを、びっしりと掲載しておりました。ただ、その中で分からなかったこととして、特に沿岸部の神社で、津波から避難してこられた方を受け入れて一時的な避難所となったこと、あるいは、炊き出しが、その神社の境内で行われたということが新聞等でも報道されておりますし、神社界でも、そういった情報は共有されているのですけれども、それが、どれぐらいの規模だったのかは、あまり数値としては把握されていないように思います。

この津波被災地、特に三陸において、もともとの神社の位置が津波到達ラインより少し内陸寄りにあって、そういったことで避難者を受け入れることができたのだという研究も出てきてはいますけれども、この点も少し客

黒崎浩行氏

観的な検証が必要なところではないかと思います。

これは、その「宗教者災害救援マップ」という、稲場さんたちと一緒につくっているものです。こちらに、地図上で分かるかたちで被災状況、これは神社に限らず、ほかの宗教施設も、どのようなかたちで被災しているのか、それから、避難している方をどれだけ受け入れているのかを示す地図を昨年からつくっておりますけれども、その中で、いくつかの神社で、直接お話をうかがうことができました。

一つが、紫神社という気仙沼市の南町にあります神社です。こちらで避難所を運営している代表の方にインタビューを行いました。こういった高台にある神社でして、この下には、このようなかたちで商店街等が広がっているところでした。ここに津波が押し寄せて、人々はこの階段を上って境内に、およそ一四〇人の方が避難されたそうです。町ぐるみで避難してこられたので、その町の自治会長さんですとか、あるいは商店街の青年会長の方も、ここにいらっしゃって、この方たちが中心になって避難所としての運営を行っていったそうです。二日目から毎朝、朝礼をした。そして、夕方には反省会をして、それで避難されている方一人一人に行政からの連絡事項が届くようにしたということだそうです。

このように、これまでの自治会のつながりというものが、すっかり境内に移ったことで、さらに山の上の方には指定避難所となっている小学校があって、そちらの方にたくさんの方が避難されていたのですけれども、そちらから、この境内に戻って、「やっぱり、ここの方がいい」と言ってこられる方もいたそうです。その前に、八月にいったん、この避難所は解散するのですけれども、それ以降も、この自治会長さんは、ここにとどまって、この町の復興計画を練る、ある種の作戦基地のように、この境内を活用していらっしゃいました。

九月一七日、一八日には紫神社のお祭りが行われたそうですけれども、それに先立って、この避難所でお世話になった方たちは屋根の塗り替えを行ったそうです。

これは、紫会館という社務所、直会等を行う場所として活用されてきた施設。その手前にはテントを張って、避難所として運営してこられたところです。

こういったところから、地域コミュニティがもともと持っていた相互扶助というものを、神社の境内が活性化させる働きがあったと言えるのではないかと思うんです。しかし、先ほど申し上げたように「これが、どれぐらいの広がりを持っていたのか」は、じっくり客観的に検証してみる必要があるかと思います。

神社の再生・復興

次に再生・復興ということが言われているのですけれども、これも、冒頭から玄侑宗久さんが、非常に、いま困難な状況にあるということをおっしゃっておられました。私も、そのような認識でおりますけれども、その困難さと、どのように向き合っているのかを、少しお話しさせていただきたいと思います。

お祭りですとか、神社の再建ですとか、あるいは、さまざまな民俗芸能、こういったものが、被災地において人々の絆を活性化し元気づけている、とそういったことは、よく言われております。そのさまざまな事例も、私も足を運んで見させていただきました。そういったいくつかの事例について、お話をさせていただきます。

一つは、これは相馬市に山田神社という神社がございました。ここは昭和一六年に八沢浦干拓という事業が前にあって、その功績をたたえて、山田貞策を祭った神社として、昭和一六年に相馬市に創建された新しい神社です。ところが、ここは津波で流出してしまいました。

そこに、南相馬市にボランティア活動に来ていた熊本県の神職の方が、この津波で流出してしまった状況を聞いて、ご自身の地元の熊本県にあります球磨工業高校——伝統建築コースという、全国で唯一宮大工を養成するコースを設けている工業高校——の生徒たちが製作した祠を、仮社殿として寄贈したらと思いついて、そのことをその校長さんに提案しました。また、地元の方、氏子さんたちも、そのことを了承して、新しい鎮座地を、もともとこの山田貞策の家があり、記念碑もたくさん建てられている磯ノ上公園にし、そちらに新たにその仮社殿を遷座し、そこで復興を誓うお祭りが今年の二月に行われました。

二月には、まだ、こういうかたちで雪が降っておりました。右側に見えますのが海岸です。この海から津波が来て、この農地があったところは塩害、それから、三〇キロ圏より、もっと離れておりますけれども、放射能による影響もあって、なかなか、この農地の復興は難しい状況にあるわけです。けれども、こういったところで行われた遷座祭に、この高校生たちも一緒に、仮社殿を運んできて、鳥居も新しく造って建てました。地元も神職の方たちが集まってきました。

これは今年の春、四月の例大祭のときにおうかがいして撮影した写真です。雪は、なくなっておりますけれども、やはり、この農地は、まだ荒れた状態でありました。これは、かなり長い期間をかけて復興していかなければいけない状況にあります。

また、熊野神社が女川にあります。こちらは地域医療センター。もともとは町立病院だったのですけれども、津波が来た後に町立病院はいったん廃止されて、地域医療センターという官民融合の医療機関に変わります。その医療センターの、さらに上のところにある神社です。

こちらは春に例大祭というのが毎年、行われているのですけれども、このみこし担ぎのボランティアを外から募るということを行いました。本来は、おみこしは氏子さんのみが担ぐものでありますけれども、こういうたいへんな状況だからということで、女川に来ていらっしゃるボランティアの方たち、また、インターネットで、さまざまな方に呼び掛けて、みこし担ぎが行われました。

鷲神浜という女川港があるところですけども、こうい

うふうに、津波ですべて流されているところです。

当日は、たいへんな暴風雨だったのですけれども、一三〇人ぐらいの方が集まって、大人みこし、それから、東京から寄贈された子どもみこしを担いで、ほとんどさら地になってしまったような場所から、丘の上にある住宅地を巡ってまいりました。地域医療センターの中から撮った写真です。このように、ここにいらっしゃる老人の方たちも、この様子を見守っておられました。

また、このレジュメには載せておりませんでしたけれど、五月五日には鎌田東二先生、須田郡司さんたちと一緒に雄勝町大須地区にある八幡神社の例大祭にうかがいました。

ここでは大人みこし。このみこしの担ぎ方は、私も行って驚いたのですけど、ものすごく揺らすんですね。そして、「チョウサイ、チョウサイ」という声を掛けながら揺らしていく。子どもたちも、こうして、みこしを担いでいました。先ほど鎌田先生のスライドにもありましたけども、浜降り神事も行われました。

それで、雄勝法印神楽が奉納されるわけです。その前に祭典がありまして、ここに写っている、この緑色の服を着た若い男性は神道文学部の学生です。このお祭りに駆け付けて、何かできることはないかということで、この祭典のお手伝いをしておりました。これは「初矢」という、一番最初に舞われる舞です。これは大須小学校の児童たちが、このように舞っておりました。

それから、八重垣神社が宮城県の山元町にございます。こちらは、やはり津波で流されてしまいました。住宅地、または農地だったわけですけれども、津波の被害を大きく受けて、神社もろとも、この地域一帯は流されてしまいました。

被災地の神社が果たす役割

玄侑宗久さんのお話の中にありましたけども、この地に、震災の木質のがれきを使った防潮林をつくるプロジェクトが宮脇昭先生らによって提唱されて、この八重垣神社の鎮守の森の復活も、その考えに基づいて行われるということで、六月二四日に、その植樹祭が行われました。

このときに、ここの植樹ポイントでやってくださいと言われて、私は二番の植樹ポイントでやることになったわけですけれども、その際に特徴的だったのは、このようなかたちで、午前中に地域の氏子さんたちだけが集まって、リーダー講習というものを宮脇昭先生が直接、指導してやっておられました。

ここに集まっていらっしゃる十数人の方が、先ほど、ちょっとお見せしました一一の植樹ポイントに分かれて、それぞれ、当日集まってきた五〇〇人の方のボランティアに声を掛けながら、植樹をやっていくといったかたちを取ったのです。

こうして、地域における神社、あるいはお祭りの復活が、地域を越えた支援を受けてはいるのですが、しかし、それはローカルな宗教文化の伝統を自立的に保存、継承しようという地域コミュニティの意志が、そこにうかがえるものとなっていたように思います。しかし、それは同時に、これからの地域の再生・復興の困難さと向き合うものとならざるを得ないと思います。

先ほど挙げました八沢浦干拓地。現在、八沢土地改良区と申し上げますけれども、ここは明治三九年から約三〇年間をかけて干拓事業を行ってきたところです。その後七〇年にわたって水田耕作を営んできた地域ですけれども、その一〇〇年間の蓄積が津波、原発事故によって失われてしまったのです。

この南相馬市の復興計画にあたっては、ここ八沢浦干拓地を農地として再生させると、その土地改良区の方たちは名乗りを上げましたけれども、それは、これから先、非常に長期にわたるものになると思われます。先ほどの山田神社での復興の誓いは、そういった長期にわたる復興を願う、そういったものとならざるを得ないという事情があります。

また、山元町の八重垣神社の場合は、イチゴ農園の再生が、すでに一部、始まっていますけれども、防波堤が現在のところ壊れております。ですので、建築規制が掛けられていて、新しく家を建てることはできない状況です。すでになんとか建っている家を譲ってもらって、そこに住む方も若干名はいらっしゃるようですけれども、それは非常に困難なことです。住民が戻ってくるのは非常に難しい状況にあります。

この八重垣神社のすぐ近くにある、笠野地区の住民は集団移転を決めたそうで、この土地を離れていく人たちもいらっしゃる。そういう人たちであっても、楽しく集まれる場所として、この鎮守の森、あるいは祭りを大事にしたいと、八重垣神社の宮司さん、藤波祥子さんは、おっしゃっていらっしゃいました。

また、いわき市に久之浜というところがあります。こちらも津波で多くの住民が亡くなり、家も失われたところです。ここには諏訪神社がございます。この地域は、実は行政もボランティアも、なかなか入りにくかったのですけれども、この諏訪神社が一つのボランティア拠点になって活動されていました。こちらでは、宮司さんの高木美郎さんが非常に尽力されてボランティア活動をされていたのですけれども、地元の方たちの被災の生々しい体験、また、行政の防災計画、ここはもう立ち入り禁止区域にしたいという行政との葛藤、また、原子力災害での不安の中で、住民たちが住んでいた土地を離れるにしろ、とどまるにしろ、神社を正常に保って、それを継続していくことが、ふるさとを守ることになるのだと語ってくださいました。

これは、学生四名とともに、被災神社の復旧活動を手伝わせていただいたときの写真です。

これは星廼宮神社という、その諏訪神社の宮司さんの兼務神社ですけれども、こういうかたちでさら地になってしまったところです。仮設の社殿が建っており、その

境内を清掃しているところです。また、稲荷神社は社殿が奇跡的に残ったので、ここも雑草を取ったりしました。

最後に、被災直後、神社は、さまざまな支援を受けながら、地域住民の自立的な相互扶助の場として機能したと思われます。また、再生・復興の困難さを地域とともに抱えてきております。その中で、神社がふるさとというものの意識を未来につなぐ役割を果たしていることが、いくつかの事例からはうかがえるのではないかと思います。

ただ、その検証は不十分ですし、また、原子力災害の影響、あるいは被災地におきまして、神職の方々が、どれだけの困難を抱えていらっしゃるのかについても、十分には今日お伝えできなかったかと思います。

こういったことも、これからの課題としながら、地理学ですとか、津波工学ですとか、さまざまな分野の方たちが、これからの提言も含めて、研究調査活動に入っていらっしゃいます。そういった方たちの知見なども参考にしながら、被災地の再生・復興における神社のあり方に、これからも学んでいきたいと思います。

以上でございます。ありがとうございました。

鎌田　どうもありがとうございました。

まとまったかたちで、被災地の神社がどういう役割を震災後、果たしていたかということを考える材料と問題点について、提起していただきました。

続いて、一条真也さんに、東日本大震災とグリーフケアについて話をしていただきます。お願いします。

報告2
東日本大震災とグリーフケアについて

一条真也

グリーフケアの重要性

こんにちは。一条真也と申します。私はいろいろな本を書いているんですが、どういうテーマかというと、「日本人の心」を一つのテーマとしております。

私は、日本人の心というものは大きな三つの柱、神道と仏教と儒教によって支えられていると考えています。その三つの宗教が、日本人の心にデザインされているのかなと。これは聖徳太子が最初にデザインしたのではないかと思うんですが、このたびの「こころの再生」に向けては、神道も仏教も儒教も総動員しなければいけないと思っております。

今日は、神道のお話も先ほどありましたし、玄侑先生から仏教のお話もあったのですが、私は、どちらかというと普段から儒教に親しんでおります。北陸大学でも客員教授として「孔子研究」の授業を担当しており、儒教を教えているのですが、実は、孔子のお母さんが葬儀の仕事をしていたと言われております。

そして、「礼」を追求したということで、お弔い、葬儀ですね。それもまた私の本業で、冠婚葬祭業をやっております。結婚式のほうももちろんやっているのですが、葬儀も年間一万件以上、お世話させていただいております。

私は冠婚葬祭互助会の全国団体の副会長もしていまして、被災地では、いろいろサポートをさせていただきました。そして、さあ、私も現地に入って陣頭指揮を執ろうと思っていたときに、尾道で神社の石段から転げ落ちて足を折ったんです。それで被災地に入れなくて、二カ月ぐらい動けなかったのですけれども、悶々としました。もう自分も何十年、生きてきて、こんなに間が悪いことはない、業界の仲間のみんなが先に入って、どんどんやっているのにと、非常に悔しい思いもしたのです。が、ここで、自分にできることをやりました。それから、骨折が治り、被災地にも何度か入りました。

そういったところで、なぜ私が東日本大震災でグリーフケアの話をするかといいますと、グリーフケアというのは、医療従事者とか、宗教関係者とか、いろいろな方がやっているのですが、アメリカではお葬儀屋さん、葬儀業界の人々がいちばん熱心にやっているんです。私どもの業界では、私の会社がグリーフケアを国内で最も早く始めたと言われていまして、自助グループのサポートなども行っていますので、それを今から全国的に普及させていきたいと思っているところでございます。

この会場におられる方で「グリーフケア」という言葉を初めて聞かれた方は少ないのではないかと思うんですが、最初に簡単にご説明します。グリーフというのは「悲嘆」ということですね。グリーフのケアは、「子ども・配偶者・親・友人など大切な人を亡くし、大きな悲嘆（グリーフ）に襲われている人に対するサポート」ですね。死別で起こる悲嘆の反応は、時には不眠や食欲不振、あるいは「うつ」につながるとされています。

日本人の自殺が多いということが、ずっと言われていますが。日本における自殺者の数は、一四年連続で三万人以上となっています。自殺の原因は、もちろん、いろいろあるのでしょうが、大きな原因として言われていますのが「うつ」です。うつが非常に大きな原因と言われています。特に、配偶者を亡くされた方が、うつになる確率は非常に大きいそうです。私どもも、いつも葬儀の現場から見ていて、それは同感です。このような「うつ」の危機に直面したとき、グリーフケアが必要となります。

グリーフケアでは、対象者が事実を受け入れ、環境の変化に適応するプロセスを支援するのです。グリーフケアは、一九六〇年にアメリカで始まったとされているのですが、欧州のイギリスやドイツでも、いま非常に盛んであります。

誰がグリーフケアを行うかということですが、先ほども言いましたように、まずは、医療の関係者です。医療従事者、心理士ですね。そして宗教家、グリーフケア協会・団体とか。「自助グループ」が、いま一番、重要だとされています。「フューネラル」は葬儀という意味ですが、フューネラル業界では公益社さん。大阪に本社がある公益社さんが「陽だまりの会」という自助グループを最初につくられたんです。

互助会の世界では、私どものサンレーが「月あかりの会」という自助グループをつくりました。いま、自助グループで、奥さんを亡くされた人の会であるとか、反対に御主人を亡くされた未亡人の会とか、小さなお子さまを亡くされたお母さまの会であるとか、いろいろ、そういった自助グループを立ち上げることも行っております。

東日本大震災に先立って、やはり一九九五年、阪神・淡路大震災が非常に大きな出来事だと思うのですが、これとの大きな違いは、阪神・淡路大震災は「ボランティア元年」と言われたんですね。このときに初めて日本にボランティアが本格的に根付いたとも言われ、一三七万人の支援者が現れたそうです。しかし、阪神・淡路のときには「グリーフケア」の問題は、あまり言われなかったですね。

東日本大震災における死者の発生の仕方が、地震以外に津波が非常に悲惨な悲嘆を生んだわけですね。そこで初めて日本にもグリーフケアというものが必要ということが言われてきました。この未曽有の大災害と最悪の、「最悪」と一概に言ってはいけないのですけども、二一世紀になって土葬が復活したというのが、まさに「ありえないこと」でした。

これに先立って一年前、「日本人のこころ」における大きな出来事がありました。「無縁社会」という言葉が流行し、島田裕巳さんが『葬式は、要らない』という本を書かれた。この二つは二〇一〇年の一月に同時に生まれた言葉でして、NHKスペシャルで「無縁社会」が放映され、『葬式は、要らない』が同じ月に発刊された。私は「無縁社会」と「葬式は、要らない」は同義語ではないかと思っていまして、その一年二カ月後に、津波と共に「無縁社会」も「葬式は、要らない」も消え去ってしまったのではないかなと思っております。ちなみに、私は『葬式は、要らない』に対して、『葬式は必要！』という本を書きました。また、「無縁社会」に対しては『隣人の時代～有縁社会のつくり方』という本を書いております。

東日本大震災での「複合悲嘆」と「複雑性悲嘆」

さて、「被災者の中でケアが必要な人、行われるケア」ということですが、被災者の中で心理的サポートが必要な方は誰か。まず大切な人、家族を亡くした人、愛する人を亡くした人。で、安否不明者の家族。これがまた非常に大きいんですね。高齢者、子ども、障害者、旅行者、外国人ということですね。

「被災者の中で行われるケア」は、「遺族のグリーフケアの対応」「被災者、被災地移住の精神的不調、ストレスへの対応」「被災地での支援活動、ケアを行っている方々の精神的ケア」などですね。これもまた、非常に重要ですけども、今日は時間がありませんので、ちょっとはしょります。それから、「被災地の避難所、被災した現地医療機関の機能の支援」ですね。「東日本大震災では、家族の喪失、生命の脅威、悲惨な光景の目撃などを経験した被災者が多く、さまざまなストレスの対応策が必要である」と。

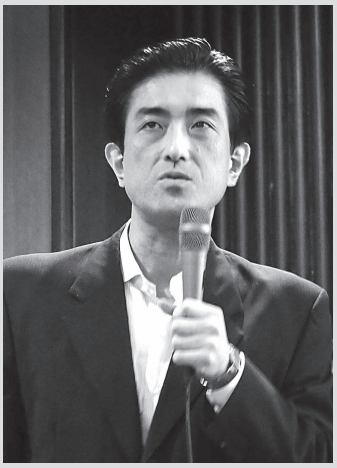
グリーフケアというものは、「失ったものを、どうケアしていくか」ということなのですが、普通は、愛する人を亡くすということがあります。東日本大震災をはじめ、さまざまな災害では、「複合悲嘆」「複合喪失」と言えるのではないかと思います。有吉佐和子さんの『複合汚染』という本が昔ありましたが、複合悲嘆。これは、さまざまな悲嘆で、同時に、いろいろなものを失ってしまうことです。まず一つは、「大切な人、愛する人の喪失――配偶者、親、子、恋人、友人」とかですね。死者が一万六千人近く、行方不明者も三千人近くいます。実は、東日本大震災の後、私どもの業界では柩を二万個用意して、現地に送りました。しかし、柩を苦労して集めても、あまり役には立たなかったんです。海から上がったご遺体は、もう柩では対応できなかった。袋ですね。納体袋というものがあるのですが、それも全国からかき集めても全然足りなくて、これは、やはり、いままでにない未曽有の大惨事だという実感がいたしました。その中で、どのように「人間の尊厳」というものを守るかが問われたように思います。

これが、大切な人を失うということですが、「所有物の喪失」ということもあるわけですね。家とか車とか船とか会社とか。仕事もそうですし、職場とか、ペット、家畜ですね。福島でもそうですけども、家畜を失う。

そして、「環境の喪失」。故郷を失う、避難による越境、あるいは慣れない土地へ移ること、転勤とか、いろいろなことがあります。役割も失ってしまった。職場での地位とか、家族の役割を失った。意外と東日本大震災の後に離婚した夫婦が多かったんですね。いろいろ、やっぱり環境の変化があったのではないかと思います。

そして、「自尊心の喪失」。これも大きい。避難生活ですかね、孤立感とか。名誉とか、いろいろなものが傷ついていってしまった。

そして、「身体的損失」。命に関わる負傷もありましたし、けがや病気による衰弱もあった。精神的、睡眠なども失われてしまった。重軽傷者が六千人。いまでも、いろいろな被害があると思います。



一条真也氏

そして、「社会生活における安全・安心の喪失」。これは、いま福島以外でも、日本全体が安全・安心を失ってしまったということが言えるのではないかと思います。

ということで、普通は何かを喪失したときには、それ一つを失っただけでも大変なことですが、東日本大震災の被災者の方は複合して、家族も失って、家も失って、車も船も全部、失ってしまったと。安全・安心も失ったというようなことが言えるのではないかと思います。

いまのは「複合」でしたが、今度は「複雑」です。「複雑性悲嘆」ということで、深い悲しみが、ずっと長引いて、回復がなかなかできない。そして自責の念、罪悪感、否定的な考えが回復を妨げていく要因となっている。

「生前中はもっとよくしてあげればよかった」とか、「自分のせいだ」と、「自分だけ幸せになってはならないのだ」と思って、「愛する人と一緒に死んでしまえばよかった」「生きる意味がない」とか、「通常の日常生活が送れない」、無感覚、無力、「自分は駄目だ」と思う。「何で、あの人は生きていて、うちの家族は死んだんだ」「何で、うちの家族が死んで、私が生きているんだ」とかですね。「不公平である」、これも非常に大きいです。「誰も理解できるはずがない」と「他人を信用できな」くて、「愛する人の死を受け入れてはいけない」と最後に思うということは非常にパニックになっているということです。

このたびの東日本大震災で葬儀業者が、どういうことをやったか。物資の供給や衛生面の配慮も重要でしたが、何よりも人的支援ですね。要するに、海から上がったご遺体をきれいにするという、「エンゼルメイク」と言うのですけど、そういったこともありました。そして、納体袋安置とか。さらには、「慰霊、鎮魂、供養、祈り処」、そういったスペースを設置するということも、非常に重要なことでした。いろいろな災害があるのですが、ご葬儀のお世話をさせていただいて、遺族の方から、これだけ「ありがとうございました」と言われたことはなかったと、本当に、みんな言っていました。

私が、ずっと足を折って動けない間に、被災地の方にどういうお言葉を掛けたらいいか、何ができるかを書いたのが、『のこされた、あなたへ』という本です。「あなた」といっても抽象的な「あなた」ではありません。「葬儀ができなかったあなたへ」「遺体がみつからないあなたへ」「お墓がないあなたへ」「遺品がないあなたへ」「それでも気持ちのやり場がないあなたへ」ということで、「ないないづくし」なんです、本当に。これも津波という災害の特性が、すべてを「ないないづくし」の状態にしてしまったということが言えるのではないかと思います。

これに先立って、私は、『愛する人を亡くした人々』を二〇〇七年に書いたのですが、ここでいま、私のところのグリーフケアでも実践しているのですが、要するに、これは、いろいろな発想法があるということなんですね。

私は宗教家ではありませんので、たとえば、この儀式とか自然、命とか、キリスト教の天国という考え、仏教の考えもある、ヒンズー教の生まれ変わりとか、いろいろあります。そして、スピリチュアリズムも含めて、こんな考え方もあるんですよと。そして、愛する人を亡くされた方の世界観とか信仰に合わせて、こんな考え方もあるとご紹介して、ずっと話をしていくということ。決して特定の思想や考えを押し付けることはありません。

ここで大事なのは、「愛する人」と一概に言っても、いろいろな「愛する人」がいるということです。これは、私が非常にいつも肝に銘じており、また、スタッフにも言っているのですが、愛する人を亡くした人が何を失うのかということ。これはユダヤ教のラビであるグロフマンという人が言っているのですが、「親を亡くした人は過去を失う」「配偶者を亡くした人は現在を失う」「子を亡くした人は未来を失う」「恋人、友人、知人を亡くした人は自分の一部を失う」ということで、みなさん、微妙に少しずつ失ったものが違うのだから、同じように十把ひとからげに「ご愁傷さまです」の話ではないと。非常にデリケートな問題ですから、そこをどう接していって、どうグリーフケアを行っていくかをいつも模索しながら考えております。

そして、私どものフューネラル業界でできる、さまざまな実践術が、ご葬儀を起点としまして、その前と後で、いろいろ違うのですが、葬儀前、終末ケアもありますけど、生前準備のケアを、エンディングノートなど、いろいろ使って行うと。そして、遺体のケア。これが東日本大震災でも発動したのですが、エンゼルメイク、エンバーミングや湯灌とか納棺ですね。そして、遺族のケア。ここが非常に重要で、いま非常に重点的にやっているのですが、「遺族の精神・身体的状態を察した、快適安心な時間と空間の提供」ということですね。

「葬儀中のケア」ですが、本当に「儀式がどうして必要なのか」「なぜお葬式というものを行っているのか」を考えることが大切です。法事、四十九日、一周忌、初盆には、どういう意味があって、どうして行っているのかを、宗教家の方と僧侶が一緒に考えていくことが必要ではないかと思います。それから「会葬者のケア」があって、お葬式の後も、葬儀後のケア、死後の諸手続きとかもあります。ついで、「喪のケア」。法事法要、慰霊、鎮魂、供養、手元供養、仏壇、墓地、散骨。

自助グループへの支援

いまいちばん、力を入れていることが自助グループ（Self Help Group）を立ち上げていって、サポートしていくということです。自助グループをつくってサポートするということは、まず「愛する人を喪失した対処から、愛する人のいない生活への適応のサポート」をするということですね。

本当に、愛する人がいなくなるということは、時間や空間の感覚が歪んでしまい、異次元の世界になってしまうと思います。葬儀というものも、歪んだ時間と空間をいったん破壊してしまって、また新しい時間と空間を創造して、そこで、また生きていくスペースをつくる、そういう意味があるのではないかと思っています。愛しい者が死んでも、ずっと、そのままで何もしないで日常生活を送ろうと思っても、そうはいかない。やはり心が悲鳴を上げてしまうし、異次元に向かって開いた穴に落ちてしまうのではないかと思います。「人生の目標」とか、「喜び」「満足感」、言葉で言っても、なかなか、うまくいかないですけれども、このようなものを提供することを目標にしております。「自分自身をケアすることをすすめる」「他者との関わりや交わりをすすめ、自律感の回復を促し」ていくと。

先ほども言いました、サンレーでは「月あかりの会」というものを実際につくって活動しております。そこで、「癒やし」「集い」「学び」「遊び」といった大きなテーマが四つあります。

「癒やし」は、「大切な人を亡くし、深い悲しみにある人が、きちんと悲しむことができ、そして前向きに生きていくことができるように安心感を与え、支え、癒やしに役立つものを紹介」していこうということです。具体的には、「悲嘆している人に安心感を与え、不安を軽減させるため、遺族に対しベストをつくす」のは、アロマセラピーとか。香りですね。あとは音楽セラピー。音楽によって癒やす。その人の精神状態にマッチした音楽を紹介していくと。

それから「手元供養」という、最愛の人をいつも近くに置いておくことができる供養の仕方を提案する。本も、絵本などをはじめとして、その人の気持ちに合った、愛する人の死と向き合う何かのヒントが生まれる一冊の本を紹介しております。ついで「カウンセリング」。専門家によるカウンセリングとカルテを作成して、遺族が質問できる環境をつくっています。そして、遺族の思い出を引き出して、あらゆる質疑応答に関して正直な気持ちで対応する。

それで、イベントですね。みなさん、遺族の方々が集うイベントをいろいろ企画して、やっております。「集い」ということで会食や、慰霊祭、月例会を開催して、同じような境遇の人、配偶者を亡くした人とか、お子さんを亡くした人とか、同じような境遇の人が集まっていく、そういった場を提供させていただいております。同じ境遇の方々が集い、つらい気持ちを共有し、参加者全員で故人を偲ぶ機会をつくると。同じ境遇の方々で、会食する。これは、やっぱり食事をするということが大事ではないかと思うんですが、故人の思い出を話し合って自分の状況を把握する。

「死別に対する意味付けを与える」。これも、なかなか難しいんですけどね。カウンセラーなどが「上から目線」で話しても聞かない場合が多いです。それは、やはり同じ体験をされた方が、「私も夫を亡くしたんですけど」というふうな自分の体験として話していただけると、非常に効果が大きいですね。死別に対する意味付けを与え、悲しみや、つらさを受け止める機会として、「故人は私と人々の中にいる」という確信を持つ機会。月例会を開催して、葬儀後のフォローとして遺族を支えていくと。そして、お坊さんをはじめ、宗教者の法話やコンサートを開く。こういったことをやっております。

この「学び」ですが、セミナーやカルチャースクールなんかも開催しています。共通の趣味の方々と主に学んでいくということが、また新しい生きがいづくりですね。新たな趣味の発見のお手伝いをする。人生の目標、生きがいづくり、将来設計のお手伝いというようなこともあります。また、親しい人が亡くなられたわけですから、その供養についての話などもします。いまから、どうやって法事があるのか。そういうお話になると本当にみなさん、熱心に聞いていただいております。そして初盆を迎えるわけです。

最後は「遊び」です。「遊び」と言うと、ちょっと不謹慎なような感じもしますが、「こころの再生」においては非常に遊びが重要だということですね。四季の移り変わりを感じるということで、よく旅行などを企画し、バスハイクなんかで、よく行っています。外に出るきっかけをつくり、体を動かして健康に気を配る。

新たな夢や希望、喜びや生きがいづくり。このような言葉だけを口で言うと、私も何か虚しい気もするのですが、実際に、そういったものがグリーフケアの自助グループの活動現場の中から少しずつ生まれつつあるということは実感しています。そして、「定期的に自分を甘やかすことができる場を提供する」。これも大事です。ということで、会員同士のみなさんも、自助グループのみなさんの縁を新たに結んでいく機会を提供するということをやっています。

これは、その自助グループのみなさんの意見を集めて、「悲しみを癒すための一〇ヶ条」というものを月あかりの会ではやっています。「孤独感から救われて、自分だけではないと気がつくことができる」。愛する人を亡くした人は、私一人ではないと、「安心感が得られ、気持ちにゆとりが生まれる」。「同じ悩みや、問題を抱えている他の人の話に耳を傾けることによって、そこから自分を見直す機会や方法を学ぶことができる」。「悲しみや、辛さから逃げないで受け止め、悲しみに対して素直な気持ちをほかの人に伝えることができる」。「参加すること

で、生き生きとしていく他の人の姿をみて希望を持つことができる」。私もあんなふうに、いつかは元気になれるのかなと。

「自分にとって必要な情報を得ることができる」。この「必要な情報」というのが大事で、本当に深い悲しみは、いつまで続くかみたいなことも、実は大事です。いろいろな方がいますから、一般論でしか言えませんけれど、普通、配偶者を亡くした悲しみは三年は続き、お子さんを亡くした悲しみは一〇年続くと言われています。これは一般論ですけども、そういったことを情報として得ると、それで、あと一年、あと一年ということで、自分を励ましていくことも大事ではないかと思います。

「体験がどのように自分に位置付けられていくかなど、他の人とのお互いの成長を分かち合える」。「仲間を大切に思う気持ち、仲間を尊ぶ気持ち、自分が大切にされる喜び、自分が尊ばれる喜び」。「自分自身を大切に思う気持ち、自分自身を尊ぶ気持ちが育つ」。

「将来の目標や意思表示が明確にできて、あきらめないで信じることができる」。「仲間とともに、時間をかけて悲しみや不安感を軽減していくことができる」ということですね。

グリーフケア・スタッフ心得

もう本当にグリーフケアは技術論ではないと思います。こういうことをやって、こういうことをすればいいというような、テクニックで語っては本当はいけないような気がしますが、やはり、やってはいけないことはあるんですね。それで、いつも気を付けていることを、ちょっと最後にお話ししたいと思います。ご紹介するのは、「グリーフケア・スタッフ心得」です。死別した人へ、こういう言葉を掛けてはいけないというものです。

「励ましや激励」。「頑張って」とか、これはもう、この東日本大震災以後、日本語でいちばん、悪役になった言葉ではないでしょうかね、「頑張って」という言葉が。

「もう少しの辛抱」とか、「早く元気になって下さい」「貴方は、まだいい方ですよ」とか、「もっと辛い人がいます」、これもいけないですね。比較しては、いけないわけですね。悲しみ比べをしてはいけない。決して、「〇〇さんは〇〇を始めてから元気になりました」とか、「お気持ちはよく分かります、時間がたてばよくなります」とか。

「あなたは強いですね」とか、そんなこと「大きなお世話」であって、言ってはいけないです。

「元気そうで安心しました」。これは何か、うっかり言いそうな感じはするんですけど、やはり言われた方は、あまりいい気分はしないそうですね。

「まだ若いんですから、忘れるのがいちばんです」とか、そんなことは絶対、言ってはいけませんね。

「もう一年たったんだから、元気を出してください」なんていうのも、誰が一年たったら元気にならなきゃいけないという決まりをつくったのかということです。

こんなこともいけない。「納骨や遺品の整理をせかす」ということね。

「私まで辛くなるから泣くな」と言うとか、こんなこと、本当にひどい話です。これはもう自己中心のエゴイズムでしかありませんね。

「神様が決めたことです」とか、「成仏しました」とか、宗教家でもない人までも、こういうことを言うのは、おかしい。「法事はこうしなければいけません」とかも禁句だそうです。

では、どのような言葉を掛ければいいのかといいますと、死別を経験した人に声を掛けるなら、事前に会話の糸口をやっぱり用意する。故人の思い出の話とか、故人のいい話が、やはり、いいですね。人柄とか長所とか。

そして、「貴方のことが気にかかっていましたが、いかがですか」と言ってみる。これが非常に練り上げられた言葉だということになります。そして、「お辛いでしょうね」と押し付けずに聞く。

「〇〇さんのことをお話しになりたいですか」、故人のことを「聞かせてもらってもいいですか」と聞く。故人の話は事前に聞き出すということですね。

そして、つじつまの合わない話、前回と違った話をすることは、別に構わないのだと、聞き流していく。

「ぼんやりして注意力が散漫になっていることがあるため、思わぬ事故にあわないように声をかける」。

「控えめに自分も同じ経験をしたことを話す」。それで、「自分の適応の方法を押し付けない」ことですね。

このような話をいつも一時間半ぐらいかけてやるのですが、ちょっと今日は急ぎ足でやりましたので、はしょったところとか、言葉が不足して誤解を招くようなところもあるかもしれませんが、後でまた聞いていただければお答えさせていただきたいと思います。

医療従事者や宗教関係者と共に、儀式という大事なところを扱っていく私たちもまた、本当に悲しみを少しでも軽くしていく、サポートしていくお手伝いをさせていただきたくて、こういう運動を、いま全国に広げていこうと思っております。

私の話は以上でございます。ご清聴、どうもありがとうございました。

鎌田　どうもありがとうございました。次に、コメンテーターのお二方に一〇分ぐらいずつ話をしていただきます。まず最初に、鈴木岩弓さん、お願いします。

コメント1　鈴木岩弓

宗教施設の役割

東北大学の鈴木と申します。今朝、仙台空港から飛行機に乗ってきました。去年、飛行機が飛び始めたころは、まだ飛行場の中ではヘドロの臭いがしておりました。仙台空港は、みなさんの多くがご覧になったかと思いますけど、ＮＨＫのライブの放送の中で津波が押し寄せる

シーンが録られた空港ですね。私があのシーンを見たのは三日後か四日後の電気が通じてからでしたけれども。

いまはもうヘドロの臭いもなくなっています。ただ、空港の周りはがれきの山がまだ多少残っていて、津波が来たということがよく分かるような状態になっています。

今日、お招きいただきまして、いろいろ先生方のお話をうかがいましたけれども、私は仙台、一応、被災地に住んでおりますけど、被災地に住んでいる人間と比べて、逆に外にいらっしゃる黒崎さんや鎌田さんなど、いろいろなところから被災地をたいへん広くご覧になっているので頭が下がる思いです。

といいますのは、私は自分の近くに問題が多いので、そんなに広い範囲を見て歩く余裕がないんですね。私は福島県の特に相馬市や南相馬市は、ずっと昔からフィールドにしていたところで、今回すっかり壊滅してしまった地域もありますが、フィールドワークをしたために知っているところがあります。そういうところが、宮城県でいうと南三陸町や石巻市、岩沼市であり、このところ岩手には足を延ばす機会がなくなっております。ですから、私は限られたところのデータでもって、簡単なコメントをつけさせていただくことになります。

まず黒崎さんのお話に簡単にコメントをつけますと、黒崎さんのお話は神社のことですけれども、ある意味では、宗教施設というものが持っている、一つの地域における役割ということになるんだと思うんです。

これもみなさん、ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、閖上という地域、名取市にある港町でしたが、もうすっかり壊滅した地域です。海辺のすぐそばに日和山という小さい山があるんですが、そのてっぺんに、小さな祠がありました。その山のてっぺんまで津波が来たので、祠は全部なくなってしまったわけですが、そこが、ある意味では慰霊の施設となっています。神道的なかたちで、神社の再興もなされていますし、仏教式の大きな塔婆も建てられました。

閖上というところを一望に臨める小さな山なんですよ。しかも、それが津波で全部やられるぐらいの高さの山なんですね。そこに塔婆がいっぱい建てられて、ある意味では慰霊の場所になっています。本来小高い場所にある宗教施設だったということもあって、ここが被災地を見渡す慰霊の場になっています。従来までの宗教施設の空間が、慰霊施設という被災者の人々をまとめ上げる空間となっている一つの事例と言えると思います。

そのほか、今日お話しになりましたようなかたちでいうと、神社の民俗芸能だとか、あるいは地域コミュニティの、いわゆる「コミセン」、コミュニティセンターになっているというような宗教施設は、被災地のいろいろなところにあるかと思います。

それで、私は簡単に一つだけコメントをつけたいと思うんですけど、宗教施設、お寺にしろ神社にしろ、いろいろな活動をされてきたということを言われる中で、先ほどもちらっと言われたことですが、宗教者のご家族の方のご活躍というのかな、これもやっぱり、かなり重要なことではないかと思うんですね。玄侑宗久さんも、奥さまが、たぶん、いろいろなところで活躍されているのではないかと思いますが。

「こわれた、ふるさとがあるんだよ」

先ほど黒崎さんがご説明された被災地における神社については、川村一代さんがまとめられている『光に向かって――3・11で感じた神道のこころ』（晶文社、二〇一二年）には具体的なお話がいっぱい出てきます。川村さんからこのご著書をお送りいただいたのですが、本日もこの場にいらしていただいています。この本の中に出てくる南三陸町の上山八幡神社は以前から存じ上げていた工藤祐允宮司さんの神社で、先日うかがった際に、娘さんの工藤真弓さんが『つなみのえほん――ぼくのふるさと』（市井社、二〇一二年）という本を出版されていることを知りました。真弓さんは工藤宮司の実の娘で、旦那さんの庄悦さんとの間に由祐君という五歳の息子さんがいます。この本は初め、紙芝居として真弓さんが作ったものでしたが、それがまとめられて本になったものです。この本では地震の起こった当日を中心に、真弓さんの身の回りに起こったことが簡潔な文体で記されており、津波の怖さを伝えるとともに、津波から復興していこうという、被災された立場からの意志表明みたいなものが出てきます。

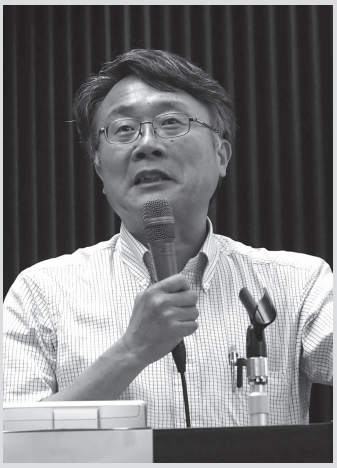
お会いした当日は、真弓さんご自身による紙芝居も拝見したのですが、そこに描かれた絵が収録されている本もたいへん素晴らしい出来だと思います。一言だけ言いますと、本文中には息子の由祐君との会話が、いろいろ書いてあるんですけど、以下のような記述があります。

こうしてしん災から九ヶ月が経ったある日、ゆうすけが、ふっとつぶやきました。「おかあさん、ゆうすけには、こわれた、ふるさとがあるんだよ。――しづがわ」

「え、ゆうすけには、ふるさとがあるの？」……そうか、そうだよね。

こうして由祐君という子どもさんの一言は、お母さんの真弓さんの気持ちを救ってくれることにもなり、お母さん自身このことを紙芝居にして伝えることで、被災地に住む人々に対して大きな力を送っています。

こうした活動は仏教寺院でも確認されます。これも編者の小野崎美紀さんからいただいたものですが、『あったかい手　宮城県石巻市海の近くの避難所五カ月間のことば』（ぱんたか、二〇一一年）という本です。小野崎さんの夫の小野崎秀通老師は、石巻市にある洞源院という曹洞寺院で、震災直後から五カ月間にわたり四〇〇人もの人々の避難所となっていたところで、そこで起こったいろいろな出来事やメッセージが収録されています。つまり、そうしたかたちで、神社やお寺も宗教者のみなら


鈴木岩弓氏

ず、そのご家族もいろいろと献身的な活動をされて、今回の震災に際して世に発信されているということも、ぜひ注目すべきことではないかと思っております。

次に、一条さまのお話に関連して言いますと、実はこれ、ちょうど先ほど島薗先生のお話の中にもあったことですけど、私たち東北大学で「実践宗教学寄附講座」というものをつくっています。それは、やっぱり実際に現地に支援で入って「カフェ・デ・モンク」ということで、カフェで文句を言ってもらおうと、傾聴に行くのですが、そのときに、どう人と対峙したらいいか、どういう会話をしたらいいか。このへんが非常に難しいことが、はっきりしてきまして、それを宗教、宗派を超えた超宗教超宗派でやっている。ですから、われわれの仲間はお坊さんもいますけど、神主さんもいますし、牧師さんもいるというような、超宗派で現地に入ってお茶を出したり、コーヒーを出したりというようなことをやって、それをきっかけにお話をうかがい、ある意味では、グリーフケアをやっていこうとしております。

「臨床宗教師」の必要性

先ほどの一条さまのお話で出てくる中には医療従事者、心理関係、そして宗教者とありますけれども、とりわけ私たちは、宗教者が自分の布教のためではなく、宗教宗派を超えたかたちでの宗教的ケアが、いかにできるのだろうかということを、「臨床宗教師」という名前でちょっと考えています。ちょっと難しいところを狙っているのですけれども、いわゆるアメリカの軍隊チャプレンなんかは、そういうことで実際にケアしてきているという現実があるようですので、こういうことが日本で確定できれば、一つの新たな宗教改革というか、宗教者の新たな出番が確定してくるのではないかと思っています。私は宗教者ではないのですけれども、そう思って活動をされている方たちのために、どのような方向付けをするかといった検討を行うための講座を開いています。

ただ、そういう中で、去年の秋ぐらいから、やっぱりお化けが見えるとか、何か、そういう不可思議な話は、被災地でしばしば聞かれるのですが、そのケアで、いろいろたいへんなことがあります。中には霊が取り憑いたとか、そういうような話も出てきています。

従来、そうしたことは、ミコさんと言われる、青森まで行けばイタコさんと言いますけど、宮城県だったらオガミヤサンとかオガミン、ミコさんなど、いろいろな言い方をしますけど、地域にはそういう人たちが宗教文化として担っていた部分があるわけです。結局、そうした部分も、ある意味で臨床宗教師のほうで担えるようなかたちになればいいかなと思っています。

最後に、奇跡みたいな希望の見えるような写真をお示しいたします。これは、最初に申し上げた、仙台空港のすぐそばで、これは下増田神社といいます。

この周りは津波で全部やられているんですけど、ここは、いわゆる微高地というやつですよね。飛行場が、すぐこの裏なんです。反対側が海です。海と飛行場の間にありながら、標高二メートルぐらいの、この神社が津波の影響をまったく何も受けなかったんですね。飛行場に逃げた方がおっしゃっていましたけど、「波が、ここをよけてきていた」と言うのですね。ある意味では、一つの奇跡みたいな感じで。神社の裏には石塔が建っているのですが、これは昔のまま全然、動いていないということです。そういうことで、ここは結構ありがたい神社だと言われています。

それに対して、この神社の横に墓地が見えたかと思うんですが、この墓地のお墓は、津波の直撃を受けカロートが洗い出されてしまっています。所によってはこういうふうに骨も出ています。こうしたところは祖先祭祀の問題からすると、すごく重要なことです。家が流された人たちは仏壇が流されているので、位牌、遺影、過去帳が流されています。その上、お墓もこうやって、ひっくり返って骨も流されている。そうなると先祖の依代がなくなっているということですね。これがどうなるのかというのも、また一つ、重要な問題になるかと思います。

もう時間が来ましたので、これでコメントは終わらせていただきます。ありがとうございました。

鎌田　どうもありがとうございました。では早速、続きまして、井上ウィマラさん、お願いします。

コメント2　井上ウィマラ

グリーフケア理論――「急性悲嘆」から「統合された悲嘆」へ

高野山大学の井上です。私は専門が仏教瞑想に基づいたスピリチュアルケアということで、主にグリーフケアの話題についてコメントできたらと思っています。

先ほどの鈴木先生のお話で、「こわれたふるさとがある」という子どもの言葉に、思わず涙がこみ上げてきました。やはり悲しみにも表れ方がいくつかあって、大切なものをなくした当時の「急性悲嘆」と言われる身体症状をも伴う状態から、半年なり一年がたって、その人な

りに意味が受け止められて、悲しみがなくなるわけではないのですけども、泣き笑いしながら思い出せるような状態になっていきます。英語圏ではsour sweetと言うそうですけども、いい思い出も、辛い思い出も、それぞれ泣いたり笑ったりしながら思い出すことができるようになっていくようです。悲しみを「乗り越える」という表現はよくないのかもしれませんが、悲しみを抱えて生きていけるようになることが一つのメルクマールだとして、専門家の方はそれを「統合された悲嘆」と呼んでいます。

急性期のまだ荒い悲嘆で、身体症状もいろいろ出てくる状態から、その人、あるいはそのものを失ったことで自分は何を失ったのかということ、フロイトは「内的な喪失」と言っていると思うんですけれども、喪失の意味を自分なりに了解することができるようになると、泣き笑いしながら、その悲しみが受け入れられるようになり、思い出に変わることができる。すると、なくしたものの思い出は自分の人生の中に位置付けられて、将来を見据えて生きていこうと思う力が出てくる。それが悲嘆から回復していく一つの道標だということです。

「こわれたふるさと」という言葉の中に、その少年、数歳児だと思うんですけども、その子の中にある、専門家であればresilienceと呼ぶであろう力を感じました。五歳ぐらいの男の子の中に回復能力、あるいはスピリチュアルなものが発現するのに接して、そういう「生きる力」に導かれながら、私たち大人も、この悲しみを共に生きていくことができるようになるのでしょう。悲しむことから育むことに、新しい命、人と人とのつながりや社会を育んでいくテーマにつながっていくのではないかと思います。

稲場先生のお話の中で、いまの私たちが、この東日本大震災にどのように立ち向かうかということが二〇年、三〇年先に、どう見られるだろうかというお話がありました。その二〇年、三〇年のスパンで考えますと、二〇二〇年問題、団塊の世代の方々が亡くなっていって迎える多死時代の問題。年間の死者は一五〇万人になり、それに比べて、生まれてくる人たちはその半分になります。二〇三〇年問題、結婚しないで一人で暮らす中高年の方が都会にあふれてくるかもしれないそうです。

そうした二〇二〇年問題や二〇三〇年問題は、一条先生のお話では無縁社会とか、葬式は必要かという問題として語られていたと思うんですけども、将来、私たちが直面せざるを得ない問題です。一五〇万人の方が亡くなり、生まれてくる命は七五万人を切るだろうという状況下で、どう社会を担っていくかという問題に向けて、私たちはこれから、どうかじ取りをしていったらいいのでしょうか。そこを見据えて、いまの時期を過ごしていかねばならないのではないかと、お話をうかがって感じました。

一条先生のお話の中で、最後のスライドでしたか、こう声を掛けたらいいよということで、「貴方のことが気にかかっていましたが、いかがですか」というのがありました。この「気にかける」という言葉を英語ではcareと言うのだと思います。Careという言葉には、気にかける、好きになる、だから、お世話をするという意味合いがあります。

そのお世話をする単位が、昔は家族だったり、地域であったりしました。それが、産業革命以来、人間関係や絆のかたちが変わってきて、家族の力が薄れてきました。特に介護に関しては、家族では力が足りなくなったので、ケアのアウトソーシングがあたりまえになってきています。学校化や病院化もこうした流れの中での現象です。

こうした現象を、今回の災害を契機として、私たちはあらためて見直してゆくべき地点に立っているのではないかと思います。大切な人を看取り、喪失の悲しみを自分なりに受け止めて、その悲しみを、次の世代を育む力、絆を結んでいく力に変えていけるようにするにはどうしたらよいか。そうした視点から生き方を問うこと、つながり方を問うことです。それは科学、技術、経済、政治、すべてを含めてだと思うんですけども、そういうことが問われているんだと思います。

私は発災直後、複雑性悲嘆の研究者の方と高野山大学でお話しする機会があって、それが契機となりまして、Japan Disaster Grief Support Project（JDGS）の立ち上げに加わりました。インターネットで検索していただけると、すぐ出てきます。これを見ていただくと、一条さんのグリーフケアに関するお話の理論的な背景が具体的に分かっていただけるのではないかと思っています。

それから、もう一つ、今日ご紹介したい本をここに持ってきました。『サイコロジカル・ファーストエイド』です。日本語に訳すと「心の応急処置」という本が、昨年の七月ぐらいに出版されました。これはアメリカで作成された本ですけども、兵庫県のこころのケアセンターが翻訳して、ホームページに掲載していたものが、発災を契機に、大切なものだということで書籍化されたものです。こういうたいへんな災害が起こったときに、そこに入る専門家の方、あるいはボランティアの方も含めて、何に気を付けたらいいのか、先ほどの一条先生のお話にもありました、掛けてはいけない言葉も含めて、事細かに書かれています。

この本の第二章だったと思いますけれども、悲嘆のケアに関しては宗教者の担う役割が大きいので、その地域にはどんな宗教者がいるのか、その被災者さんはどんな宗教者と会いたがっているのか、どのように葬儀をし、話を聞いてもらうことを求めているのかに関して十分な情報を集めてください。そして、その宗教者に引き継ぐお手伝いをするようにしてくださいということが書かれています。

その一方で、その項目の最後のところには、「しかし、布教しているところを見かけたら、係の人に通報してください」ということも書かれています。つまり、そこには高野山大学で行おうとしたスピリチュアルケアの重要

井上ウィマラ氏

性、あるいは鈴木先生のところで養成しようとしている臨床宗教師やチャプレンの重要性が記されているのです。

実は、この『サイコロジカル・ファーストエイド』の作成者の中には何人かのチャプレンが入っています。医療者とチャプレンが災害現場で共に仕事をするという背景から、この本ができたわけですね。ですから、この本を導入することで、私たちは宗教者として、災害などの現場で医療者をはじめとする他の専門職の方々と共に仕事をしていくために、何を常識として備えていかなければいけないのかということが見えてきます。関心のある方は読んでください。

パークス先生の取り組み

それから、JDGSプロジェクトの一つとして、私はパークス先生の災害ケアに関する論文を翻訳しました。パークス先生は、世界で最初の聖クリストファー・ホスピスで遺族会を立ち上げた人です。その遺族会では、ボランティアを教育してグリーフケアに取り組む仕組みが作られました。

彼はその後、災害ケアに取り組み、さまざまな災害現場でケアのリーダーシップを取りながら、グリーフケアと災害ケアが、どのように通じるかということを、この論文の中で示してくれています。たとえば、遺族ケアに関わった人は、災害現場に行って、すぐにそれと分かるのだそうです。粘り腰が利くからです。大切な人を亡くした悲しみがどういうものか、それを支えることがどんなにたいへんなことかを身をもって知っているからだということですね。

もう一つ興味深い話は、ニューヨークの9・11同時持多発テロのときのこと、パークス先生はイギリスから現地に飛んで、グリーフケアのボランティアを指揮します。もう一つ、警察には犯罪被害者の遺族支援というものがありますが、そのスペシャルチームも派遣されます。この二つのチームが、ニューヨークテロのときに、初めて出会います。どちらもPTSDに関わる部分があるのですが、その二つのチームが出会って、お互いにどれだけ支え合えるかを初めて学んだということです。それ以来、これが定式化しているようです。

ですから日本でも、病院をはじめ、さまざまなところで遺族会なり、グリーフケアの自助グループなどが定着していってほしいと思います。そして、それが今回のような災害における復興支援のケアへとつながっていく必要があります。

災害時に被災地に行って分かりますのは、保健師さんのルートで入ってくる情報と警察のルートで入ってくる情報が、つき合わせてみると同じ家族についての情報であるのにもかかわらず、最初は、よく分からないことが少なくないということです。その二つの情報、保健師ルートと警察ルートの情報が合わさって、ああ、同じ家族さん、遺族さん、被害者さんのことを話していたんだということが分かると、支援体制が格段に組みやすくなります。現場でさまざまな分野の専門職の人が一緒に仕事をしてゆくメリットが発揮しやすくなるということです。

最後に、「複雑性悲嘆」という話が出ましたので、少しだけ補足しておきたいと思います。日本では神戸の震災のときに、ボランティアとPTSDの問題が取り扱われるようになりました。その後のJR西日本の福知山線事故で、グリーフケアの大切さが取り上げられて、グリーフケア研究所がJR西日本の基金によってつくられました。

そして、今回の東日本大震災の中で複雑性悲嘆の問題がクローズアップされ、グリーフのエキスパートと伝統的な宗教とが一緒に取り組んでいかなければ間に合わないということが言われるようになってくるのではないかと思います。

宗教者のケアトレーニング

複雑性悲嘆は、うつ病とPTSDと、三つ巴になって現れてくるものであることを理解しておく必要があります。そして、PTSDの治療がうまくいってはじめてグリーフに取り組むことが可能になっていきます。トラウマを抱えたままでは、うまく悲しめないのです。そうしたことを理解しておいて、私たち宗教者は、先ほどのお化けが出てくるとか、霊が見えるという状況に向かい合っていくべきなのではないかと思うのです。沖縄では「ユタ半分、医者半分」という言葉ありますけれども、その人のその時の状況に合わせてアプローチすることが重要なのです。

災害後の緊急時には、宗教的な儀礼によって悲しみを癒やす効果は大きく、それが大きなセーフティネットになります。そこからこぼれてくる心の傷を抱えた人には、専門的な医療が必要となり、PTSDが癒やされて、それからあらためて悲しめるようになるのです。そうした流れの中で、総合的に支援するチームをつくっていくことが大切だと思います。

最後にもう一つ。石井さんというジャーナリストが『遺体』という本を出されました。その本の中で、釜石の話でしたけれども、葬儀産業に関わっておられた退職者の方が、遺体とご遺族の対面に関して非常に丁寧な対応をして助かったという話が出てきます。

死後硬直はこう直していけばいいとか、損傷のひどい

遺体の場合はこう声を掛けていくとか、遺族さんが尻込みしているところをどう支えたらよいかということを、細かくケアしてくださったので助かったということです。私はこれを読んで、本来は、やはり宗教者が、遺体と遺族の対面に際して、もう少し活躍する場所があってもいいのではないかと思いました。そこにこそ宗教の原風景があるような気がしたのです。

仏教の中に「不浄観」という修行法があります。これは死体を観察しながら自分の性欲を乗り越えていくというものです。私も実際にやったことがありますけど、とてもストレスの高いものです。最初、死体に囲まれたその場にいられません。吐きます。だけど、だんだん慣れていく。そうした状況に耐えながら、死別された方の悲しみに寄り添っていくということも含めて、宗教者のトレーニングの中に入れていくことが必要ではないでしょうか。

葬儀産業の方、エンバーミングの方、医療関係者の方の応援を得ながら、伝統的な修行法を復活させて、宗教者としての自分をトレーニングして、今回のような大災害の悲しみに寄り添いケアをしていく準備が整うのではないかと思います。ありがとうございました。

鎌田　どうもありがとうございました。これまで四つの報告、そして三人からコメントをもらいました。それらの話をうかがいながら思ったことが二つあります。

一つは、いま問題になっていることのポイントは、宗教を超えた宗教的なもの、超宗教、あるいは超宗派、そういう公共宗教と言うのか、宗教の公共性とか、利他性とか、社会性とか、他者性といったようなところへつながっていく宗教の力や役割はいったい何なのか、があらためて問われているということだと思いました。

そういう宗教の公共性を編み出し、活力を増していくためには、もっと深い内的な自分たちの宗教体験なり、宗教的ミッションの自覚なり、それぞれ固有の宗教的な力がやっぱり必要で、それぞれの宗派や宗教の伝統と精神性・霊性に基づきながら、それを超えていくということが大きな課題として出てきているということをそれぞれの発表者やコメンテーターの中から感じ取りました。

もう一つのポイントは、通人間性というのか、人間に共通な問題だということです。たとえば、日本人であるとか、中国人、韓国人であるとか、ヨーロッパ人であるとか、そういうことでなくて、災害とか、事件とか、いろいろなことが起こったときに、特にグリーフケアが大切になってくるということ。それは、何ぴとであろうと変わらないだけでなく、大人も子どもも同じであるということ。悲しみや痛みというものを抱えて生きていかざるを得ないということです。

そういう通人間的な問題に対して、私たちの社会の文化遺産と言うのか、文化力というものを、どう活用していくことができるのか。そのとき宗教はいったいどのような役に立つのか。宗教が持っているリソースやワザというものは、いったい何であるのか。そういう問い掛けがあったかと思います。

ここで、休憩し、第三部のディスカッション、総合討論を始めます。その冒頭で伊藤博夫会長さんに雄勝法印神楽のこの一年四カ月を振り返りながらご挨拶をしていただきます。

ディスカッション

雄勝法印神楽伊藤会長のあいさつ

鎌田　それでは、第三部、全体の締めくくりのディスカッションの時間に入りたいと思います。発表者の先生方にはご登壇いただきます。

いま、私の後ろに出したスライドが、先ほど午前中、冒頭部で申し上げました雄勝法印神楽を伝承して、子どもたちが共に学んでいる雄勝中学校と大須中学校です。両中学校は数年後に合併するとのことですが、いま合同で修学旅行をしていて、昨日から京都に来ています。そして、先ほども申し上げたように、今日の朝、午前中に、京都市立開睛小・中学校の小学一年生から中学三年に当たる九年生まで、全校児童・生徒が一緒になって、雄勝町の雄勝中学校と大須中学校との交流に参加したわけです。

そこで、これから話をしていただく伊藤博夫会長さんが笛を吹かれて、そしてここに同行のお二人の方々も囃子方でサポートされ、大須中学の三人と先生一人の四人で舞を舞いました。

それでは、伊藤博夫会長にご挨拶をお願いします。

伊藤　みなさん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました、雄勝法印神楽保存会の伊藤と申します。

昨年の大震災後には、全国のみなさまからのご支援で、私たち保存会の、ほとんど流されました衣装装束、お面、その他の道具類が復活できました。震災後、本当に数週間、会長も行方不明のようだ、道具類も流された、さあどうしようと思いました。

前の年に、私たちは、国立劇場に公演で来たのですけれども、それを見に来てくれた豊島区の方々から二〇一一年の一月に電話をいただきまして、豊島公会堂でぜひ神楽を上演してくれないかという話がありまして、日程も大丈夫なのでぜひ行かせてくださいと即オーケーしたのですね。それが、道具類も全部流された、さあ、どうしようと、何も考えられず困っていたところに、いろいろな方々からのご支援が起こってきたのです。

国立劇場に見に来てくれた地元出身者が関東圏にだいぶいるんですけれども、その人たちもふるさとに帰るのはお正月とお盆です。春と秋のお祭りにはほとんど帰らないのです。ですから地元の神楽を国立劇場で四〇数年ぶりに見て感激したという話を寄せてくださったんですね。

それが津波でどんと流されたという報道を知って、鎌倉にいる青木さんという雄勝出身の方が、一〇月に薪能がある、土曜日にあるから、その次の日の日曜日、仮設

のその舞台を使って神楽ができないかというお話をいただきました。さあ、道具もないし、どうしようかということで、でも、こうしていられないというような気持ちから、なんとかして周辺の神楽団体から足りない道具を借りながらでも、ぜひ行きたいということで、そこから復興に向けて保存会が集まりまして始まったのです。

全国のみなさんから本当にいろいろご支援いただきました。それから、ユネスコさんにも入っていただきまして、支援企業もご紹介いただきました。

お面の修復は実物がなく、写真しかないのですが、それを奈良の国立博物館の国宝修理所のみなさんがつくってみたいということで、これも、わざわざ地元まで来ていただいて、写真を見ながら、私たちの意見を取り入れて、目の前で復元していただきました。いま途中ですけれども、今年中にはお面類も全部そろうと思います。衣装とか、そういうものは業者さんに頼めばできますので、そのへんは全部そろいました。

今日は中学校の修学旅行の学校間の交流があるのでどうしようということだったので、私たち三人、笛と太鼓二人がいないとできないということでしたので、では、ぜひ一緒にということになり、たまたまそこに鎌田先生に来ていただきました。本当にお忙しいところをありがとうございました。

いま復興の途中ですけれども、今年中にはなんとか全部そろうようになります。本当にみなさま方に多大なご支援をいただいて、ありがとうございました。

鎌田　伊藤会長さん、どうもありがとうございました。

そういう不思議な巡り合わせで、黒崎さんの発表にも、私の話のなかにもありましたが、雄勝法印神楽は、東北、宮城県を代表する民俗芸能であり、伝統文化です。それを大切な絆としながら地域が結ばれ、復興に向かっていく姿を見せていただきました。

では、発表者とコメンテーターの先生方、ご登壇ください。それぞれ時間不足で話し足りなかったことが多々あろうかと思います。でも、最後に二回ずつお話を全員にうかがうことは不可能だと思いますので、三〜四分か、長くて五分以内で、ご自身のお話の補足やそれぞれの発表者に対してのコメントなど、お話しください。

では、玄侑さんから、お願いします。

無欲な個人たちの祈り

玄侑　さっき、あまりいいことを話さなかったものですから、よかったことと、ひどいことを一つずつお話しします。ひどいことを先にしますか。印象が変わりますのでね。

ひどいというか、わが県の双葉町長の発言、一月八日にあった発言によって、人権という意識が目覚めてしまいました。要するに、「双葉郡民も国民ですか。法の下に平等ですか。守られていますか」という、あの発言ですね。あれが出たことで、ものすごく中間貯蔵施設というものができにくくなってしまいました。おそらく、私はできないのではないかという気がしています。どこの町でも、うちの町にはつくりたくないという権利があるわけですね。いま、そういう状態でして、民主党政権がこれを変えられる根回し力を持っているとは思えない。

ですから、あれが決まらない。たとえば南相馬など、まだ一カ所も仮置き場が決まっていません。ですから、根本的な除染はできないということなのですね。その上で、嫌なやつとどう付き合えばいいのかというような問題として、放射能との付き合い方を考えていきたいなと思っています。

そして、もう一つはいい方の話です。とにかく、私の所は地震の被害は多少ありましたけれども、津波は来ませんし、放射能もさほど濃いわけじゃないので、何ていうか、ちょうどいいハブみたいな場所になったのですね。私の所に送れば、たぶん避難所や仮設住宅に持って行ってくれるのじゃないかと思われる方が多くて、とにかくいろんな物がうちに送られてくるのですよ。今後は、ぜひおやめいただきたいのですけれども。

でも、その送られてくる物を拝見して、それを必要な場所に運んでいくのですけれど、本当に、自分で一生懸命やった写経ですとか、着てほしいという浴衣ですとか、とにかくいろんな物がうちに集まってきて、ものすごく大勢の人々の祈りと善意を感じました。自分は無力で、そっちにも行けないし、何もできないけれど、祈りたいと言っていろいろ送ってくるのです。これが本当に被災者たちの底力を呼び覚ましているという感じがしています。

天明の飢饉のときの被害の各藩ごとの違いなどを見ますと、やはり政治の力が天災の被害を縮小するというのは明らかにあると思いますし、もう少し政治に頑張ってほしいとは思いますけれども、それぞれの無欲な個人たちの祈りは、とても無数にあったし、だから、あそこにいられるという感じもあります。

ありがとうございました。

鎌田　ありがとうございました。では、島薗さん、お願いします。

利害の対立を乗り越えるために

島薗　玄侑さんが、ひどいことがあるということをおっしゃって、私は、それは大事だなと思っています。災害支援ですので、善意から出てくるいいことをお互いに伸ばしていこうという今日の集まりだと思いますが、やはり、厳しい、難しい、一致できない、対立することがたくさんありますね。

風評被害は、その一つです。まあ、風評被害と言ってもいいし、差別ですね。それはとても深刻な問題だと思います。福島へ私も数回行くたびに、いかにそういうことで福島の方が痛んでいるかということを感じますね。ただ、災害支援の、そういう共感する気持ちと、差別を越えていこうという気持ちは、当然一致できるはずのものだと思っています。

ですので、問題は、やはり原発を巡る問題ですね。沖

縄にオスプレイが配備されるのをみんな嫌だと言っていますね、そういうこと。それから、原発の再稼働は嫌だと言っています。それと、放射性物質が出てきたものをどこに置くかという問題は少し性格が違うと思うのですね。つまり、みんな嫌なものは近くに来てほしくないというのはあるのですが、アメリカ軍が、よく分からないのにオスプレイをここに置くとか、長年、沖縄だけに防衛の負担を強いているところに対して、いま沖縄県民なりは反対しているわけですね。

原発の問題も、原発によってわれわれはいろんな恩恵を被ってきたことはあるけれども、あまりにもいろんなことが隠されてきて、うそによって行われてきた。本当は悪いことがたくさんあるにもかかわらず、あたかもよいことであるかのように思わされてきた。われわれもそれに加担してきたのですけれども、そういうシステムそのものに対する、異議申し立てというものがあると思います。ですから、いま起こっていることは、あじさい革命だというふうなことを言われているわけです。

軍事的なものが背景にある大きな政治的な力によって強制されてきたようなものですよね。それを市民の、よい関係をつくっていこうという意志によって越えていきたいという側面と、地域エゴみたいなことが重なって見えるということがあると思うのですね。そこはなんとか克服していかなければいけないと思います。

放射能のことで言うと、ここは少し玄侑さんと実は潜在的に対立しながら、にこにことお話をしているのですけれども、私はやはり、安全情報、たとえば、今日の朝日新聞にも甲状腺についての情報が出ていたのですけれども、要するに、原発倒壊以後、放射能の健康影響については過小評価をして隠すのがアメリカの方針であり、核保有国の方針で、それに対して住民が闘ってきたという長い歴史があります。

そういうことが事故以後の放射線の情報提供にも関わっているので、これは国会事故調の報告書でも政府、東電を厳しく批判していますけれども、さらに、これは専門家、科学者の方にも関わってくるのですね。そこのところは、私どもは科学者、専門家の仲間ですので、間違ったところは大いに批判し合い、変えていかなければならない。そういうところでは、対立をむしろ、ここでこそ起こして、それを越えていく方向に向かっていかなければならないと思います。

差別については、そういうふうに放射能の問題を強く意識することが差別を増やしてしまう側面があります。しかし、それは、放射能の影響に対して敏感である人の本来望むところではないはずですね。そこのところをなんとか、うまくコミュニケーションしながら克服していく方向で努力していく必要があると思います。

また、保養プログラムでは、要するにさっきから出ている話なのですが、地元の方と福島の被災地域の方に、「行って」が大事だという話がありましたね。それから、「気にかけて」が大事だと、一条さんとか井上さんも言っておりました。要するに、距離が開いちゃうと、その間に不信が生じ、いろいろ猜疑心も出てきてしまうというようなことがあります。

それで、お互いの利害の対立のようなことが非常に悪い方向へ強く意識されてしまうのですね。ですから、とにかく交流しながら、お互いに支えていく気持ちを出し合っていくことでなんとか差別を越えていくことができるはずだと思っております。以上です。

鎌田　では、次に、稲場さん、お願いします。

神社や寺に宿る場の力

稲場　今回こういった大災害が起きて、被災地での宗教者の取り組みというものを、いろいろと聞き取りをさせていただくなかに、本当に大きな力を、神社、お寺、教会、宗教施設が持っているなと思いました。これはほかのところでも書いていますけれど、まず場の力があったということですね。

同じ被災されている場所で、指定避難所になっている公民館、小学校がある。でも、そのちょっと離れた所にお寺、神社があると、みんなそこに逃げているのですね。やはり、広い空間があり、畳があり、安心できる場がある。そこに逃げている。場の力があった。それからまた、資源力もあったのですね。食べ物とか備蓄されているのですね。そういったものによって、自衛隊とか行政の支援が来るまでに数日間生き延びることができた。また、檀家さん、氏子さん、多くの方々の人的な力もあった。

そして、そういった、お寺、神社、教会、宗教施設にいるということで、一カ月、二カ月避難生活が続くなかにも、祈りというものを持てたと。住職の方々、神父さん、牧師さん、神主さん、宗教者の方が、祈りなさいとか、ここにいるから一緒に祈りましょうと声を掛けずとも、しばらくそこにいることによって、自然と何か「祈りたい」という方々がいた。

こういう場の力、資源力、そして、人的力、祈りの力というものが宗教の場にはあったと。これが今回、本当に大きく、明らかになった。でも、これが社会的にあまり認知されていないということですね。今後、東海・南海・東南海連動型地震が来る。宗教が、国と地方自治体と、またNPO、NGOとどう連携していくか、本当に大きな課題だと思います。これが一点です。

もう一つ。先ほどグリーフケア、ケアの問題があがっていました。これもいろんな方々の声を聞くなかに、やはり心だけを切り取った心のケアはあり得ないと。先ほどいろんなお話をいただきました。マニュアルもある。でも、そのマニュアルを超えて現場で関わられている方、また専門家の方は、さまざまな一人一人に合った、寄り添ったかたちでのグリーフケア、心のケアをされている。つまり、マニュアルを基に心だけを切り取ったケアではなく、一人一人が違う状況にある、それに対応したケアのあり方があるのではないかと感じました。

最後に一点、原発の問題に関してです。私も、ある電

力会社、そして原発をつくっている、そして、海外にそれをずっと売ってきた人が友人にいます。本人の思いとは違って、やはり組織として何をするべきか、また、上司から言われてしなければいけないこと、自分の生き方、思いとの葛藤のなかで生きている人もいるのですね。

そういったことを思うなかに、私も原発問題に対して、また、社会のあり方に対して、自分なりの思いを持ってきました。そして、今回の原発事故に対して、ある時にふっと思ったことがあります。津波が来たらこうなるのではないかと、数年前から分かっていたのに安全対策を怠ったと、いろいろ報道されていますが、それは、安全をないがしろにして経済、効率、利益重視で走ってきたものがあったと。でも、それは私自身の心でもあるのだということに気付きました。

そういったなかで、これは、ある人たちだけを責めても解決するものではなく、日本だけでなく、いまを生きる現代人一人一人がエネルギー問題、そして、さまざまな環境問題一つ一つを、誰かを責めるのではなく、自分の生き方はどうなのだと、それを問うなかに意識が変わり、また、行動が変わり、ライフスタイルが変わっていく。

そして、将来の子どもたち、あるいは、これから生まれてくる命、その人たちに対してどういう社会を伝えていくか、そういったことを考えていく必要があるのではないかと、考えています。

繰り返し帰ってこれる場所を形成

黒崎　若干言い忘れていたことがありますので、それを補足させていただきます。地理学者の山口弥一郎という人が、明治二九年の明治三陸大津波、それから、昭和八年の昭和三陸大津波の際の集落移転について調査して、報告などにまとめています。

今回、東日本大震災においても、これから先、津波被災地の集落、それまで形成されてきた集落、コミュニティがどういうふうになっていくかということは非常に心配されていますし、また実際、行政のさまざまな防災計画ですとか、コミュニティごとの自主的な動きなどによって、集団移転するか、あるいは、分散して移転するか、さまざまな選択肢がある。

しかし、山口弥一郎さんが書いているのは、結局のところ実際には、選択肢があるといっても、いろんな事情によって高台といってもなかなか難しい。また、低地の方がいろいろ便利がいいということで、またそこに戻ってくる。そして、また、もう一回津波がやってくる。それで被災することが繰り返されていることを、山口弥一郎さんは非常に嘆いているわけですけれども。そういったことが今後また繰り返されないとは限らないような気がしています。それに加えて、原発事故による警戒区域になっている所というのはあるわけです。

山口弥一郎さんは、低地に帰ってくる一つの要素として、屋敷神とか墓地が、かつての居住地にあったことで、そちらにまた拝みにいくことが、繰り返す、戻ってくる一つの要因としてあったことを指摘されています。

これは私の考えではなくて、ある私の同僚といいますか、先輩といいますか、茂木栄先生という、宗教民俗学をやっている先生が一つのアイデアとして、そういった低地の神社、祠等、宗教的な場は、浜宮として残しつつ、高台といったところにもまた新しく、お宮、お寺等を建てる。そこをコミュニティの結束の場、憩いの場としつつ、お祭りのときなどには帰ってくるといったことはできないかということを提案していらっしゃいました。

実際そのような試みがすでにあるのかどうかは私もよく分からなかったのですが、この間、南三陸町の上山八幡宮の工藤祐允宮司さんにちょっとお話を聞いたのですが、荒島という島が南三陸町にはありまして、そこは所有者がいらっしゃる私有地なのです。チリ地震大津波があった昭和三五年に、志津川の沿岸のたくさんの祠が流されてしまったのです。その後、そのたくさんの祠の祭神といいますか、ご神霊を荒島に移し、遷座して、そこに荒島神社という神社が新しく昭和三六年に創建されたのです。それで、年に一回、七月の荒島神社の例大祭のときには、それぞれの元あった場所に仮宮を建てて、ご神霊を戻していく。船で、船渡御というかたちで戻していって、また帰っていくことを実は毎年、毎年繰り返してらっしゃるということがあったそうです。

これから先、津波、被災された場所に、新しいコミュニティのかたちを模索しつつ、新しい祭り、新しい民俗芸能が、これから後出てくる可能性があるのじゃないかと思います。そういった力をこれから私たちが見つめていく、また、心を寄せていくことが一つ、これから先重要になってくるのかなという気がしております。

もう一点なのですけれども、私は今回、神社に集中してお話をしましたけれども、たとえば、山元町の八重垣神社のすぐ近くにはお寺があり、墓地がありました。墓地は、先ほど仙台空港近くの映像を鈴木先生がお見せになりましたけれど、ああいったかたちで墓地は墓石が転がり、中のカロートがむき出しになるという状態があったそうです。私はちょっと、その現場はすでに建て直されている状態しか見ませんでした。そういった所があったというふうに聞いています。

地域ごとにそれぞれ、さまざまな特色ある宗教文化が複雑に入り組んだかたちであるわけでして、それが、また横の連携をしながら地域の復興、再生を目指していくところも、これからまた見つめていかなければいけないのじゃないかとちょっと考えておりまして、その点も補足させていただきたいと思います。以上です。

「絆」は「傷」の共有から生まれる

一条　私は福岡県の北九州市に住んでいます。その北九州市が最近、非常に全国的に話題になったことがあります。住宅地の中から、なんと、大量破壊兵器であるロケット砲がたくさん発見されたのですね。新聞には、「戦争でも始める気か」と書かれていました。おそらく暴力団

の関係があったようですが、非常に仰天しました。北九州市も、それでちょっとイメージが悪くなりました。

でも、実は北九州市は最近、震災がれきの受け入れをしているのですね。これもまた非常にすったもんだして、もちろん多くの反対派の人がいまして、しかし、やはり被災地の痛みを共有しようということで、最後は市長が受け入れを決断しました。同じ福岡県では、震災がれきの受け入れを福岡市も久留米市もみんな反対していたのですけれども、九州にいったん入ってしまえばもう陸続きで、同じなのですね。だから、いま北九州市に放射能のがれきが置いてあるということは何かちょっとほっとしたというか、ああ、私も被災地、福島の方と同じような、もう痛みの度合いは全然違うのですけれども、少し共有体験できたと思って安心したという部分があります。「絆（きずな）」という言葉には「傷（きず）」が含まれているように、やはり傷や痛みを共有しないと本当の「絆」は生まれません。

そんな北九州市に本社を置いていますが、沖縄でも私は冠婚葬祭事業を展開しています。沖縄の葬儀というのは非常にユニークです。みなさんも知っているかと思うのですが、ユタという存在がいまして、死者と話す人ですね。そのユタを紹介してほしいというお客さまからの依頼がよくあるのです。それで、わが社では、ユタの方をあっせんします。あっせんと言うと言葉が悪いですが、紹介するのですね。ですから、お坊さまとユタの方がセットで動いているところがあるのですけれども。東北でもシャーマニズムの第一人者の佐々木宏幹先生が、お坊さんと「オガミサン」という拝み屋さんがいつもセットでお葬式をやっていたと述べられています。

何が言いたいかと言いますと、先ほどから、グリーフケアの現場において言ってはいけない言葉とか、こういうことを言ったらいいよとか、あまりにも表層的な、マニュアルなことばかり私たちがやっているのかと思われると、ちょっとそこは違うのであります。愛する人を亡くされた方の心に立ち入って、その悲しみを受け入れて話すとき、やはり霊とか魂の話をしないわけにはいかないですね。心理学を超えて、宗教的次元に入らないと、本当のグリーフケアは難しいのではないかと私は思っています。フロイトという人が「喪の作業」ということを初めて提唱し、それによって「グリーフケア」というコンセプトが誕生したとされているみたいですけれども、どうも本当のグリーフケアというのは、心理学や精神分析だけでは手に負えないのではないか。さらなる深みに入る必要があるように思うのです。

そして、「鎮魂」とか「慰霊」などのテーマを扱っていますが、私は実はいま「幽霊」にいちばん関心があるのです。津波で多くの犠牲者を出した場所でタクシーの運転手が幽霊を乗車させたとか、深夜に三陸の海の上を無数の人間が歩いていたとかの噂が、津波の後に激増したというのです。私は、被災地で霊的な現象が起きているというよりも、人間とは「幽霊を見るサル」なのではないかと思います。故人への思い、無念さが「幽霊」をつくり出しているのではないでしょうか。そして、幽霊の噂というのも一種のグリーフケアなのでしょう。夢枕・心霊写真・降霊会といったものも、グリーフケアにつながります。恐山のイタコや沖縄のユタも、まさにグリーフケア文化そのものです。

そして、「怪談」こそは古代から存在するグリーフケアとしての文化装置ではないかと思います。怪談とは、物語の力で死者の霊を慰め、魂を鎮め、死別の悲しみを癒やすこと。ならば、葬儀もまったく同じ機能を持っていることに気づきます。葬儀で、そして怪談で、人類は物語によって「こころ」を守ってきたのかもしれません。

そして、最近いろいろ調べたのですが、怪談というのはだいたい日本では百年おきに流行しているのですね。百年ごとに怪談が流行していて、その頃には飢饉とか大きな震災があったようですね。大量の死者が生まれた後に、やはり死者に思いを馳せる。「死者はきっとこういうことを言いたかったのではないか」「恨みがあったのではないか」とか、それをかたちにしたのが怪談という文化かなとも思っています。そう、怪談とは慰霊と鎮魂の文学なのではないでしょうか。怪談は、まさに今から流行するのかなというより、流行すべきであると私は思います。やはり、東日本大震災の犠牲者の方々の死者の声をいまからどう表現していくのかなと。葬儀においても、これから死者の想いを表現する演出というものを考えなければいけない。「演出」という言葉には嫌なイメージを抱かれる方もいるかもしれませんが、これからの葬儀においては「幽霊づくり」という演出が求められると思っています。

故人の写真を「遺影」といいますが、これも本当は幽霊づくりの一種なのです。本当はそこにいない人、死者に、生者の想いを馳せる「こころの装置」をつくっているわけですね。いま、遺影というものをだんだん、動く写真にする、つまり動画を導入する動きがあります。さらに、どうすれば亡くなった方に想いを馳せることができるのか。そのような儀式、また、あるいは、祈りの場を提供していけるのかということを、私も日々考えて、また実践していきたいと思っております。

鎌田　ありがとうございました。では、鈴木さん、お願いします。

超宗教的なかたちの宗教ケアのあり方

鈴木　今日はみなさまからいろいろとお話がありましたけれど、地震、津波、原発の問題と、さまざまな問題点が出てきていると思います。今日のスピーカーはみなそれぞれ、どこかいちばん重く感じるところを中心としてお話しされました。

私自身の問題はというと、別に原発に関心がないわけじゃないのですけれど、やはりいちばんいま関心を持っているのは、宗教者が自分の宗教の布教ではなく、超宗派、超宗教的に宗教的なケアをする構造がどうしたらで

きるのだろうかということです。

私自身が、とりわけ宗教民俗学というのをやっているのですが、従来、宗教というのは、一言で言えば、価値の問題なのですね。価値、つまり、価値を認める人にとってはすごく重要だけど、価値を認めない人には全然意味がない。あるいは、自分の価値を否定されたら、それこそ相手をあやめてでも自分の価値を貫くというように、宗教はある意味、非常に怖い面も持っており、人を救うのみではないいろんな側面を持っているわけです。

そうした際に、中立な立場の国立大学にいて宗教学を教えているわれわれとしては、宗教が正しいとか正しくないというところには絶対踏み込まないで、事実としてこういうことがある、これが宗教として、人間に、社会にどんな意味があるのかということを教えてきました。

その僕がですね、一応、このお手元の資料の六頁には、今日の参加者がいっぱい出てくる『日経新聞』の玄侑さんの写真入りの部分がございますけど。ここらへんの、ちょっと最初の方にちょうど私の方でつくった実践宗教学寄附講座の話が出てきております。この記事にあるようなところ、つまり、ある意味では、「いかにあるか」ということを言っているはずの宗教学者が、「いかにあるべきか」、実践宗教学を進めるにはどうあるべきかというところに一歩踏み込んじゃっているのが、いまの私の現状だと思います。

そういう意味で、ちょっとここまで言ってしまっていいのだろうかと、私としては思っていますので、今日みたいなこういう機会を与えていただいてみなさまの反応を見せていただけていることはすごくうれしいことと思っています。

つまり、先ほどちらっとお話ししましたように、アメリカなどでは、軍隊チャプレンといって、宗派を超えた兵隊が戦場で死を迎えようとするときに、違う宗教の、つまり、ムスリムの兵士が倒れているところにカトリックの神父が行って死を迎える最後の言葉をかけるということをやるような現実があるようですけど、日本はそういうことがまだ全然ないわけですね。

もっと言うと、日本はちょっと前から、宗教という言葉を使うこと自体が非常にナイーブになってきている。それが、神戸の震災のときには、宗教団体がいっぱいお手伝いしたにもかかわらず、その宗教団体の名前を隠してと言うと。ちょっと言いすぎかもしれませんが、それを表に出さずに動いたということがあり、それを、山折哲夫先生は批判して、いったい宗教者は何をやっていたんだというような流れが出たわけです。

その点で言いますと、今回はそんなことはなくて、宗教者は宗教者であることを全面に出して、いろいろケアしている部分があると思います。そして現実に、「カフェ・デ・モンク」なんかに行きますと、「お坊さん、来て、来て」というような感じで、お坊さんの姿を見ると、そこへ寄って行って話を聞いてほしいおばあちゃんたちがいっぱいいます。そうした感じで、宗教者が来ることを歓迎しているような部分がいっぱいあるわけです。

ですから、そういうときに、布教ではなく、超宗教、超宗派的なかたちの宗教ケアという言い方をしているのですが、それがどう実現できるか、ちょっといろいろ考えております。このあたりのことに関してご意見とか、ご批判などいろいろいただければと思います。

この新聞に出ていない、いろいろな方からも問い合わせが来ております。自分もやりたいという言い方をしてくださる方もおりますけれど、そのほか、自分もこういうことを考えていたと。自分とぜひ話をして、その辺を聞いてほしいという方々もいろいろいる。新聞もこういうふうな全国紙に出ると、すごいんだなというのは思いましたけれど、そういうことがあります。

今日の機会は本当にありがたいと思っていますが、みなさま方、ぜひ、いろいろ導いていただくようにご意見などをいただければと重ねてお願い申し上げます。

ありがとうございました。

「ワスレズ」の大切さ

井上　稲場先生のお話に、「丸ごと支援」というのがあったと思うのですけれども、去年六月に南三陸町に入ったときのこと、「心のケアに関わる者ですけれど、何かできることがありますか?」と聞いたら、最初、「喪服」という返事が返ってきました。ああ、喪服がないのかと。次に、「太鼓」という話が出てきて、「え、なんで太鼓なんですか?」と聞いたら、南三陸町では、五〇年前のチリ沖津波の後で、『津波復興太鼓』という音頭、楽曲を作って伝えてきていたそうです。

お話を聞かせてくれた太鼓隊の人によると、今回の津波の翌日、子どもが無事帰って来た姿を見て、「ああ、これで太鼓が伝えられる」と思った。「でも、肝心の太鼓が一台もないのだよ」と言う。だから太鼓が欲しいのだということでした。私は高野山真言宗にお願いして、一〇月ぐらいには太鼓を寄贈することができて、彼らは復興音楽祭でEXILEと共演して演奏したそうです。

最近では、先月末から七月一日にかけて、南三陸町を中心に歩いてきました。石巻から雄勝も走ってみました。今回の訪問の目的は、登米というところ、被災地支援のバックヤードになっている所ですけれども、そこで「復興感謝太鼓祭」というのがありまして、太鼓隊の方がチケットを送ってくれたのです。私は、あの『津波復興太鼓』を一度聴いてみたかったのです。前日は仮設住宅に泊まらせていただいて、太鼓隊の代表の方にお話をうかがいました。「太鼓をもらったけど、最初、たたいていいかどうか分かんなかったの。九月、一〇月。でもね、実際に太鼓をたたいたら、泣けて、泣けて、涙が出たら時間が流れるようになった」、そんな話をうかがいました。

伝統芸能のこと、いろんな祭りのこともそうなんでしょう。やはり、その当事者の方にとっては、やってみたいけど、やることに躊躇もある。でも実際にやってみると、体を動かして、仲間と一緒に汗を流し、声を出し、

それから、涙をたくさん流せるようになると、止まっていた時間も流れるようになるのです。そして彼は、ふと、こんな言葉を漏らされました。「いま、もし東京で大震災があれば、俺たちのことは忘れられちゃうよ。いまいちばん怖いのはそれだ」。それから、「まあ、先生も遠い所から来るのはたいへんかもしれないけど、たまに来てくれて、俺たちのことを忘れないでくれ。それがいちばんありがたい」と言ってくださいました。「忘れない」というのは、島薗先生が引用された宮沢賢治の言葉にありましたけれど、仏教で言えば「念」という言葉に当たります。「念」、「ワスレズ」の大切さです。

私は『津波復興太鼓』を聴いて、泣けて、泣けて仕方ありませんでした。「ああ、いちばん聞きたかったのは私だったのかもしれない」と思いました。演奏を終えた太鼓隊のメンバーの手をとって、「ありがとう、今日は聴きに来てほんとうによかった」と、また泣いてしまいました。こんな感じでグリーフに主に関わっているのですけれども、これからじわじわとグリーフのボディーブローが効いてくる大変な時期になってきます。草っぱらになってしまった何もない跡地を見て、「悲しみは一段とまたひとしお増してくるようだ」と話してくれた被災者の方もいました。

それから、怒りの問題があります。これから自立支援住宅に移るころ、被災者の怒りが再び噴出してくる可能性が高まります。でも、怒りのマネジメントを支援することが、政治的あるいは経済的な不公平をカムフラージュすることに使われてしまうとすると、いったい何のための支援なのかということになりかねません。悲しみだとか、霊的だとか、スピリチュアルということは、いったい何なのだということです。

仏教徒で、ベトナム人のお坊さんにティク・ナット・ハンという方がおられます。ベトナム戦争のときにエンゲージド・ブッディズムを提唱しました。社会参加する仏教ということです。仏教の活動が、経済的、社会的な不公平に対しても働き掛けられるようにすることを目指して、いろいろな運動を展開してきました。

それから、ケン・ウィルバーという人は、トランスパーソナル心理学を理論的にけん引した人なのですけれど、彼はいま、それを超えて、インテグラル、統合心理学というものを始めました。その理由は何かと言うと、超越したもの（トランスパーソナル）に関わることが、社会的、経済的な制度の不公平に対して働きかける力を持たねば意味がないということです。あるいは、権利という視点から見るならば、目の前の人を本当に大切にすることがどういうことなのかを吟味してみることです。個人的なレベルでトランスパーソナルに達していたとしても、社会的な不公平、暴力、戦争をもたらす制度の変革に関して何も力を持てないのだったら何なのだろうという思いを持って、統合心理学というものに進んでいったのだと思います。

ですから、私も、グリーフとか、スピリチュアルというものに関わりながら、先ほどは「悲しむ力を育む力に」という表現をしましたけれども、悲しむ力が育む力に変わったときに、私たちはどんな自我、あるいはどんな志を持って、どんな価値観や自然観を持って生きていく世代を育もうとしているのかを明確にしていくことが必要だと思っています。

その新しい世代が、原発開発に象徴されるような、私たちのやり残した問題に対してどのように対処してほしいのかということでもあります。玄侑先生のお話で、元請け、二次請けが四万円からだんだん八千円ぐらいまでになっていくというのがありました。そういう構造を介して、科学者の情報も操作されていく。現場でパイプをつなぐ人も、〇・五ミリの基準のズレを調整できない。そういうことを放置しておくから、いろんな事故が起こる。

今回の原発事故の後で、アメリカ側の開発者の間でのいろんな議論も含めて、原発の背後にある問題も次第に明らかになってきています。原発事故の問題に関して、自然エネルギーの方向に切り替えるために必要な総合的議論を継続していける世代を育むために、悲しむことだとか、霊的なものに関わることがどのようにつながっていくのかを明確にすること。まさに、そこを問われているような気がしています。

政治や経済の不公平、ある一部の人たちの利益をカムフラージュすることに使われてしまわないような、悲しみやスピリチュアルなものへの触れ方があるのだと思います。私たちはどんな次世代を育もうとしているのかを問われているのだとひしひしと感じます。

研究プロジェクトとしての姿勢

鎌田　どうもありがとうございました。最後に井上ウィマラさんが全体的なまとめの話をしてくれましたので、こころの未来研究センターの研究プロジェクトとしての姿勢を付け加えて結びとさせていただきます。

私が二〇〇八年四月にこころの未来研究センターに入って四年が過ぎ、今年で五年目になります。私がこころの未来研究センターに所属している限り、毎年このような公開のシンポジウムを一回ずつやっていきたいと思っています。というのは、やはり一年一年どうなっていくのかということをきちんと検証していくことが大事だと思うからです。またそれが研究者の一つの務めでもあると思うからです。私たちの多くは研究者ですので、いま出ているデータを踏まえて、学問的にきちんと検証しつつ議論して、社会に発信していくという責務があると思います。

それをホームページや報告書や本など、いろんなかたちで社会に提示していくことを継続していきたいと思います。毎年七月には一般公開シンポジウム、そして、一月には半公開の研究会を開催して、宗教的世直しとは何なのかという密な議論をして、年に二回はホームページなどで発信していきたいと考えております。

今日、壇上で発表してくれている方々は、みなさん連

携研究員なので、同士とも仲間とも思っていますので、末永くお付き合いいただくと同時に、みなさまも私たちの活動の何が不足か、こういうことをしたらいいじゃないかということを、今日のアンケートでも構いませんし、こころの未来研究センターへの提案として出していただければ、それを踏まえて、これから先のことを考えていきたいと思います。

今日、最初も法螺貝で始まりましたが、「ほら吹き東二」としては、最後もほらをもって結ばせていただきたいと思います。これは、私の鎮魂の気持ちと、司会が不十分だったおわびの気持ちと、みなさまがたがこれからますます自由自在に活躍していっていただくという思いを三つ兼ねて、最後のほらとさせていただきます。（法螺貝奉奏）

鎌田　どうもありがとうございました。これをもってお開きとさせていただきます。

3・11巡り玄侑宗久さんらシンポ　京大

京都大学こころの未来研究センターは今月11日、東日本大震災を考える3回目のシンポジウム「こころの再生に向けて」を京都市左京区で開いた＝写真。原発事故があった福島県の臨済宗妙心寺派寺院の住職で、芥川賞作家の玄侑宗久さんが基調報告し、「去年の今ごろは放射能の除染や雇用づくりなどやるべきことは分かっていながら『ぐずぐず』していた。今は『ぐちゃぐちゃ』だ」と語った。約180人が聴き入った。【鶴谷真、写真も】

「差別のまん延を危惧」

玄侑さんは、放射線量の高低の判断が個人任せになっていると指摘。汚染のレベルにかかわらず避難し、そこで生活の根を下ろしつつある人がいるという。「除染うんぬんより、元々住む所が子供の進学などの点で不便だから」という面も見え隠れし、「非常に分かりにくい」と話した。また、社会全体が保身に走って疑いの目を持ちがちな風潮があるとして「もう半歩進むだけで『福島の人とは結婚しないでおこう』になってしまう」と、差別のまん延を強く危惧した。

復興の道筋については

「祭りが結ぶふるさと」

「防潮堤を何㍍にするかという話ばかり。海と闘って敵に回すのか、共生していざとなれば逃げるのか。今、私たちの自然観が問われている」と憤った。

神社の役割などを研究する黒崎浩行・国学院大准教授は、被災地の神社の動向を「ふるさとの意識を未来につなごうとしている」と報告した。宮城県女川町の熊野神社は今年5月、例大祭のみこし渡御を行った。多くの氏子が犠牲になった地区にあって、氏子総代会はみこしの担ぎ手を広く募集。ボランティア団体やネット募集に応じた人たちを含む約130人が氏子区域をくまなく巡行したといい、「ローカルな宗教文化を保存、継承する地域の意志がうかがえる」と述べた。

毎日新聞　2012年7月30日夕刊

研究会の構成メンバー

鎌田東二	京都大学こころの未来研究センター教授（宗教哲学・民俗学）
梅原賢一郎	京都造形芸術大学芸術学部教授（美学）
河合俊雄	京都大学こころの未来研究センター教授（臨床心理学）
船曳建夫	東京大学名誉教授（文化人類学）
島薗　進	東京大学大学院人文社会系研究科教授（宗教学）
黒住　真	東京大学大学院総合文化研究科教授（倫理学・日本思想史）
原田憲一	京都造形芸術大学芸術学部元教授・NPOシンクタンク京都自然史研究所特別研究員（地球科学）
中村利則	京都造形芸術大学芸術学部教授（茶道文化・茶室研究）
藤井秀雪	京都造形芸術大学ものづくり総合研究センター主任研究員（マネキン研究・空間デザイン）
小林昌廣	情報科学芸術大学院大学教授（芸術生理学・医療人類学）
尾関　幸	東京学芸大学准教授（美術史・ドイツロマン主義美術）
竹村真一	京都造形芸術大学芸術学部教授（文化人類学・情報メディア論）
関本徹生	京都造形芸術大学芸術学部教授・近代産業遺産アート再生学会副会長・アーティスト（彫刻）
松生　歩	京都造形芸術大学芸術学部教授・アーティスト（日本画）
大西宏志	京都造形芸術大学芸術学部准教授（メディアアート・アニメーション）
茂木健一郎	ソニーコンピュータサイエンス研究所シニアリサーチャー（脳科学）
岡田美智男	豊橋技術科学大学大学院工学研究科知識情報工学専攻教授（生態心理学・認知科学）
近藤高弘	アーティスト・造形美術家（造形芸術）
辺見葉子	慶應義塾大学文学部准教授（ケルト神話学）
田中貴子	甲南大学文学部教授（中世文学）
西山　克	関西学院大学文学部教授・東アジア恠異学会代表（中世史）
鏡リュウジ	占星術研究家・平安女学院大学客員教授（心理占星術、魔術研究）
上野　誠	奈良大学教授（万葉学）
渡邊淳司	日本電信電話株式会社NTTコミュニケーション科学基礎研究所（認知科学）
棚次正和	京都府立医科大学大学院医学研究科教授（宗教哲学）
井上ウィマラ	高野山大学文学部准教授（瞑想、スピリチュアル・ケア論）
土居　浩	ものつくり大学准教授（地理学、墓地研究）
切通理作	文化批評家・和光大学非常勤講師（文化批評）
上林壮一郎	京都造形芸術大学准教授（インターフェースデザイン論）
兵藤裕己	学習院大学文学部教授（中世文学・芸能）
佐藤壮広	立教大学非常勤講師（宗教学・沖縄研究）
井関大介	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程（宗教学・上田秋成研究）
石井　匠	國學院大學PD研究員・多摩美術大学芸術人類学研究所特別研究員（考古学・縄文図像学）
大石高典	京都大学アフリカ地域研究資料センター研究員（生態人類学）
魚川祐司	僧侶
外村佳伸	龍谷大学教授
秋丸知貴	美術史家・京都大学こころの未来研究センター共同研究員
奥井　遼	京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定研究員（教育学）
須田　郡司	写真家

表紙作品

石峰山の石神社の磐座（宮城県石巻市）　撮影：須田郡司

編集後記

「3・11」以後、「モノ学」の次の展開が要請されている。さらに大きく深く、「モノ」の捉え方から、生き方や文明にまでトータルにかかわる「モノ学の構築」が要請されている。その要請に応えようではないか。知と力を結集して。宮沢賢治は『農民芸術概論綱要』の結論に書いている。「詩人は苦痛をも享楽する／永久の未完成これ完成である」と。その路線で行こうではありませんか！

（鎌田東二）

本号も種々の豊かな研究の成果が収められたが、とりわけ東日本大震災関連プロジェクトを興味深く読んだ。災害と宗教と心のケアというテーマは、被災地における支援のあり方を考えるだけでなく、これからの日本の方向性と可能性、そして一人ひとりの生き方まで問う大きく深いテーマであると感じた。これからの展開に目が離せない。

（原　章）

モノ学・感覚価値研究〔第7号〕

発行日　平成二五年三月二九日
発　行　京都大学こころの未来研究センター
モノ学・感覚価値研究会
〒606-8501
京都市左京区吉田下阿達町46
電話 075-753-9670（代）
http://homepage2.nifty.com/mono-gaku/

編　集　編集工房レイヴン　原　章
デザイン　鷺草デザイン事務所　尾崎閑也
組　版　マル工房　大西昇子
印　刷　株式会社NPCコーポレーション

本誌の一部または全部を無断で複写、転載することを禁じます。